

チート染みた力を持っているけど母音ーツン
しか発せられない

飯妃旅立

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法科高校。様々な思惑画策謀巡る魔校。

これは、その魔法科高校に一年生として入学する、ちよーつと舌足らずな男の子の物語である。

目次

フアツシヨンヤンキー編

あいいいあ えおんあんおおえあい

1

あいいい あ えあつあいおーおあ、あう

おんえいいい

16

あいあんあ あいえんいえんいおい

いえ

28

あいおんあ あああうあおおえおんあ

うお

44

あいおあ ああいおあえおいうえあ

60

あいおうあ あーああー

72

あいあああ あんあいおうえいうう

92

あいあいあ おうううおういあん

106

あいいううあ ああんおあいあ

119

あいいううあ あいおうえいあい

129

あいいうういあ あうおうういおう

138

あいいうういあ ううおうあうおう

148

あいいううあんあ おえいうーうおう

あああいえ ————— 164

あいいううおんあ あおううあい☆い

いいお ————— 179

あいいううおあ おうあういあ

196

あいいううおうあ いいいえーいおん

211

夏休み編

あいいううああ ういいうう・おー

うお ————— 225

あいいううあいあ ーいあいおああ

247

あいいうういううあ ーあああ、あい

うえお! ————— 272

ダテガーネメ編

あいいうううあ うういおあい

286

あいいうういあ えんいおうおい

うあ ————— 302

あいいうういあ ーああいいあんあお

おうえい ————— 316

あいいううあんあ おんあおいーお

あおいーお! ————— 334

あいいううおんあ おーう・えんい・

いうーお ————— 345

あいいううおあ ーいつえあ — 357

あいいいいうおうあ うあんあいえい

372

あいいいいうああ いあつおおい

いうう

386

あいいいいうあ いあーお

んあえい

399

あいいいいういうあ えおうん

412

あいいんいうあ あおあおうえあ

ううあう

422

第二部 ダツテガーネメ編

あいいんいういいあ あいいんあ

430

あいいんいういいあ いいおいえあ

あつお 439

あいいんいうあんあ おうあいいい

い

458

あいいんいうおんあ おいう、いお

うえうおうあいいい……？

469

あいいんいうおあ えいいうんあう

あう

485

あいいんいうおうあ おいええあ

あああいいえう。

500

あいいんいうあああ おあえあえあ

515

あいいんいうあいいあ おい、おいう

おい



534

フアツシヨンヤンキー編

あいいいあ えおんあんおおえあい

「ああ……」

ついに来てしまった。

見上げる空はまさにTHE・快晴。本日天晴とでも言うべき晴れ空は、憎らしい程に高い。

というか暑い。暑がりな僕は、春より秋より梅雨が好きだ。何故なら外出しなくていいから。

そんなとりとめのない事を考えながら、太陽光をバンバン反射する整備された地面を歩く。太陽ぶよでも振つてきそうな直射日光。これで春なら夏は灼熱地獄だろうか。

「うう……」

早くも帰りたいという想いが浮かんでくる。

いやいや、さつさと屋内に入ればいいじゃんというツツコミも入る。

なつとうねばねびよーんびよーんと変なダンスを踊る妖精も現れた。消えてほしい。

エンブレムの無い胸を擦りながら周りを見渡す。

新天地に舞い上がる男の子。緊張でガチガチになっている女の子。静かに椅子で読書にふける男の子。頬を染めてクネクネしながら身体を浮かす女の子。うーんファンタジー。

「…………おー…………」

ここに集まってネミ☆（意識）と書かれた案内に従って歩いてきてみれば、そこは大きな大きな建物。崩れるならどこから崩れるのかを計算してみたけれど、まあ屋根の下にいれば屋根の下敷きにはなるだろう。どこにいても同じだ。

これがただの体育館だというのだから、驚きだ。全コート使ってバスケットボールをやればIQだけで選手はヘトヘトだろう。バスケット部があるのかどうかは知らないが。

ちらつと時計を探して時間を見れば、驚いたことに予定の時刻まであと二時間。

寝坊や寝過ごしを考えて早めの早めの早めの時間で家を出た事が仇になったようだ。まあ大体こうなるとは思っていたけれど。

「…………」

散々引つ張ったけれど、僕がいるこの場所は国立魔法科大学付属第一高校——通称魔法科高校。その敷地内にある体育館の、ド真ん前だ。

入学式終了後に学生IDが配られると言う話なので学校施設は利用できないし、体育

館が開かれるのは式の三十分前。つまり一時間半暇。ひまわり。

そんな長い時間このソドムの炎の下にいたら、僕はカラカラに干からびてしまうだろう。干物になってしまふ。それはごめんだ。ガラガラに進化したい。

適当な思考を捏ね繰り回しながら散策していると、良い感じの中庭を見つけた。

陰になっている所と日にあたっている所両方にベンチがあり、陰一択だろうと素早く席を取る。椅子取りゲームは負けた事が無いのだ。勝った事も無いが。

どうせなら雨が降ればよかったのに、なんて考えながらぐでーんと寝転がると、丁度顔の位置だけ日向になった。顔を顰めて反対になる。足が燃える。

顔か足、どちらを犠牲にするかと問われれば、迷いなく足と答える。

足は灼熱に焼かれてもらおう。

「……」

そんなアホなヒップダンスをしていたからだろうか。

僕の身体を突き刺す視線を感じた。

「……」

トイメン。

僕の顔が右端にあるなら、彼の身体は左端にあった。彼からしてみれば右端なのだろうが。

不思議な視線だった。普通の人は放射状の視線を持つている。真ん中が強く、周りは弱い。けれど彼の視線は、なんとというか……円錐形だった。楕円錐とでもいうべきか、僕の身体を万遍なく見ているのだ。どこかを見ていない、ということがない。

だが、見られているのであればこう返すしかない。

こう返す以外の術を、僕は持っていなかった。

「あ？」

片眉を下げて、片眉を上げる。

口は半開き。心無し鼻の穴大き目。

いわゆる、ガン飛ばし顔である。寝転がってるが。

「……」

彼は視線を自分が持つ端末に戻す。

特に珍しくも無いフィルムスクリーンの情報端末。先程と違い、視線が上から下へと動いているあたりは読書だろうか。僕のカラダは二次元に負けたらしい。

なんだか癪なので、懐から仮想型端末を取り出して装着した。確か魔法科高校では仮想型ディスプレイは禁止されていたはずだが、まだ入学式を終えていない、つまり本生になっていないのでセーフだろう。

ゴーグル型のそれで行うのは、ひたすらクツキーを生産するゲーム。ARになっても

ひたすらクリックするだけという、恐ろしい程に単純で中毒性のあるゲームだ。一世紀続いているらしい。

恐らくはたから見た僕は、ごついゴーグルをつけて人差し指だけをひたすら動かしている怪しい金髪だろう。言ってなかったが僕は前時代的ヤンキーな格好をしていて、ぼさつとした金髪に赤とか銀とかを入れて、耳ピアスマまでしている。エンプレムのない制服を着崩し、持ち込み禁止の仮想型ディスプレイで遊んでいる男。まさにドロップアウトしたヤンキーそのものだろう。

これは要らぬ誤解を招かぬよう、そしてある種の誤解を促進させるための措置であり、決して僕がヤンキーと呼ばれる類いの人間であるということではない。不良行為なんてしたことないし、街でお婆さんが困っていれば秘密裏に重量軽減の魔法式を使って荷物を運んであげるくらいには善良だ。疲れたくはないので魔法師が傍にいたり監視カメラを振りきれなそうだったりしたら見捨ててしまう。ごめんねお婆さん。

とまあ、話は逸れたが僕はひたすらに近づき難い存在なのだ。

金髪が無言で指を動かし続けている姿なんて、それはもう奇異にみられるはず。

目論見通り目の前の彼も話しかけてくる事は無く、平穏な時間だけが過ぎて行つた。

現在のクツキー総生産量は *vingintillion* を数えている。漢数字に直せば千那由多。素晴らし気かなクツキー天獄^{てんごく}。初めて使うルビがこんなにくだらな

のになるとは誰も思っていなかっただろう。

A R 空間の視界には余すところなく至る所にクッキーが降り注ぎ、建物を埋め尽くしている。

良い良い……まだまだ！ 焼・菓・全・夜！

「——あなたも新入生ですね？ 開場の時間ですよ」

「あ？」

生産量を示す数字が一桁も数字が変わらないまま、どれほどの時間が経ったのだろうか——。一日？ 一年？ 一世紀？

今言われた事を加味すれば、たったの一時間半なのだろう。

それほど短い時間を引き伸ばし、僕はクッキーの生産に集中していたらしい。これが……ゾーン？

馬鹿な事を考えていないでGoogleを取れば、そこにクッキーはない。代わりにメロンパンがあった。あれもクッキーと言えばクッキーだ。じゃあここは現実ではない？

「聞こえていましたか？ あと二十分ほどで開場の時間ですよ」

「あー……おう」

A R に夢中になっていて聞こえていないと思ったのだろう。メロンパンさんは残り

時間を付け足して、もう一度言ってくれた。それに生返事を返せば、メロンパンナちゃんは少しばかり顔を顰める。

明らかな先輩へのこの態度、しかもイトコのお嬢さんな雰囲気のあるメロンパンナちゃんにはあまりなじみの無いジャンルの人間だったのかもしれない。

「それと、当校へは仮想型ディスプレイの持ち込みは禁止しています。今日は仕方ないとしても、」

「あいあい〜」

お小言を途中で遮れば、更に顔を顰めるメロンパンナちゃん。

けれど仕方がないのだ。許してちょんまげ。

「……私はこの第一高校の生徒会長を務めています、七草真由美です。あなたの名前は？」

内心でそんなことを思っていたからだろうか、メロンパンナちゃんは自らの名前を名乗ってから僕の名前を聞いてきた。これは目を付ける気マンマンなのだろう。出来るのならご遠慮願いたいところだが、このご時世、匿名掲示板でさえ個人の特定が容易いのだ。

生徒会長なんて言う職権乱用し放題な立場の人相手に、偽名が通じるはずもない。

「追おいうえ上」

「……下の名前は？」

「……………青^{あお}」

長めに言い洩つてから、ぶつきらぼうに言い放つ。

追上青。これが、僕の名前だ。

「追上青くん、ね。……ああ、貴方の事、先生方の間では有名になっていたわよ」

「……」

「入学試験、文章題と小論文共に『あ』だけを羅列して出してきた奴は初めてだ、つて」

勇者の名前かな？

それでも入学が出来るのだから、なんともまあ。

ギリツギリだったみたいだが。

「少なくとも私には真似できないわ……」

でしょうね。

ちなみにひらがなの「あ」だけでなく、「ア」や長音符も入れたはずなのだが、どうやら知らされていない様子。あーあ。

お小言はもつと続きそうだったので、後ろ手を振ってポケットに手を突っ込み、中腰で体育館へ向かう。

入学前からお先真つ暗だ。保険は効きますか？ 一寸先は闇……。

メロンパンナちゃんという妨害はあったものの、なんとか十分前に体育館に到着出来た。

既に席はほとんどが埋まっていて、適当な空席にドカッと座る。ここ、空いてますか？　なんて聞かない。聞いたらおかしいだろう。見た目ヤンキーだぞ僕は。

栄えある誉れ高き第一高校に突如現れた前時代的なヤンキーに周囲がざわつく。ザワークラウト。

「あ?」

「ひっ!」

視線を感じた方にガンを飛ばせば、思った通り顔を逸らす生徒たち。

中には対抗するように睨みつけてくる子もいたが、視線を完全に絡め取って睨み返せばものの数秒で顔を逸らす。ふ、容易い。ようい。

そんな感じに来る視線全てを押し返す為にキョロキョロしていると、見覚えのある頭を見つけた。複数の女の子と喋っている彼。

さっきの彼だ。ほら、クッキーに埋もれていた子。

同じく新入生だったらしい彼をじっと見つめる。

……やっぱり、変な視線だ。隣の女の子も大分変だが。

少し彼を観察してみる事にした。ほどなくして、入学式が始まったが。

*

司波達也は内心で溜息を吐いていた。

面倒だな、と。

原因は先程から強烈なガンを飛ばしてくる金髪の男子生徒だ。

入学式の二時間前にこの第一高校に到着した達也は、時間を潰す為に中庭にあったベンチで読書をしていた。していたのだが、ほぼ同一のタイミングで向かい合う形で置かれた反対のベンチに座った件の男子生徒に遭遇してしまったのである。

その余りにもヤンキー然とした恰好は今の時代珍しいもので、つい不躰な視線を向けてしまった事は自らに非があるのだろうか、男子生徒はこれまた前時代的なガン飛ばしを行ってきたのである。

すぐに手元を持つていた情報端末へ視線を落としたが、今なおガンを付けてきている辺り目を付けられたのだろう。入学早々揉め事を起こしたくない彼としては、正直に言つて煩わしいと感じるものだった。

この手の輩は諦める、という文字を脳内辞書に持っていないので、更に煩わしい。その一方で興味も湧いていた。

無論それは人間性に、ではなく、あんなヤンキーでも入学できるのだな、という第一高校への感心。自らもあのヤンキーも二科生とはいえ、第一高校に入学するという事自体がそれなりの難度を誇る。

よく落とさなかつたな、という学校への感心と、あんなナリでも一応の能力はあるのだな、というヤンキーへの感心。そのどちらもが合わさつて、ようやく興味となり得ているのだ。

それもまた、新入生代表の答辞が始まると同時にバーナーに当てられた雪の如く消えて行つたのが。

*

「E……」

交付されたIDカードに示されたクラスはE組。FとかGとかHでなくてよかつたと、心の底から安堵する。良いクラスだな、E組。イーだけに。イーッ！

一世紀以上前の伝説のやられ役の真似をしながら体育館を出る。もちろん内心でだ。

ヤンキーがいきなり「イーッ！」って叫び出したら怖すぎるだろう。

「……………」

頭を貫く視線。

振り返ってみれば、そこにいたのはクツキーに埋もれていた彼。と、女子数名。

内、平らな子が物凄く強い目で睨み返してきた。いやいや僕君の事睨んでない睨んでないハランデイイ。

あんなハーレム厄介ごとの塊の気配しかないので、ここはいつそすがすがしくらいに避けられようとクツキーに埋もれていた彼に向かって中指を立て、笑う。ところでコレ、男に対してやっても本来の意味だと傷つくの僕だよな。

もつとも現地でさえ本来の意味で使っている人はいないのだろうか。

うわ、平らな子が憤怒の形相になった。やめてほしい。あ、でも話しかけないでくれるならいい。それなら大歓迎だ。

そのまま後ろ手振りポケットで去る。教室に行く気はないし、その辺の端末からやることは済ませてしまおう。

良いぞ良いぞ、良く滾る逃走よ!! 逃げるが勝ちってなア!

*

「それにしても……いるのね、まだ。ああいう前時代的なヤツ」

それはむすつとした表情の赤茶の髪をした女子生徒から放たれた愚痴のような呟きだった。

彼女の名前は千葉エリカ。今日初めて会って友達になった柴田美月、司波深雪、そして司波達也と共にケーキ屋へ来てからの一言である。

「……まあ、その驚きには同意しておくよ」

「お兄様？ どちら様の話ですか？」

ケーキ屋というか「ケーキも出してくれるフレンチ店」であるここは、座って話すのにはもってこいだった。

エリカの呟きに、美月は「あはは……」と苦笑し、達也は流し目に頷く。

3人が男子生徒と邂逅した後合流した深雪にはわからない話題に、少しだけ不満な顔をして深雪は話題の人物を兄に聞いた。

「……深雪は、あまり深く関わって欲しくないな」

「そうねー、あんなヤンキーに深雪が近づいたら、何されるか分かったもんじやないし。って、うわ。司波くん顔怖い顔怖い」

エリカと美月の脳裏に浮かぶ、ヤンキーと優等生の二単語。

創作物の上ではもはや廃る程に掛け合わされたこの二つも、実際に知り合いが毒牙にかかりかねないと思うと遠慮したい。

無論、その優等生の兄が何があるかと許さないだろうが。

「ヤンキー……不良生徒がいたのですか？ 新入生に」

「ええ。とびつきりの、THE・ヤンキーって感じの奴がね。」

……でも言われてみれば、よくあんなヤンキーが入学できたわね。ああでもヤンキーが実は頭いいって設定は鉄板か……」

「あー……」

深雪の問いにエリカが答える。

エリカの言う鉄板がどこの鉄板なのかはわからなかったが、美月にも思い当たる節があるのかまたも苦笑いをする。

魔法科高校は名門校に数えられる高校だ。

ヤンキーなどという存在自体、希少価値が生まれかねない程に珍しいと言えるだろう。

「ああいうの、かつこいいとでも思ってるのかしらねー」

「さ、さあ……」

「深雪、分かっているかとは思いますが……」

「もう、エリカもお兄様も、心配しすぎです」

自分の身は自分で守れますからと、さらに不満顔になる深雪。

それでも心配を続ける（エリカはからかい半分だったが）二人に深雪が拗ね、美月が宥めるといった事をしているだけで、どんどん時間が過ぎて行った。

不本意な事に、そのヤンキーの話題だけで短くない時間を使ってしまったのである。

その日はそれで解散となり、二人と一人と一人は自らの帰路に着くのだった。

あいあいあ えあつあいおーおあ、あうおんえいあい

「うああ……」

大きな欠伸をする。

登校した一年E組の教室は雑然と緊迫の入り混じる混沌とした空間になっていた。

もつとも緊迫しているのは僕とクツキーに埋もれていた彼の間だけであり、さらに言えばその横にいる平らな彼女と、クツキーに埋もれていた彼に話しかけた背の高い男子生徒との間にも一方的な緊迫が満ちていた。

ずるいぞ、僕は独りなのにそちらはイヌサルキジを連れてくるなんて。

追上なんて名前だから、左前詰め五十音順に並べられると教室の左隅後ろという主人公キアラポジションに追いやられてしまうのだ。方角的には裏鬼門だというのに、何故イヌサルキジがそちらにいるのか教えてもらおう桃太郎君。

しかしあるうことかクツキーに埋もれていた桃太郎君は犬と猿を宥めてしまった。随分と常識的な桃太郎らしい。

さて、いつまでもクツキー太郎くんをみているわけにもいかない。

色々と手続きがあるのだ、この学校は。中学もそれなりに電子化が進んでいたけれ

ど、ここはそれ以上に凄い。無駄に電子化が進んでいるせいで逆に面倒くさい。読むだけ読んで判子を押すだけでいい紙時代が懐かしい。

チカチカと喧しいオンラインガイダンスをスキップして進めていく。タイピングもできるが、脳波アシストと視線ポインタの方が遥かに速いのだ。特に視線ポインタは良い技術。

履修登録までを済ませ、ふと思いついて先程のオンラインガイダンスを見る。

この左の女の人……メロンパンどころか、スイカボールか？

いや、おかしい。この揺れ方……本当にこの大ききで、しっかりとした生身なのだとしたら……やけに揺れすぎている。

違ったら失礼だ。失礼極まりない。だが、どう計算しても……明らかに揺れすぎている。

これあ……とつつあん、キナ臭えぜ？ 詰めてやがるな……！

自分の情報端末（仮想型ではない方）を取り出し、オンラインガイダンスを一時停止して情報端末を立て掛ける。何の捻りも無いペイントという名のお絵描きアプリを脳波アシストで呼び出し、視覚情報をそのままペイントツールへ描き出していく。

これは絵心とかそういうものはいらない。ただのトレス絵だ。

その後、僕が計算したままの胸のサイズに削り落とした。

「おおお……」

担任教師なのかなんなのかはわからないが、それなりに可愛い子が教壇に立っているのを視界に一応収めつつ、そのトレスと削減を1Fずつ繰り返す。

そして完成した。

パラパラ漫画のように絵をめくって行けば、本来の姿を取り戻したオンラインガイドンスお姉さんがとても自然な揺れ方でその小振りな西瓜を揺らしている。

満足だ。

満足したので立ち上がる。

履修登録はしたのだから、ここにいる意味はない。丁度近くで細身の男子生徒が立っていたから出て行ってよいのだろう。

「あ?」

集まる視線を感じて教室をぐるりと見渡せば、さっと視線を逸らす大多数。残りは桃太郎一味だ。

それと教壇に立つ女性も、こちらを吟味するような視線を向けてきていた。

やだ、照れちゃう。

前の男子生徒が一礼して出て行ったのを見て、僕は適当に後ろ手を振って出ていく。

これで前の男子生徒の印象は良くなったに違いない。僕の印象操作に一役買っても

らったついでに彼の好感度も上げる。うーん、なんて良い奴なんだろうか僕は。

ふらふらと歩いていく方向にあるのは第二小体育館、通称闘技場。

何の捻りも無くて申し訳ないが、僕はもう見た目通り肉体で戦うタイプの魔法師だ。CADは一昔前に流行った音声認識CADで、基本的に殴って被ってジャンケンポン、もとい収束系魔法の、特に硬化魔法を使って戦う。

ちなみに何故汎用型CADを使わないのかと言えば、とても簡単な事。

入学試験の文章題に「ああああ」を書いたことからそろそろわかってくれるとは思うのだが、僕にはとある欠点があるのだ。

それは、母音^{ポイ}ツンしか発せないという事。

発せないというのは、声に出す事も文字に起こす事も絵で表す事もキーボードや脳波アシストで打ち出す事も、全てダメということ。

あいうえお、A I U E Oと長音符に促音、音節主音としての「ん」しか言葉にする事が出来ない。

これは後述するチート染みた力に言語中枢を占領されているからだとかなんとかオイシャサマは言っていたのだが、まあそんな話はどうでもいい。

問題は僕がCADに魔法式を書き込むことが出来ない、という点だ。

そりゃあ魔法が使えると聞いて一応勉強はしまくった僕は、それなりに妄想と想像を膨らませて云万文字を超える魔法式を考え出した。脳内で。

だが、書き込むことは愚か声に出す事すらできない。僕は悲しんだ！

仕方が無いので市販の汎用CADを買い、知り合いの魔工技師に頼んで思いつく限りの魔法を入れてもらおうと思つたのだが、あいうえおーんしか発声できない僕は意思の疎通すらできなかつた。

今までの人生で散々思い知つてきたはずの絶望を、更に味わうことになつたのだ。

だから、本当に仕方がないので、僕は母音ーンだけで通じる魔法式を音声認識CADに入れてもらったのだ。

そう、想子での起動式への干渉も出来なかつたのである。

さて、話がずれてしまったが、要するに僕の音声認識CADは限られた僕が魔法を使え得る唯一の端末。文章題と魔法実技がほぼ最低点になることはわかつていたのだ、他の部分が満点になるように努力した。ちなみに選択問題はAとかAではなく、1、2、3、4から選ぶものだったために普通に点を取る事が出来た。

ポケベルが欲しくなるところである。

「あーっ」

「んっ」

闘技場に入るか入るまいかという所でぶらついていると、目の前から見覚えのあるメロンパンナちゃんが出てきた。恐らく先輩だろう方々を引き連れて。

全員が全員八枚の花弁のエンブレムを付けている辺り、メロンパンナちゃんのクラスメイトだろうか。確か生徒会長と言っていたはずだから、多分A組だろう。生徒会長はA組になる定めなのだ。

メロンパンナちゃん率いる先輩方を前にしても一步も退かない僕。

退けば老いるぞ臆せば死ぬぞ！ 僕はまだ若いまままでいたいので、退かない！

「……」

普通に避けて行きなされた。

クラスメイトであろう方々が侮蔑の視線を向けてくるが、睨みつけると視線を逸らして先を急いでいく。いいんですかあ？ 一年の後輩坊主に負けちゃってえ。

ガンスルーである。そりゃあそうだ、声に出していいないのだから。

気を取り直して、闘技場に入る。

コロッセオ的な雰囲気期待していたが、そんなことはなく。

普通に体育館だ。汗が舞う体育館だった。

「……」

確か、一年生は見学しかできないのだったか。

女子生徒が汗を流す姿ならともかくとして、ムサ苦しい野郎どもが流す汗なんて僕は見たくない。

くるりと踵を返し、校門方面に向かう。

あ、CAD返してもらわないと。

*

「ん？」

「……お前か」

まだ下校時間ではなかったことが起因して、中々CADを返してもらえなかった。

悪戦苦闘する事三時間程。お腹が空いたので食堂で適当にご飯を買い、再度挑戦五時間半。

ようやく意図が伝わった事で帰ってきたCADは、なんだかかけがえのない宝物のように見えた。余計な手間かけさせやがって分かり辛い形してんじやねえよこのCADが、なんて思いは一切無かった。ああ、優しいなあ僕。

そんな、一般生徒とほぼほぼ帰宅時間を同じにってしまったからだろう。

桃太郎が、犬猿雉と美少女を引き連れてやってきた。

「何よ」

「ああん？」

「お、なんだやるのか？」

犬と猿が僕を威嚇する。先に威嚇したのは僕だが。
つて、待つて待つて。

美少女？

「……うお」

美少女だ。

美少女がいるぞ！

月に代わつてお仕置きしてくれるかもしれない！ あの衣装エロすぎるよね！

「……」

ズイ、と。

クツキーに埋もれていた桃太郎君が美少女と僕の間割つて入る。

ぬあああああ……美少女までクツキー太郎君の毒牙にかかっているのかああ……。

いやイケメンだが！ イケメンだがね!? なかのうえ君くらいイケメンだが！

「……おい」

「なんだ」

手でシツシツと捌ける動作をする。

美少女の周りを桃太郎君と犬君と猿ちゃんが固めた。雉ちゃんはおろおろしている。だが、美少女は気丈にも毅然きぜんとした態度で僕を見据えてきていた。

これは……脈アリ!?

少し勇気を出して、手を伸ばしてみる。

「ツ!?!」

「あん?」

ガシツ、と腕を掴まれた。桃太郎君に。

あれれ……? おかしいなあ、ねえねえ小五郎のおつちゃん、僕ちゃんと視線外したよね?
そして痛い痛い。力強い強い。

「深雪に触れるな」

「……あいあい」

ばつと振り払う。いったいなあ、まだ痺れてるよ。

それにしても深雪ちゃんっていうのか。

……呼べないなあ、残念だ。母音とンだけで構成されている名前だったらよかつたのに。僕みたくに。

「てめえ、今何しやがった……?」

「見えなかった……」

そしてまだ臨戦態勢のお供二人。やめてくれ、名前を呼べない時点で恋愛対象外なんだあ。

もうその子に手を出す気はないから逃がしてくれ。

というのも無理そうなので、ここでパン！ とどこかの国家錬金術師のように打ち合わせる。

そして視線を外して猛ダツシュ！ お供二人を交わし、深雪ちゃんの横を……うわ桃太郎君と目が合った怖っ!?

驚きから大きく迂回し、そのまま校門へダツシュダツシュ！ キックエーンドダツシュ！

さっきのパン！ はいわゆる猫騙しで、特に魔法的な効果のあるものではない。

だが人と言うのは集中している所に破裂音が聞こえると、その地点を注視してしまうもの。視線は外しやすくなるのだ。

まあ今回は上手く行っただが、次は通用しないだろう。あの二人、バリバリの肉弾戦タ
イプっほかったし。

「アイアン
iron!」

校外に出た瞬間に音声認識CADを起動。勝手にサイオンが持つて行かれ、内蔵された起動式がエイドスに干渉、世界の改変が始まる。

僕の音声認識CADは、靴だ。靴というか、ローラースケートというか。

このCADに登録されている魔法はとも少ないが、使い手次第で汎用性はある方だと思っっている。

今使ったものは収束系硬化魔法で、文字通り靴の、それもローラー部分の密度を高め、硬度をあげるもの。

これさえやっておけば無茶な使い方をしても壊れない。素晴らしい。ローラー部分は精密機械つてわけでもないし、軸と靴の緩衝に最もお金が注ぎ込まれているので大丈夫だ。

僕はこの靴をエアギアと……呼びたかった。実際のアレとは全く違うが、初めの頃に行われていた塀走りなんかを再現できるからもうエアギアと呼びたかったのだ。

でもギガ……ギガが発音できなかったんだ……ッ!!

仕方がないので左と右、それぞれ違う機能を付けてもらったうえでアイオンと呼ぶことにした。両性具有の神だから、左が女性で右が男性。それぞれをモチーフに機能が造られている。まあ小細工程度の機能なのだが。

ちなみにアイオンの硬化魔法を起動させているのは男性モチーフのCADになる。

そして走り出す。

身体能力に任せ、道の在るとこ無いトコを縦横無尽に駆け回る。重力的眩暈。

「A i r i !」^{エ ア}

十二分に勢いを付けた所で、弾道予測計算を利用しながら左脚の女性モチーフのC A Dの音声認識コマンドを使う。少ない魔法を二つ、ではなく、二足合せても少ない魔法しか入っていない、だ。悲しい事だが。

今使ったのは名前だけ聞けば気体にも作用したり世界を乖離させそうな魔法だが、実のところは加速系魔法。現在進行方向に向いているベクトルを計算で割り出した角度に変更、文字通り僕の身体は宙を舞う。

あとはノータツチだ。

僕の身体は実家に飛んでいき、着地の瞬間にアイアンを身体にかければいいだけ。昔は何度か失敗したが、今はもう目を瞑っていても出来る。狙撃されたりしなければ、だが。

そのまま、空の旅を楽しんだ。

*

あいあんあ あいえんいえんいおいいえ

*

特に何でもない午前授業が終わり、買ってきたコンビニ弁当（一世紀以上続く7と1のコンビニ）を食し、午後の授業。

僕は絶望した。

「ああ……」

この授業で使われる教育用CADはあらかじめ設定された起動式に想子を流し込み、反作用で返ってきた起動式を元に魔法式を構築する必要があるというもの。

そう、魔法式の構築が必要なのだ。

僕は魔法式が構築できないのだ。なぜならa i u e oしか発せないから。促音としての「っ」はx t uかl t uの組み合わせでのみなら使えるが、バラして使う事は出来ない。音節主音としての「ん」も同じで、n nとして使う事は出来るがn単体で使う事は出来ない。そんな状態で魔法式が構築できるはずもない。

結果僕はヤンキーっぽさを利用してバックレた。だって出来ないもん、あれ。

二科生ということもあつて呼び出される事は無く、今回はただCADに慣れよう、という旨の授業だったために評価されることもなかった。

*

なんでも桃太郎君は司波達也君という名前で、風紀委員会に勧誘されたらしい。

あの美少女ちゃんも司波だったし、多分兄妹だろう。妹にまで手を出しているのだからか。

どちらにせよもう深く関わるつもりはない。達也君も深雪ちゃんも名前を呼ぶことが出来ないのだ。名前とは互いを認識する上で最も必要なツール。動物のように鳴き声がそのまま感情を示すのならともかく、言語なんて面倒な物に縛られている以上名前には必須だ。

それが呼べないのなら、関わられるものでもない。

しかし風紀委員かあ。

見た目なあ……。見た目なあ、ヤンキーだもんなあ。

ヤンキーは取り締まってくるよなあ、確実になあ……。

深雪ちゃんなら目の保養にもなるからいいのだが、達也君の方は正直遠慮したい。

僕のチート染みた力の応用である視線外しを軽々と躲して僕を見つけてしまうのは、もうそれだけで大分天敵だ。黒子君と高尾君くらいの天敵だ。ちなみに僕はチート染みた力の性質上3Pシユートは得意である。得意なのだよ。

さて、そんな僕は現在体育館の屋上にいる。屋上というか屋根というか。

眼下に広がる学校はお祭り騒ぎの最中で、数多の上級生で溢れかえっていた。

何をしているかと言えば、部員募集だ。学校らしくクラブ活動があるのでその新入部員を集めているのである。

世はまさに、大勧誘時代ツツツ!!

「ん?」

何やら下方が騒がしい。下方というかが中が。

さながら忍者のように屋根のへりを掴んで身体を中空に投げ出し、そのままの足で空に接地する。どうやらこの第二小体育館の中では剣道の試合? が行われている様だった。

観客数はそれなりで、試合はかなりの白熱をしている様である。

剣道かあ。

僕、面も胴も籠手も言えないんだよなあ。

居合！ なら言えるが、言えたところで意味は無いし。

とりとめのない思考をねるねるねるねしながら試合を眺めていると、観客の中に件の達也君の姿を見つけた。

達也君は人垣を掻き分け、あろうことか試合をしていた男子生徒に直進する。

そして、彼のCADから波が放たれた。

「うおっ!？」

咄嗟にそれを避ける。あの密集地帯ではほぼ全員が被弾したのだろうが、これほど離れていれば避ける事は容易だった。

それにしても、今のはなんだ？

「っ、おいおい……!？」

そして始まる乱闘騒ぎ。

いや、乱闘ではない。リンチだ。

達也君一人に対して、周囲の剣道部員？ らしき面々が襲いかかる。

僕は見た目ヤンキーだが、実は良い人だ。いじめの現場は見過ごせない。

だから窓をけ破つてでも助けに行こうとして――、

「あ?！」

必要ないな、とわかった。

当たらない。彼にはどの攻撃も当たらない。

まるで僕と同じものが見えているかのように、彼は掠りさえせずに暴徒を鎮圧していった。鎮圧というか周りが疲れて行っているだけのようにも見えたが。

いや、凄い物を見た。

あれがワンマンアーミー。無双シリーズをプレイしていた時代が懐かしい。

そしてあんなのに目を付けられた事に絶望した。やばい人の妹に手を出そうとしてしまったようだ。出していないからセーフ！

くわばらくわばら……とさえ呟けないこの身に絶望しつつ、下校時間まで屋根の上で過ごした。クラブ活動に入る気はないのだ。

*

「――以上が、剣道部の新歓演武に剣術部が乱入した事件の顛末です」

風紀委員になって早々事件に遭遇した達也はその旨を風紀委員長である渡辺摩利と七草真由美に報告していた。真由美は十人近い剣術部の生徒を一人で往なした事に驚き、摩利は忍術使い・九重八雲の弟子であるのなら納得だと言う。ちなみに部屋には嚴のような顔の男子生徒・十文字克人もいる。

二、三の確認の質問に対して、達也はある程度都合のいい報告に変えている事を顔に出さずに受け答える。そのポーカーフェイスは余りにも高校生離れしていた。

部活連本部を出て生徒会室に向かうために昇降口へ向かう達也だったが、彼の視界に2つの光景が飛び込んできた。

一つは昇降口付近で集まっている彼の妹と彼のクラスメイト。

もう一つは、彼らと対峙するようにしてニヤついているヤンキー、追上青の姿だった。追上は品定めでもするかのように彼の妹とクラスメイトの千葉エリカ、柴田美月を見ている。美月の前に深雪が立ち、その前にエリカとレオが立っているのだが、その下卑た瞳はレオの一切を視界に入れていない様だった。

達也は少しばかりの溜息を吐きながら、学友と追上の間に割って入る。

「あ、おつかれ〜達也くん」

「お疲れ様です、お兄様」

こんな状況でも普通に労ってくれるエリカと深雪。

それに言葉を返したかったが、目の前にいるヤンキーを放っておくことはできなかった。

相手は「精霊の眼」を持つ達也の視線から、一瞬でも逃れた相手だ。

油断はしない。

「おお」

そして追いは、割り込んできた達也を見て目を輝かせるように嗤った。

ようやく本命が来たな、とでもいうように。

「私達を出汁に達也くんを呼び出そうとしてた、つてワケ？」

「そりや、また。随分と舐められてんな」

その眼に気付いたエリカとレオが血を滾らせて言う。流石にクラスメイトを取り締まりたくない達也としては、その血気盛んさに溜息が出そうだった。

だが、達也を狙って妹の深雪が不快な思いをしたというのなら見過ごせる話ではない。

「用があるなら、俺が相手になるぞ」

「いあ……いいい」

「何？」

もう用は済んだとばかりに踵を返して去っていく追上。

「何？ 何をしたかったのよ、アイツ」

「わからねえが……何かを確認した、のか？」

エリカにもレオにもわからないようで、美月と深雪も首を横に振っていた。

目的はわからないが、ただのヤンキーというわけでもなさそうだ。ならば、用心する

に越したことはない。

達也は追上の去って行つた方向に目を向け、そう独り言ちるのだった。

*

入学式から一週間が過ぎた。

アイオーンは別にCADとして使わなくとも普通にローラースケートとして滑る事が出来る。というか街中で魔法を使うの方が実はあまり褒められた事ではないので、靴兼武装一体型音声認識CADであるアイオーンは、見た目普通にスニーカー、のような偽装が施されている。

そんなアイオーンで、校内をしやーっと滑る。

本来なら最初に預けるべきなのだが、今の時刻は午前5時。つまり誰もいない。預けられない。

何故そんな時間に僕がここにいるのかといえは、いくつかの理由があげられる。

1つはこの学校を見て回リたかつたという点。学校を自由に探索する、という時間は最初の一日以外（本当はここも違うのだが）無かつたので、何処に何があるかくらいは知っておきたいのだ。

次に、良い感じの昼寝ポイントの搜索をしたかった点。ファツションヤンキーである僕だが、ヤンキーぶるために時たま授業をバツクれて適当な所で昼寝、という行為を中学時代から繰り返していたら、これがもう気持ちいいのなんの。

みんなが必死に勉強に打ち込んでいる横でグースカピースカ寝る事の優越感と背徳は何物にも代えがたい。特に何かやりたい事があって入学したというわけでもないし、入試で落ちてしまった子達には申し訳ないが頑張つて勉強した、ということもない。

高卒認定を貰いたい事と、家から一番近い国立大学付属魔法学校がここだった、というだけの話なのだ。

シャー、シャーつとローラーを鳴らして学校を跳ねまわる。

一応教員の中には早く来る人もいるようなのでその辺だけ気を付けて、走り滑る事一時間。

「それで？ 校内でのCAD無断使用に関して、何か申し開きはあるのか？」

「……いいえ」

僕は捕まっていた。

女性にしては背の高い、僕から見ればちんまい女子生徒。

女子生徒は風紀委員長の渡辺摩利と名乗った。

「やけに殊勝な態度じゃないか。持ち込みは禁止だとわかっただけでやっていただけなのか？」

「ああ」

「素直なのは良い事だな。だが、これは没収させてもらう。放課後風紀委員会に取りに来い」

「ええ……」

「わかったな？」

「あーい」

別に没収される事は構わないのだが、風紀委員に行くのが嫌だ。

昨日も、僕が不思議な視線を持っているメガネおっぱいちゃんに近づこうとしたらヒーローかと思うタイミングでやってきて、彼女らをガードしてしまった彼がいる場所。

毅然とした態度でメガネおっぱいちゃんを守る凛々しい深雪ちゃんも可愛かったが、怯えてはいたものの決して視線を逸らさなかったメガネおっぱいちゃんも結構な気の強さだと思う。

普通こんなヤンキーが近づいてきたら怖いよ。

あ、だから達也君はガードしてきたのか。納得した。

「そうだ、お前。名前は？」

「……追上青」

「追上だな。覚えたぞ」

それはもう悪さが出来ないように覚えたぞ、という意味でせうか。

おいおい生徒会長と風紀委員長とシスコンに目を付けられちやっただよ……3人なのに八方ふさがりとはこれ如何に。

じゃあもういいいすかね、という感じの表情を作って立ち上がる。見せる僕のハンドレットフェイス。伝われ！

「ん？　なんだ、まだ何か言いたい事があるのか？」

だめだったよ……。

そう、これで伝わるのなら僕の人生に苦労は無かった。

目で会話する、なんて言葉があるが、あれはある程度の会話を経てのものであって、会話が上手くできない僕には意味の解らない高等技術なのである。

「いえ」

「なら、もう下がっていいぞ」

「うい」

でも結果オーライ。

素晴らしい先輩だったようだ。

相手から沢山の事をしゃべってくれれば、僕は相槌を打つだけで会話が成立する。

素晴らしきかなそのコミュニケーション能力。逆に無口だとか寡黙だとかいう相手がだと会話は一切成立しないのだが。

僕は顎を突き出して会釈をして、昇降口へ入って行った。

*

授業を終えて。

僕は言われた通り風紀委員会に顔を出した。幸いなことに渡辺先輩は風紀委員会でデスクワークをしていて、面倒な書類なんかを書かされることも無くアイオーンは帰ってきた。もし書かされたとしてもかけないのだが。

いやあ話の分かる先輩がいるとありがたいなあと心無し上機嫌で廊下を戻っていると、目の前から視線を感じるではないか。

前を向いてみれば、そこには目が覚めるほどの美少女。

司波深雪ちゃんである。驚いたことに、達也君は一緒じゃない。

1人だ。

「……………私に何か？」

「ああ——合縁、良い縁？」

中々縁が合うね、これが良い縁だったらよかつたんだがね、という意味で伝われー！と念じる。

深雪ちゃんは警戒しながらも「？」を浮かべていた。デスヨネー。
深雪ちゃんに近づく。

「ツ、」

「——応援」

視線を避けて深雪ちゃんの肩に手を置き、囁く。

お兄さんとの仲、応援してるよ！

「何を……」

ばいばーいと手を振ってそそくさと逃げる。

家族とならコレで伝わるんだが、まだ無理だよねえ。

*

「追上が接触を？」

「はい。先程、風紀委員会の前で接触しました」

兄が風紀委員会にいと踏んで向かっていた矢先、深雪は件のヤンキーと遭遇した。後からわかった事だが兄はカウンセラーの小野遙に呼び出されていて風紀委員会にはいなかったようなのだが、その時は中にいるだろう兄と風紀委員会から出てきた風の追手を繋げ、一悶着あつたのではないかと考えた。

故に最初から敵意を含んだ口調と態度になつていたのだが、言われた言葉の難解さに気を緩めてしまったのだろう、いつのまにか接近・接触され、後ろを取られていた。

家に帰ってからその旨を兄・達也に報告している次第である。

「……奴は何か言つて来たのか？」

「初めは、合縁、良い縁？ と聞いてきました。その後、私の背後を取ると応援、と一言だけ」

それは確かに難解だと、達也は呟く。

何かの暗号かとも考えたが、それを自分に言う意味が無い。兄と違って自分は軍属ではないし、今考えて分からない時点で暗号という形を取ること自体無為なものだ。

「何故奴が風紀委員会（そんなどころ）にいたのかは聞いたのかい？」

「はい。渡辺先輩に、没収されていた持ち込みCADを取り返しに来たのだと聞かされました」

「……すると、あのローラースケートのCADは奴のものだったのか」

達也は心当たりがあるというように言う。

「ローリースケート、ですか？」

「ああ、昨日には無かったCADが無造作に置かれていてね。随分と独特な造りをしていたから、印象に深いよ。恐らくフリーの魔工技師によるものだろうね」

達也がいつも学校に持って行っている情報端末に画像を乗せる。それは確かに、廊下で追上が履いていたものだった。

「恐らくは武装一体型CAD……奴の武器は蹴撃だろう。あの不可解な視線外しも含めて少し調べてみようか。合縁、良い縁、応援の意味も」

そう言つて先程まで見ていた「ブランシュ」に関するファイルを閉じ、「追上青」と名の付いたファイルを開く達也。そこには追上の簡単なデータがあった。

彼は深雪を守る為に危険な芽は残しておかないのだ。とはいえ相手はあくまで同校生、それもクラスメイト。とりあえず何かと繋がっていないかななどを調べては見たものの、結果は芳しくない様だった。証拠に、出されるデータに特に変わった所はない。

兄が諸々を調べている間、深雪ももう少し考えてみる事にした。

「合縁、良い縁、応援……あい、いー、おう。IEO？」

「独立評価機関かい？ そんなダジャレを好む奴には思えなかつたけど……もしそうだとして、エンは何を示すと思う？」

「いえ、すみません。思いつきで言ってしまった……」

「いや……：e n が3つ……：e n t r ・ e か？ 英語なら前菜、フランス語なら……：制限された場所への入場か」

制限された場所、と聞いて思い浮かべるのは第一高校の図書館だ。

特別閲覧室という場所がそこにある。一般閲覧禁止の非公開文献にアクセスできる場所。

「OではなくAだとすれば……：A u c u n e e n t r ・ e？」

「そういえば合縁、良い縁で切っていました。I E……：i . e . ラテン語。i d e s t の略。すなわちくでしようか」

「即ち、入室禁止。……意味が繋がらないな。もう少し奴の反応を探ってみる必要があるか……」

これだけの情報ではわからない。

だが、不穏な事には変わりない。兄程の人間が調べても何も出てこないという事は、なんらかの規制がかかっているのか。

その日は結局、どれほど探しても有益な情報は得られなかった。

*

あいおんあ あああうあおおえおんあうお

*

「ああいあーただいまー」

「ん、おかえりー」

僕の家族は僕の体質（？）に理解がある。幼少期とか生まれ直後とか、とても早い時期から僕自身は母音ーっんしか発せられない事を知っていて、家族にはそれを隠そうとはしなかった。

知能障害や言語障害というのは一世紀前から存在する。人間の脳って言うのはとっても繊細で複雑怪奇だから、ちよつとのダメージや原因で正常な機能が失われる事は当然のようにあり得る事なのだ。

それはどれほど医療技術が発達しても変わらず、むしろ想子や壺子、エイドスとアイデアの発見などによつてもつともつと複雑に、難解な「症状」として扱われるようになってきたと言えるだろう。技術の発達が招いた闇、という奴だね。

「おかえりー、あおにい青兄」

「うん、ああいあーうん、ただいまー」

僕のコレが明らかに「舌足らず」だとか「悪ふざけ」だとかでは片付けられない「障害」だと分かった時点で、家族は僕の体質改善に走ってくれた。一般のお医者様だけでなく、魔法師まで頼って。

結果今のオイシヤサマの元で僕の症状が判明し、その上で見捨てる事無く向き合ってくれている家族には感謝の念しかない。

「どう、魔法科高校は楽しい?」

「うん」

「それならいいんだけど……いじめられたりして無い?」

「うん」

「彼女出来た?」

「ううん」

「やっぱり高校生じゃダメかあ〜」

「えお、ああいいおあいあお」

「……でも、かわいいこはいたよ?」

「いえあ!」

「いえーい!」

僕の母音ーツン語を瞬時に理解・翻訳できるのは妹と母だけ。父は単身赴任が多くて、理解はあるが即座に翻訳する事はできない。それでもこっちが簡単な受け答えしか出来ないとわかった上で話してくれるからとつても楽なんだがね。

この体質は一応第一高校にも伝えてあつて、まだ会ったことはないが保健医の先生にも伝えてあると聞いている。それでも学校側が公表しないのは、公表しないでほしいという旨を僕が（正確に言えば母が）伝えたから。一々僕が話す母音ーツン語を生徒のみんなに理解させるのは酷だし、何より僕は普通に考え、行動が出来る健康体。

難関名門校に入るっていうのに、障害があるから援助して、つてのは僕が嫌だった。みんなと同じテストを受けて、ギリギリでも合格したかった。

なんて、高尚な思いはなくて。

面倒なんだよね、治らない病気を持っている事に対する周囲の反応つて。

「まだ治らないのか」とか「もう治ったのか?」とか、「そんな病気で辛い思いするんなら外に出るなよ」とか「ああコイツ……（察し）」とか。

実際に言われても、目が語っていても、例え善意からのものだとしても、非常に面倒だ。反応に困るし、ストレスも溜まる。

だつたら隠して、学ぶことだけ学んで、盗める技術だけ盗んで、結果評価が悪くて退学、とかなら何の文句も無い。だつて隠している僕が悪いんだし。

ダメでもともと、行けたらサイコー！

そんなノリ。

「いつか青兄を貰ってくれるお嫁さんが現れるといいねー」

「あああああつああ、おあつえうえう？現れなかつたら、貰ってくれる？」

「んー、私にはほら、彼氏がいるから」

「あつうい」

がつくし。

チート染みた力があるのも、母音ーツン語しか発せられないのも僕だけだ。妹も両親も両親父母も健康体で、魔法師の素養は無い。ただの突然変異つて奴だね。

普通の両親と、普通に……あ、いや、めちゃくちゃ可愛い妹。目に入れても痛くない。と、僕の四大家族。これが追上家の家族構成だ。

盛大に鼻負して言うが、妹はめちゃくちゃすごい。料理も出来る。洗濯もできる。掃除も出来るし勉強もできる！運動もできるんだぞ！グウレイトウ！

幼少から僕の母音ーツン語を解読するためにアクセントやイントネーションを研究しているの、僕のこの暗号染みた言語の解読方法を記したルーズリーフがあるくらいマメで甲斐性があつて優しい！エエックセレンツ！！

「ん、どしたの青兄」

「いあ、ああいいあ、っえいや、可愛いな、って」

「だめだつてー、私には将来を誓い合ったヒトがいるんだからあ」

なにより——可愛い。

そう、それが何よりも大きく、それが全てだ。

そう、それだけで——パーフェクツツ!!!

本当に僕は良い家族に恵まれたと思う。

*

「Oh……」

今日の授業は魔法実習。

当然、魔法式を構築し得ない僕は全くできない。他の子が10000mscを努力して切ろう！ とやっている中で、僕はどうやって発動しよう、という所で躓いている。本当によく入学できましたねえ!?

ちなみにペアの子はいない。はいはい、ペア作つてー（生徒数奇数）のパーティーンだ。

用意されたCADを使わなければこの程度は出来るのだが、僕専用チューンでもない

実習用CADでは出来るものも出来ないのだ（言い訳）。

ところで達也君は意外にも実技が苦手なようで、1000 msecを切るのに三回も
の再試技を必要としていた。隣で見ているおっぱいメガネちゃんを見る限りでは、悪い
のは達也君ではなく機械の方のようだが。

あれほど動けていい目を持っていても、出来ない事は出来ないんだなあ、という感慨
深さと共に、僕も頑張らなきゃ！ という想いが湧いてくる。なんでもソツなく熟しそ
うな彼があれだけ努力しようやく、という技術なのだ。僕はもつと努力しなければい
けないだろう。

よし、もう一回！

*

実習用CADには勝てなかつたよ……。

昼休みになつても、当たり前だが魔法式は構築されなかつた。むしろこんな短時間で
改善されるのならば僕の今までの生はなんだつたのかというツツコミをいれたくなる
ので当然の事ではあるのだが。

僕と同じように居残っているのは桃太郎のお供こと千葉エリカちゃんと西城レオン

ハルト君。彼らの付添いで達也君とメガネおっぱいちゃんも残っている。

並べられた情報端末の両端にいたので彼らの会話は聞こえてこないが、それはもうチラチラとみられているのが分かる。アレか、ヤンキーが努力しちやダメですか。でもなあ、流石に基礎魔法学はバックレられないんだよなあ。必修科目だから。

さてどうするか、もういつそのことチート染みた方の方を使つてしまおうかと考えていると、ガラリと実習室の扉を開けてロリイが二人入ってきた。

見た目クールロリイと見た目元氣ロリイだ。見たことが無いから違うクラスだろう。

……まさか彼女たちも達也君ハレムなのか!?

くうつ、少しでも「出来ない同士頑張ろうな!」とか思つた僕の気持ちを返してくれ

!

あれ? というか達也君は三回かかったとはいえ出来ていて、女の子もたくさんいる。

僕は何千回何万回やつても出来るわけがなくて、女の子もいない。

Oh^神! Jesus^死!!^だ

Oh, no! My cola !!

*

達也達は困っていた。

「……………なあ、あれ……………助けてやった方がいいのか……………？」

「いいでしょ、別に。ああいうのはプライド高いから、下手に優しくすると怒るわよ」

「でもなあ……………。さつきから魔法の発動自体出来てねえぞ？　何か理由があるんじゃないや

……………」

実習室の最奥でCADに片手を置いたままずくずくと立ち尽くしている件のヤンキー、追上青の存在に。

レオもエリカも中々1000 msecを切ることが出来ず、達也にコーティングをお願いしていた身だ。出来なければ終われないのはそうなのだが、誰にも「ダメな所」を教えられずにいれば自分達も立ち尽くすことになっただろうことは想像に易い。

達也の助言もあつてなんとか1000 msecを切る事が出来たが、反面一切の進展が無さそうな追上が気になり始めていた。

「……………」

「お兄様……………」

そして、彼の事が気になるのは司波兄妹も同じ。

先日深雪が言われた暗号の意味や、妙な視線外しの技術。探っても探っても、普通の

情報しか出てこない経歴。

専用の武装一体型CADを持っているのだ、魔法師としての技量はそれなりにはあるはずで、そもそも第一高校に入学できるのだから魔法の発動が出来ないなんてことはないだろう。

で、あるならば。

何か目的があつて、居残っているのか。

そう思うのも当然の事だった。

「だ、すまん！ 俺、ちよつと行つてくるわ！ 体調悪いかかもしんねえし！」

レオが立ち上がり、追上の方へ早足で歩いていく。

「うわ、アイツほんとお人好しね……」

エリカが呆れたようにつぶやく。

「……あの人、知り合い？」

深雪と共にやってきた一科生の女子二人の内の一人、北山雫が深雪へと尋ねた。

「ええと……知り合いと言いますか、何と言いますか……」

「深雪を狙ってるヤンキーよ。二人も気をつけといた方がいいわね」

「や、ヤンキー!?!」

もう一人の女子、光井ほのかが怯えたように言う。

言われてみればさもヤンキー然とした恰好だとほのかは思った。
五人が見守る中、高身長男子二人が接触する――。

*

「よお、追上。さつきからずつと固まつてるが、大丈夫か？ 何か手伝う事、」

西城レオンハルト君が快活に話しかけてきた。

クツ、これが性格イケメンか……ツ!! 困っている者ならヤンキーであつても見捨てない……眩しい、眩しい!! ゾンビにケアルを掛けたら死んでしまうぞ!!

「ふふ」

「……あそこにいる達也に見てもらえば、少しは上達するかもしんねーぜ？ なんとつて俺やあそこにいる奴も達也に助言貰ったら出来るようになったし、」

「……いいッー!」

だが、すまないなレオンハルト君。

僕のこれは助言どうこうでどうにかなるものじゃないし、何よりお兄様ラブな深雪ちゃんの折角の達也君と一緒タイム時間を僕で潰させるのもアレだ。どれほど彼が凄くても僕のコレはどうにもならないだろうから、恐らく次のクラスがここを使う時間まで彼を

拘束してしまうだろうし。

ああ、なんて献身的な僕。可愛い子はやりたい事を望むままにやらせてあげるのが一番だよね!!

「……そうかよ」

ごめん、性格イケメンハルト君。君の好意は確かに受け取った!

しかしほら、明るい君は明るい所にいた方がいいのだよ! 僕みたいなくらいドロップアウトヤンキーみたいなのと関わらずに彼女でも作っていてくれ!

……彼女欲しいなあ!

ただまあ、そうか。

余計な心配をさせてしまうかあ。これ以上せつかくの善意を不意にするのは心が痛いからなあ。

えいつ☆

*

レオが何かを話しかけ、追上が拒絶を怒鳴り返した直後。

少しだけ顰めた額と共に達也達の元へ帰ってくるレオの後ろで、それは起こった。

丁度レオの影になって追上の姿は見えなかったが、モニターにいきなり122 msecの表記が出たのだ。

「なッ!?!」

「うそ……」

それは有り得ない事だと言えるだろう。

人間の処理速度の限界に迫ると、そう評された司波深雪の235 msecを上回る速度。

どうしたって人間は考えてから動くまでにラグが存在する。

CADに想子を流し込み、帰ってきた起動式を読み込んで魔法式を構築し、エイドスを改変するという処理が必要不可欠なのだ。学校が教育用に用意したノイズまみれのCADでさえ235 msecを出せる深雪の方が凄いのであって、普通の魔法師であれば500 msecで一人前と言われる。

0.5秒で物事の判断が出来れば十分であると。

それを、今さつきまで魔法の起こりすら見せなかったヤンキーが、それも二科生が0.2秒を切る。それがどれほど有り得ない事か。

その速度は、むしろ現代における「魔法」ではなく、魔法の元となった「超能力」にこそ相応しい物であるのだから。

達也は考える。

やはり追上是、何か意図があつて残つていたのだと。

そしてソレは、レオが追上の元に行った事で果たされたのだと。

——深雪を狙つているというのはいふの思ひ違いで、レオに何かあるのか……？

それともそれはミスディレクションで、深雪や、深雪と共に来た雫とほのかに……？

「おい」

「ん？ なんだよ」

追上が、レオに近づく。

そして無理矢理何かを握らせた。

実習室を出ていく追上。

「なになに、何渡されたのよ」

「……いや……500円玉、だな」

「はあ？」

「レオ、その硬貨……少し貸してくれないか」

「そりゃ別に構わねえけど……」

レオから受け取つた硬貨を視る達也。だが、何処にもおかしい所は見受けられない。専用の機器を使わなければわからないものか、それとも渡したことに意味があるのか。

通貨。それから連想させるのは、報酬や対価といった言葉。

「レオ、追上になんて言ったんだ？」

「んー、手伝うか？ って聞いて、断られて。んで、達也つつー良いアドバイザーがいるんだが、つてもう一回言ったがそれも断られたな。んで帰ってきたんだ」

「ツ……」

ギリ、と歯を噛みしめる。

追上が帰った理由がレオではなく達也だと気付いたのだ。

——何を悟られた？

思えば、先程の美月の暴走の時だエキサイトって追上はそこにいたのだ。後半の音量が大きくなった部分は聞こえていただろう。いや、もしかしたら前半も聴かれていた可能性はある。

CADを使わなければもっと早くできるといふ技術は、美月には誤魔化しと嘘で隠されたものの、本来秘匿技術だ。それに加え、レオとエリカの魔法行使風景も追上は見えていたはず。自身と同じく彼らの欠点や上達方法がわかっていたとすれば、レオの言葉から達也もまた、そういつた事エレメンタル・サイトに気付く目を持っているという確信になる。

あの視線外しを精霊エレメンタル・サイトの眼で無理矢理再認識した時、腕を掴まれた追上は明らかに驚いていた。つまり、あの時点ではソレを知らなかったのだろう。だが、この実習で確信

を得て、情報をくれたレオに報酬まで支払った。

正直に言えばこんな実習のこれだけの情報量で達也の精霊の眼に辿り着けるとは到底思えないが、その樂觀が深雪への危害にでもなれば目も当てられない。

「……返すぞ」

「ん、おお。なんか変な仕掛けでもあったのか?」

「いや、特に何でもない五百円玉だろう。持っているのが嫌なら俺以外の五人にジュースでも奢ってやったらどうだ?」

「お、ラッキー!」

「……まだ奢るって言っていないんだが」

とにかく、追上青は要警戒対象だ。

達也は警戒度をさらに高め、深雪と共に領き合うのだった。

*

好意の代金、五百円!

……安すぎたかな?

あいおあ ああいおあえおいうえあ

*

『全校生徒の皆さん!』

「うおっ!」

授業が終わった、放課後。

突然の大音量がスピーカーから放たれた。

ハウってるハウってる。

『失礼しました、全校生徒の皆さん』

どうやら音声調整ミスのようなのだ。あるある。

『僕達は学内の差別撤廃を目指す有志同盟です。僕達は生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します』

じゃあなんで全校生徒に言ったんだらう。

生徒会と部活連に言えばいいのに。

とは思ったものの、クラスメイトのみんなは何やら不安がって一度席を立った人も

戻つてきている。この後その交渉とやらが成功するにせよ失敗するにせよ、その旨を伝えるためには生徒が多くいた方がいいってことかな？ わからんが。

とはいえ僕には特に関係の無い話だ。

残念ながら僕への差別はどうかやつたつて撤廃されないからね。人と違う、つてだけで差別つてしちゃうもんだよ。区別じゃない分マシかな。区別だと、対等な立場なのに出来ないうつていうもうどうしようもないレッテルが貼られちゃうからね。

そんな感じで席を立つと、一瞬で視線が集まった。

「あ？」

いつも通りの単音。

サツと目を逸らすみんな。この便利ワード、是非とも流行語大賞にしてほしいよね。

じゃあそういうことで、とでもいうかのように手を振つて教室を出ようとしたその時、肩をガシツと掴まれた。痛い痛い握力強い強い。

「——何処へ行く気だ、追上」

「家」

簡潔に答えて、振り払う。

僕もそれなりにガタイがいいから、振りきれない事はないのだ。それにしたつて強いが。

達也君が追いかけてくることは無かった。

*

翌日、僕は普通に登校した。

当たり前のように僕の席付近には誰も近づかず、誰も話しかけてこないストレスフリーの状態でみんなの会話を聞く。

クラスメイトの話（盗み聞き）によれば、明日は講堂で公開討論会なるものを開くらしい。昨日の有志同盟とやらと生徒会・部活連の交渉の結果（？）だとか。へえ、やるじゃないかと思いつつ、もしやそれは強制参加なのかとうんざりもしていた。

僕にはクッキーを大量生産し続けるという崇高な使命があるというのに、だから昨日もこの一週間もいち早く家に帰っているという崇高な使命を奪うのかい!?

母音ーツン語すら使わなくていいクリックゲーは僕の心の癒しなんだよ……ッ!

「君、少しいいかな」

「あん?」

そんな身勝手な敵意を有志同盟とやらに向けていたら、後ろから声を掛けられた。

振り向いてみれば、優男。あ、いや、チャラ男と優男を足して二で割った拳句四乗し

たような、そんな男。青と赤で縁取られた白いリストバンドの様な物を付けている。なにそれ、フランス国旗？

「そう凄まじいでくれ。僕は君に良い話を持ってきたんだよ」

「……」

うわっ、怪C!!

とういか胡散臭っ。良い話を持ちかけられて良い話だった試しがある人つてどれくらいいるんだろう。

うさんしゅう
胡散臭がプンプンするぜツ!

「おえっ」

こういう奴が持ちかけてくる話題つて、基本薬物やらないか？ とかだよね（偏見）。見た目ヤンキーだからそう言うのに誘いやすそうつてのはわかるが、薬物、ダメ、ゼツタイ。ペッペッ!

僕が吐き気を催す、とでも言いたげな顔で鼻をつまみながらそう言うと、怪しい人はピクピクと青筋をヒクつかせる。本当に優しい人だったら謝るが（謝れないが）、どう見ても怪しいでしょこの人。

「……僕は親切で君にこの話を持ちかけている。その恰好を見るに、君も受けて来たのだから？ 数々の差別を」

あ、この人有志同盟の人だ。

今の学校で差別って言葉使うの同盟の人達だけだろうし。

ってことはアレかな。僕も同盟に引きずり込まうとしているのかな？

「いえ」

「……何？」

なら、お断りだ。この学校に来てから差別なんか一度も受けていない。元々僕は自分の事情を隠しているのに、みんな普通に接してくれているじゃないか。遠巻きとはいえ。

撤廃する差別なんか、見当たらないね。

伝わらないだろうが、しっかりとこの気持ちを母音ーツン語で伝えよう。

「あえうあんあうええあい」

差別なんか受けてない。

あーあ、これで僕が母音ーツン語しか喋れないのバレちゃったかな。

折角隠していたのに。

「ツ！ 失礼するよ」

「うい」

そのまま、怪しい人は去って行った。

これ。これが嫌いだから隠していたんだよ。

「あ、こいつ話通じないな（察し）」っていうこれが嫌いなんだ。
あ、やだやだ。

今日はもう教室から出ないようにしようつと。

僕は天を仰ぎ見ながらため息を吐いて教室に戻った。

うおつ、眩しつ。

*

美月が剣道部主将の司甲に絡まれていた所を助けた直後のことだった。

達也は、第一小体育館の裏という絶好の勧誘スポットでその二人を目撃したのだ。

その二人とは、先程見た司甲と——件のヤンキー、追上青。

達也はその身体能力を駆使して体育館上に上がり、気配を殺して二人の様子を窺う。
耳を澄ませば、やはり会話の内容は勧誘。

差別がどうこうと言って相手を引き込もうとする同盟の常套手段。

だが、意外な事にも追上は「差別を受けて来たのではないか」という甲の問いに対して、「いえ」と簡素に答えた。

差別を受けたからこんな恰好をしているわけではないと、そう言ったのだ。

確かに入学当初からあの恰好だったから、魔法科高校で差別を受けたわけではないのだろう。よくよく思い返せば意外な事でもない。

だが、次に続いた言葉は意外——いや、埒外の言葉と言えただろう。

「Are you want a way tonight?」

アンタは今夜のやり方を本当に望んでいるのか？

特徴的な訛りのある英語で、司甲にそう問ひ質したのだ。

達也もまた、この男が餌を撒く側……つまり何かを「やらかす側」だと推測していた所。

追上はそのさらに先、今夜何かをやらかす事を察知したと言うのか。

明日は公開討論会の日。明日何か仕掛けてくるならば、今日が決断の日と言えるだろう。

「ッ！」

目が、あつた。

まるで「やれやれ」とでも言いたげな表情の追上と、達也は確かに目が合った。

未熟。忍術使いに教えを受ける身として、気取られる事のなんと未熟な事か。

丁度いい。達也はそう思う。

司甲の件で九重八雲の所へ行くつもりだったのだ。アポイントメントは取るつもりだが、自身の細心がどれほどであるかの試しのため、気配を消して忍び込んでみよう。その「企み」がどうにも八雲と似ていることに、終ぞ達也は気付かなかった。

*

「エガリテにブランシユねえ……もちろんその程度の事は調べられるけど」

「企み」を「企み返された」達也は、本来の目的である司甲についてを師匠・九重八雲に相談していた。相変わらず飄々としたこの男は、その程度「朝飯前」であるとあつけらかんと言いつつ放ったのだ。

達也の軍属に関する話でからかいを入れてきた八雲を躲し、やはりとうに調べてあつたらしい司甲に関する情報を話し始める。達也の依頼を予知したかのようなその言動に深雪が目を丸くした。

プライベートもへつたくれもないその情報量に、やはりと舌を巻く達也。

からかいを交えて二人をおちよくる八雲に少し剣呑な雰囲気を出し始めた達也。その雰囲気を実に受けて、深雪が慌ててブランシユと司甲の関係を八雲に聞く。

腹の探り合いの無いその可愛らしさに場が和んだところで、八雲はまた語り始めた。

司甲の兄がブランシユ日本支部のリーダーである事を、あつさりと。

だが、肝心の部分にはわからないと。

十分だと言う達也に対して、八雲は細い目をさらに細めながら言う。

「それより気になってるのは、追上青君、だろっ？」

「……彼の事も、掴んでいると？」

確かに依頼しなかったが、昼間の一件から見ても追上がブランシユと関わりがある、というようには思えなかった。何らかの情報も掴んでいる事は確かだ、達也や深雪を嗅ぎまわっている事も確かなのだろっが、ああいう問いかけをするという事はブランシユそのものの関係者ではないだろう。

だが、それは関係が無いと八雲は言う。

縁があれば、それが良縁であろうと悪縁であろうと調べるのが忍びだと。

「おうえあお追上青。両親、祖父母、妹の誰にも魔法的な因子の発現は見られず。

先程の司甲君と同じ、いわゆる『普通』の家庭。司甲君と違うのは、どれほど遡ってもどこかで血が混じったという兆候が見られない事。司甲君が先祖返りなら、追上青君は突然変異か取り替え子チエンジリンゲだね。

幼少の頃は病院通いで、脳に何らかの異常があった事もあるようだ。今は問題ないよ。うだけど、その異常が魔法的な因子に繋がっていると僕は見ているよ。

ただ、今回の件には彼、関係ないと思うよ？　これほど洗っても関係性が出てこない
辺り、少なくともエガリテやブランシユのような末端組織には、ね」

その言い方はまるで、それらの上位組織とならわからないよ？　という言外に言っ
ているようなものだと思はれる。隣で聞いていた深雪でさえそう思った。

だが、それを今ここで明言しないのは達也の依頼から外れているから、だろう。

依頼は果たすが、依頼外の事はしない。なるほど、忍びである。

「そうそう、もう一つ。彼が君達に使った視線外しについてだけ……」

それを受けた事実まで知っている事に、流石に内心で驚く達也。深雪の方は顔に出
て驚いている。

「僕達忍びの使う幻術とは程遠い……：ような気がするんだ。全容が掴めたわけじゃない
けれどね」

「あの技術は、古式魔法ではないと？」

「うん。どちらかといえば超能力……君達に倣っていうならBS魔法という奴じゃない
かな。先日追上君が叩きだしたという処理速度から見ても、その線は濃厚だと思ふよ」

確かに、あの処理速度は古式や現代魔法では考えられぬものだった。

いや、CADの性能さえよければ匹敵するであろう存在が達也の隣でピトッと寄り
添っているが、十師族でもない追上があつた速度を叩き出すにはBS魔法師であると言

理由が一番しつくりくる。八雲が調べた幼少期の何らかの異常。これも関係しているのだろう。

であるならば、あのローラースケートのCADを使った時こそ、その処理速度の真骨頂が見えると言う事になる。コマ一秒を割る世界は達也も散々経験してきているが、それに追随しうる同年代というのは中々いない。

明確な敵か、第三者か。少なくとも味方である可能性は薄いだろう。

「……そういえば師匠。『合縁、良い縁？ 応援』という言葉聞いて……何か思い浮かべる事はありますか？」

「うん？ 合縁、良い縁、応援。……うーん、パツと考え付くのは西EUかな？」

「……西EU、ですか」

「欧州連合……日本じゃEUだけど、現地フランスじゃUnion Europeenne. だ。

A、I、Oと揃っているんだから、UとEもないと寂しいだろう？」

要は言葉遊びだよ、と八雲は笑う。

だが、どこかそれを単なる言葉遊びとして捉えられない達也。

思えばブランシユもエガリテもフランス語だ。例えば追上がフランスからの間者で、ブランシユやエガリテ等と言った存在を快く思っていないのだとすれば。

深雪や達也に自身の存在を知らせ、且つブランシユやエガリテと敵対する事によつ

て、その隔たりを証明できると考えるのではないだろうか。

「パツとしない答えですまないね」

「いえ、参考になりました」

思考は加速する。

それが真実であるか、勘違いであるかは闇に包まれたまま――。

*

あいおうあ あーああー

*

公開討論会とやらは強制参加ではなかった。

だから僕は普通にC A Dを返してもらって、普通に帰ろうとしていたのだが……。

「……」

もうね。

思いつきり怪しい黒塗りワゴンカーが学校の近く——実技棟の裏手——に止まっていた。

そして中の人間が見ているのは第一高校。僕のチート染みた力の性質上、そういうのはよくわかる。

そして、綺麗な放物線を描いて実技棟の窓に向かうそのもう一つの線に溜息を吐く。散々勿体ぶったが、僕のチート染みた力というものについて軽く説明しよう。

僕には、物の線や軌道が見えるんだ。あ、なぞったら死んじやうアレじゃないよ。

日常生活でよく使う視線外しや3Pシュートが得意って言った理由もこのチート染

みた力に由来する。そのエイドスがこれから行く軌道の予測……というか、ラインが見えると言うか。

弾道予測なんか計算しなくてもわかるし、誰が、もしくは何がどこを向いているかもわかる。

そして、わかるだけでなく操れる。

視線や意識を視認・操作する方は系統外魔法……それも精神干渉魔法のBS魔法で、エイドスの移動予測・操作は移動魔法のBS魔法だつてオイシヤサマは言っていた。CADを使わなくても念じるだけで出来てしまう魔法。

ON/OFFの切り替えは出来るし、見たいラインだけを特徴的な色に変える事も出来る。

これが、僕のチート染みた能力だ。

そして母音ーツン語しか発せられない原因でもあったりする。

正直僕は納得していないのだが、オイシヤサマの話に寄ればこういうことらしい。

・僕の脳は物の先を見る事が出来る。

・よつて僕の脳は常に最終端にいるに等しい。

・だから僕は言葉の終端である母音ーツンしか発せられない。

なにが「よつて」なのか、なにが「だから」なのか今……というか全くスッキリし

ない答えなんだが、そのオイシヤサマはこういうことだ、つて断言した。まあ普通の病院に行つても「様子見ですわねー」とか「何が原因かはわかりませんわねー」とか、オイシヤサマよりもつと遠い回答を貰つてしまつたが故に、一番理由らしい理由を言つてくれたオイシヤサマを信じる事にしたのだ。

僕のチート染みた力と母音ーツン語しか使えない理由の説明はこれで終わり。

簡単にまとめると、僕は想子の向かう先、飛んできた痕跡を視認出来て、操れて、系統外魔法擬きも使えるBS魔法師、というわけだ。

ね、チート染みた力でしょ。

もつともサイオン単位での視認・操作は正直今の僕には難しい。何故つて見えないから。

小さすぎて見えないんだよね……。もつと大きい括りならともかく、サイオンつて光みたいなものだから、その粒子を一粒一粒動かさせて言われても無理。

さて、そんな僕の方について説明したところで……。これ、どうしようかなあ。

そりや勿論止めた方がいいんだろうが、それは僕のチート染みた力を公表するようなものなわけ。オイシヤサマに、出来るだけバレないようにしてほしい、つて言われているんだよなあ。いや視線外し日常的に使つちやっつてはいるのだが。

とかなんとか考えている内に、黒塗りワゴンの窓が開いた。

そして出てくる、FPSなんかで良く見る紡錘形の先端部分。

あ、これ榴弾だ。やばいやつ

僕のチート染みた力がチートに成りきれない欠点。

何かが飛んでくるのはわかってても、何が飛んでくるかまではわからない！

つていうかこれどこに逸らしてもまずいんじゃない……。

せ、せめて上に！

*

何の前触れも無しに窓を破って入ってきた紡錘形のソレ。

演説と拍手の陶酔に酔っていた生徒たちに反応できるものではなかった。

だが、事を起こすだろう事は前夜の時点で風紀委員の全員が知っていた。

故に軍隊たるやという速度で同盟メンバーを拘束し、煙を吐き出し始めた紡錘形のソレは、逆再生を見ているかのような様子で煙をその内に戻し、破ってきた窓から体育館の外に放り出された。

「先輩、俺は図書館へ向かいます！」

「お兄様、お供します！」

「氣を付けろよ！」

達也には確信があつた。

先日、追上が深雪に与えたヒント。奴が本当にブランシュやエガリテを快く思っていないのならば、その目論見を潰そうとするはず。

i. e. Accune
e. n. t. r. e.
即ち、入室禁止。

つまり、テロリストの目的地は図書館の特別閲覧室だ。

講堂を出た達也達はしかし、直後に轟音を聞く。

場所は実技棟……その上空付近。

恐らくは炸裂焼夷弾だろう。達也と深雪は顔を見合わせる。

逡巡は一瞬。

二人は実技棟へ向かつて駆けだした。

*

「何の騒ぎだ、こりゃ？」

二人の走力をもつてすれば実技棟への道のりなどあつてないようなもの。すぐに駆け付けたそこは、しかし全てが終わっていた。

倒れ伏す電気工事作業員のような恰好の男達。無線機を使ってどこかへ指示を飛ばしている教師二人。そして、レオ。

教師二人にもレオにも怪我はないようだ。

「テロリストが学内に侵入した」

「物騒だな、おい」

「レオ！ ホウキ！ ……つてありや」

事務室の方からエリカが姿を現す。

彼女にも怪我はないようだ。

教師二人は既にCADを取り出して、倒れ伏した男達の痕跡から見てもレオではなく教師が迎撃した事が窺い知れる。

——この場は大丈夫だ。

警戒心を欠片も抱いていなかった平時ならともかく、この状況であるならば教師は信頼に値する魔法師になる。ツーマンセルで行動すれば奇襲も問題ないだろう。

「図書館に向かう。そこにテロリスト共は向かっているはずだ」

そのきつぱりとした物言いに、状況も考えて何故を問うている場合ではないとエリカもレオも顔を引き締める。雑談やじゃれ合いをすることなく、達也達は図書館へと駆け出して行った。

*

「……追上、青君ね。随分と無茶をしたようだけど……大丈夫？」

「……ああ」

咄嗟に榴弾の軌道を真上に逸らしたはいいのだが、どう云うタイプの信管なのかは分からなかったためにその辺に落とす事も出来ず、空中で爆発させる手を選んだ。

アイオーンを履き、Airで直上まで飛びあがり、僕自身の軌道をチート染みた力で曲げてIronで固めたアイオーンによる上下反転ライダーキック。

衝撃で爆発するタイプだったのはよかったのだが、まさか炸裂焼夷弾だとは思っていなかったから、モロに爆風を受けて叩き落された次第だ。

とはいえ自身に向かってくる炸裂片は全て逸らしたし、地面に着くまでにその軌道を逸らしまくる事で落下速度を落とし、無事植え込みに着地する事が出来たのでこれといったダメージはない。服も焼け焦げていない。

着地してすぐ、セーターを着たパンツスーツの女性が僕を労ってくれた。

身長が高くなってから覗きこまれるっていう経験がほぼなくなっていた事と、その女性の持つ余りにもスエックスイーな富士山が僕を癒す。何その大きさ……つてあ

れ、どつかで見たことあるような……。

ああ！ 初登校日に、担任っぽい恰好をしていた人だ！

「……気付いていたのね？」

「ん？ ああ……おう」

唐突に話し始めるものだから一瞬戸惑ってしまったが、焼夷弾の事だろう。

気付いていたというか、見てしまったというか。

よっこらしよういち、と口には出さないが心の中で思いながら立ち上がる。

うわ、この先生ちっちゃ！ いやフジヤマヴォルケイノがじゃなくて、背が！

フジヤマヴォルケイノの方はメロンパンナちゃんやおっぱいメガネちゃんを抜く勢

いでイラプションしているが、身長に対して大きすぎてもう巨っついうか爆だよ爆！

「……行くのね？」

って、そうだ物見遊山こんなごとしている場合じゃないんだった。

あんなの学校に打ち込むって、あれテロリストだよ。というかそれ以外だったら恐

ろし過ぎる。

こういうことって大人達に任せただ方がいいのだろうが、流石にこれほど線に溢れている学校を見捨てていくのは無理。特に不味そうなのは図書館。水平の線……銃器特有のソレが見える。

「おう」

とりあえずフジヤマヴォルケイノ先生に返事をして、ぐつとしゃがみこむ。

Airの欠点はあくまで加速系魔法であるということだ。ベクトルを変えるに過ぎないコレは、最初の運動エネルギーが必要になる。チート染みた力の方でやればその限りではないのだが、今はフジヤマ先生が傍にいる。見られるのは不味い。

クラウドチングスタート。

すりー、とうー、わん。

「オオオオオオオオ!!」

GO!

十分な助走を付けたらエアで飛びあがる。

自分の軌道予測は見えているので、面倒な計算をする必要もない。

飛びあがった眼下、レオンハルト君が侵入者っぽい人たちに囲まれているのが見えた。

間に合ったみたいだ。アイアンを使いながら、着地する。

「あいう、あいういんう……!」

ナイスタイミング! 早かれ遅かれ昨日の怪しい人の一件でバレるんだ、少しくらい喋っても良いでしょ。衝撃音で聞こえていないかもしれないが。

*

「P a n z e r
パンツァー!!」

図書館前で行われていた侵入者 v s C A D 無しの三年生の乱戦に雄叫びを上げて突っ込んでいくレオ。音声認識というレアな C A D もさることながら、逐次展開という最早廃れつつある昔流行した技術に呆れ顔の面々。

そこへ。

「I r o n
アイアン!」

まるで砲弾か何かかのように、見覚えのある金髪が突っ込んできた。

「うおっ!」

「I , m w i l l i n g t o f i g h t . . . !」

レオが飛び退く最中、そいつは呟く。

さあ、俺と戦おうと。

現れた闖入者に驚きつつも、侵入者たちはソイツ——追上にも攻撃を仕掛ける。一人がナイフで切りかかったのだ。

だが、ふらふらとした動きで追上はその一切を躲す。次にどこに何が来るかを熟知し

ている様な動きは危なっかしい部分が一切ない、戦い慣れた動きだ。

「アイアン！」

ローラースケートの車輪部分の分子構造の位置が固定され、硬化する。レオのものとほとんど同じだが、レオが全身であるのに対して追上是足だけ。一切の攻撃に当たる気は無いとでも言いたげな魔法行使だ。

追上是硬化したローラー部分で以て侵入者を蹴り飛ばす。

「へっ！ アンタは足技かよ！ んじゃ、役割分担は丁度いいな」

言いながらレオは侵入者を殴り倒していく。拳のレオと脚の青。どちらも長身故に、まるでコンビでも組んでいるかのような様相だった。

フルフレイトアーマー
速度とローラースケートという移動手段で戦場を縦横無尽に駆け回る追すと、剛力と全身鎧という防衛手段で堅実に且つ豪快に殲滅をしていくレオ。周囲からは三年生の魔法が飛び交い、テロリストを包围する。

「レオ！ 追上！ 先に行くぞー！」

「おうよ、引き受けた！」

「YEAH！」

拮抗していた戦況は変わったのだ。

レオと追上に場を任せ、達也達は図書館へ入って行く。

*

テロリスト達を拘束して、それじゃあ家に帰ろう！ とした所をフジヤマ先生に止められた。腕を掴まれて、こう、ぐによつていうかふによつていうか。

「まさかそのまま帰る気じゃないわよね？」つて……まさかお礼!? 曲がりなりにも学校を守った事への!?

いやあゝそこまでされたら断れないっていうかゝ、も、もうちよつとこの感触を楽しんでいたいっていうかあゝ。

「小野先生と……追上君?」

下卑た思考を顔に出さないように努めていたら話を聞きのがしていた。何かフジヤマ先生に言われた気がしたんだが、うん、良く覚えていない。

とりあえず強制連行される形で保健室に入ると、そこには達也君の知り合いと風紀委員の渡辺先輩、メロンパンナちゃんこと生徒会長の七草先輩、そして僕なんかメジヤないくらいに超絶ゴツイ男子生徒。というか多分先輩。

人垣で見えなかつたが、体育館で試合をしていた剣道部員(?)の先輩もいるようだ。怪我をしているのか、包帯を巻いて寝台に横になっている。

「小野先生、追上。事ここに至って知らないフリはありませんよね?」

達也君の鋭い目線が僕とフジヤマ先生……もとい小野先生を貫く。

なに、何の話? 小野先生の柔らかかみの話?

……ふざけている雰囲気ではなさそうだ。

「……地図を出してもらえないかしら。その方が早いから」

小野先生は何か心当たりがあるらしい。しかし、なんだろう。

ここ、僕がいるべきじゃないよね。さつきまで舞い上がった僕がいて良い場所じゃないよね。

あとゴツイ先輩の視線が超怖いんだが?

達也君が情報端末を取り出し、地図アプリを展開する。

小野先生もオサレな端末を取り出して何かを送信。達也君の地図アプリにマーカーが出た。座標を送ったみたいだ。

うわ、めつちや近所。ウチが街の終端だから……歩いて10分くらい?

そこから交わされた会話を聞く限りでは、そこには環境テロリストがいたらしい。そして今は、今回学校を襲ったテロリストが隠れ潜んでいると。

なにそれ怖い。

達也君と七草先輩たちの話ほとんどん拍子に進み、なんでも達也君達とゴツイ先輩こ

と十文字先輩が突入する事になったんだとか。いやいや、学生の領分越えてるよね。教師に任せちゃダメなのかなー……というか、警察とかさ！

しかし僕にはそれらを呼んではどうか、という提案をするための術がない。

そしてなーぜか僕も突入班に入れられた。自然な流れで。

「会頭と会長が十師族なのはわかったけどよ……遙ちゃんと追上って何者なんだ？」

「その話は後だ。行くぞ」

後にしないでー！

大事！　そこ大事！　フジヤマ先生のフルネームが小野遥だつてわかった事は嬉しいが、そこスルーしちゃだめなところ！

勿論、心の声は誰にも届かなかつた。

*

「追上、やるな！」

「ああ」

「……なんか手馴れてたわね」

時速百キロ超で走行中の大型車全体を衝突のタイミングで硬化してくれ、とは達也君

の依頼。まあいつもやっている事とさほど変わらないので引き受けた次第だ。

さつき一緒に戦った時もそうだったのだが、先日あんな風に好意を無下にしたにも関わらずレオ君は僕を褒めたり激励したり、とにかく気にかけてくれる。もうすぐ日が沈むというのにレオ君だけ輝いて見えるよ。

親愛も込めて（心の中だが）レオンハルト君からレオ君呼びに変更させてもらった。

エリカちゃんは未だいぶかしむような目で僕を見てくるのだが。

「司波、お前が立てた作戦だ。お前が指示を出せ」

「はい。」

レオ、お前はここで退路の確保。エリカはレオのアシストと、逃げ出そうとする奴の始末だ」

「捕まえなくていいの?」

「余計なリスクを背負う必要はない。安全確実に、始末しろ」

達也君は冷徹な顔でそう言い放つ。

始末って……殺す、って事かなあ。

それ過剰防衛で捕まりそうだなあ。

「会頭は桐原先輩、追上と共に左手を迂回して裏口に回ってください。俺と深雪はこのまま踏み込みます」

「わかった」

「まあいいさ。逃げ出す鼠は残らず斬り捨ててやるぜ」

「……おう」

んー、出来るだけみんなが罪に問われないように、手早く昏倒させていくべきかあ。特にこの桐原先輩（？）、目つきがギラギラしていて……確実にヤリそうだなもんなあ。桐原先輩が刀を手に駆けていく。眼を離さないようにアイオーンでシャーつと付いていく。十文字先輩は、悠然と歩いてくるようだった。急ごうと言う気はないらしい。出来れば死人が出ませんように、つと。

*

裏口までの道中に敵らしい敵はいなかった。

裏口までは走って行った桐原先輩だが、流石にそこからは気配を殺す……かと思いきや、なんと工場の裏口のドアに刀——振動魔法・高周波ブレードを発動してあるもの——を突き刺したではないか。

そしてバターでも切るかのように、扉を斬り落とす。

「行くぞ、後輩」

「おう」

短く声を掛け合って進む。

流石に裏口に誰も配備しない、ということにはなかったようで、ドアが切り落とされた音に反応してかわらわらとテロリストたちが出てくる。

工場のドアを斬った刀で人体を斬れば、殺傷するには十分だろう。

そう判断し、桐原先輩よりも早くテロリストを制圧するためにチート染みた力を使いつつ駆けだす。

「アイアン！」

昼間と同じようにローラーを硬化し、しかしチート染みた力で勢いを殺さずに身体に負担がかからない程度で軌道を曲げ、連続で蹴り抜いていく。

身体を貫くラインが見えたら即座にジャンプし、シングルアクセルを決めつつ回しかかと落とし蹴り。鼻の骨が折れるくらいであれば、死よりはマシだろう。

僕が露払いをするとわかったからか、桐原先輩はずんずん進んでドア、時には壁をも切り裂いて真っ直ぐに進んでいく。僕は離されないように蹴り倒していく。

ひしひしと十文字先輩の視線を背中に感じていたが、気にしている余裕は無かった。そして。

壁一枚を挟んで、向こう。

「何故——!?」という、何事かを必死で問いかける男の声が聞こえた。僕達側の壁にほど近い場所。

構わず桐原先輩は壁を切り裂く。

「ひいっ!?!」

中は死屍累々だった。

拳銃型のCADを持った達也君を囲むような形で、肩や足から血を噴出させた男達が倒れている。とある事情で血臭にこそ慣れているが、この光景はあんまり長く見ていたものではない。

「よお。コイツらをやったのは、お前か?」

そんなわかりきったことを聞く桐原先輩。

あ、十文字先輩が追い付いた。

「やるじゃねえか司波兄。それで、コイツは?」

「それが、ブランシユのリーダー、司一です」

それを聞いた瞬間、桐原先輩の雰囲気が一変した。

今まで拔身の刀のようなギラギラとしたソレから、荒れ狂う嵐のような怒気へ。

「お前か! 壬生を誑かしやがったのは!」

あ、これヤバイ。

咄嗟に桐原先輩の持つ高周波ブレードの軌道を逸らす。

「てめえのせいだ、壬生があああああああ!!」

右腕を肘から切り落とす軌道だったそれが逸れて、手首——腕にはまった真鍮色の腕輪ギリギリを斬り落とす結果に収まった。それでも十分に傷害罪に問われそうだが。

「ギャアアアアア!?!」

その腕輪から、先日体育館で見た達也君から発せられた波の荒い *ver.* の様な物が飛ぶ。

確かこれ、人を酔わせる魔法だっけ？

当たるのは嫌な感じがするので、避けながら腕輪を蹴り飛ばした。

ちよつとローラーに血が付いてしまったかもしれない。後で取っておかないと、つまりの原因になりそうだ。

何より血が付いているとか、僕が嫌だ。

さて、このままだとこの人出血多量で死んでしまう。流石に人殺しの罪は背負いたくないし、同じ学校の生徒にも背負ってほしくない。

ので止血をするべきなのだが、生憎僕のアイオーンにそんな便利な魔法は入っていないかった。

そこへ、ぬうつと十文字先輩が顔を出す。

十文字先輩は少し顔を顰めると、すぐにCADを取り出して魔法を発動した。
ジユツ、という肉の焼ける音。

「あーあ……」

二度と嗅ぎたくなかったなあ、人体の焼ける匂い。

うわー、当分お肉を食べられなそうだ。

菜食主義のヤンキーへジョブチエンジしないと……。

*

あいあああ あんあいおうえいうう

*

五月になった。

絶対にお咎め、というか警察の関与があるよなあ、と戦々恐々としていた僕だが、時が過ぎれども何も無し。何かあるより何も無い方が恐ろしいと言うべきか、僕のチート染みた力への追及も無ければ桐原先輩や達也君の過剰防衛に対する問い質しも無し。

文字通り何事も無く五月になった。

もつともここで言う「何事」は事件に関する事だけで、人間関係の方で言うのならば……進展、そう言っても許されるだろう事があった。これは僕にとって結構な重大事件だったりする。

それは、

「よ、青。おはよーさん」

「ん。ああ、Leo……おう」

輝く性格イケメンこと、レオンハルト君との仲が深まった、という事。

こういう言い方をすると変に捉えられるのもっとしつかりとした言い方に変えるのならば、「友達」と——そう、呼べる存在になったのだ。

ギリギリ——そう、ギリギリ、レオをエオと発音しても名前だとわかってもらえない。達也君とか深雪ちゃんとか、エリカちゃんとかおっぱいメガネちゃん（まだ名前を知らない）とか、発音できない子達との交流は全然だが……レオ君だけは頑張つて呼んでみた所、彼も僕の事を下の名前前で呼んでくれるようになったのだ。

これは大きな一歩である。

無論今までの人生に母音ーツンだけで構成された名前を持つ人間がいなかったわけではない。愛とか葵とかそういう名前を持つ子は少なからずいた。が、僕のこの对人的友好度降下衣装を見た上で友達付き合いをしてくれる子はいなかった。

レオ君がここまで親身になってくれるのは恐らくあの共闘が原因だろう。

テロリスト相手の大立ち回り。使用魔法の近似や戦闘スタイルの噛み合い。少年漫画で言う戦友と書いてトモと読む、みたいな信頼性が生まれたのだ。

……と、僕は信じている。信じたい。

「今日は壬生先輩の退院日なんだってよー」

レオ君は僕の口数が極端に少ない事をそれとなく感じ取ってくれているらしく、相槌も求めずに色々な事を話してくれる。無論彼の占める時間の割合は達也君たちやエリ

カちゃんと共に居る事の方が多いのだが、一割でも僕に割いてくれているそのイケメンっぷりに、僕の頭は下がり過ぎて地面にめり込む勢いだ。

ちなみに壬生先輩というのはあの日ベッドで横になっていた女子生徒の事。

レオ君曰く怪力女ことエリカちゃんに叩きつけられて骨が折れていたのだから。エリカちゃんは怒らせないようにしよう。

とにかく、僕は第一高校に入って初めての友達が出来ました。

家族に報告したら、飛びあがって喜んでくれた。本当に、良い家族だ。

よし、これからの学校生活も頑張るぞ！

*

七月中旬。

僕の心は折れかけていた。

原因は、定期試験。

魔法の実技テストはまだ良い。チート染みた力を使えば、個別の部屋でやる分には何ら問題なく行使できるから。

問題は、魔法理論の記述式テストだ。

知つての通り、僕は母音ーツンしか書けない。

一時期はどうにかして母音ーツン以外を出力するために色々な方法を調べたのだが、どれも轟沈した。赤白旗の手旗信号や手話、ツートンのモールス信号、ポケベルのような数対応、果ては描画、フोटモザイクなんかも試したのだが、なぜか全て母音ーツンになる結果に終わった。

そんな僕が、だよ。

魔法理論の記述？ ハハツ、出来ない出来ない。

ペーパーテストは捨てた。他の普通科目も、普段の提出課題が評価点になるため、当たり前だが文字を書けない僕はほとんど提出していないので超低評価。

家族は魔法理論なんてさっぱりだから頼めないし、そもそも僕が頼みたくない。家族に課題やつてもらおう高校生とか……ないない。

そんなワケで、見るも無残な、という言葉がしつくりくるレベルまで劣等生評価を受けた僕は、しかし呼び出される事は無かった。

ふざけているのか、くらいは言われると思つたのだが……。

まあ一応魔法実技の方はしつかりとやったし、処理能力と干渉力に関してはチート染みた方を使えば一科生にも勝る自信がある。オイシヤサマがBS魔法と言つたコレは、文字通り思いのままにエイドスを改変できるからね。

反面魔法規模の方は今一だったりする。何故って、僕のこのチート染みた力は魔法式なんて構築しないから。よって構築しうる魔法式は自分のCAD……つまりアイオーンに込められたものだけとなり、一番大きいもので三工程のものしか入っていない。(ちなみにエアとアイアンは一工程だ。どちらもその後の事は考えていない)

ということ、なんとか落第は免れた(魔法実技が重要視されるため)が、劣等生も劣等生な結果に終わった、というワケで。

貼り出された定期試験のランキングを見て、ランク外の文字に僕の心はブロークンファンタズムしかけていた。

これが最初のテストで、これからどんどん評価基準が上がって行くのなら……果たして、僕は無事にここを卒業できるのだろうか。

自主退学をしなければ、余程の問題を起こさない限り退学させられる、ということはないだろう。だが、魔法科高校の卒業資格は与えられず、魔法科大学へ進学するための前提すらもらえない結果になるだろう。

それはまあ、割と困る。

そもそも魔法科高校に入りたいと思った理由は、分かっているかとは思うがこの症状の治療、もしくは制御を学ぶためだ。

最悪チート染みた力の方が使えなくなっても良い。良いから、普通に喋れるようにな

りたい。ぶつちやけ魔法師としての素養が無くなっても全く以て構わないので、言葉を
取り戻したい。元から持つてないが。

それが、僕がここにいる理由。

魔法科大学になれば、僕を治癒し得る人、もしくは魔法がある事を願っている。

オイシヤサマや魔工技師でも治せなかったこの症状。というか、治るか治らないかだ
けでも良いからはつきりさせたいのだ。治る可能性が一厘でもあるのならそれを死ぬ
気で目指すし、不治だと断定されればそれはそれで向き合っていく。

今のオイシヤサマは何故こういう症状が起きているのか、は説明してくれても、どの
ようにすれば治るのか、はわからなかった。だから、僕は魔法科大学に進みたい。

……なんて、格好つけておいて、この定期試験結果であるのだから、心が折れかける
のも仕方のない事だろう。

「……ああ」

普通の人なら、溜息をつけば八行を扱える。

僕の溜息は「ああ」になる。はあく。

「ああ、うん」

だめだめ。

一人でいる時に落ち込み、そのまま将来の事を考えると負のスパイラルに陥ってしま

うものだ。こういう時は無理やりにも頭を切り替えて、出来るだけ明るい事を考えなければ。

明るい事。

……明るい事……？

太陽を見上げる。

うおつ、眩しつ。

「……あー」

うん、馬鹿な事をやったら気分が晴れた。太陽だけに。

まあ、なんとかなるさ！

*

「青ツ！」

魔法科高校にも魔法以外の授業は当然のようにある。

そんな普通科目の一つ、体育。科目はレッグボール。フットサル派生の……なんだろう、実はスーパードールなんじゃないかってくらい跳ねまわるボールを、透明の箱のようなもので覆われたフィールドで蹴り合う競技だ。ヘディングがハンド扱いなどこ

外は、まあ大体サッカーと同じ。とはいえ凄まじく跳ねまわるボールなのでドリブルは至難。

足を使うポートボールだと考えた方がいいかもしれないね。
ところがぎつちよん。

僕に限って言えば、その認識は少し変わってくる。

僕は物の行き先が見える。操れる。その軌道がどういう干渉を受けたらどう逸れるのかまで見える。

どれだけ反発力があるかが、何処に跳ぶのか分かっていれば対処は容易い。

コート上にいるプレイヤーの軌道だつてわかる。急停止された場合はその限りではないが、その身体がそのまま走つたらどういうラインを辿るかが見えるのだ。故にフェイントは効かないし、相手の視線（視界の最も濃い部分）がどこを向いているかわかっている僕のフェイントは必ず通る。

レオ君がくれたパス。他の生徒は僕を忌避し、嫌厭する故に僕にパスを出す事は無いが、レオ君はその限りではない。むしろ僕の身体能力を知っているからこそ頻繁にパスを出してくれる。

そして僕は、その期待に応えるだけの力がある。

「オオオオオオアアア!!」

ドリブルをしない事が基本であるから近づいてくるプレイヤーはほとんどいない。故にディフェンスがいるギリギリまでをドリブルで接近し、パツと見では絶対に入らない角度で——しかし、軌道予測が見える僕にとっては絶対に入るシュートを放つ。

キーパーが魔法を使わなければ絶対に届かない場所へ向かって抉り込むように放たれたシュートは、魔法を使わない、つまり自然に起こり得る範囲での最大限の鋭角を描いてゴールを穿つ。

こういうスポーツの選手になるのもいいなあ、なんて思う事はあるのだが、こういう競技こそチームプレーが第一だ。意志の疎通がうまくいかないワンマンプレイヤーなんて、すぐに対策を練られてしまうだろう。あと僕、インタビュートとか答えられないし。

「ナイツシュー！」

「おう」

レオ君とハイタッチ。

いやあ、しかし良いね。こういう汗を流すスポーツは嫌いじゃないよ。
というか好きだよ。

「つと、休んでる場合じゃないよな」

「……ああー！」

僕の見た目はヤンキーだが……月刊跳躍の、特に熱血スポーツ漫画好きなんだ！

あ、日曜日とか弾倉とか道楽とか転倒とか銃銃とか優勝者とかも、全部好きだよ？
この後めちやくちやレツグボールした。

*

「意外だ、つて顔してるぜ、達也」

「……いや、身体能力の面から言えば然程驚きはないさ」

見学レーンに戻ったレオの達也に向けた第一声がコレだった。試合はレオ、達也、追上、そして細身の男子生徒——吉田幹比古の活躍によって圧勝。むしろ圧倒的なまでのディフェンス力を誇る追上のおかげで失点無しの完全試合となった。

「俺だつてそつちを言ってるわけじゃねえよ。意外だったのは、青があんなに真面目に授業を受けてる、つてトコだろ？ それもこんな、チーム一丸になってやるスポーツなんか」

その指摘に、達也は「半分は当たりだな」、と思う。

この七月までの間に体育の授業が無かったというわけではないが、基本的にサポータージユを敢行するか一匹狼を貫いていた追上。だからこそ、今回のようなチームプレーを主体とする競技こそ面倒くさがるのだと思っていた事は事実だ。故にその半分は当

たっている。

だが、もう半分は違う理由。とはいえこっちはレオが気付けるわけも無い。

残りの半分とは、西EUの間者——^{スパイ}達也の伝手である軍事関係者を頼つても情報を拾えなかった事からほぼほぼは確実だろう——である追上が、達也達に身分をバラしてもなお学校に在籍し続け、なおかつその身体能力や認識能力の高さなどを一切隠そうとしな
い事だ。

学校の教師陣は低成績者に目をくれる事は無い。達也のように実技と理論がしつちやかめつちやかしている場合はその限りではなかったようだが、二科生にまで割くりソースのない学校は二科生^{その中}でも態度不良・成績不振である者など相手にはしない。

だからこそ、追上が入学時点から不良生徒であり続ける事は意味があつたのだ。

だというに、その能力を隠そうともしないのは不可思議だ。魔法ではなく体育の授業故にトレーナー資格を持った職員がいるのだから、記録にも記憶にも残る。特に今日の授業は観客も多く、追上の運動神経の良さはE組、F組共に知れ渡つた事だろう。

魔法こそ絡んでいない授業ではあるが、一般科目でも定期試験前と定期試験後で成績結果や授業態度が段違いであれば怪しまれることなど容易にわかるだろう。

それとも、注目されたい理由があるのか？

「そうだね……偏見になるけれど、僕も彼はこういうスポーツは、参加しても不真面目に

やると思っていたよ。

けど、周りも良く見えているしフェイントなんかの技術もすっかりしている。特に弾道予測が格段に上手い。正直、あのボールをドリブルした時は目を剥いたけどね」

「ああ、あれは俺も驚いたぜ。あのボール、ドリブル出来たんだな」

先程交流を持った幹比古がレオと達也の話に入ってくる。

幹比古が正に良い例だろう。不良生徒だと思っていた追上の印象が、たった十数分の授業で覆されてしまったのだから。

——それが狙いか？

「……それにしても、レオ。随分と追上と仲良くなったようだが」

「ん？ ああ、そうだな。あんまり喋らないヤツだけど、割と普通に付き合えるぜ？」

「——なんだ、やつぱりソツチなの？ アンタ」

ふと、不意に声がする。

聞き覚えのある声に三人が振り返ると、そこにいたのはエリカ。と、美月。

ソツチってなんだよ、とレオが聞き返そうとして、その恰好を見てフリーズした。

*

それは休憩時間の事だった。

天使が、舞い降りたのだ。

お山こそ低いものの、その余りにも健康的な御魅足は崇めたくなるほどの美しさ。

いや、いやいや!

昔は普通に見られた光景だが、この時代においてそれはもう、情欲を掻きたてると

言っても過言ではない衣装^{コスプレ}。

そう!!

ブルマきたあああああああ!!

ナアイスだよエリカちゃん! 暗い事考える僕の頭の中がブルマ一色、いや、その健

康的な脚で埋め尽くされたよ! いやあ世界は明るいね!!

*

「む?」

「どうした、エリカ」

「いや、今一瞬視線を感じたような……」

*

あいあいあ おうううおういあん

*

やけにクラス中がそわそわしている。

「聞いたか?」とか「凄いよね〜」とか、主語の無い会話がそこかしこで交わされているのだが、具体的に何を、とか何が、とかいう情報は入ってこなかった。

今日ばかりはレオ君も話しかけてこず、仕方がないので情報端末に入っている音楽を聞いて朝の時間を過ごす。リンボ! もびれ! ギーム!

ワイヤレスホンは楽でいいなあ。

「あ、来た!」

と、クラス中の視線が一点に集中する。

恐らく渦中の人物が来たのだろう、情報を聞きのがさないように片耳を開けた。

「おはよう。がんばれ、司波。凄いじゃないか」

「おはよう、司波君。がんばってね」

「おはようございます、司波くん。応援しています」

「オッス。頑張れよ、司波」

……渦中の人物が達也君なのはわかったが!!

何を!? 何を激励しているの!? 主語の無い日本語ムツカシスギルヨー!!

しかし、応援か。

おうえん。僕でも言える言葉。

少し幼い言い方にすれば、えいえいおー! でも行ける。

だがしかーし!

僕、ファツシヨンとはいえヤンキーなんだよね。

……レオ君相手ならともかく、達也君にエールを送るのは……こう、キャラ付的にどうなんだろう。

というかそもそも何の応援かわかってないし。達也君の微妙そうな顔を見るに、本人にとってはあまり嬉しくない事なのかもしれない。

便乗するべきじゃあ、なさそうだ。

*

みんなが達也君の何を応援していたのか、それは五限目の全校集会で明らかになっ

た。

発足会。そう名付けられた、九校戦という学校対抗の大運動会の代表メンバー挨拶。先日の討論会と違って強制召集であるコレは、勿論僕も参加するのだが……。

えーと、何故皆さん前に行くのでせうか？

言うまでも無い事だが、僕達は二科生だ。色々な点で一科生より劣っていたから二科生に振り分けられたのであって、当然一科生は二科生の事を見下している。それは魔法実技・魔法理論に対する努力や素質の顕れであって、決して悪い事じゃあない。純然たる事実から来る価値観だ。

そんな一科生のいる前列に二科生が突っ込んでいったら、そりやあ悪目立ちする。

実際ほら、全生徒からの視線が君達に集中しているよ？ なーぜ気付かない？ それとも気付いているが無視している？ それならもう豪胆通り越して無謀だよ……。

まだ入学したての一年生なのに、上級生や同学年全部を敵に回すとか勘弁だよ……？ というか君達どこを見て……おお？

あれ、達也君じゃないか。

へー！ 達也君、大運動会に出るんだ。あ、みんなが応援していたのってソレ？

そりやあ応援するよ！

僕も前行って応援しよう!!

「……あんあえお」

小声で、頑張れよって言っておいた！

ちよつと尻すぼみになってしまったが、どうせ聞こえてないから大丈夫大丈夫。こういうのは言つたつて事実が大事なんだよね。

*

九校戦メンバーの発足式。技術スタッフとしてメンバー入りする事になった達也は、一科生で先輩の五十里啓による声掛けで悪意に晒されていた心を和らげ、改めて客席を見つめた。

そしてギョつとする。

席割りは自由なはずだが、自然と一科生が前、二科生が後ろという無意識の区分が出来ている中で、前から三列目というほぼほぼ最前列の位置にエリカがいたからだ。エリカは達也に向かってブンブンと手を振っていて、その隣には美月、逆側にはレオ、その隣に幹比古。他、見覚えのある……というより、まさに朝会つたばかりのクラスメイト達が一塊となつてそこにいた。

さらには、金髪に赤と銀を入れている高身長……追上の姿までではないか。

そんなことをすれば、クラスメイトや二科生だけでなく——全校生徒に対しても自身を目立たせるようなものなのに。

真由美が技術スタッフとして達也の名を呼び、深雪が蕩けるような笑顔で達也の襟に徽章を付けた。

その瞬間、割れんばかりの拍手が起こる。当然、前列に固まったクラスメイトからのもの。おぎなりではあるが、追上也拍手をしていた。

今までのメンバーにそんな拍手はしなかったのだ。進行を妨害するその行為に一年の一科生からブーイングが起こりそうになって——、

パチパチと、舞台の両脇の生徒、深雪と真由美が拍手をする。

それはメンバー全員を紹介し終わった事への拍手にすり替わり、講堂全体に広がった。

だが、その拍手に掻き消されかけた追上の呟きを、達也は聞き逃さなかった。

「An alert。」

警告はしておくぜ。

ニヤついた笑みを浮かべながら拍手を続ける追上は、式が終わるまで達也から視線を外す事は無かった。

*

八月になった。

暑い。なんだこれは。暑い。

そして僕は何故ここにいるんだろう。

シャー、シャーとアイオーンで走るのは、コンクリートの道。幅約50cm。

そう、高速道路——その、ヘリである。

ヘリ。

出っ張りと言っても良い。高速道路の側面にあるヘリを、それはもう素晴らしいローリースケート捌きで走っているのだ。

「……うおっ」

チート染みた力の方は常に使用している。というか、していないと危ない。

普通に小石や砂利、ブロック片が落ちていたので、軌道予測のラインを常に見ていないとまっさかさまだ。

コンクリートに身体を押さえつける様な方向にもチート染みた力を使っているのでなすすべなく落ちる事はそうそうないだろうが。

さて、何故僕がこんな曲芸染みたことをしているか、だが。

事の発端は昨日にまで遡る。

*

「青兄、七草真由美さん、って知ってる?」

「うん? うん」

「スピードシューティング、って知ってる?」

「うん」

「写真って、……撮って来れる?」

「いいえうおお! いいですとも!」

パワーをメテオに!

「ごめんね? 急なお願いで……その、お兄ちゃんが魔法科高校に行ってるって知った
彼氏の子が……欲しいって。本当、無理ならいいからさ」

「あいあいあ、ああいいいおうおおあえああんおおお! ああおえういおえいおうおお
ええ、おつえいあうああいんおいいあい! いやいや、可愛い妹のためならなんのその!

山越え海越え地獄を越えて、撮ってきますさ写真の一枚!

おえい、いうおおえあいあつえうんあああ、おえうあいおおんあえいああええおそれ

に、いつもお世話になってるんだから、これぐらいの恩返しはさせてよ」

「……青兄……。うん、じゃあお願い！ スピードシューティングの日程は明々後日だけど、近くのビジネスホテルに明日から三泊四日で部屋を取ってあるからね」

「え、おあえあ？ おんあおあえ、おおああえ、お金は？ そんなお金どこから」

「彼氏が、『不躰なお願いをするのだから、お金をこちらが出すのは当然だよ』って……」

「うあー、おうえいああえいあええうわー、よくできた彼氏だねえ」

「現地に着いたら電話でナビゲーシヨンするから、いつも通り、ココを押せば直通で私に繋がるからねー」

「うん、いうおあいあおうん、いつもありがとう」

「今回はこつちがありがとうだよー」

*

そんな会話があつたのだ。

そう、僕がここにいるのは可愛い妹の為。

そしてこんな曲芸染みた事をしている理由。それは。

……九校戦の会場知らないから、バスを追っていくしかないんだよなあ。

これに尽きる。

自慢じゃないが、僕は地図が読めない（本当に自慢じゃない）。

地球の自転による地球上の物体の軌道を見れば東西南北はわかる。が、地図のどこがどれなのかがよくわからない。特に近代化したこの時代、空中道や地下道が入り組んだり、入っちゃだめだったり良かったり。もうほんと止めてほしい。

地図の検索アプリは使えないし、機械式でナビゲートされてもよくわからないし、というか明らかに効率悪いルートを取ろうとするし、それに反抗して近道っぽいところ選ぶと迷うし……。

なので、こうして「道を知っている車両」に付いていくのが一番いいわけだ。

……まあ、犯罪なのだろうが。

しかし……遠いな。

ん？

嘘でしょ!?

*

「……どうした、十文字」

九校戦の会場へ向かう途中で起きた、いや、起き掛けた衝突事故。

パンクか脱輪か、対向車線を走るオフロード車が堅固なガード壁を飛び越え、生徒たちの乗るバスへ突っ込んできたのだ。

運転手の的確な急ブレーキと生徒会・市原鈴音のバスの減速処理、十文字克人の防壁魔法、司波深雪の常温への冷却による消火。

これらの巧みなまでの手腕により、けが人はオフロード車の運転手一人に収まる結果となった。怪我人——否、死人、であるが。

警察の事情聴取などに付き合う中で、額を顰めている十文字を見つけた摩利は彼にどうしたのかと問う。

「いや……妙に、防壁に掛かった圧力が少なかったように思ったが……」

「市原の減速魔法があったからだろうか？」

「そちらではない。飛んできたオフロード車の話だ」

それはおかしな話だった。

飛んできたオフロード車を減速させよう、もしくは弾き飛ばそうとした魔法は複数の術者が行使しようとした事で相克が起き掛けていたし、何よりそれらの魔法は全て何者かの手によって吹き飛ばされている。

だからこそ司波深雪が炎を消化する魔法を行使できたのだし、十文字克人が防壁の魔

法を発動させられたのだ。

魔法の行使が最も早かった千代田花音のソレさえも発動していなかったその僅かな瞬間に、既にエイドスの改変が終了しているなどという処理速度を持つ者が、今バスに乗っている生徒たちの中にも思えなかった。

いや、可能性があるとすれば司波深雪だが――。

「気のせい……か？」

「いや、十文字の空間把握能力はこの場にいる誰よりも卓越しているだろう。お前がそう感じたのなら、減速魔法、あるいは移動魔法を使ったものがあるのだろうか……」

「……これ以上は調査の仕様がな、か」

後は警察の仕事だ。

この後現場を通行可能にするための手伝いをして、三十分ほどの遅れはあったものの、昼過ぎには宿舎に到着したのだった。

*

いやー……驚いた。

絶対に外部からの干渉が無ければ有り得ない軌道だったね、あれは。

咄嗟にチート染みたの方で軌道を逸らしたのだが……。

完全に曲げきる前に、こう……横合いから思いつきりぶん殴られたみたいな感じで、僕の軌道干渉が掻き消されてしまった。

なんだったんだろう、あれ。あれが魔法の相克かなあ。

とまあ、トラブルはあったもののバスは再出発して、富士演習場南東エリア、つてトコ……の、近くの宿舎に到着したようだ。

ようだ、というのは遠目から見ただからで、当たり前だが僕はあの宿舎に部屋を取っているわけではない。山梨県の吉田市にあるビジネスホテルに、向かわなければならぬのだ。

ワンタッチで妹に繋がるそれを押す。

『はいはい、着いたー?』

「うん。おおいえあいいい?どこ行けばいい?」

『GPS見るから待ってー……あ、結構近いよ。今いる所から真南にすいーつと行ってー』

シャツと言われた通り真南に滑る。

『MOSの看板見えたでしょー?』

「うん」

『そこを東でー』

そんな感じで、僕はすっかりビジネスホテルに辿り着けたのだった。
お名前は？ 追上。

これで通じるって、いいなあビジネスホテル！

*

あいううあ ああんおあいあ

*

僕にとって未踏の地というのはそれだけで危険だ。

道を人に尋ねられない。地図が読めない。不作法をした場合、言い訳ができない。

またも人に話せないというのは自身がその土地に馴染んでいなければいけない程強固な壁となつて道に立ちはだかる物だ。

故に僕は、

「……」

仮想型ディスプレイで律動ヘヴンをプレイする——ッ！

例の大量生産ゲーは放置していても大丈夫なので、今日は妹が入れてくれたリズムゲームを遊ぶことにした。

勿論、ビジネスホテルの中で。

九校戦は明後日から。

人と話す用事は無い。

さつき下の自動販売機で買ってきたご飯（カ〇リーメイト）も十分。
僕に死角はない！

*

「……」

九校戦懇親会の来賓挨拶。

大人達の挨拶が滞りなく進み、最後に出てきたトリック・スターこと九島烈の「手品」に、達也は強烈な既視感を覚えていた。

目立つ物を用意して、人の注意を逸らすと言う事象改変とすら呼べぬ「改変」。大勢に、一斉に引き起こすための微かで弱い、故に気付くのが困難である魔法。

精神干渉系魔法。全く同一のモノではないだろうが、達也はこの「結果」に覚えがあった。

追上青の視線外しだ。

確実に、一挙手一投足を見逃さぬよう努めていたはずなのに、いつの間にか深雪に向かつて腕を伸ばしていたあの男のソレととても良く似ている。

一瞬とはいえ、達也の「精霊の眼」からも逃げさせたソレが精神干渉系魔法で、八雲

の言う通りB S魔法の類いだとすれば、なんと厄介な事だろうか。

技術的なものであれば対策の取り様があるし、C A Dを使つての魔法行使であっても達也なら無効化の手段がある。だが、先天性のB S魔法は前触れといふべき発生れの兆候が見分け辛い。念じただけで事象の改変が出来てしまうからだ。

C A Dを使わずとも行使できるコレは隠密性が高く、かけられた後で無ければ気付けないその厄介さは、達也もまたB S魔法を扱うが故に身にしてみてもわかつている。身内に精神干渉系魔法を使う者がいる故に、そちらの対処のし難さもまた、同じく。

しかし、そうであるのなら、何故奴は普通の魔法を扱える？

達也自身のソレは、後天的に創り上げられた魔法演算領域があるからだ。

ならば、追上もまたそういう処置を受けた存在だと言うのか——？

九島の演説が終わり、拍手が起きる。

達也もまた拍手を送った。ようやく見えてきたあの不良生徒の足掛かりの、礼として。

*

「うあー……」

気付けば二日経っていた。正確には一日半。

恐ろしい……誰にも何も言われない時間って恐ろしい！

小学校も中学校も僕は Yankee フアッションで過ごしていたが、丸一日誰にも何も言われない、なんて事は無かった。小学校は学校の先生が諭す様な口調で、中学校は上級生が脅す様な口調でそれなりに話しかけられたものだ。

生まれた時からこの体質で、生まれた時からこのチート染みた力を持っていた僕は、その力を遺憾なく（バレないように）発揮して、先生や上級生を躲していた。

だからか、会話こそなかつたものの時間だけが早く過ぎ去る、という事は中々無かつたんだ。なかなかなかなか大変だったんだ。

家にいれば妹や母親が話しかけてくれるし、高校でも何かしら……あ、いや、うん。

レオ君は話しかけてくれるが、基本僕ぼっちだったわけ。いやまあ自分で招いた結果だから気にしていないのだが。

というより、魔法科高校は学ぶことが多いから時間を潰す、っていう概念がないんだよね。

誰かに見せようと思っていないノートなら普通に文字も絵も書けるのだし。

だからこうして久しぶりに一人の時間で且つ暇つぶしの日だったから、体感時間二時間もないくらいで九校戦当日になっちゃった、というわけだ。

「……」

さて、九校戦である。

妹のナビゲーシヨンによつてスピードシューティングの観客席に着いた僕は、視線外しと光の軌道逸らしを盛大に使つて最前列にいる。情報端末はすでにカメラモード。充電はばつちし。チヨベリグ。

光の軌道を逸らして何をしているかと言えば、カメラの向く先を弄つているのだ。カメラの視野角というか画角が見えるし操れる。ちなみにその辺の監視カメラの画角も見えるし、こちらにも画角を操れると言えば操れるが、物凄く映像が歪んでしまうのであまりやらないようにしている。

ビバチート染みた力。僕が割り込んで入つてきた事は誰も気付いていないし、僕のカメラの画角は誰にも邪魔されない。

さあ来いメロンパンナちゃん！ その美貌、その肢体、その揺れ!!
全て収めてやる!!

*

七草真由美のスピード・シューティングを見る為に観客席へと来た達也達。途中、エ

リカ、レオ、幹比古、美月とも合流し、観客席の後列で競技の開始を待つ。

前列に行かないのは、高速で飛来する標的を撃ち落す様を見たいのであつて選手を見たいわけではないからだ。それでも前席の方に客が多いのは、

「バカな男が多い所為ねく……つて、あれ？」

「青少年だけではないようだがな……どうした？」

「いや、あれ……ほら、あの金髪」

いた。

最前列。大きな機材を持った男やキャーキャー叫ぶ女の子たちに紛れて、フィルムディスプレイ型の情報端末を持った見覚えのあり過ぎる男子。しっかりと脇を締め、ブレがおきないように（この時代にもなればとても強い手ブレ補正がついているのだが）しっかりと腰を落とす格好で端末を構えている。

視線の先にいるのは勿論、七草真由美。

射撃場所である上空ではなく、プレイヤーである真由美を激写せんと構えているのは丸わかりだった。

「ま、アイツも男だった、つてことだな！」

レオが快活に笑う。

そう、魔法の発生速度を見るにしても、魔法の規模や干渉力を見るにしても、知覚範

囲を見るにしても、プレイヤーである真由美を見ている必要は欠片として無いのだ。

もしあるとすれば、その美貌や肢体そのものへ興味を抱いている場合……つまりレオの言う通りの場合だけだろう。

いや、もしくは……達也と同じような目を……？

「あ、始まるわよ」

エリカの声に顔を上げる達也。

開始のシグナルが点った。

*

あんまり揺れない。

スピード・シューティングは文字通り早撃ち競技だ。クレー射撃みたいなものだ。

だからもう少しこう、身体を横に振るなりして揺れるものだと思っていたのだが、真由美先輩は不動だった。不動のまま、飛んでくる標的すべてを早い弾で砕いている。

一応動画と写真のどちらも撮ったが、これで妹の彼氏君は満足してくれるのだろうか

？

こう……女の子の写真としては、色々と足りないような……。

まあ、いいか。そもそも妹の彼氏なワケだし。そんな不埒な写真撮って帰って二人の仲に罅でも入ろうものなら土下座ものだ。

しかし、この競技……僕と相性いいなあ。

アイオーンに遠隔系の魔法は入っていないから実際に今からやるとなると難しいが、何処に何がくるかわかる僕にとってこの競技ほど簡単な物はないというか……。

なんなら全部の標的をバレないようにズラして一点にまとめることだってできるわけ……。

そう考えると、それが出来ない真由美先輩の凄さがわかる。

「おお、うおい」

おお、すごい。パーフェクトで終わった。

軌道も見えない、操れないのに全発全中って……流石は生徒会長だなあ。

でも……、

「あつえいあいああ……」

やってみたくないなあ……。

そんな風に、思ってしまうのは仕方のない事だと思う。

九校戦なんて……出られるわけも、ないのだから。

*

「Almost…… as 『A I R』……」

その眩きは、今までの彼の言動からは浮いているように感じた。

まるで独唱曲だ……と、感慨深そうに、本当に感動しているように言ったのだ。

独唱曲。確かに言い得て妙だと達也は思った。

ステージの上で毅然とした態度で前を見据える真由美。彼女の魔法に合わせて観客拍手をすすめる。クレイが割れていく。ステージにいるのは彼女独りで、彼女の魔法に砕かれぬクレイはない。

……少し、いやかなりクサイな、とは自分でも思ったが。

追上に本心からそう思わせたのだとすれば、それは七草真由美の美貌か、それともその魔法力によるものか。

どちらにせよ、自分の様な感情の希薄な化け物では無くてよかったと安堵する達也。相手が心無い機械や化け物ではなく人間ならば、取れる手段は一段と増えるのだから。

発足式とは違う、おぎなりではない拍手をする追上を見ながら、達也はそう独り言ちるのだった。

*

あいいいううあ あいおうえいあい

*

真由美先輩の素晴らしいリユドミラ・パヴリチエンコ張りの狙撃を見た後、僕は昼食を取ることにした。

スピード・シユータイングの準決勝と決勝は午後に始まるので、カロリーメイトとへ○フ○シ・コーラを飲んで観客席で暇をつぶす。流石に灼熱地獄もびつしよりの汗をかいてしまいそうだったので適度に日光を逸らしている。全部逸らすと凍え死んでしまうし、僕の姿が見えなくなってしまうから。

「いよう！ 青、来るなら言ってくれりやよかったのに。お前も応援に来てたんだな」人が少なくなつた観客席でカロリーメイト（エキシビジョン味）一世紀以上続く人気栄養食品カ○リーメイトを模してファンが造つたカロリーメイト。その味は多岐にわたり、中には劇物と呼ばれた味のモノまで様々。

今回はそんなカロリーメイトの味を全てミックス！ お口に広がる地獄を召し上がれ。の余りの不味さに驚きながらぼけーっと雲の形を眺めていると、僕の肩を叩く衝撃

と声があつた。

来てたんだな、つて……こっちのセリフなのだが。

「L^エe^オo。応援……おう……？」

レオ君だ。

応援。……あ、そうか、レオ君たちは達也君が九校戦に出るからその応援に来たのかな。

ということは……。ああ、やつぱり。エリカちゃんとメガネおっぱいちゃん（まだ名前知らない）と細身の子（クラスメイト）と深雪ちゃんが一緒にいる。ほんと仲良いなあこの子達。

「なんで疑問形なんだよ。それともまさか、本当に写真撮りに来ただけつて事はねえよな？」

「……おう」

いえ、写真撮りに来ただけです。

でも、そうか。達也君だけでなく、真由美先輩や摩利先輩も出るんだから、普通は応援の為に来るものなんだよな。学校対抗の運動会とか、妹の彼氏君に言われるまでほとんど興味なかったから……暑いし、外出るの面倒くさいし。

なんてことを正直に言うわけにも（言えないし）いかないので同意しておく。

「そうだよなあ、自分の学校の先輩や同級生を応援しに行くって……凄いなあ、青春じゃん。」

「溜めが長えよ……。ったく、とりあえず一人で応援するくらいなら、俺達と一緒に見ねえか？ もうすぐ、スピード・シユーツの準決勝が始まるみたいだからよ、別に無理して会話しなくてもいいから、な？」

「何この性格イケメン。眩しい！ 太陽より眩しい！ レオ君を直視できるなら太陽も直視できるはずだ……。うおつ、眩しっ！」

「しかし……。後ろの四人。特にエリカちゃんと深雪ちゃんの視線が……。メガネおっぱいちゃんもあからさまに怯えている……。細身の子はよくわからないが。」

「あー……」

「遠慮すんなって。構わないよな？」

「別に、私は構わないわよ。人避けにもなるし」

「ああ！ ナンパ対策！ そうだね、ヤンキーだからね、人も寄って来ないね。」

「でもエリカちゃんは寄ってきたナンパ片っ端から撃退しそうだなあ……」

「私も、構いません。どの道もうすぐお兄様も帰ってくるでしょうから……」

「どの道ってなんだろう。あ、アレかな。僕が深雪ちゃんとフォーリンラブする道かな。」

でもごめん！ 名前を呼べない人はもう恋愛対象外なんだ……その気持ちは嬉しいがごめん！！

うわっ、冷たい目線。魔法かっつくくらい冷たい。目線で太陽凍らせられそう。今なら太陽も見えるはず。うおっ、眩しっ！

太陽曰く、落ちろバルス。軽い気持ちで太陽に近づくと破滅の呪文で蠟の翼を落とされるってイカロス君が教えてくれたのだ。

「あ、だ、大丈夫です」

「僕も、構わないよ。一応話すのは初めまして、だね。僕は吉田幹比古。上の名前はあまり好きじゃないから、幹比古って呼んでくれ」

「ミキでいいわよミキで」

「あー……追上、青」

よろしくな、って言えないから握手を要求する。ミキちゃんか……。あ、ミキ君か。ミキ君は意外そうなものを見る目で僕の手を見たあと、少しだけ微笑んで握手を返してくれた。

「僕の名前は幹比古だからね。幹比古、だからね」

「お、おう」

あれかな、丸い鼠耳のアレを思い出すからミキって仇名苦手なのかな。

ハハッ。

「よし！　じゃ、こっち来いよ。もうすぐ達也も帰ってくるだろうからさ」

「……ああ」

伸ばされた手を掴んで立ち上がる。ほんと、良い子だなあ。

そして、後列上段に座った彼の後ろに腰を下ろした。レオ君の隣でもよかったのだが、エリカちゃんの隣は僕が怖い。ちなみに反対側には深雪ちゃんがいるのだが、もう「お兄様のためにキープしてます」感が凄まじかったのでやめた。あそこは不味い。それくらいは僕でも分かる。

ところでさっきまでは気が付かなかったのだが、後列（というか隣のメガネおっぱいちゃんの横）に、いつか実習室で見たロリイ二人組がいたようだ。平たいロリと大きなロリである。まあ二人ともロリってほど小さくはないのだが。雰囲気かね……。

とりあえず仲間に入れてくれたお礼というわけではないが、エリカちゃんの言った人避けとして周囲の人の視線を散らしつつ、日光も散らす。この光逸らしは「波」の「軌道」を逸らしているのです、僕達の居る場所をカメラに収めようものなら凄まじい歪みが発生する事間違いなしだが、僕らを向くカメラの画角が無い事は確認済みなので問題はない。

流石に衛星写真には歪みが映ってしまうだろうが、そこまで綿密に見る事はないだろ

う。

「あれっ?」

「……………ん?」

メガネおっぱいちゃんと幹比古君が同時に顔を上げる。幹比古君、とても暑そうにしていたから心配だったのだが、大丈夫だろうか。

「ん、どしたの美月、ミキ」

「なんか見つけたか?」

エリカちゃんの発言でようやくメガネおっぱいちゃんの名前が判明した。美月ちゃんか……。美しい月。うんうん、二つも美しい満月を持っているから、まさに名は体を現す、だね。

「いえ……………いきなり暑さが和らいだような……………」

「僕も、そろそろキツいかもしれないと思っていたんだが……………良かった、これくらいの気温なら観戦を続けられそうだ」

わあお、素晴らしい感覚の持ち主なんだね、二人は。確かに赤外線他諸々を散らしたが、あくまでバレないようにだったのに……………余程そういう変化に敏感なのかな?

「……………」

そしてポカーンと口を開けて僕を見ているのは大きな口リイちゃん。僕というか、僕

らの頭頂付近を半開きの口と共にガン見している。

……もしかして光とか見えちゃう子？ 君が見ているそこ、まさに僕が逸らしている部分なんだが。内緒にしておいて欲しいなー、なんて……。

大きなロリイちゃんは僕の視線に気が付くと、物凄い勢いで何度も頷く。おお、伝わったのかな？

「暑い事には、変わらない」

「まあ、昼前から気温が下がってきたってんならいいんじゃないか？ 夜にかけて涼しくなっていくだろうし」

「それを祈るばかりね」

そしてもう一人。

深雪ちゃんもまた、僕をガン見している。やだなあ照れるじゃないか。

……冗談はさておいて、深雪ちゃんもまた光が見えちやつたりするのだろうか。それとも別の何かかな？

わからないが、この優秀な子達の前であまりチート染みた力の方を多用しない方がよさそうだと思います（小学生並の感想）。

*

「達也くん、こっちこっち！」

「ティータイム」を終えた達也が観客席に戻ると、スタンドは既に満席だった。

その人ごみの中で達也がメンバーを探していると、先に達也を見つけたエリカから声がかかる。

群衆を掻き分けて彼らの元へ向かえば、既に達也以外の全員がいた。

追上青も。

「……」

「……」

追上と達也の視線が交差する。

そこに、敵意は無い。昼間七草真由美の試合を観戦していた時と同じく、観客としてここにいるのだ、という想いが伝わってきた。

「何突つ立ってんだ、達也？ もう始まるぜ？」

「ああ……そうだな。しかし、凄い観客の数だな……」

「会長が出場されるからですよ。他の試合はここほど混んではいません」

レオの言葉に頷き、エリカの隣に座りながら呟いた独り言に、反対側にいた深雪が答える。

なるほど。

「そののヤンキーと同じ理由ってワケ。昼間つからよく飽きないわよね」

「……まあ、時間帯も違えば構図も違ってくるだろうからね。下でガチャガチャ機材を組み立てている人たちの気持ちもわからなくはないよ」

「えー、ミキ、アンタまでソウイウ目当てなワケ？」

「い、いや！ わからなくもないってだけで、っていうかソウイウ目当てって……」

話題に上がった追上是情報端末を構えているのだが、やはりそのレンズの向く方向はクレーの射出されるフィールドではなく選手自身。その目的は明らかだろう。

達也が戻ってくるまで追上と共に居たのだろう深雪に視線を向けてみるも、深雪は顔を振るばかり。動く気配も無く、本当に観戦しているだけ、ということだ。

「……ふう」

なんだか気を張り詰めているのが馬鹿らしくなって、達也も試合に集中する事にした。

勿論見るのは選手ではなくクレーの方だが。

競技開始のシグナルが鳴った。

*

あいいうういいあ あうおうういおう

*

九校戦二日目。

妹の彼氏君から貰った(?) ビジネスホテルの予約は三泊四日なので、このホテルとは今日でお別れ。さあ帰り支度をと荷物をこそごそしてしていると、プルリプルリと電話が。

発信元は妹。

「あい?」

「あ、青兄。もしかしてもうホテル出ちやつてたりしてない?」

「ううん、ああいうお? ううん、まだいるよ?」

「良かったー、もうすぐそつち着くから、チェックアウトしたらロビーで待っていてくれる?」

「え、うん。ああつあ…え、うん。わかった……」

「じゃあーにー」

そう言って切れてしまった。

……こつち来るって、どういうことだろう。

*

「あ、青兄！ 三日間、大丈夫だった？」

「おう」

ビジネスホテルのロビーなので母音ーツンだけではない、普通の切り替えしで会話する。

僕を見つけて駆けてきたのは、なんだか余所行きの装いをした妹。元の場所には母親と……知らない男の子がいる。あれが妹の彼氏だろうか？

「うん、私の彼氏。紹介だけでも、する？」

「ううん。いい。あい」

妹の兄がヤンキーコレで、しかもともに喋れないというのは例え彼が聖人の様な人でも気を遣わせてしまうか、悪感情を抱かせるだろう。触らぬ神にタタタタタ。

情報端末を妹に渡す。これでお願ひ達成、かな？

「……そつか。うん、じゃあ私から言っておくね。ありがとう、青兄！」

「ん。おう」

妹は少しだけ寂しそうな顔をした後、トテトテと走って彼の元へ行つた。

彼は二、三妹と言葉を交わし、遠巻きながらもすっかり僕に向かつて礼をする。

僕は片手をあげて「気にしないでいい」という感じに手を振っておいた。

妹の彼氏君と妹の笑顔が見えた所で、そういうえば何故二人がここにいるんだろうという疑問が湧いてきた。母親は妹の付添だとしても、何故に？

僕が首をひねっていると、それを察したらしい妹が母親から何かを預かつてから、またトテトテと此方へ駆け寄ってくる。可愛いが、ごめんね。そっちにいればよかったね、ほんと。

「航君、お姉さんが九校戦に出場してるんだって。けど、昨日まで用事があつて……だから青兄に代理で撮影を頼んだの。一切ブレなく、綺麗に撮れてるって喜んでたよ」

「ん」

「で、今日からは用事が無いから来れるようになったって。お姉さんが泊まつてる宿舎は軍用だからダメだけど、このホテル九校戦の最終日まで二部屋予約したから、是非くつろいでいってください、って」

「……いいおえあ？」

「良いお部屋？」

「ううん」

「ミリオネア？」

「うん」

「んー、どうだろ。多分？ 詳しくは聞いた事ないし」

偶に、こういうアクセントもイントネーションも母音も似ている言葉は妹でも分からない時がある。まあ仕方ない事なのだが。

しかし……ビジネスホテルとはいえ、九泊って……。僕の泊まらせてもらった部屋は一泊3,300円だったから、4人を泊まらせるのに単純計算で118,800円（連泊プランを利用する可能性もあるが）。十二万だよ十二万。

彼女の為にそこまで出せるって、確実に大富豪ミリオネアだろう。

「おいうえ？」

「そう、私は追上！ ……ごめんごめん。ううん、年下。小学校六年生」

「うああ……」

「うわあつてなにさー！」

いやまあ、妹も中学一年生だから特に問題はないんだが……。

あ、まって。

あ、これ確実に大富豪の家の子だよ！ 小学生で十二万……ヒエヒエ！！

「お父さんが魔法競技が好きで、お姉ちゃん共々連れまわされてる内に七草真由美さん？ のファンになったんだって」

「Oh…」

魔法競技は他のスポーツより安全性を高めなければいけないために観戦料金が低い。そこに子供を連れまわせる時点でヤヴァイオカネモチだ。

「つて、そうだ！ そんなことより早く会場に行かないと、その人の競技が始まっちゃうつてー！」

「ああ、うん」

確かクラウド・ボールにも出るのだと、レオ君が言ってたね。

「Before going」

「先に行け、つて？ もう……じゃあ先行くけど、青兄もちゃんと見に来てね？ 友達、いるんでしょ？」

「えっ」

「午後の部の方の動画、さつき見たけど……青兄の名前呼んでた男の人の声、あれ友達でしよ？」

「ああ、うん。Leo」

「へえ、あの声の人がそうなんだ。つとと、時間無いんだった。じゃあまた夜にね。部屋

は408と409で、青兄は409の方だから。はいコレカードキー。

いい？ 折角できた友達なんだから、絶対行つてね？」

「あいあい」

トタタタツと駆けて行く妹。

今更だが、中一にもなつてロビーで走るつてどうなのさ。ほら、航君はあんなに落ちて
着いているのに。可愛いから許す。……ハッ。

さて、一応母親にも手を振つて、まとめた荷物をよつこらしよ。

妹達の荷物はホテルスタッフに預けたようだ。

「……」

まあ、何はともあれ。

九校戦、最後まで見られるようになったのだから……ちゃんと応援して行こうかな。

*

魔法を一切使わずに、ただのローラースケートとして履いたアイオーンで滑る事数十分。迷わずに会場に辿り着く事が出来た。

というのも、当たり前だが僕の泊まったビジネスホテル含めて九校戦会場近辺のホテル

ルは観戦客が沢山泊まっている。それを受けてか、大会運営スタッフだろうか？ そんな恰好をした人たちが九校戦会場はこちらですよ、というプラカードを上げていたり、至る所に電光掲示板があったりするのだ。

そう言う部分は時代が変わっても人力なんだな、とは思いますが、同時にこういう木端のアルバイトが小銭稼ぎには丁度いい事も知っているのも特に同情はしない。

「いあ〜……炎威炎威」

会場に入ると、もう分け目があるんじゃないかってくらい気温が違った。

人ごみの熱や、平らな地面の水を掃いてしまうその作りが熱を生んでいるのだろうが、打ち水とかしなのだろうか。スプリングラーで四、五mくらいの場所から水を撒くだけでも気温は下がるといふのに。

そんな人ごみの中を歩く。流石にアイオーンは使えない。視線と進行方向の軌道をズラす、なんてことも出来なくはないが、普通に危ないのだ。僕に当たらずとも僕の周囲で転倒者が出る可能性は否定できないのだし。

ちよーつとばかり熱狂拍子というリズムゲームに集中してしまったせいで出てくるのが遅れてしまった。そのため、恐らく午前の部の最初の方だとレオ君が言っていたクラウド・ボール女子の部、真由美先輩の一番は終わっているだろう。テニスウェアのメロンパンナちゃんは見たかったが、仕方ない。

HEADの「上昇希望」って曲が難しくて難しくて……。

とりあえず適当にご飯を食べて、桐原先輩が出るらしい男子クラウド・ボールの観客席に先に座つていよう。僕の様相は目立つのでレオ君たちも見つけやすいだろうし、なんだつたら彼らの視線を集めても良い。

そんなことを考えながら、僕は場内マップも見ずに適当に進むのだった。

*

当然、地図も読めない奴が地図さえも見ずに歩き回れば迷う。

ようやくたどり着いた男子クラウド・ボールの観客席は疎らも疎らで、試合がすでに終わっている事をありありと伝えてくれた。

「ん……ああ、確かお前……追上、つつったか？ 意外だな、観戦来てたのか」

「うい」

せめて試合結果だけでもどこかで見られぬものかと会場周辺をぐるぐるしていると、一人歩く桐原先輩を見つけた。

「どうやら僕の事を覚えていてくれたらしい。」

「Ah……^{あー}won^{ウン}？」

「…………いや、お前……………なんで英語……………つつか、試合見てないのか？」

「Yeah」

「いやだから……………。はあく……………ああ、惨敗も惨敗だよ。二回戦で早々負けちゃった」

「Oh…」

「オーウって、お前その見た目で……………ブフツ、クク……………じわじわ来るな……………つ」

突然桐原先輩は笑い始める。

ナニガオカシカッタノカワーカリーマセーン。

一頻り笑い終えた後、何を思ったか桐原先輩は持っていたジュース缶を僕に放つてきた。

ナイスキャッチ！

「いやあ、いいわお前。追上だな。よし、ちゃんと覚えたぜ」

「うい」

「ああ、笑ってスッキリした。うっし、とりあえずこれで壬生に心配されずに済みそう
だ。助かったぜ」

「……………ああ！」

ポンと手を打つ。

あの剣道部（？）の！

「完全に忘れてた、って顔だな……。まあ、お前はアイツとそれほど接点がないのか」
「Yes」

「そのキャラ、まだ続けるのか……。お前、絶対見た目で損してると思うぜ。……つと、そろそろ戻らねえと。お前も、遅くならない内に帰れよ？ その見た目でこの近辺の深夜徘徊は、一校的に不味いからな」

「うーい」

そう言つて桐原先輩は去つて行つた。

桐原先輩に貰つたジュース缶を見る。

『想サイダー子オン』と書かれた、炭酸飲料。

……つめたらしい。

*

あいいうういあ ううおうあうおう

*

九校戦三日目。

流石に同じ轍わだちを二度踏むわけにはいかないのです、今日は摩利先輩が出ると言うバトル・ボード……に、観戦に行く観客をストーキ……追跡して、無事に観客席に辿り着く事が出来た。

レオ君たち一行を見つけて隣に座らせてもらい、待つこと数分。

しかし良いスーツだなあ……。じゆるっ。

「お兄様、もうすぐスタートですよ！」

何やら遅れていたらしい達也君が、ギリギリ間に合った。

深雪ちゃんの声に反応した達也君が座るとほぼ同時にスタートのブザー。

レースゲームで言う所のスタートダッシュを決めた摩利先輩だが、すぐ後ろに二番手三番手がくっついていて。美月ちゃんが言うには去年の決勝のカードらしい。

摩利先輩たちは凄まじいスピードで水の上を歩き、コーナーを曲がって客席からは見

えなくなるコースへ入る——直前。

「あ?」

「むっ?」

僕と達也君が同時に何かに気付く。

僕の眼は軌道が見える。物理的な障害があっても、だ。

だから、見えた。

追い縋っていた二番手の選手が変な軌道を取る。減速するべき部分で加速したのだということくらいはわかる。この運動会に出る選手が、いかなればF1の選手がマシンのアクセルとブレーキを間違えるような事をするとも思えない。

確実に他者の手による介入が為された事は、僕の眼にありありと映っていたのだ。

「オーバースピード!」

そうして追い縋っていた選手は摩利先輩に突っ込むような形で摩利先輩の方へ。

だが、摩利先輩はそれを視認した瞬間になんらかの魔法を用意した。何の魔法かはわからないが、恐らく衝撃を殺すものだろう。

だが、そこで何かが弾けた。

彼女たちの軌道予測は確実に次の瞬間も水面を滑っていたはずなのに、その弾けた「何か」によって摩利先輩のボードが当たらずだった水面が陥没し、軌道予測が大幅に

曲がったのだ。

このまま行くのが不味い事くらい、僕にもわかる。

間に合えっ！

「……何？」

弾け飛んだ摩利先輩と突っ込んだ選手のボードを、他の壁で弾き返すような軌道に修正して二人の元に向かわせる。普通なら、これほど危ない事は無いだろう。

だが、僕には軌道が見えている。まるで偶然、まるで奇跡のように。

ボード二枚をクッション代わりにフェンスと選手の間に挟み込む事など、造作もない！

勿論二人への減速を兼ねた軌道逸らしも行うが、これほど速度が出ている時に無理に軌道を逸らすのは身体に良くないのだ。だから優しく、ふんわりと。

そして別に壊れても問題ないだろうボードの方へは大きく働きかけて、衝突の際も衝撃を殺すように彼女らを抱き留める。

……成功。

見た目からじゃ医療的な事は何もわからないが、血流に乱れはない。少なくとも出血しているという事は無いはずだ。

レース中絶の旗が振られる。

まあ、一歩間違えば首や頭をやってしまったらどう大事故だ。

続行とか言い出すような非常識さがなくてよかった。

……それにしても。

ひしひしと……それはもうひしひしと感じる達也君の視線……。

これ、完全にバレた、かな？

*

運ばれている最中も摩利は意識を保っていた。

脳が揺れた事ですぐに立つ事はままならなかったが、救急隊員や治療魔法師への受け答えは十分に出来た。

「もう、心配したんだからね？ わかってるの？」

「ああ、わかっているさ。だが、無事だったのだからいいじゃないか。それより、七高の選手は……？」

「あちらさんも、特に目立った怪我はないみたい。流石に危険走行で失格だったみたいだけ……本当、跳ね返ってきたボードがクッションになるなんて奇跡のような事があつてよかったわね……」

「……ああ」

病院まで駆けつけてきた悪友の言葉に、摩利は出かけた言葉を飲み込んで答える。

自らのボードは反転させただけでそこまで勢いはつけていなかったし、突っ込んできた七高の選手のボードは全く別の方向へ弾き飛ばしたはずだ。

コースの形から考えても、丁度、偶然に、奇跡的に自分たちの背とフェンスの間に挟まるような軌道を取るなんてことは有り得ない。

「……だが、まあ……全治一週間か……。ミラージ・バットには、ギリギリだな」

「本当は止めたいのだけどね……。言っても聞かないでしょう？」

「ああ、医者の見込みなど、覆して見せる」

七高の選手ともつれ合いかけた時も、ふわつという不自然な感覚と共に別々の方向へ引き剥がされた。

確実に、自分達を救助した者がいる。

それも、大会運営委員や各校の選手に一切気付かせないような存在が。

だが、それを口外するつもりは無かった。

言いつけられないという事は、隠しておきたいということだろう。

気付いたのが自分だけで、助けてもらったのだから、礼というわけではないが黙っていた方が良く、ことくらいはわかる。

それは先程来た司波達也に聞かれた「第三者による妨害の可能性」の話にも出さなかつた、秘め事とも言えるモノ。もしかしたらその「妨害」を行った者と「救助」を行った者が同一人物である可能性すらもあるのに、何故か摩利はそれを黙っていた。

言うなればそれは、ただの「勘」。

フェンスに衝突する直前に滑り込んできたボードが、どこまでも優しく、摩利や七高の選手の負担にならないようふんわりと二人の身体を受け止めた事から、「妨害」と「救助」の術者が別であると——そう、思ったのだ。

「……礼を言うぞ」

「え？　何か言った？」

「いや、なんでもないさ」

届く事の無いだろう礼。

それはやはり、病室の空気に溶けて消えて行った。

*

摩利の「事故」に関する検証を行っていた達也と深雪。五十里啓と千代田花音を呼び込んだ達也は、その映像と検証結果を啓と花音に見せた。

啓は達也の仕事に舌を巻き、その検証結果——「水中に作用した魔法式が水面を陥没させた」というもの——について、花音と共に頭を悩ませる。

と、その検証ルームへとノックがあった。

深雪が対応し、入ってきたのは三つの影。

達也が啓と花音に向き直る。

「ご紹介します。俺のクラスメイトの吉田と柴田と追上です。知っているとは思いますが、五十里先輩と千代田先輩だ」

「うい」

幹比古と美月が緊張気味に、青が名前だけを簡潔に、啓と花音がざつくばらん自己紹介を終えた所で、五人から向けられる「？」の視線に達也は簡潔な答えを返した。青は何やら花音と啓を見て首をかしげている。

「三人には水中工作員の謎を解くために来てもらいました」

そこから達也は、幹比古と美月に対して自身と啓の意見を話す。摩利が体勢を崩した原因は水面の陥没にあり、それはほぼ確実に水中からの魔法干渉によるものだということを。

驚いた様子の美月や眉をしかめている幹比古と違い、青は何の反応も示さない。知っていた、もしくは予測していた、という事だろう。それよりも啓と花音が気になるよう

で、彼らの顔と胸の辺りを交互に見ていた。

達也は続ける。

「可能性——水中に作業員が隠れ潜んでいたなどという荒唐無稽な話ではなく、人間ではないものが潜んでいたのだ、と。」

「司波君は精霊魔法の可能性を考えているのかい？」

啓の問いに、達也は頷いた。

精霊魔法。Spiritual Being（心霊存在）を扱う魔法のことで、その

本体は霊子フシオンで構成されていて、観測されている想子サイオンはあくまでその「精霊」をコントロールする際に発せられる術者の想子でしかない、というのが現代の最も有力な仮説だ。

仮説というのは、魔法師には霊子フシオンの状態を見分ける事ができないためのもの。普通の人間が赤外線を「暖かい」と漠然と感じることができても、その波長を可視光線の波長のように色彩として捉える事ができないように。

活性の低い霊子を見つける事は、現代の魔法師には困難なのだ。

「だから、二人に来てもらったんだね。けど、彼は……？」

幹比古の得意魔法と美月の特異性を紹介すると、得心が行ったとばかりに啓が言う。同時に、もう一人の存在を呼んだ意味が分からずに、それを問うた。

「追上は別件です」

簡潔に答える達也。その「別件」について今聞いても話を脱線させるだけだと飲み込み、啓は達也に続きを促した。

達也は続ける。

幹比古に「今回の件は精霊魔法で起こし得るか」を聞き、幹比古の是の答えに詳細を詰めていく。精霊魔法で出来る範囲。それだけでは、事故を起こすことなど出来ないという事。

さらに達也は、件はそれだけではないと——七高の選手のCADにも細工が合ったのだらうと言いつつ始める。美月に靈子の兆候フシオシを問うが、眼鏡によって阻まれていて見ていなかったという美月の言葉に自らの失念を認めた。

「やっぱ裏切りかな？」

CADの細工が出来るとすれば、その調整をしている七校の技術スタッフだけだ。そう考えた花音が推理を口にするが、達也が見たのは青だった。

「——追上、お前はどう思う？」

「……運営」

今まで一言も発さなかった——達也も問いかける事をしなかった——青が、ボソリと答える。

運営。

その言葉が当てはまるモノなど、一つしかない。
大会運営委員会だ。

「やはりお前もそう考えるか……。手口の方はどうだ？」

肩をすくめる青。その動作は「さっぱりだ」というようにも「これ以上は自分で考えな」と言っているようにも見えた。

各校の使用CADは一度各校の手を離れ、大会運営委員に引き渡される。
達也と青の見解に絶句している面々の中、淡々と達也が説明を続けた。

「万に一つも、警戒を怠らないようにしましょう」

*

さつき紹介された二人……啓先輩と花音先輩……。なんで啓先輩の方は男子用のユニフォームを着ているんだろうか。

交換している……。とか？ 仲良さそうだし、それは有り得なくはないが……。その場合、花音先輩が男子、ということに……。いや、まあ、うん。

確かに顔も……。こう、雄々しいというか、猛々しいし、胸も……。平らだし。

いや！ でも声が……。ああ、高校生だからまだ声変わり来ていないって事かな？ 啓

先輩みたいな可愛い子が幼馴染的ポジションにいるなら無理して男らしくなろうとも思わないだろうし……。

しかし、こんなに可愛くて男の子なのかあ。可愛くてイケメンな雰囲気とか……僕とは、

「――追上、お前はどっ思う？」

「――うんえい」

雲泥の差だよね。

うわ、自分で言ってる悲しくなってきた……。

はあ……深雪ちゃんに啓先輩に……どーしてこう、可愛い女の子は既に「イイヒト」がいるんだろうねえ。まあ名前呼べないからどうとも思わないのだが！ が！！

肩をすくめる。

しかし待ち時間が長い。達也君の聞きたい事なんて一つだけだろうから付いて来たのに……。

残念ながら摩利先輩の事件に関して僕が言える事は無いからね。第三者の介入があったのはわかるが、それ以上は僕にはさーっぱり。こういう点では不便なチート染みた力だよ。

*

「さて……追上」

「ああ」

「その様子だと、聞かれる事はわかっているようだな」

一度摩利に関する件を話し終えた達也が、改めて青に向き直る。

青は問われる事はわかっているとばかりに手をひらひらとさせ、「逃げも隠れもしない」という事を示した。

啓や花音、幹比古と美月もようやく「大会委員が犯人である」という達也の推理の衝撃を飲み込み、青を見た。

「渡辺先輩と七高の選手がもつれ合いかけた瞬間——奇妙な事が二つほど起きた」

「……」

「二つは、二人の進行方向のズレだ。確実に渡辺先輩に突っ込んでいった七高の選手は、しかし接触の瞬間右前方30度程にその進路を曲げた。

あの極限下で、そんな魔法が使えらると思えん。第三者が魔法を使ったのは明白だ」

「……」

青は何も言わずに達也の言葉を聞く。

だが、そのまま続けようとする達也に流石に、と啓が口を開いた。

「少し、待つてくれるかい？ そのシーンの検証もしていたのかな？」

「はい。こちらです」

聞かれる事がわかっていたと言う様に達也は先程まで摩利の事故のシーンの検証をしていた端末を弄る。時間を進め、衝突直後のシミュレーションが数値と共に流れ始めた。

それは七高の選手が摩利にぶつかる直前。項目名の部分に多量の unknown が出現する。

明らかに、外部からの力がかかっている証拠だった。

「これは……」

「使われた魔法は移動魔法と思われませんが、検知器や監視員はその兆候の一切を捉えていません。それに、七高の選手に骨折などが見られなかった事から単なる移動魔法ではない事は事実です」

「減速魔法は検知されなかったのかい？」

「はい。渡辺先輩達の身体がボードに激突するまでは、減速効果を受けた痕跡はありません。ですが……」

達也がさらにキーボードを操作する。

シミュレーターが進み、観客の誰もが「奇跡」と称した件のシーン……「弾き飛ばされた二枚のボードが跳ねかえってクッションになるシーン」を映し出した。

そこにはもうunknownしか表示されていないのではないかと思う程数多の力が、二枚のボードにかかっていた。

「これが二つ目の奇妙な事です。コースの角度から見ても、ボードの材質から見ても、あのような跳ね方をする可能性はありません。万に一つも」

「……そのようだね」

しかもボードはフェンスに当たった直後、有り得ない跳ね返りを見せて二人の身体を抱き留める様に二人にぶつかっていた。入射角的にこの角度で跳ね返る事が有り得ないなんて、中学生でもわかる。

「追上。お前はこれが起きる事を知っていたな？」

「……ああ」

詰問……いや、尋問するような口調で青へ言葉を投げる達也。

青もまた、特に抵抗する事無く「是」を示す。

「お前は渡辺先輩達が助かる事を知っていた……そうだな？」

「ああ」

「——お前の背後にいるモノは、今回の件で俺達と敵対する気はないと見ていいんだな

？」

「ああ——お、おう？」

どこか歯切れの悪い返事。

だが、言質は取った。

達也の見立てでは、青は精神干渉系魔法のBS魔法師。達也と同じように、なんらかの手段で魔法演算領域を取って付けられたとしたのなら、二科生という成績にも納得がいく。

同時に、今回の様な高度な魔法使用は青には不可能だろうという事もわかる。

だというのにあの二人が助かる事を知っていたというのなら、それは青の背後にいたろうフランス、もしくは同じ問者の誰かに高度な移動魔法スバイを行使する者、もしくは移動魔法のBS魔法師がいるのだろうことは想像に易い。

今、日本に敵対する意思はないと、この日本魔法教会主催の九校戦で示したのだろう。「この九校戦に働きかけている組織とウチは何も関わりが無いぞ」という事を。

「背後？ 敵対？」

話についていけない啓達が首をひねっているが、それを説明する気は達也に無かった。

青にもないらしい。

ならばなぜ五人を返さなかったのかといえば、青の視線外し対策だ。

彼を囲う様に見ていけば、視線を外して逃げられる事も無いだろうと言う、青の精神干渉系魔法に対する「今できる最低限」に、彼らを利用したのだ。

「Et ^{エト} a l o r s ^{アール} ? えと、あのう？」

それで？ と、わざわざフランス語で聞いてくるのは「もう話す事は無い」という意思の顕れか。

「いや、もういい。それが聞きたかっただけだ」

「あいあい」

ともかく、これで懸念事項が一つ増え、一つ減った事に成る。

「聞きたい事があります」という学友や先輩、妹の眼差しに耐えながら、達也は息を吐いた。

*

あいいううあんあ おえいうーうおうあああいえ

*

「隣、空いてる……みたいね」

「アラ、深雪。まあコイツのおかげで男共は寄ってこないからね。ほら、座って座って」

九校戦も四日目。本戦を一休みして、新人戦。

平たいロリイちゃんのスピード・シューティング観戦。いつも通り視線外しと視線逸らしを行おうと思っていたのだが、熱烈なチラ見（チラッ！ チラッチラ!!）をしてくる大きいロリイちゃん目の視線が、僕が「曲げている部分」を完全に捉えているようなので、多用は出来ない。仕方がないのでエリカちゃんや大きいロリイちゃん、美月ちゃんに近づこうとする不逞の輩にガンを飛ばすだけにしておいた。

なんでも午後はこの大きいロリイちゃんことほのかちゃんのパトル・ボードがあるらしい。これは是非見に行かねば。だってこの大ききさであのピッチピチなスーツ着るって……そりゃあ見に行きますとも！

ただまあ、今は平たいロリイちゃんに集中しよう。真由美先輩の百発百中も凄かった

が、平たいロリイちゃんの認識能力も十二分に凄い事は知っている。

そして協議開始のブザーが鳴った。

射出されたクレーと、射出を待機しているクレーの軌道が全て見える。

それらが見える通りの軌道を通って範囲エリアに入ったその瞬間――、

「……おお」

クレーが粉碎された。

すごいな。これ、僕には対応できない魔法だ。

「放射状」なら対応できるのだが、「球状」になると軌道も何もなくなってしまう。全面攻撃は言うなれば周囲全域が軌道だから、逸らそうが曲げようが関係ないのだ。

同時に思うのは、「これ僕でも使えそうだな」という感想。

なにやらやたら詳しい深雪ちゃんやほのかちゃんの話聞く限りでは、この魔法式に必要なものは変数だけ。しかもあらかじめ設定されているポイントを設定するだけでいいと来た。

アイアンやエアのように音声認識で起動式さえ起こせれば、あとは数字を選ぶだけでいいのだ。「選ぶだけ」なら僕は数字を「選ぶことが出来る」。

もつとも、使い所はあんまりなさそうだが。僕、直接蹴って行くタイプの戦い方だしなあ。

そうして、平たいロリイちゃんは一パーフェクトで予選を通過した。

後ろの電光掲示板のおかげで、ようやく平たいロリイちゃんの名前がSHIIZUKUKITAYAMAである事が判明した。雫ちゃんね。

この後何人かの予選があつて、それが終われば準々決勝が会場をそのままに行われるらしいので、大人しく待つ事にする。

お……妹と……確か航君だったかな？　が、結構遠い位置に並んで座っている。後ろには母親もいるね。

そういえばお姉さんが九校戦に選手として出ていて言っていたっけ。もしかして、今からの予選に出るのだろうか。

妹の彼氏だ。彼には、喜んで帰ってもらいたいなあ。

そのためにも、未だ名も顔も知らぬお姉さん！　頑張ってくれ！

結果、第一高校は一位、二位、三位を独占すると言う快挙を成し遂げた。

妹が航君に抱きつく様にして喜んでいたので、恐らく雫ちゃん以外の二人のどちらかがお姉さんなのだろう。まあ、そもそもこのスピード・シューティングは好きで観戦しに来ただけで、お姉さんの競技とは何ら関係の無い場合もあるのだが。

あんなラブラブデート中にそれを聞くのは野暮だろう。それくらいはわかる。

兎にも角にも角煮にも、雫ちゃん、優勝おめでとう！

*

さて、次はほのかちゃんのバトル・ボード予選だ。

ほほう、ふむふむ……ほうほう……。

良い……実に、良い……。

あのスーツ考えた奴誰だよ！
グッジョブ

レース開始のブザーが鳴る。

うおっ!? 眩しっ!?

双眼鏡の原理をチート染みた力で再現してほのかちゃんのウエットスーツをじろじろ見ていたら、フラッシュパンをくらった。

観客席のみんなの話を聞くに、ほのかちゃんの魔法らしい。

僕が視力の回復を図っている間にほのかちゃん一位でゴール。

これが天罰か……。

*

九校戦五日目。時が過ぎるのは早い物で、もう運動会の五割が終了したと言う事実
びつくりぎうてんである。

アイス・ピラーズ・ブレイクは深雪ちゃんの巫女服が良かった（小並感）。

*

九校戦六日目。

一昨日と同じようにジロジロみつつ、水面から来るだろうフラッシュグレネードの光
を除外していたら、来なかった。

アイス・ピラーズ・ブレイクはこれまた恐ろしい、という感想でいっぱいだ。雫ちや
んの放ったフォノン・メーカーは僕のチート染みた力で逸らせるが、深雪ちゃんのニブ
ルヘイムは無理。というかアレは僕自身を吹っ飛ばして効果範囲内から逃げる、くらい
の対処法しか思いつかない。何故戦う前提で考えているのかはにおいておいて、深雪ちや
んは怒らせたらダメだな、と。

正直に言つて達也君より怖いな、と。

そう思いました。

そんな感じで六日目が終わり、七日目。
それは唐突だった。

「来い」

達也君はそれだけ言つて、歩いていく。

まあ、特に用事もないので、着いていく事にした。

*

「あー……：re^イally^{アイ}？」

「追上。お前達が本当に敵対する意思を持っていないのなら、協力しろ。何、ディフェンスだけでいい。遊撃は俺達がやる」

モノリス・コードに出ろ。

そう言われた。

いやいや、無理だろう。

僕、普通のCAD使えないし。

「使う必要はないだろう？」

「……：you^{ウー} know^{ンオー} well^{ウエア}.」

よく御存じで。

先日はあれ？ バレてない感じかな？ とか思ったが、やっぱりバレていたらしい。確かに僕のチート染みた力はアイオンだろうが競技用CADだろうが関係なく使う事が出来る。モノリス・コードは魔法以外の直接戦闘攻撃が出来ないからアイアンは無用の長物だし、空を飛ぶこともないだろうからエアはいらない。他にもいくつか入ってはいるが、どれも戦闘用……それも蹴りに重点を置いた魔法ばかりなので、この競技には向かない。

それさえも知っていて僕を選んだと言うのなら、達也君は慧眼すぎてもう魔眼だ。僕なんかよりよっぽどチートだと思う。

「一応レギュレーションとしてCADは渡しておく。入れておきたい魔法はあるか？」
「いあ、いいい」

「だろいな」

しかし……何故僕なんだろうか。

僕、自分で言うのもなんであるが、達也君から避けられ気味だったと思うのだが。

初めて会った時、ガン飛ばしたもんなあ……。そんな奴普通避けるよなあ。

「お前の実力を考えての事だ。現時点において、お前は第一高校の誰よりも経験がある。勝つために起用するのは当然だろう」

さつきから考えている事を読んでいるような……？

すごい！ その読心術（？）があれば僕は喋らなくていいじゃないか！

CADの調整技術と言ひ、達也君には是非ともお近づきになりたいものだ。勘違いしないでほしい。そう言う意味は断じてない。僕は大きい果実を持った子が好きだ!!!

しかし経験つてなんのことだろう。まあ精神年齢的に考えれば……？

「俺は幹比古のCADの調整に行く」

「うい」

僕に当てる時間が無くて済んだから、幹比古君のCADをより丁寧に調整できると言つて達也君は去つて行つた。もう一人は幹比古君なのか。

レオ君が良かったなあ、なんて思わなくもない。

渡された何も入っていないCAD（カード型）で放つてはキャッチを繰り返す遊びをしながら、時が過ぎるのを待った。

*

九校戦八日目。

「森林ステージか……。八高相手には不利なステージよね」

「普通なら、だがな。あいつが普通でない事くらいわかってるだろう?」

新人戦・モノリス・コード。第一高校対第八高校の試合が始まった。

試合の様子はモニターに映されていて、三人の様子が良く見える。

「追上青くん、か……。達也君が連れてきたのなら実力の問題はないのでしようけど……」

「私はアイツが校内でCADを無断使用していた所をしよつ引いたくらいに関わりしかないが……。お前は知っていたのか?」

「私も、入学式の前に中庭で、仮想型ディスプレイでゲームをしていた所を諫めたくらいに関わりしかないわ。でも、確かあの子……。春の一件の時も協力してくれたのよね」

一瞬、二人の脳内に「それはもうつまり非の打ちどころしかない不良生徒なのではないか?」という疑問が浮かびかかけたが、思い出したように放たれた真由美のフォローによつてその疑問は飲み込まれた。

そんな件の追上は、デیفエンスとして一高の本陣……。それもモノリスの真ん前に陣取っている。手に持ったカード型のCADを放つては掴み、放つては掴み。

そんなことをしていれば咄嗟の時にCADを使えないのだが、それを気にする素振りも見せない追上の姿に、二人は一抹所ではない不安を抱くのだった。

八高のフォーメーションはディフェンス一人、オフENSE二人という構成だ。

その内、八高のオフENSEの一人が一高の本陣へ辿り着いた。

「ああん、達也君早く！」

「…………え？」

一高のモノリスは観客席から見える地形にあり、追上と八高の選手が邂逅したのが見えた。だが、それだけだった。

八高の選手は追上も、モノリスさえも素通りし、歩いていく。

完全に見えていない。傍から見てもそうわかる素振り。

さらに追上は緩慢な動作で弄んでいたCADを八高の選手に向け、

「うぐつ!？」

たったそれだけで、八高の選手は地に伏せた。酷く気分を悪そうにして、口元を押さえている。

「ん？ なんだ？ 何が起きた？」

「…………多分、私と同じ光波振動系の魔法です。視認ではわかりませんが、モニター映像が一瞬歪みました」

「眼球に入ってくる光を歪めた、ということでしょうか…………」

「うわ、考えただけで気分悪くなるわね…………」

ほのかと美月の考察に、深雪だけが思いつめた顔をしていた。

*

追上、達也がそれぞれを一人ずつを熨し、幹比古は残る一人を精霊魔法『木霊迷路』で翻弄、達也がモノリスにコードを打ち込んだことで一高が勝利した。

そして三十分後、すぐに二高との戦いが始まる。

v s 二高戦は屋内。

八高戦と同じくデیفエンスは追上一人で、幹比古と達也が遊撃だ。

「う。ぶつ……くそがつー！」

「おいおい……！」

視線逸らしの応用、視線^平グル^眼グル^球を受けてなおモノリスに走り寄ってくる二高の選手に溜息を吐き、その足取りの軌道を逸らす。

結果、足がもつれて転倒する二高選手。今度は逆回転。酔いしれたかい？

廊下に軌道。走り抜けようとしている選手の視線を逸らし、廊下の壁にぶち当たらせる。伊達にチート染みてはいないよ、この力は。深雪ちゃんのアレみたいな全面攻撃でない限り、対人戦じゃあ中々負けない自負がある。視界に頼っている人間なら、という

冠がつくが。

音だけで周囲を判断する達人ならまだいいのだが、「気配」とかいうよくわからないものを察知して来られると正直どうしようもない。気配って軌道あるんですかねえ。

「このっ！」

流星にヘルメットとプロテクターを付けていたから然程ダメージを受けていないらしい二高の選手がCADを操作する。浮かび上がった瓦礫が僕目掛けて勢いよく飛んできた。

それをく僕はく右手で受け流すく。

「はあ!？」

軌道を曲げるポイントに手を置いただけだが、二高の選手からは飛来する瓦礫を横合いから押しただけで弾いた、とでもいうような結果に見えた事だろう。

流星に監視カメラがこれほど回っている場所でノーモーションのチート染みた力を使う気は無いので、八高の時もそうだったが必要のないモーションを取り入れているのだ。CADを操作するフリや、今のような手を使って逸らしたフリ、なんかを。

「くそっ！」

二高の選手は、ならば数をと言わんばかりに複数の瓦礫を僕に射出する。

しかーし！ 見える、私にも見えるぞ!!

ちよつとカツコつけてー、後ろ回し蹴り!

瓦礫の軌道を全て蹴りの軌道上と重なるように調整し、体幹のブレも同じように調整してくるりんぱ。

結果、まるで僕の素晴らしい蹴り技で瓦礫が全て砕かれたようにみえるという……。プロテクターしてなかったら弁慶の泣き所が死んでいただろうが。

魔法攻撃以外の直接戦闘が禁止で良かった。アイオーンが使えない以上、もし戦闘アリだった場合は直接殴る蹴るをしなくてはいけない。殴るのも蹴るのも、自分が痛いので嫌なのだ。

「なら……!」

「where are you going? 何処へ行くっていうんだい?」

僕を無視して走り去ろうとした選手の足を先程と同じようにもつれさせ、視界ぐるぐるの刑に処す。

母音ーッンしか喋れないなりに母音ーッンで通じる言葉はそれなりに覚えているのだ。ちゃんと発音できるとは言っていない。

二人纏めてグルグル。グルグルではない。ヘルメットを取って戦闘不能にする。さ、後は頼んだよ達也君、幹比古君。

*

試合終了のサイレンが鳴った。

追上が二高のオフェンス二人を拘束・撃破し、幹比古と達也がディフェンス一人を相手に連携、撃破したことで、試合終了。

「危なげない勝利だったわね……」

「ああ。それにしても、司波といい追上といい、とんでもない身体能力だな」

「飛来する瓦礫を回し蹴りで防ぐ……反射神経や動体視力もそうだけど、追上くんも戦い慣れているわよね。彼もどこか凄い先生に教えを受けていたりして」

「それは……どうなんだろうな。特に『型』のようなものは見受けられなかったが……」

二人の話題は、達也と追上でいっぱいだった。

一切話に上がらない幹比古が可哀そうになる程に、いっぱいだった。

「あの少年……特尉の見立てでは、^{フランス}西EUの間者……だったか」

「はい。とはいえ、家族構成も特に怪しい点はなく、フランスとの関係性は極めて希薄……正直、これだけ探して何も出てこないとなると、『特尉の勘違い』という可能性の方がまだ信じられるといえますか……」

観客席で声を潜めて会話をしているのは、独立魔装大隊が山中軍医少佐と藤林少尉だ。

彼らは一頻り達也について話し合ったあとに、件の少年、追上青の話題を上げた。

「もしくは、我々でも辿り着けないような闇が背後にいる可能性、か……」

「……考えすぎでは？ まあ、先程の技術に惹かれるのはわかりますが……」

「技術。果たして先程の『受け流し』は、本当に技術だけのものか……」

追上が魅せた回し蹴り……ではなく、その前の受け流しの事。

人の頭ほどの大きさがある瓦礫を素手で、しかも手のひらを一切傷付ける事無くその軌道を逸らしたあれが、山中には技術のみの行為であるようにには思えなかった。

余りにも綺麗に曲がり過ぎていたし、余りにも腕に反動が乗っていなかったのだ。

まるで、手で軌道を逸らしたのではなく、逸らした軌道に手を乗せただけのように。

「……まあ、彼が『プリンス』や『カーディナル』相手にどのような『技術』を見せてくれるか、勝手に楽しみにさせてもらおうとしよう」

まるで新しいおもちゃを見つけた子供のよう。

山中は、意味ありげに笑うのだった。

*

あいいううおんあ あおううあい☆いいいお

*

vs 九高戦。

場所は溪谷ステージ。

ここは幹比古と青の独壇場どくせんじょうだった。

幹比古が試合開始早々「霧の結界」の古式魔法を使い、溪谷ステージを霧で埋める。それだけで既に一高のモノリスへと近づく事が出来なくなっていた九高選手の近くに小石を放り、翻弄し続けた挙句転ばせる青。小石が有り得ない軌道を辿っていたが、観客からは霧に阻まれて視認する事は出来なかつただろう。

転んだ後はまた視界回しで意識を刈り取り、悠々とヘルメットを取りに行くだけ。

デیفエンダーは幹比古の霧によって視界を阻まれ、飛んでくる小石に気を取られ続け、気付いた時にはモノリスが開いている結果に。振り返った時に達也はもういない。そしてすぐにコードが打ち込まれ、一高の勝利となった。

青の誤算は、幹比古の使った「霧の結界」が幹比古自身の「眼」となる事を知らなかつ

た事だろう。

だが同時に、それを追及する気には幹比古は成れなかった。摩利の事故検証の時に聞いた単語から、深く踏み込まない方がいい事を察していたのだ。

*

三位決定戦が行われている間、僕はとある人物に呼び出されて人気のない場所に来ていた。一応、視線外しによる人払いもしている。

まあ「とある人物」なんてかっこつけて言ってみたのは妹なのだが。

「青兄、九校戦出るってなんで言ってくれなかったのさー!」

「いあ、ういおいあつあおおあああいや、急遽決まった事だからさ」

「そうなの? ふーん。じゃ、そこはいいや」

「いいんあいいんだ」

「うん。それより、色々言いたい事があつて……そう、あの回し蹴り! かっこよかつた

!」

「いえーい!」

「いえいいえーい!」

超絶可愛い妹に褒められればそりゃあ嬉しい。

彼氏君、すまないな……妹を「妹」として扱えるのは、兄である僕だけなんだ……。

「正直青兄が魔法科高校行くつて聞いた時は止めようかと思つたけど……友達もいつばいできたみたいで、本当によかつたよ」

「……いんあいあえあつあ？心配かけちゃつた？」

「せーだいにねー。でも、もう大丈夫そうだから、いいの。それよりそのファツションも
うやめたら？ 友達出来たんなら、人を遠ざける意味ないでしょ？」

「うっ……いあ、えおあ。いいあいあんいーあうううおあつおういえいああ、おう……え
んいあん？うっ……いや、でもさ。いきなりヤンキーが普通の格好して来たら、こう
……へんじやん？」

イメチェンどころの騒ぎじゃない。

僕、自分で言うのもなんだのだがかなり童顔だから、この髪色・髪型をやめるとは
ぼほぼ別人なんだよね。

「んー、でも変な勘違いされて、また絡まれるよりはよくない？ とうか青兄のために
思つて正直に言うけど、青兄かなり浮いてるよ？ 第一高校の人達すつごく真面目そ
うな人ばかりだからか、物凄く浮いてる。ヘリウムガスくらい」

「おいああ、うっおうういえうえ……そりゃあ、すつごく浮いてるね……」

「夏休み入ったら、イメチェンしてみない？ 航君がね、夏休みに一緒に別荘に来てくれないかーって。航君のお姉さんはお姉さんの友達を呼ぶみたいだから、青兄も一緒にどうかな、つてき。そこで真面目青兄のお披露目！ みたいな？」

「んー？ えーつお、あうああううんおええあんあ、あえあお？ おうおいっえういお？んー？ えーつと、まず航君のお姉さんは、誰なの？ 僕の知ってる人？」

クラスメイトだからって全員が全員友達というわけじゃない。というより、厳密に言えば僕が「友達だ」って断言できるのはレオ君だけだ。……言つて悲しくなってきた。だからまーったく知らない人の友達と僕が行つても、僕は良いのだがその人達が楽しくないんじゃないか、という……。

「へ？ 結構近くに座つてたじゃん。北山雫さんだよ。ほら、スピード・シューティングの」

「えー……。えあつ？へー……。へあつ？」

「ウル○ラマン？」

「いあいおえあん（いやヒト○マン）」

へえ、それは知らなかったな。

平たいロリイちゃんこと雫ちゃんの弟が、妹の彼氏と……。

世界狭っ!!

「ああ、えっおうおいえいいあいいあうあいいあえいいあいいあいいあおまあ、別荘と聞いて行きたいか行きたくないかで言えば行きたいよ」

「じゃあ決まりね！ 青兄のイメチェンは妹の私が責任を持って担当しまーす！ 青兄背、高いからねー、色々似合いそう！」

「うーん、ああういいいいおうーん、まあ好きにしてよ」

レオ君はなんか、イメチェンしても友達でいてくれそうだし。

他の子達はわからないが……一人いれば十分かな。

「じゃあさ、青兄！」

「うん？」

「優勝してね！ 私、応援してるから。勿論お母さんも、ね？」

「……ん。 I ^ア ^イ ^{ウィ} ^ウ ^{イン} ^{ウィ} ^ン ^{ウィン}！」

「その意気だー！」

ハイタッチする。と言っても、僕は胸前だが。

んー、やる気出た。

超絶可愛い妹に応援されたら、兄のパワーは無限大だよ！！

「じゃ、青兄。私は戻るねー」

「ん、おうっえうお？ん、送ってくよ？」

「青兄もうすぐ試合始まるよー? 戻らなくていいの?」

「うえつ? うあ、おんおあ! あうあつあ!うえつ? うわ、ほんとだ。助かった!」
……かつこ付かないなあ。

*

三位決定戦が終わり、ついに決勝。

一高 v s 三高のステージは草原ステージに決まった。

その事に三高の天幕で歓声上がる傍ら、一条将輝と吉祥寺真紅朗もまた、歓声こそ上げないが笑みを浮かべていた。運はこちらにあると。

気を付けなければいけない要素を再度ピックアップする。司波達也は言わずもがなだが、残りの二人も気を付けなければいけない。

「ヤツの相手は俺がする。遊撃の吉田という選手もジョージが制圧しうるだろう。だが、あの後衛の男は……」

「確か光波振動系の魔法で視界を回して平衡感覚を乱す、という手法を使う相手だね。他にも魔法無しの身体能力がズバ抜けているようだけど……格闘戦は禁止なんだからそちらに気を配る必要はないかな。」

対処法は、視界が歪む兆候が見えたらすぐに目を閉じる。これだけでいいはずだけど……」

「ヤツを相手に一瞬でも目を閉じなければならぬ、か。なるほど、厄介そうだな」

「速めに僕が後衛の彼を倒せばいいさ」

「ああ、任せたぞジョージ」

将輝は不敵な笑みを浮かべて、そう言った。

*

新人戦モノリス・コード、決勝戦。

出てきた選手たちを見て、観客は大いに沸いた。同時にどよめきと、一部で笑いが起こる。

一高の選手の一人が、時代錯誤極まりない「ローブ」を身に付けていたのだ。無論、笑っているのは一高の応援生徒である。

「うう………なんで僕だけ……」

「前衛の俺がそんな動き難しいものをつけていては仕方がないだろう。追上には必要ない

ものだから、必然的に幹比古だけが付けることになる」

「ん？ おう」

僕の視線外しは完全に達也君にバレているらしく、相手選手が使うらしい「不可視の弾丸」が「対象を視認しなければいけない」という条件を持っている事を加味してか、僕にローブを渡す事は無かった。

割とかつこよくて付けて見たかった感はある。MALICIOUSしたかった。

「追上」

「おん？」

「後ろは任せる」

「……おう」

おお、なんか達也君に頼られているような……！

いやあ正直相手選手の「爆裂」って魔法は最大の苦手分野だったが……任された以上、例え達也君と幹比古君が撃破されてもどうにか守り抜いてみよう！

僕じゃあコードは打ち込めないから、三人を撃破すればそれで終わりなわけだし。

……それに。

「あー……おい」

「なんだ」

「——We will win」

僕達で勝つぞ、の意味を込めて。

達也君と幹比古君に、拳を突きだす。

「……ああ」

「死力を尽くすよ」

達也君は微かに、幹比古君は頼もしく笑って、拳を返してくれた。

一高のため——二割。

妹のため——八割。

正直二人よりやる気の動機が不純なのは認める。

だが、手を抜くつもりはない！

*

試合開始と共に、達也と将輝の「撃ち合い」が始まった。

二人は堂々と歩を進めていく。

その傍らで、吉祥寺が動きを見せる。

だが、すぐに踏鞴を踏む事となった。

「これがッ……!?!」

右の眼球が脳に送る景色と、左の眼球が脳に送る景色が混ざり合い、ごちゃごちゃになり、気付けば倒れている。目を瞑る暇などない。兆候なんてものはみえない。

だが、落ち着いて倒れてから眼を瞑った事で、気分の悪さはすぐに引いた。やはり目を開けなければ効果を為さないようだ。

吉祥寺は冷静にCADを操作し、片目だけで追上が視認する事で追上の身体に加重系魔法をかけようとする。

だが、そこに追上はいなかった。

「なッ、どこに……?」

代わりにいたのは、もう一人の選手・吉田幹比古。

それを知覚した瞬間、吉祥寺の身体は宙に浮いた。突風。古式魔法だろうことはすぐにわかった。

慣性減衰魔法でわざと吹き飛ばされる事でダメージを緩和した吉祥寺は、すぐさま「不可視の弾丸」の照準を幹比古に合わせようとする。だが、幹比古のローブへと焦点を合わせようとした途端、吉祥寺の遠近感はずまらなくなった。

また追上の光波振動系魔法か。

幹比古が何かを操作しているのはわかったが、このぼやけた視界では何が来るかわか

らない。

吉祥寺は来る衝撃に耐える為に目を瞑り——、

「があっ!?!」

幹比古の苦悶の声に、目を開けた。

幹比古は吹き飛ばされるような形で横たわっていた。

その魔法の痕跡は、彼がよく知るモノ。

「将輝——」

吉祥寺は救い手の名を謝辞を込めて呼びかけた。

*

(大きく左に逸れた……?)

一方で、名を呼ばれた将輝は疑問を残していた。

意識を刈り取るつもりとの距離で放ったはずの空気圧縮弾は、その圧縮点を将輝の想定
の遙か左方に設定され、幹比古を吹き飛ばすに終わったのだ。

まるで、今の今まで幹比古がもつと左方にいたと勘違いしていたかのような——、

「ッ!?!」

そしてその疑問は、「隙」と呼ぶに相応しいものだった。

彼私の距離を一瞬で詰めた達也に、その恐怖への直感に。

彼はレギュレーション違反の威力を持つ圧縮空気弾を十六連発、その「恐怖」へと撃ち放つてしまった。

上空に。

「は？」

*

凄まじいまでの轟音が遠く離れたスタンドまでもを揺らす。

……凄まじい指パッチンを見た。彼には是非ともサラマンダーの革手袋をしてほしい。そして大佐になってほしい。

達也君の指パッチンで将輝君は崩れ落ちた。

幹比古君のダメージは大きくは無いだろうが、小さくも無いだろう。残る相手はジョージ君ともう一人だけ。

「吉祥寺、避ける!!」

相手の選手が叫ぶ。

何かと思えば、なんと幹比古君が復活しているではないか。咄嗟に視線ごと逸らして直撃を外させたとはいえ、細身の彼にはキツイ衝撃だったはずだ。なのに彼は、意志の力で意識を回復させ、なおかつ攻撃に出ている。

男前だなあ。

なら、その男前……少しだけ、お膳立てしようか。

「くっ！」

幹比古君の作り出した雷撃が不自然に逸れる。避雷針でも作ったのだろうか。

だが、「逸らす」のは僕の十八番だ。

雷の軌道を「逸らし返す」。

「うあっ！」

結果ジョージ君に雷は直撃し、彼の身体は弛緩して倒れた。

さらに幹比古君は地面を掌で叩きつける。それだけで地面が揺れ、ジョージ君は苦悶の声を上げた。

——何アレかつこいい。

「この野郎!!」

残る一人の選手が幹比古君に向かって土を掘り起こし、盛り上がった土砂が津波のよ

うに幹比古君へ向かう。

幹比古君は動けない。達也君は遠くにいる。

そして僕は、幹比古君にこれでもかと思化されていて……要は格好つけたかった。

だから僕は、ずっとここにいた。

「えっ!?!」

「なんだと!?!」

魔法以外の直接攻撃は禁止されている。

魔法への直接攻撃は禁止されていない。

敵を欺くにはまず味方から。幹比古君の視線も、三高の選手の視線も完全に僕から外

し続けて、今姿を現したのだ。

三高の選手と、幹比古君の合間に。

それは勿論、の土砂の津波の進行ルートで――、

「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

天高く振り上げた足を思いつきり振り下ろした。

振り下ろした地点で股裂きになるように相手の移動魔法の軌道を操る。移動魔法で

良かったよ。

あの魔法は、まるで僕の震脚によって霧散したかのように見えた事だろう。

だが、まだ僕のバトルフェイズは終わっていない!

「Taming!」

逸らされ続けた土砂の津波は二つに分かたれ、そしてぐるりと進行方向を変えて――術者の元へ、挟むように帰る!

まるで僕が魔法を飼_テい_イなら_ムしたかのように!!

避けようとしたのか、はたまた魔法を解除しようとしたのか。

真実は定かではないが、関係ない。彼の視界を回す。

「う、がっ……」

狂った平衡感覚と双方からの衝撃に倒れる三高の選手。

全員、戦闘不能。

つまり、僕らの勝ちだ。

試合終了のブザーが鳴った。

*

「影印、か……。試合結果を額面通りに受け取るのであれば、その名の通り『相手の魔法を写し取る魔法』と言った所だろうか……。」

「……ですが、彼がCADを操作した様子はありませんでした。それに、そんな魔法は……」

「私も知らない魔法だ。だが、BS魔法だと言われれば納得も行く。特尉の見立てでは彼は精神干渉系魔法のBS魔法師。『視線を外す』だけしかできない方が不自然だとは思わないか？ そう、例えば——『相手の心を操る』という、如何にも超能力者のような。」

それならば、あの三高の選手が『自身の魔法も解除せずに、自身へ魔法を向けた』などという馬鹿げた事態にも納得が行くだろう」

「……全て、憶測の域を出ません」

「そう睨むな、藤林少尉。少尉の言う通り、全て憶測だ。それに、この試合は九島閣下も見ている。彼が本当に間者^{スパイ}なら、そう簡単に手の内を……それも高校生^この戦い^場で晒すとも思えんからな。」

本来の目的は私達や九島閣下に『そう思わせる事』かもしれない。

いやはや、彼くらいしか見るべき選手はいないと思っていたが、中々に楽しいじゃないか。これなら来年も来たくなるというものだ」

「あくまで、彼が『普通の少年』ではないと？」

「逆に問うが、私や藤林、九島閣下だけでなく、特尉の眼まで欺ける魔法を持った者が『普

通の少年』だと？

流石にそれは、世界の終末を感じるがね」

「ですが、証拠がありません」

「やけに肩を持つな、藤林。何か気に入る点でもあつたか？」

「いえ……ただ、罪もない少年が少佐の実験に付き合わされかねない事を憂えているだけだ」

「……私はそこまで人格破綻者ではないつもりだがね？」

「そうですか。それなら、安心ですね」

「……」

「……」

*

あいいううおあ おうあういあ

*

九校戦九日目。

流石に、というべきか、昨夜ばかりは僕も母親と妹の元に行つて、しばしの家族団欒を過ごさせてもらった。航君が気を利かせてくれたのだ。

テレビ電話で父親とも会話し、なんでも妹から連絡を受けてリアルタイムで中継を見ていたらしい父親は泣いて喜んでくれた。元から涙もろい父親だが、流石に職場で泣くのは……とは思わないでもないが、やはり嬉しい物があるものだ。

流石に「何か欲しい物はあるか？」なんて聞かれた時は呆れてしまったが。僕、そんなに子供じゃあないよ……。

航君にお礼を言つておいて、と妹に託たくけし、自室に戻るとまたテレビ電話が。

送信元は……あれ。

オイシヤサマじゃないか。

「あい」

『久しぶりだね、青くん。まずは新人戦モノリス・コード優勝おめでとうと、そう言っておこうかな』

テレビ電話の画面に映るのは、目元が陰になって見えないう年配の男性。

好々爺こうこうや、という言葉の元に成った人物なのではないかと思う程、似合う。

「あいあおう、あいあうありがとう、ございます」

『ついては何か祝いの品を贈ろうと思うのだが……何か要望はあるかね？』

オイシヤサマは言う。

優しそうな笑顔と、優しそうな声で。

「えあ、うえおああいでは、ツケをタダに」

『……君も中々に黒くなったものだ。いや、元からかな？』

「あああいあ、ああいあえんおあなたには、敵いませんよ」

『いいだろう。要望を聞いたのは此方だ、その要望を叶えよう』

クツクツと上機嫌に笑うオイシヤサマ。

この人は有言実行の人だ。ツケ、というのは——今までの、通院費の事である。

それを無しにしてほしい、などという僕の「身勝手な要望」を飲み込んでくれたのは、自らが切り出した言葉だから。

『では、本題に入るとしようか、追上青くん』

「ええ、Nines^{ニアイン}」

最初に教えられた、オイシャサマの名前。

Ninesという、明らかに偽名だろう名前。だが、僕のこの症状を一目で見抜いたこの人に診てもらおうしか、もうどうしようもないくらい追い詰められていた僕は、彼を信用する事にした。

九。オイシャサマも魔法師だ。その数字の意味がわかっていないとは思えない。ならば彼は、九に連なる一族なのだろうが……。

『——テレビ電話越しに、君の視線外しを使ってほしい』

「あいはい」

オイシャサマによる僕の診察は、ほぼこう言った事の応酬だ。

出来る事、出来ない事の範囲を見極めていく……ただ、それだけ。

だから僕は、そのまま、言われた通りに視線を外す。

『ツ……流石だ。こちらにアンティ・ナイトがあつても関係無いか……否、映像の“視線”などというあやふやな物を、どうやって操っているのか……』

「あんえいああ、ええいえんあおえんえんおいつえお……うあえうおおおいあうおなんでしたら、テレビ電話の電源を切っても……使えるところですよ」

『それは本当かね?』

「いあ、いおおうえあいああ今、色を付けましたから」

僕は見える軌道を色分けする事が出来る。

忘れてはならない軌道、区別しなければいけない軌道を選別できる。

僕の眼は遮蔽物があつても軌道が見えるので、既に「色付け」した彼の視線がどこにあるか、手に取るようにわかる。

「おおああいあ……うんおいううあういえうえいああそこは確か……軍の宿泊施設でしたか」

『君がいれば、逆探知の必要もなくなるというわけか。ますます、惜しい才能だ』
これだ。

しつかりと口に出す事は無いが、オイシャサマはどうやってか僕を軍に入れようとしている。僕がただの子供であれば幼少期からの刷り込みで軍を志望したかもしれないが、残念ながら僕らの精神性は少しばかり異質だ。

故に、むぎむぎ彼の手駒になるつもりはない。あくまでオイシャサマが興味を持つているのが僕のこの「チート染みた力」である事を知っているからこそ、こうやって正面切って一対一で対話しているのだ。

「ああ、おうおう。おうおおお、おういおういあいえいえうええあいあおうおあいあうああ、そうそう。僕の事、公表しないでいてくれてありがとうございます」

『半分以上は此方の都合だから、問題は無い。

……しかし、なんだろうな。前々から思っていたが……青くん、これは君の為を想つて言うのだが……その髪型は、余り似合っていないぞ』

「……おうおうあえあうんえ、いああいああいあいうああいうすぐ変えますんで、今は見逃してください」

クツクツと笑うオイシャサマ。

お酒でも入っているのか、いつもより上機嫌だ。

それとも。

「おうおううういああえうおあ、おんあいうえいあうあ？ 僕と普通に話せるのが、そんなに嬉しいですか？」

『ああ——そうだ。全く、青くんの妹御には頭が下がる。まだまだ学習が必要とはいえ、こうもはつきり翻訳ができるとは。青くんの一人称が“僕”だった事が、ここ一年の一番の驚きかも知れない』

「おういうええああんいうあういあうあおういあんえうあえ僕にくれば万事うまく行きそうな装置なんですがね」

『残念だが、機密技術も使用しているのでな。君が我々の仲間になるというのなら、考えなくもないが』

「いえ、えつおうえう。いうんえううえういおいうえあういえ、結構です。自分で作れる人見つけます」

そう——装置。

オイシャサマは今、耳にインカムのような装置を取り付けていた。

それは、僕の言葉の翻訳が出来る装置——の、試作品。

妹が長年研究してきた「青兄解読ノート」を学習した翻訳プログラムだ。

それがあれば、それを首に巻いてそのまま発声したりそれ自体が音を発したりしてくれば、僕のこの不便さはすべて解消されるだろうに。

オイシャサマは、機密技術をふんだんに使っているから「一般市民」である僕には渡せない、「仲間」——つまり「軍人」になれば使わせてあげるかもしれない、そう言うてくるのだ。

やつぱり、オイシャサマは完全な味方ではないと、そう思う。

『まあ、気長に待たせてもらおうよ』

「ええ、ええあ———— God Night, And Have A
Nice Dream」

『ほう——これは、英語も翻訳できるのか——』

ぶち。

ふう。

この人と話すの、本当に疲れるなあ。

*

そんなことがあつたからか、今日のコンディションはすこぶる良くない。

お疲れモード、という奴だ。

まあ、既に僕の頑張りどころは終わったわけで、後は先輩方のミラージ・バットとモ
ノリス・コードの応援だけ。

そんな僕は今。

「よ、青！ 昨日はかつこよかつたぜ！」

「お、追上くん……お疲れ様でした」

「お疲れ様、追上クン。ま、ミキよりは活躍したんじゃない？」

「何故そこでわざわざ僕を下げるんだい、エリカ……。コホン。それより、青。昨日は最
後の最後、本当に助かったよ。改めて、ありがとう」

「……お、おう」

なにか、物凄い歓迎を受けていた。

僕の人生でこういう「ザ・出迎えムード」って家族以外無かったから……どうしていいかわからないな。

まあ、悪い気はしないが……。なんだろう。

僕なんかより、達也君の方が凄まじく頑張っていたような……。

チラつと一高の選手がいる天幕に目を向けると、

「ああ、達也はこれでもかかってくらい褒めたからな！ 多分アイツも食傷気味だろうぜ」
「散々揉みくちやにしちゃって、深雪に怒られたからねー。いやーブラコンの妹を持つと怖い怖い」

何故かブラコンを強調するエリカちゃん。

強調しなくてもみんな分かっていると思うのだが……。

「お、そろそろ始まるぞ」

九校戦九日目、ミラージ・バット予選、第一試合。

出場選手は、小早川景子先輩。電光掲示板に名前が出たので本人の顔を見る前に名前を覚えた僕にしては珍しい人だ。

「ん……？」

「どうかしたか？ 青」

「いあ……」

気のせいかな？

景子先輩の腕にあるCADが尾を引いている。

僕のチート染みた力は、軌道が見える。それは普段使っている「これから対象が向かう軌道」だけでなく、「その対象が今まで通ってきた軌道」も見ようと思えば見えるのだ。視界がごちゃごちゃするから普段はあまり使わないが。

そして景子先輩のCADから出ている尾は、まさに「何かが通ってきた軌道」。

「CADの通ってきた軌道」とは別に、「何か」がいる——！

そしてそれは、起こった。

*

「……………」

小早川の身体に、一瞬で様々な事が起きる。

滑空の為に起動しようとした魔法式が起動しない、驚愕。

地に引かれて身体落ち行く——原初の恐怖。

それをどうする事も出来ない、恐慌。

そして、減速魔法とは違う……何かに包まれるような、阻まれるような、抱擁。

その暖かい感覚に、小早川は落ち着きを取り戻した。冷静に、CADを操作する。

その直前に、ナニカがCADの中から出て行ったのがわかった。魔法師では活性化状態でないとその存在を認知し得ない——フレイク霊子の塊が、吹き飛ぶ様に北東の方角へ。

それを知覚しながら——果たして、滑空の移動魔法は行使された。

観客や審査員からは、小早川が空中で数c m程ズレたかのように見えたかもしれない。だが、その後はしつかりと計算通りに開いている足場に着地出来たから、気にする事は無かつただろう。

「……」

己の身に起こった事を把握しているのは、小早川本人だけだった。

だからこそここは、意を決してもう一度跳躍魔法を使う。疑問や恐怖を振り払い——何の問題も無く、跳躍魔法を行使する事が出来た。

今度は光球の優先権を取る事が出来た。

もう小早川に、躊躇いは無かった。

*

『達也、幹比古だけど……今話しても大丈夫かい?』

「ああ、大丈夫だ。どうした?」

『さっきの試合だけど……柴田さんが、達也に伝えたい事があるって』

「美月が? わかった、代わってくれ」

小早川の試合が終わり、一瞬魔法を失敗しかけた小早川に懸念を抱いていた所、幹比古から携帯端末へ通信が届いた。音声通信用ユニット——インカムを接続し、達也は応対する。

『代わりました、美月です』

まるで頭に「お電話」とでも付きそうなハキハキとした口調で美月の声が聞こえてきた。

「美月、何か視えたのか?」

「何かあったのか?」ではなく「何か視えたのか?」と聞くのは、その「伝えたい事」が霊子放射光過敏症を用いたものであるとわかっているからだ。

『ええ、その……先程の試合で、小早川先輩が一瞬だけずれる前に、小早川先輩の右腕の辺り……CADを嵌めている所で、光……いえ、“精霊”がパチツと弾けたみたいに見える……』

「そうか、視えたのか。それで、その『精霊』は弾けて散って行ってしまったんだな?」

『……いえ、小早川先輩が空中で止まっている最中……ほんの一瞬の間に、北東の方角へ飛んでいきました』

「何？」

達也は敵の「カラクリ」が少しだけ見えた気がしたと同時に、その飛んで行ったという言葉に新しい謎が浮かんだことを察した。

だが、確かに……もし「飛んで行っていなければ」、小早川は再度魔法を発動する事も出来ずに落ちていたかもしれない。

何より、あの「ズレた」一瞬……慣性中和魔法にしては心無し長い時間中空にいたよ
うな気もする。

『あの、達也さん……？』

「……良くやったな、美月。今の情報はとても役に立った」

『ありがとうございます！』

慣性や移動魔法に長けた魔法師で、隠密性のある者など……姿形こそ知らないが、この九校戦の会場に紛れ潜んでいるらしい「奴ら」以外にはいないだろう。

だが、霊子まで操作できるとなると、恐らく一人二人ではないのだろうことは分かってくる。追上はあくまで端末で、その背後にいる「奴ら」は一体幾人この国に入り込んでいるのだろうか。

だが、それよりも。

今回の「敵」を、排除しなければいけない。

達也は、大会運営委員のテントのある方向を睨みつけた。

*

ミラージ・バットの第二試合が始まった。

先程の試合では少々肝を冷やしたから、今度は最初から全開で見るとする。

先程景子先輩の腕にいた「何か」は、普段の軌道操作では操る事が出来なかった。

が、視線操作の方ならいとも簡単に動かせたので、地球の自転による軌道を操作して思いつき曲げてやったらそれはもう物凄い勢いで北東へ飛んで行った。

地球の自転速度は時速1700 km。あの「ナニカ」に慣性が働いているのかは知らないが、地球が球体である事を考慮せずに捻じ曲げたので今頃宇宙の旅をしている事だろう。

さて、そんなわけのわからないモノの話はおいといて。

いやなにあのコスチュームR—18なんじゃないのアレ考えた奴誰だよGJ！
とはいえ。

個人的には……バトル・ボードのウエットスーツの方が好きかなあ。
色味が……ちよつと、ねえ。

あと前列男子諸君。下から覗くのは止めなさい。

「しかし、残念だったな。渡辺先輩の治療、間に合わなくて」

「ああ……」

そう、ミラージ・バットに出るはずだった摩利先輩の治療は、ギリギリドクターストップが出てしまったのだ。聞いたところによれば摩利先輩は凄まじく粘っていたようだが、真由美先輩達に抑えられて（誤表現に非ず）、代役の深雪ちゃんがそのまま続投。

僕がもう少し早く気付いていれば、摩利先輩は三年生最後の運動会を華々しく飾れたのだと思うと……少々、居た堪れない。

まあ、ここで無理をして今後の魔法師人生に罅が入ったら目も当てられない。

ドクター&真由美先輩達GJ、と称賛を贈っておこう。

「おお、始まるぜ！」

「まあた、ああいう衣装だとすぐに鼻の下伸ばすんだから……」

「伸ばしてねえ！」

じゃれている二人を余所に、ミラージ・バット第二試合第一ピリオドが開始する。

……この競技、僕出来るよね。見た目の一切合財を気にしなければ。

……あ、だめだ。エアは途中で止まれないんだった。

*

……僕も、投擲……いや、跳躍か。

そう言う意味で「空を跳ぶ」事はよくある。

だが、これは……。

恐ろしい。

怖い。

……いや、懐かしい。

そうだ、僕もあの、鉄の鳥で――。

*

あいいううおうあ　　いいいえーいおん

*

「女性を待たせるなんて、マナーがなってないわよ」

「すみません」

女性云々はどこかへ放り投げ、しかし約束の時間に遅れた事について謝罪する達也。

その様子に若干惑いながら女性——小野遥は自らの車へと達也を誘った。

決して如何わしい案件ではない。達也から依頼されていた、無頭ノイ・ヘッド・ドラゴン竜の幹部らの所

在地のデータを彼に渡すためだ。

「……それと、これ」

達也と無頭竜に関するデータの送受信を終えた遥は、最後にもう一つデータを送る。

「……これは」

それは二つの画像データだった。

余程急いで撮られたのだろう、かなりのボヤけこそ見えるものの、しつかり文字は読める。

そしてそれは、達也にも見覚えのあるものだった。

「……軍の身分証明書？」

「ええ、そうよ。良く知っていたわね。そう、国防軍の身分証明書。そして、彼が敵ではないという事の証明……に、なるかもしれないもの」

一枚目は、所有者が軍属である事を示す身分証明書。

二枚目はその裏側——上尾葵^{うえおあおい}特別二等兵という人物がこの証明書の持ち主であることを現すもの。

そして、その写真は。

「……追上か」

「恐らく、だけどね。顔立ちは確かにそっくりだけど……追上青君と上尾葵^{うえおあおい}って軍人が同一人物である証拠は見つからなかったわ。それに、未成年である彼が軍属であるとも思えないし」

「そうですね」

自らの事は天高くまで棚上げして、達也は頷く。

遙の言う通り、顔立ち（目鼻口の位置や輪郭）は追上青を彷彿とさせる。だが、それ以外の部分は全く合致しない。

なぜなら、証明書に掲載されている写真の人物は肩^{かた}まである髪^{かみ}を後ろ^{うしろ}で一纏^{ひと}めにした

黒髪の女性だったのだから。

身分証明書もまた、この人物が女性であると言っている。

「では何故これを俺に？」

「あなたが彼を疑っているからよ。これは彼の家で見つけたもの。これが彼であるにせよ彼でないにせよ、彼は国防軍と繋がりと見えて良いと思うわ」

「そこまであなたが気を回す理由は？」

小野遥は公安の秘密捜査官。

度々達也の依頼を受ける事はあったものの、本来は自由に動ける身ではないはずだ。

だが、今回の件は明らかに私情で動いているようにしか見えない。

「……春の一件で、テロリストが学校に侵入した時……彼は学校に撃ち込まれた炸裂焼夷弾を上空に蹴りあげて、学校に被害の無い高さで蹴り碎いたわ。自分が爆発に巻き込まれる事も省みずに。」

近くの樹に叩き落されて、私が駆けつけた時にはボロボロだったのに……すぐに戦闘が激化していたあなた達のもとに向かった。

もしアレが着弾していたら、実技棟は半壊していたはずよ。彼はそれに気付いて、学校を守ったの。その後どうしてその事をあなた達に話さないのか、って聞いても薄く、力なく笑うばかりで……私には彼が悪い事が出来るような子に見えなかったわ」

「それだけですか？」

それは確かに達也の知らなかった事だ。なるほど、学校を守っているように見える。だが、追上はそもそも司甲の企みに気付いていた。その上で事を起こすのを見逃したのだから、その罪滅ぼしにそういった行動をするのは不思議ではない。

それに気付かぬ遥ではないはずだと、達也は催促する。

「……似ているのよ。私と」

それが一番の理由である事は火を見るよりも明らかだった。

だが、達也に遥の身の上や事情を聞くつもりはない。恐らく遥も話すつもりはないのだろう。

ただ、「自分と似ているから疑いを晴らしたかった」等という理由で納得させられるほど達也は甘くない。

「では、ありがとうございました」

「つ……ええ、それじゃ」

車を出る達也。

背に何かを言いたげな遥を感じながら、ドアを閉めた。

*

「上尾葵特別二等兵、ね……」

遙と別れた達也はすぐ近くに停まっていた車にいた女性——藤林響子と合流し、今しがた手に入れた無頭竜の地図データを渡した。そのデータの示す場所へ向かう途中、雑談というわけではないが、これまた今しがた手に入れた画像データを藤林に見せたのだ。

藤林は「電子エレクトロン・ソーサリスの魔女」の異名を取る程のハッキング技術を有している。電子・電波魔法を使って行われるそれはとても高度なスキルだ。

「聞いた事はありませんか？」

「残念だけど、ないわ。流石に他の隊の二等兵の名前までは覚えていないもの。けど、少し調べてみようかしら」

「お願いします」

そしてその手にかかれば、消されてすらいらない光学ストレージのデータを電子の海から浚うことなど、赤子の手を捻るより容易だったと言えるだろう。

達也の端末がデータを受信する。

「あつたわ。上尾葵特別二等兵。十年前の、四月一日に仮入隊。今送ったのは入隊基地とされる朝霞基地近辺の監視カメラの映像の一部よ。」

関係あるかはわからないけど、顔のデータは完全に一致したわ。それが証明になるんじゃないかしら？」

「……」

それは画像データだった。

——一人の老人と、一人の少年が握手をしている画像。

老人はにこやかに、少年は硬い顔で。

「まさか、九島閣下？」

「そうみたいね。そして少年の方は多分幼い頃の追上君……コレ、かつら？ なるほど、今の顔も黒髪のかつらを被せると……中性的になるわね。幼い頃なら、なおさらかしら」

厄介だ、と達也は思った。

これで少なくとも、追上自身が軍に関係のある身分である事がわかってしまった。上尾葵との関係の方は一旦放置しても、追上が軍の……それも九島烈に関係のある人物だとすれば、達也が手を出すべき案件ではない。

もし追上の身を達也が脅かすようなことがあれば、それは追上と達也二人だけの問題ではなく、^{フランス}達也の家と国防軍の衝突にも成りかねないのだから。

「これで、^{フランス}西EUのスパイという線は消えたんじゃない？」

「九島閣下が間者を抱き込み、二重スパイとして使っている可能性もあるのでは?」
「……流石に深読みが過ぎるんじゃないかしら……」

達也がここまで追上を疑うのには理由があつた。

それは、彼のあまりにも卓越した戦闘技術の所以がわからない、という点だ。

達也自身も、そして今隣にいる藤林も追上の経歴を調べた。

そこにあつたのは、「普通」。特別事故を起こしたり、特別事件を起こしたり、何かに巻き込まれた事の無い——ただ、幼いころに病院を転々としていた記録の或る男児。

魔法の魔の字も出てこない家庭に生まれ、地域の小中学校に通っていた少年。周囲と協調性の無い不良生徒である部分は確かに普通ではないかもしれないが、特に行方不明になったような期間も存在しない、不良生徒だからこそ周囲の人間（子供や教員）がその存在を証明しているただの少年。

その来歴に、一片たりとも「戦闘行為を行った」もしくは「戦闘訓練をした」という情報が無いのだ。武術や武道の経験さえ見つからなかった。

だというのに追上は、未熟な、という修飾が付くとはいえテロリスト十数人に囲まれても一切ひるまず、逆に相手を制圧して見せた。先程の遥の話もそうだ。ただの少年が「実技棟を破壊できる程の炸裂焼夷弾を瞬時に見分けて」「自身の身も省みずに蹴り碎き」「すぐに行動再開できる程度の傷しか負わない」等という馬鹿げた現実を掴みとれる

だろうか。

受け流しや回し蹴り一つとっても、流麗過ぎるのだ。誰の教えも請わずにあそこまでできるのなら、それはもう天才という言葉では片付けられない傑物であると言えるだろう。

達也は違う。達也は幼少から家に様々な戦闘技術を叩きこまれていた。一体幾人の人間を殺めたかもわからない。八雲の教えを受け、技術を磨き、いつ戦闘に成っても対処できる下地が出来ている。

だが、追上の経歴はそうではない。

そうではないのにも拘らず、対処できている事がおかしい。

ならば秘された何かがあると考えるのは、極普通の事だ。

「とはいえ、これ以上俺が手を出して良い相手ではないようですね」

怪しい。怪しいにも程がある。

が、手を出せないのならば仕方がない。深雪に危害が及ぶと言うのなら容赦はしないが、それ以外で何か動きを見せたとしても、達也が関わっていい案件ではないのだから、仕方がない。

「上尾葵と追上青……子供だましのようアナグラムね。つと、そろそろ着くわよ」

「はい」

何か事を起こした日には軍が……九島烈が対処をするだろう。そうして、達也の中から追上に対する「事を起こしたらすぐにでも排除する」というレッテルは消えたのだった。

*

九校戦十日目。

なんで九校戦なのに十日やるんだろう、なんて思いながら、僕はいつも通り観客席にいる。モノリス・コードの決勝戦に克人先輩が出るのだ。

そして試合は、準決勝決勝共に、圧倒的な結果で終わった。

服部先輩と鋼太郎先輩の魔法もさることながら、克人先輩の「壁」が何物（誤字に非ず）も寄せ付けない。モノリス・コードなのに一切コードを打ち込むことなく先輩達は九高と三高に勝利。

第一高校の総合優勝が決まったのだ。

克人先輩の使っていた壁の魔法（名前は知らない）は僕と相性が良さそうだったが、服部先輩（下の名前がわからない）の砂嵐は本当に苦手分野だ。

よく台風の進路、なんていうのが天気予報で映し出されるが、そこにしっかりとした

軌道があるわけではない。あれは逸らせない。

もつとも風の回転そのものを逸らしてしまえば消すことは出来るだろうが、あの大きさを掻き消すのは中々骨が折れそうだ。

そんな考察をしながらいやー面白かった、なんて風に伸びをして帰ろうとしていた……の、だが。

「おいおい、新人戦モノリス・コードの功労者がどこへ行くつもりだ？ ん？」

「……うえーい」

そんな感じでニヤニヤした摩利先輩に首根を掴まれて、無理矢理後夜祭合同ホールというパーティ会場に連れ込まれてしまった。僕が一番嫌いな、人の多い場所。観客席みたいな周囲の人間が全員同じものをみている集団であるならともかく、こういう雑多で……誰に話しかけられるか分からないような空間は鬼門でしかない。

だから早々に視線外しを行って壁の花に徹する事にした。どうせ達也君にはもうバレているのだから、隠す必要はないのだし。達也君にバレているなら彼らにも伝わっているだろうし。

なんだか中央付近でラブコメを繰り広げている深雪ちゃんと将輝君を視界に収めつつ、料理をつつく。うまつ。

そうしている内にダンスが始まった。

先程からキョロキョロと誰かを探している摩利先輩も服部先輩と踊り始めたし、もうそろそろ視線外しは切っていないだろう。喋らなければ僕はヤンキー。こういう格式高い場所に来るような企業の社長なんか話しかけてくるとも思えない。

そう思い、僕は視線外しを切った。

「……ねえ」

「え」

切った瞬間に声を掛けられるなど、思ってもみなかったが。

*

後夜祭合同パーティにて、小早川景子は不可思議な既視感に見舞われていた。

思い返すのは九日目のミラージュ・バット。

自身の魔法が発動せずに、落ちかけた時の抱擁。

そしてその後の、霊子が飛んで行った現象。

あの後真由美の話聞いたところ、自分や司波深雪の、そして七高の選手のCADに細工がされていて、自分の身に起きた事はその細工が原因だろうということだった。当事者故に、こっそり話してくれたのだ。

その細工はS B魔法によるもので、非活性状態の霊子が自身のCADに潜んでいたのだとも。

それを聞いて、ならば助けて貰ったのだと小早川は確信した。

潜んでいたモノが勝手に出ていくとは思えないからだ。事実、出て行ったCADで小早川はリカバリを行い、一位こそ取れなかったものの棄権にはならなかった。細工は一高にポイントを取らせないように行われていたものらしいので、確実だろう。

誰かが小早川のCADから霊子を取り除き、自らを助けた。もしあそこで落ちていれば、魔法不信になっていたかもしれない窮地を救ってくれた人物がいて、しかしお礼も言えていないこの状況はなんとも歯痒いモノ。

そんな折の、後夜祭。

あの時感じた、「霊子を押し出した掌」のような感覚が、会場全体を覆っている事に小早川は気付いたのだ。

それを感じた瞬間、小早川は友人たちの輪から離れその「押し出し」を最も強く感じる場所をふらふらと目指した。

そして辿り着いたのは、何も無い、誰もいない窓際。

右を見ても、左を見ても誰もいない。

だが、次の瞬間。

一切気にしていなかった真正面に、背の高い金髪の少年が現れた。

見覚えのある姿。新人戦モノリス・コードにおいてデイフェンダーを務めた一年生。知らない顔ではなかったが故に、すぐに声を掛けられた。

「……ねえ」

「え？」

彼は見た目にそぐわないあどけない少年の様な声で、疑問を浮かべる。

小早川は直感的に彼が見た目通りの性格ではない事を見抜いた。

「ありがとうございます」

深く頭を下げる。

何故敬語を使ってしまったのかはわからなかったが、これが小早川の隠さない気持ちだった。

ただただ、感謝を。

「あ……い、いえ」

少年は戸惑ったように、驚いたように後頭部を掻き。

そして一瞬目を瞑り、もう一度目を開いた時には子供とは思えない大人の顔つきになっ

ていて。
そして小早川に手を差出し、

「Are you alone?」

お一人ですか？

と聞いて来たのだ。

この場でその言葉の意味する事はただ一つ。

踊りませんか、という事。

矢張り見た目にそぐわないその紳士ぶりに、小早川はなんだかおもしろくなつて、その一年生の手を取った。

「ええ、リードよろしくね？」

「oui」

そうして、他校の選手や企業関係者からは余りにも流麗で美しいダンスを行う事への、一高の選手からは接点が一切想像つかぬことへの驚きを浴びせられながら、二人は一曲だけ時間を共にしたのだった。

*

夏休み編

あいいううあああ　ういいうう・おーうお

*

夏休み。

厳密に言えば九校戦の時期だつて夏休みだったのだが、休みらしい休みではなかった。

まあ運動会を観戦してただけなのだが。

さて、九校戦の最中に（半ば無理矢理）約束した、妹の彼氏こと北山航君の別荘に行くことになった件で、僕は今美容室……ではなく、妹の部屋にいる。

そこで受けているのは、化粧。

もう一度言う。

そこで受けているのは、化粧だ。

「ああああ、あんええいおうああ？あのさあ、なんで化粧なの？」

「んー？　ふふーん、一高の優勝挨拶の時、一高の技術スタッフを見たんだけどさー。五

十里啓さん？　って人見て、ビビっと来たんだよね」

「うんうんえんああ？　ゆんゆん電波が？」

「ずんずんセンター？」

「ううん、いあう。えおいいいあいえううん、違う。でも気にしないで」

椅子に座らされ、大きな鏡の前で色々されている。

既に髪は黒に戻っていて、ワックスも取っているので普段の僕を知る人が見れば誰だお前状態だ。その上に化けの皮を押し固めているのだから、性別すら行方不明である。

「そう！　既に流行の終わった男おとこのしの娘を！　さらに進化！！　男おとこのヒトの女性の時代だよ！」

「……ああおいういえおまあ落ち着いてよ」

多分その時代は一世紀くらい前にすでに終わっているから。
とうにか啓先輩に失礼だろう。参考にするのは花音先輩の方だと思うのだが、勘違いしているのかな？

「青兄はお母さん似だから、ちよーつと化粧してあげれば違和感ないってー。これで青兄のお友達さんも青兄にめろめろ！」

「おえあおあうそれは困る」

「あはは、冗談冗談。でもほんとズルイよねー。航君もケツコーカワイイ系んだけど、青兄は綺麗系っていうか、出来る秘書官、みたいな雰囲気あるし」

「いつあいああおいあええうあいあいあええ実際はまともに喋れすらないがね」

「そこは特に気にならないかなあ。私は青兄の言葉わかるし、昔から青兄が周りの子達の何百倍も頭良かったの知ってるし！」

……ええ娘やあ。

本当、僕には勿体の無いくらいの妹。可愛いなあ可愛いなあ。

ちなみに頭脳の方は今となってはほぼほぼ横並びである。勉強は欠かしていないが、歴史とか魔法学とかでかなーり躓く。数学や言語学は負けるつもりはないが。

「はーい目、閉じてー」

「ん」

言われるがままに処理を施されていく。

というか、中学一年生って普通にお化粧の知識があるものなんだなあ。ああでも、アイツも結構早い時期からやってたっけ。

「それに青兄には音楽があるじゃん。むしろそっちの道で生きていけばいいのに」

「いおーあーえうあ、あいありコーダーですが、なにか」

「嘘吐きー。色々演奏できるの知ってるんだからね。誰が青兄の仮想型端末管理してると思ってるの？」

「……あいいあいあ……参りました」

母音ーツンしか発せられない僕に残されたもう一つの意志表示。それが音楽だ。

音階で言葉を伝えようとするとなーぜか伝わらないのだが、普通に音楽を奏でる分には特に問題ない事がわかっている。鼻歌も歌える。

本物の楽器を買うお金のない僕は仮想世界で色々手を出しているので、元の経験も相俟ってそれなりにできる自負がある。

披露する機会は訪れなそうだが。

「ああ、女装＋タキシード＋ピアノもいいなあ。でもやっぱりハーブ？ いやいや、眼鏡でサックスも捨てがたい……」

「おーい、あえっえおーいおーい、帰ってこーい」

むしろそう言うのは達也君なんか似合いそうだ。で、深雪ちゃんがボーカル。暗闇のステージにライトアップされて真っ白なドレスで……なんて。達也君はどうせピアノも出来るのだろうし（偏見だが）、あの二人は何をやっても絵になりそうだもんなあ。ふむ、そうなってくると……レオ君はギターで、エリカちゃんがドラムで、美月ちゃんがフルートでー。

「あ、そうだ。航君に、別荘に楽器無いか聞いてみよーっと。もし合ったら弾いてよ、青兄」

「えー」

「……ダメ？」

ぐああああああ!!

青に 9999 の た^ため^し !! ▼

うわめつ、かい は こうか は つく^くんだ !! ▼

「ううん、いいおううん、いいよ」

「やたっ！」

……僕、達也君は度を越えたシスコンだと思っていた。

しかしながら、存外僕も変わらないらしい。昔は妹いなかったし、余計にそう感じるのかなあ。

くっ、航君も見る目がある！ そう、僕の妹こそ世界一可愛い！ ぶつちやけ深雪ちゃんより可愛い!! 口に出したら（出せないが）達也君に指パッチンされそうなので言わないが。あれ、後々聞いた所相手と自分の鼓膜を大音量で破るっていう、エターナルフォースヘッドバッドみたいな技だったらしい。怖すぎる。

「さ、出来たよー。後は目の周辺整えるだけ」

「おえあいいんああ、おおおえあいいいあんあ……それはいいんだが、そろそろ出ないと時間が……」

「ダイジヨブダイジヨブー。お迎え来てくれるって言ってたし。遠慮したんだけど、押

し切られちゃって。まあ、そういうチョット強引な所もいいんだけどー」

ああ、可愛いなあこの子。

照れ恥じる姿も可愛いとか、神？ むしろ宇宙？

あ、神様はダメだ。肝心な時に裏切るから。うーん……妹様でいいか。

「よーし、出来た！ 名付けて、『仕事は出来るし優しくて綺麗！ 社長秘書追上葵』！」

「あおいつえあえあお……葵って誰だよ……」

さて、こういう化粧を経た後は「……これ、僕？」みたいな事をする様式美が存在するのはわかっている。が、昔こういう変装みたいなものは（またも無理矢理）経験しているの特に驚きは無い。

「おー、うおいうおい（おー、すごいすごい）」

「航君びつくりさせるために葵姉って呼んでいい？」

「いいあ、あおえあああうおあいあおいえお？ いいが、後で必ず誤解は解いてよ？」

「了解しました！」

ビシッと敬礼をする妹。

妹よ、左手での敬礼は死敬礼だぞ。あ、妹は左利きだから問題ないか。

「——ん」

「どうしたの、葵姉？」

「あ、おえおうあいあつえうんあ……。いあ、いっいうんいんあえ……。おうあいおうあおあ、それもう始まつてるんだ……。いや、一瞬視線がね……。もう大丈夫だよ」

「視線？　なんだろ、覗きとか？」

「……いおつおいえいいえううちよつと死刑にしてくる」

妹を覗こうとした者に天罰を……！

曲げるだけで済ましてなるものかアツ！！

「わーわーストップストップ！　もしかしたら航君かもしれないし……」

ピンポン。

と、妹の発言の直後にチャイムが鳴った。古めかしいとは思うだろうが、この音が好

きなんだ、僕も母親も父親も。

「いあ、いおうあじゃ、行こうか」

「はーい！　あ、荷物……」

「おいおん、おうあおうお。おおあえおあつああい勿論、僕が持つよ。そのためのタツパだし」

よつこらしょういち、と心の中で呟いて二人分の荷物を持ち上げる。軽い……二泊三日分とはいえ、女の子なんだからもつと沢山持つて行かなくていいのだろうか。

僕の荷物はアイオーンと着替え一式だから軽いのは仕方ないのだが。

「ああういあお、ああうんああつえうお？早く行きなよ、航君が待つてるよ？」
「……うん、ありがと」

どこか不満そうな顔をした妹は玄関の方へトタトタ駆けていく。

後姿も可愛い。勿論不満顔も可愛かった。

ああこれ、重度のシスコンだなあ。

妹を追って家を出る。施錠もしっかりする。まあ母親が普通に家にいるので任せてもいいのだが、習慣付けにね。

そうして庭を出て、なんとびつくりサルーン。またの名をリムジン。

そして車の前でキヤイキヤイしている妹と航君、運転手らしき人。

「こちらへ」

運転手らしき人が僕を促す。トランク……ああ、荷物を入れるのか。

ヤバイな、想像はしていたが……本当にお金持ちだ。

今も昔も庶民な僕としては、勿論そんな車に乗るのは初めてなわけで。

ストレッチ・リムジンではないにせよ、傷を付けたらどうしようとか考えてしまうわけ。

「……」

「……」

「……？」

車の中からじいーつと見つめてくる雫ちゃんの見線にどう答えたらいのか全く分からないわけで！ 答えられないがね!!

一応会釈をしておく。あ、返してくれた。

「何してるの、葵姉。乗って乗って」

「ん」

妹に促されてサルーンに乗る。のるーん。

三列シートサルーン。中列に妹と航君。そして後列に僕と雫ちゃん。

妹と航君はとても楽しそうに喋っているのだが、僕と雫ちゃんの間には話はずー

ろー。

元々レオ君を介さなければ友達というわけでもないし、雫ちゃん自身無口なものだから……。

「……あの、初めまして」

「……」

うえ？

あ、もしかしてコレ僕が僕だとわかっていない？

そっかー、そうだよね。そもそも元の僕を良く知らないのだから、その見た目が変わったらわからないよねー。

僕も美月ちゃんがいきなり金髪化粧マシマシギャル風ファッションにして来たら解らないと思うし。

一応、もう一度会釈を返しておく。

「……航の姉の、雫です。茜さんの……ご姉弟の方で間違いないですか？」

うわー、めっちゃ敬語だ。確かこの子無口は無口でも結構ズバズバ言う子だったと思うんだが……。

ちら、とルームミラーを見る。

人差し指を唇に当て、ウインクをしている妹。うん、可愛い。

ちなみに茜は妹の名前である。青と赤です。

「え、ええ。……追上葵」

よろしくね、の意を込めて手を差し出す。

これ絶対勘違いされてるよね……もう一人お姉さんがいたんだ、みたいに思われてるよね……。しかし自分から弁明する術がないんだよなあ僕。染髪剤持ってきてないし。

あれ、これ妹がバラしてくれるまで僕が僕だと証明する方法が無いのでは……。

学校のIDカード……貴重品だから置いてきたなあ。あーあ。

「はい」

雫ちゃんは握手を返してくれた。うわー、ちっちゃい手。

可愛い子だなあ。

そうしてサルーンは出発する。

行先は神奈川の葉山マリーナ。

クルーザーで行くんだって。お金持ちイ……。

*

「初めまして、茜さん。いつも航と仲良くしてくれていると聞いています。今後ともよろしく願いますよ」

「はい！ こちらこそ航君にはお世話になっています。今日はお世話になります！」

「うん、元気がいいのは良い事だ。……それで、彼女が……？」

「えと、実は……」

「……ふふ、なるほど。面白い試みだ。それに、本当に社長秘書であるかのように見える。航がいつ気付くか、人を見る目を養う訓練にもなりそうだな。私も彼が彼女である体で行かせてもらおう」

「おお……おじ様、実は悪戯好きですね？」

「君には負けるよ、リトルレディ」

なんか、クルーザーの船長さんと妹がとても仲良くなっている。

離れた所で見ている航君が物凄く微妙な顔をしている事に気付いてあげなさい。

兄として妹の行く末にドキドキハラハラムネムネしているそんな折、続々と人が集まってきた。雫ちゃんが呼んだいつものメンバーである。達也君に深雪ちゃん、ほのかちゃん、エリカちゃんにレオ君、美月ちゃんと幹比古君。

女の子たちの私服姿、可愛いなあ。

さてはて、雫ちゃんは気付いてくれなかったが……レオ君ならどうだろう。

そう思って、じーっと見つめてみる。

レオ君は視線に気づき、「？」を浮かべて首をひねり、人差し指で僕を指してからそれをエリカちゃんに叩かれ、掌を拳で叩いて（「閃いた」のポーズ）にこやかに会釈をしてきた。

……うん？

うん？

ならば達也君はどうだろうと達也君を見てみると、そこには啞然とした顔が。

幽霊でも見たかのような彼の顔はレアものだが、なんだろう。僕だよー、追上青だ

よー。

……まあ、分かっていた事だ。

人間の顔は何か特徴があればそこを一番に覚える。例えば美月ちゃんだつたら眼鏡。幹比古君だつたら右目下の泣き黒子。エリカちゃんだつたらその赤に近い茶髪でレオ君は碧眼。恐らく十秒で似顔絵を描け、と言われた場合、特徴を捉えるに一番参考にする部分が最も印象に残っている箇所だ。

そして僕の場合、それが金髪であるということ。よく見てくれている人なら銀と赤も追加してくれるかもしれないが、まあ大体ボサボサの金髪を書けば僕だ。

そんな僕から金髪を取ってしまえば、結果誰も僕の顔を思い出せなくなってしまう。あー、なんか長身だなー、くらいの記憶しかなくなってしまう。

……フフ、どうせ僕はその程度の存在……！

だつたらむしろ、盛大に勘違いさせてあげよう！

そして男湯に入ってきて、あー!! みたいな？

お、面白そう。なるほど、妹が航君を驚かせたいって言ったのはこういう気持ちか。ならば、記憶にある姉を頼りに……下腹部手前辺りで手を組んで、お辞儀をしてみる。妹風に言うなら「出来る秘書風」である。

……自分が自分で気持ち悪いのであんまりやりたくないのだが。

そんな風な言葉を交わさないやりとりをしていると、クルーザーの船長さんが達也君と深雪ちゃんと何やら言葉を交わす。そして僕に一度会釈をして、大型車両に乗って行ってしまった。

……え、船長さんじゃないの!?

待つて待つて、じゃあ何、あの服装は何? コスプレ?

というか船は動くの!?

「葵姉、いくよー?」

「ああ、ええ……」

今普通におう、つて言いそうになつたよ。

ともあれ、いつバラすのか後で妹に聞いておかなきゃね。

僕の精神的ダメージの蓄積を考えて。

……所で、さつきから飛んできてこの視線、何なんだろうなあ。一度逸らすだけじゃダメっぽくて、意識的に弾かないといけない視線なんて初めてだよ。ちよつと鬱陶しい。

どつかから望遠鏡で見られている、のかな。妹のストーカーとかだったら怖いし、もう少し広範囲に弾いておこう。

*

「……彼女は？」

「追上葵さん。弟の彼女さんのお姉さんだよ。青君は急用で来れなくなった、って」

「急用……。それに、葵か……」

調べた家族構成に姉はいなかったはずだが……。と内心で呟く達也。

雫の別荘に呼ばれ、集合した葉山マリーナにその女性はいた。

あの写真と違い、毛髪量こそ少ないが……。追上青とよく似た顔立ちの存在。

注視しようとする、そして精霊の眼で見ようとすると弾かれる。追上のソレとよく似た現象だが、こちらの方が強い。追上の視線外しはもう一度見直せば捕捉する事が出来たが、この女性のソレはどれほど注視してもぼやけたままだった。

アイデアにアクセスしエイドスを観測する精霊の眼が外されるといふことは、相手もまた同じことが出来るといふ事に他ならない。

エレメンタル・サイト
精霊の眼に狙われて逃れられる者は、存在しないモノだけだ。

戸籍が存在せず、アイデアには不確かでエイドスをしっかりと残さない女性。

だが、この場にいる誰もが彼女を肉眼で視認していて、追上青の妹だという少女もまた女性を「葵姉」と呼んでいる。

達也だけに見えている霊子の塊、というわけではない。

「気になる?」

「……いや、彼女が航君達を見る目は慈愛のソレだ。恐らくは大丈夫だろう」

「……?」

雫の問いかけに反射で答えてしまったが、気付いた様子が無い事に安心する達也。そもそも彼女たち学友は、追上の身の上などは知らないのだ。

それにしても、と達也は思う。

九校戦最終日に小野遥が見つけた身分証明書と藤林響子が見つけた過去の映像。

そのどちらにも映っていた女性と瓜二つ……十年の時間が経てばなるほど、こう成長するのも納得である顔がそこにいる。あの写真の女性は上尾葵という名前だったが、追上葵と上尾葵、偶然響きが似ているだけとは思えない酷似だ。

ならば九島烈と握手を交わしていたのは、目の前の女性だったのだろうか?

「葵姉! 見てあれ、いるか!」

「うん」

「もう、ちゃんと見てる? あ、航君航君、双眼鏡とかって……おお、用意良いね! 一

緒に見よ? ……ありや、上手く見えない」

「ええ……」

「あ、葵姉と航君が同時に私を呆れた目線で……ち、違うから！ 普段の私はもう少し賢いから！」

「うんうん」

「なげやりだ!?!」

……雫の弟を交えて姉妹でじゃれ合っている姿からは、彼女が軍人であることなど想像も付かない……と思いかけたが、達也の脳内でこちらへウインクする藤林や事あるごとに実験を迫ってくる山中の顔などが浮かび、思い直した。

軍人でもそう言う人はいるのだと。

「よ、達也。楽しんでるか?」

「レオか。まあ、今時クルーザーを使う事なんて無いからな。貴重な体験をさせてもらっていると思う」

「お、少しは達也も旅の醍醐味って奴がわかるようになったみたいだな。で、だ。

……あの人が、気になってんだろ? 青のお姉さんらしいけどよ、正直想像つかないよな。あんなに綺麗な姉と可愛い妹がいるなんて」

「……気にならないと言えば嘘になるな」

レオが期待している意味ではないが。

達也にとっても精霊の眼をぼかさされるという経験は初めてだ。

興味という点では正直別荘を楽しむ事より上位に位置すると言えるだろう。

「——お兄様？」

だが、その興味も妹の一声で急速な鎮まりを見せた。

背筋に冷たい物が走る。

「お、おとつと。じゃ、達也。頑張れよ！」

何をだ、と問いたかったが、今は彼の最愛の妹を宥める事が先決である。

クルーザーの上で振動減速魔法を暴走させようものなら恐ろしい結末になってしまうだろうから。

「……深雪。落ち着け」

「ええ、深雪は落ち着いています」

どこがだ、と達也はツツコミをいれなくなった。

「あー！」

と、そこで追上の妹……茜という名の少女が何かを思い出したように声を上げる。

茜は追上葵をしゃがませると、葵の背負っていたリユックサクから四角い紙……色紙とペンを取り出した。

そして達也と深雪の元へトタトタと駆けてくる。

流石に中学一年生らしい少女の前で魔法を暴走させる事は恥だと思ったのか、深雪が冷気を仕舞った。

「あ、あの！　お願いがあるんですけど……」

と、頼み込むのは深雪に向かって。

茜は色紙とサインペンを両手に持って、

「九校戦……アイス・ピラーズ・ブレイクとつてもかつこよかったです。不躰で申し訳ないんですが、サインくださいませんか……？」

と言ったのだ。

無論、それを断る深雪ではない。にこやかに、先程までの冷気なんてどこぞに放り投げて、大和撫子然とした態度でそれを了承した。

「ありがとうございます！」

自らの妹をカッコイイと言われて、達也も悪い気はしない。

だが、次の言葉には困惑した。

「あの……その、達也さんも……お願いしてよろしいでしょうか」

「……俺に？」

「はい。モノリス・コード、青兄が出るから見てたんですけど……達也さんかつこよくて……。私、魔法の事はよくわかんないんですけど、達也さんのスタイリッシュな動きを

見て、ファンになりました！」

そこまで言われて、今度は深雪が気分を良くする。

自分が慕う兄が他者に認められるのは妹である深雪も自分の事以上に嬉しいのだ。

減るモノでもないが、達也はいわゆるサインらしいサインを持っていない。別名義であるならばともかく、司波達也としてのそれは持っていない故に、そのまま名前を書くだけになってしまった。

それでも喜んでくれたようだが。

その後茜は幹比古、ほのか、雫の元にもサインを貰いに行き、その褒め千切りにたじたじの幹比古をレオとエリカがからかう場面が見受けられた。

「……青兄、か」

「お兄様？」

追上青と、追上茜。そして追上葵。

青と茜が兄妹である風に見えないのだ。

何故なら、茜はどこまでも普通だから。

情動も、言動も、何もかもが「普通」だ。一般家庭で生まれ育った見本のような少女。

それは貶すような意味合いではなく、「異常ではない」という意味。

兄である青のような「陰」を一切感じさせない「日向」の存在。

もし、青が……この少女を守るために「闇」に身を落としているのだとしたら。

そこまで考えて、達也は頭を振った。それは考えすぎというか、妄想が過ぎるというものだろう。

「……あの、達也さん」

「どうした、美月？」

達也が思考を自嘲していると、美月が話しかけてきた。

その顔には明らかな怯えがある。

「あの……ヘンな事を聞きますけど……よろしいでしょうか」

「ああ、構わない。何が聞きたいんだ？」

美月の「眼」がまた何かを捉えたのかもしれないと考え、達也は自嘲を消して思考を

冷静にする。

達也のその真剣さに、美月は安心した様子で——言った。

「追上……葵さん、という方は……本当に……この場にいらつしやいますか？」

*

あいいううあいあ　　いあいおああ

*

「……………どういうことだ？　美月には……………見えないのか？」

「いえ、その……………眼鏡を掛ければ、見えるのですが……………外すと、消えてしまつて」

美月の眼は霊子放射光過敏症だ。プシオンが放つ光を過剰に捉えてしまう現代病の一つであり、幹比古に言わせれば美月の眼は「水晶眼」という、機能的にとても優れた物であるらしい。

彼女のつける眼鏡はオーラ・カット・コーティング・レンズといつて、その放射光をカットできるアイテムになる。

そんな彼女の眼が、眼鏡を付けている時は見えて、眼鏡を付けていない時は見えないと言うのはどういう事か。

「あの女性は霊子を持つていないということか？　いや、それならば眼鏡を付けていないくとも見えるはず……………」

「皆さんが見ている場所は、私にはレンズを通した世界のように……………歪んで見えます。

そこに何かがある、ということとはわかるんですけど……」

「……」

その現象は、追上青が頻繁に使用する視線外しと似ていた。九校戦の後、追上の戦闘映像を見た限りで、「恐らく視線を外しているだろう箇所」で似たような歪みが起きていたのだ。

光波振動系の魔法、と思われるていたようだが、それがBS魔法の……それも精神干渉系魔法だとするならば、心靈現象の次元にある霊子に作用できてもおかしくはない。未だ仮説の段階ではあるが、霊子は「情動を形作っている粒子」とされているのだから、「見たくない」という情動を操作しているのであれば、納得も出来よう。

であるならば、追上葵のしている事とは何か。

それは霊子の視線外し。美月が見てしまう視界、つまり美月の視線を外しているという事か？

「だが、それをする意味は……？」

「達也さん？」

達也は、美月を“見て”みた。

イデアにアクセスし、美月を構成するエイドスを視る。

ぼやける事無く、視る事が出来た。

追上葵を視る。

ぼやける。追上葵がいる場所の奥の景色が見えているような、そんな視界。

「……美月。もう一度眼鏡を外してみてくれないか？」

「え？ は、はい」

そこで達也は、精霊の眼の使用を中止する。

相変わらず注視は出来ないが――、

「え……あ、視えました……。……あれ？」

達也が精霊の眼の使用を中止した途端、美月の眼が葵を捉えたのだ。

これは恐らく、「精霊の眼の視線」などという達也ですら把握していないソレを逸らされた結果、巻き添えで美月の眼まで彼女を捉えられなくなっていた、という事だろう。

美月の証言を省みるのならば、逸らされたというよりは操作され、ステルスが如く背後の風景を投射されていた、と見るべきだろうか。

「どうした、美月？ どこへ行く？」

「いえ、その……」

眼鏡を外したままフラフラと……葵の方へ歩いて行く美月。

口は半開きで、目はパチパチと瞬きを繰り返して。

流石にその異常性に気付いたのか、周りの人間達も美月に注目する。

そして美月は、墓の前に立つと。

「……あの、間違っていたら……ごめんなさい。けど……追上くん、ですよ？ あの、私達と同じクラスの……」

「え？」

あ、うん」

そんなことを、のたまった。

*

「いやー、マジで気付かなかったわ！ つか、改めて見ると女性要素が欠片もないな！」「ほんとなー。それだけ妹ちゃん化粧技術が凄いでしょうけど……というか、やっぱりあの前時代的ヤンキー感はファッションだったのね」

「あー、うん」

「……良く見たら、耳に穴開いてないんだね。あのピアスはクリップ式？」

「うっ」

「ちえー、航君が気付くまで秘密にしておきたかったのに……どこがいけなかったんだろ」

本当に、なんでバレたんだろうね。

特に隠してはいなかったが、まさかド直球でバレると思っていなかった。

美月ちゃん、不思議な視線の子だとは思っていたが……あの眼、何か秘密があるのかな？

「あ、そろそろ着きますよー」

と、クルーザーの操舵手である黒沢さんが言う。

物凄い目線を向けてくる達也君と深雪ちゃんとほのかちゃんが多少怖かったが、知らないふりをする事にした。

嵐なんか来ていたら無理やりにも逸らそうかと思っていたのだが、そんなことも無くてよかった。

雫ちゃんの別荘、なごうどじま媒島に到着である。

「アツハハハ！ 高校デビューで、虐められないためにあんな格好にしたって？ 考えが古くない？ アンタとどっこいどっこいじゃない！」

「おまえなあ……青は青なりに悩んでやったかもしれないだろう？」

「いやいや、今時日本語が上手くない程度の事でいじめを起こす様な幼稚なヤツは……ああ、いるかも。結構いるわね、うん。そういう意味では成功してるかも？」

「けどま、早い段階に知れてよかったぜ。ん？　ってことは、アレか？　青はどちらかといえど、幹比古と気が合うんじゃないか？」

「……レオ、それはどういう意味かな」

ビーチまでの道中で、妹が嘘の入り混じったネタバラシをしてくれた。

小さい頃から海外にいたせいで母国語が英語＋フランス語になっていて、日本語はあまり上手くないのだという設定。

それでいじめられる事を恐れて、逆に威圧するためにヤンキーファッションで登校していたという半分事実半分設定。

そして、

「……で、だ。青、お前……本当にこっちじゃないんだよね？」

「うん」

手の甲を口に寄せて科を作るレオ君に即答する。

断じて、僕はソツチじゃない。そもそも僕の格好これ女装じゃないし。

「しっかし、良く気付いたわねー美月。いや、改めて言われればもう見間違えようがないくらいなんだけど」

「その……—が、完全に追上くと同一だったので……」

何が、だつて？

ワンモアプリーズ。ファブローズ。

「ふーん、なるほどねー。あ、そうだ。ねえねえ茜ちゃん。ミキにも女化粧できる？」

「エリカ!!? いいから!!」

「良いってさー。了承貰ったから、別荘着いたら——」

「そつちのいいじゃない!」

……元気だなあ、エリカちゃん。

幹比古君も一々突っ込んでいて疲れそう（小学生並の感想）。

「アイツは本当に……。ああ、そうだ。別に恰好が変わったからって気にしないからよ、

これからもよろしくな、青」

「……。L^エe^オo」

ああ、やっぱり良い子だった。

握手を交わす。

「お、見えてきたな……」

「おー……。M^アA^ンM^アA^イM^アI^アA」

「……。それ、ここで言うセリフか？」

「f^{ウイ}i^ウl^ンl^ウm」

「ああ、映画の方が」

おお、一世紀前の映画なのにわかってくれるんだ。

エーゲ海、行ってみたいよねえ。

「おーい幹比古！ ちよつくら競争しようぜ！」

「いや、体格的に……つていうかりーちにレオと青に勝てる気がしないんだけど……」

「大丈夫だろ！ 青、お前泳ぎはいけるか？」

「うん」

「よーし！ 達也……は、アイツ……なんでもうパラソルの下にいるんだ……？ 保護

者か？」

達也君はサングラスをして、パーカーを羽織つて、ビーチチェアで寝っころがつて僕らを見ていた。その姿はなんだろうな……ハリウッド・スターみたいな。林檎星みたいな。

と、レオ君の視線に気づいたのか、達也君は手をひらひらさせる。

俺は遠慮しておくさ、とでもいうような声が聞こえてきそうだった。

「んじや、行くか！」

僕らはもう服の下に水着を着てきているので、服を脱ぐだけでいい。

カーデイガンは砂で汚れる可能性も考えてリュックの中に詰め込んであるし、ジャケットとワイシャツはリュックの上にフアサアツ、しておいた。黒のボトムはこれ、本

当にただ黒いだけのボトムスなので、くるくると丸めてリュックにイン。大きく伸びをして、伸脚。ばきばきばき。

同じように二人の身体からもバキバキと音が聞こえた。やっぱり六時間クルーザーの旅は長いよね……。

さて、二人には悪いが……勝ちに僕に譲ってもらおうかな。

*

「I^{アイウイン} WIN!!」

「ゼエー……ゼエーツ、速すぎだろ……」

「……僕から……してみれば……どっちもどっちなだけどね……」

ハツハー、まだまだ若いモンには負けんよ!

なんたつて僕には軌道が見える。どこへどのようにという風に身体を動かせばもつとも阻まれずスムーズに泳げるかが一瞬で分かるのだ。

今の僕であれば、「アトランティスから来た男泳ぎ」だって夢じゃあない。

さて、遠泳から帰ってみると、達也くんとほのかちゃんがいなかった。

何やら良い雰囲気になったらしい。

大方、ほのかちゃんが濡れかけた所を達也君が助け、しかしほのかちゃんのメロンを触ってしまったか見てしまいかして、ほのかちゃんが達也君を執事に指名した……と
いった所だろう。

「青兄、お帰りー。はいこれ」

「……うん？」

航君と妹もイチヤイチャしているのを遠目で見ていたが、どうやらラツキースケベ的な展開は無かつたらしい。まあ、中学一年生と小学六年生じゃあまだ早いよね。

ちなみに妹の胸は「それなり」である。明言はしない。

そんな妹から差し出されたのは、オレンジ。

マンダリンオレンジ。

しかし冷凍。

「深雪さんが手で握ると、普通のみかんが冷凍ミカンになるの。すごくない？」

「あー」

なるほど。

やきもち焼きか。

焼いているのに冷えるとはこれ如何に。

皮をむいてジャリジャリ食べる。競泳で火照った身体には丁度いいクールダウンだ。

「夕食、バーベキューだった」

「ん」

「……無理、してない？」

「ん」

ありや、透けちゃったかな。

何度も何度も来る「よくわからない視線」に気を割っていたせいで、少しばかり疲れ
ているのは事実だ。どうやら妹ではなく僕を狙っているらしいこの「よくわからない視
線」は、全方位から囲むようにやってくる。

ので、僕はそれをぐるっと回すように、視線で膜を作るようにして逸らしているのだ
が、遠泳中にやるには随分と苦労があった。厄介なのは、この視線の出所が分からない
所。

強いて言えばアイデアから直接見られているような、そんな視線だから出元の辿り用が
ないのだ。

だからまあ、疲れたと言えば疲れた。精神的疲労が、ね。

「……やっぱり、言った方がいいんじゃない？」

「……ううん」

「そ、そっか……」

ああ、妹はそっちを心配していてくれたのか。

まあ、当たり前だが、クルーザーに乗ってから……いや、家を出てからか。

僕は普通に喋っていない。妹なら理解できる母音ツンの言葉を、妹が近くにいるのに話せないのは確かにストレスだったかもしれない。

だが、それでも……みんなにバレるのは、嫌なんだ。

そんなことで突き放してくるような人たちではない事はわかったが、これは僕の矮小なプライドの問題。

それについては、本当に迷惑をかけてしまう。

「ああ」

そうだ、お願いの一つを果たしてあげよう。

達也君達が帰ってくるまで少し時間がかかるだろうし、せめてもの罪滅ぼしに、これくらいはしてあげなきゃ。

両手で笛を抑えるような動作をする。

「……疲れてるんじゃないの?」

「いい」

「……いい、青兄。あくまでこれは、私の我が儘だからね?」

「うんうん」

我が儘を叶えるのが、兄の仕事である。

それを罪滅ぼしに使わせてもらえるのだから、やはり妹には頭が上がらないね。

*

水着から服に着替え、しっかりと頭の水気を取ってから別荘に上がらせてもらった。航君の案内の元、楽器のある部屋に向かう。

なんでもお父さんの趣味で集められたものらしく、そういうの勝手に触ったら不味いんじゃないかなー、なんて思っていたのだが、既に許可を取つてあるとの事。

ヨウイガイイナー。

そうして、そこについた。

「……おー」

そこは、確かに。

音楽室……とでもいうべき場所。

置かれたランドピアノやチェロが、なんともクラシックな雰囲気醸し出している。

「青兄、どれ弾けそう？」

「……んー」

妹の耳に口を寄せる。

「いおっおえんいううあええちよつと練習させて」

「あ、うん。じゃあどうしよつか。それじゃあ、また十分後くらいにくるよ」

「うん」

そう言つて、航君の背中を押し出ていく妹。

扉が閉まると同時に、

「うう〜……ふう〜……」

と、大きなため息を吐いて、へたり込んだ。

溜息でさえ母音ーツンになつてしまうこの声帯に嫌気も差したがそれよりなにより。

ようやく、よくわからない視線が止んだ。

一息つける……ふう。

「おっおいいおういい……よっこいしょういち……」

立ち上がる。

折角妹が本物の楽器に触れられる機会をくれたのだ。

航君とお父さんに感謝して、精一杯楽しませてもらおう。

*

バーベキューを終えて。

雫と深雪が「お散歩」に出ていった。

達也とほのかも部屋を出た。

いつのまにか青と茜も居らず、航はうとうととしていたために黒沢に寝室へと連れて行かれた。

そして、美月は――。

暗い廊下。

月明かりが窓から差し込み、点々と廊下を照らしていなければ歩く事の無かつただろうそこを、美月は何かに導かれるようにふらふらと歩いていた。

彼女の顔に今、眼鏡はない。

美月の眼に映っているのは、光の奔流。

それはいつか、幹比古の精霊の喚起を見た時とどこか似ている光景だった。だが、決定的に違う所がある。

幹比古のそれは、呼吸音のような、ゆらぎを持ちながらも規則的な霊子のシグナル。

対してこれは、この世に生まれ出でてしまった事を嘆き、悔やみ、歓喜する赤子の産声のような、指向性だけが設定されている靈子の濁流だ。

そしてその靈子の一つ一つが、真つ直ぐに放出されているのを美月の眼は捉えていた。

それはまるでプリズムに映った光のようで、とても……恐ろしい程に美しかった。

「……ピアノの音？」

廊下の奥。

扉から漏れ出でる光が見えてきたと思えば、ピアノの鳴り音が美月の耳朶を打った。

その音も、靈子も、その部屋から出ているようだ。

美月は意を決し、その扉を開く。鍵のかかかっていない扉は存外軽く、すんなりと開いた。

部屋の中では、数多の線が楽しそうに走り回っていた。

までも思いつくのは幹比古の精霊魔法。神祇魔法と幹比古の呼んでいたソレは、様々な色の球体だった。

この部屋を縦横無尽に駆け回っているのは、数多もの線だ。線であり、閃であり、穿であり——川だった。

美月の耳に聞こえる曲は鎮魂歌。

それが聞こえるという事は、弾いている者がいる証だろう。
グランドピアノの故に正面からは見えない。

だから美月は、その「線」が身体を貫く事も忘れてぐるりと周った。

「……」

そこにいたのは、追上青。

トレードマークとも言うべき金髪から黒髪になった、長身の……少しだけ怖い人。

そして、脳の辺りに凝縮された霊子光のようなものが常にある人だ。美月が葵を青と見抜けたのも、これが要因である。

「美月さん、美月さん。こっち」

「ひゃっ!?!」

突然肩を叩かれ、美月は小さな悲鳴を上げた。

だが、すぐに「しーっ」と口に人差し指を当てられて黙る。

肩を叩いた人物は、追上茜……青の妹だった。

美月は茜に促されるまま、部屋に在った椅子に座る。

眼を瞑ったままの青は気付く様子も無く、演奏を続ける。

悲しい曲だ。

聞く者に涙を誘う、苦しい曲だった。

胸の痛くなるその曲調につれて、数多の色をした線の「速度」が大きくなったり、小さくなったりを繰り返し、流れていく。

「——あつあい、いええいうんあえ」

「え？」

その最中で、青が何かを喋った。

何と言ったのかはわからなかった。英語か、フランス語か、はたまた別の言語か。「やっぱり、見えているんだね、だって。美月さんには何が見えているの？」

彼の言葉を茜が翻訳する。

見えている。その言葉が差すところは、一つしかないだろう。

「……沢山の線が……川みたいにな、流れ星みたいになつて……」

「おお、えんあんあ——いえう？」

「その、先端は見える？」

青の言葉を茜が翻訳する。

その翻訳方法が——彼が何をしゃべっているのか、美月は漸く気が付いた。だけど、今はその問いに答えた方がいい気がして。

言われた通り、線の先——川の終端を美月は探す。

辿って行くと、部屋にあふれる線が全て一本の線であることがわかった。数多にも折

れ曲がり、数多にも重なっているが、これはたった一つの線で、それはまさに青の脳の前方から出ている事に気付く。

そうして、辿って行つた線の先は――、

「……空……部屋を突き抜けて、空へと伸びています」

「――……あーうおお。あー、あうおおえー。おいああいうああああええああ……」

「なるほど、あー、なるほどねー。そりゃあ見つからないわけだよ……？　青兄、何か探してたの？」

青はピアノの演奏を続けながら、大きく肩をすくめた。

途端、乱反射するように駆けまわっていた線が真つ直ぐ統一されていく。

「ん、いおつおおあいおいおうえんおえー。おつあー……」

「友達の少年……？　それ、私も知っている人？」

「うん、おういつえいういお」

「良く知っている人……？」

知らずの内に張りつめていた緊張が解けて、同じくして部屋の空気も弛緩した。

聞かねばならない事がある。

だが、美月は中々それを言い出せなかった。

「ああえいあん。いういいあんいえうえいいえああええ茜ちゃん。美月ちゃんに説明して

あげて」

「……………いいの?」

「うん。いいああつあおあああつあい、おおういううつえいうおえんあああいああ……………うん。知りたかつた事がわかつたし、その報酬つていうとヘンな話だが……………」

「……………わかつた。あと、茜ちゃんつて呼ばないで。ちゃんと呼び捨てにして」

「おえんおえん、おおああいえお、ああえいあんごめんごめん、怒らないでよ、茜ちゃん」
「……………まで聞けばもう疑念は確信になっていた。」

彼の口から出る音が、一定のモノしかないことなど、誰であつても気が付くだろう。

「美月さん。青兄が“こう”だつて、知つてた?」

「……………いえ。今初めて、知りました。その、追上くんは……………」

「そう。青兄にはちゃんと言葉が喋れない。言語障害……………になるのかな。あ、い、う、え、おと小つちやいつ、ん、しか声にできないんだ。文字も書けないよ」

それは衝撃だつた。

美月もまた霊子放射光過敏症という「障害持ち」だ。だが、青のそれは、美月とは比べ物にならない程の「障害」——。

「あああおうあ、おおいおういおうあおうあえい……………あおうあおうおういあいつあんあ」

「だから僕は、この症状を治す為に……魔法科高校に入ったんだ、って」
「あ……私と、同じ……ですね」

本当は同じではないのかもしれない。

美月のそれは「有効活用」も出来るが、青のものは「障害」にしかならない大きすぎるハンディキャップだ。

だが、同じであると思ったのだ。

軽い、とは少し違う。

ただ青は、その「障害」を「ただコントロール出来ていないだけのモノ」としか捉えていないような、そんな気がした。

「皆さんに言わないんですか？」

「うん。おええあいおおあえあえうおあいああい、いあえおあいおあんおああつえうああえ」

「うん。それで態度を変えられるのは嫌だし、今でも割と何とかなってるからね、だつて」

そうだ。美月も、初めの頃は自身の眼のことをひた隠しにしていた。

青も同じ、という事だろう。

「……それにしても、追上くんって……その、全然見た目に合わない口調と言いますか

……」

「青兄は元々幹比古さんみたいなインテリ系でしたからー。学校では相当無理をしてると思いますよー」

「いえいいいい」

「ちよーだるいよ、だつて」

「否定はしない、と聞こえたのですけど……」

美月が苦笑気味に茜のボケに突っ込むと、追上兄妹は揃って目を見開いた。青に至つては、今までずっと続けていた演奏を止めてしまっている。

そしてぐりんっ！ と、美月へと首をまっすぐに向ける。

「……美月さん！ 青兄の言葉、わかつたんですか!?!」

「いういいあん！ うついいえ、あうあうんおおあういあんえうあ!?!」

「え？ え、えつと……ごめんなさい、今のは聞き取れなくて……」

「いや、今のは聴きとらなくていいですよ美月さん。青兄の妄言ですから」

「いええ」

今のが「ひでえ」だという事はわかつた美月。

だが、妄言と言われると好奇心が湧くもの。特に「いういいあん！」は美月ちゃん、だと思われるので、少なくとも自分に関係することだろう。

「少しなら、聞き取れます。その……聞き取りの穴埋めのために、先程追上くんがなんて言ったのか、教えてもらえませんか？」

「……『美月ちゃん！ ぶっちゃけ、達也君のどこが好きなんですか!?!』」

「へあ!?!」

ピアノを弾き始める青。

ねこふんじやつたーのーたー。

コミカルな空気が部屋を覆う。

「いえっ、別にそのっ、私は達也さんのことを好きなわけじゃっ！」

「あー、ああえいえんうあおんええ。いういいあんい、おおあいあんい、いうういあんい、

えいあいあんい……」

「激戦区だもんねえ、って。深雪さん、ほのかさん、雫さん、エリカさん……って、達也

さんそんなにモテるの?」

「うん。うっおう」

「うん、すつごく」である事はわかったが、現在美月はそれどころではない。

確かにエリカちゃんは今日達也さんを意識していたみたいだった、とか、深雪さんやほのかさんは言うまでも無く達也さんが好きなんだろう、とか、雫さんも達也さんを狙っているようだったし、とか、考えれば考えるほど深みにはまっていく。

「……青兄はモテないねー、中々」

「おー、うっおんえううえー〇 おー、ぶっ込んでくるねー」

「だって青兄、僕が名前を呼べない人は恋愛対象外だ！ とか言ってるくせに、実際呼べる子と出会っても積極的に行かないじゃん。第一高校にいないの？ 呼べる子」

「いいいい、いえおいういああいいあー。うついあえおう、おいうえおおうあういあいいい、居ても行く気は無いかなー。ぶっちやけ僕、年上の方が好きだし」

「……選り好みできるのは今の内だと思っただけだなー」

「あついああえううえううええああえいあん！ きつきから抉ってくるねえ茜ちゃん！」

美月は一人思考の渦に飲み込まれ、追上兄妹はじゃれ合う。

終わらないかに思われたその負のスパイラルは、

「ああ、いういいあん。いんあいいあああつえおいうえう？ あ、美月ちゃん。みんなには黙っておいてくれる？」

「あ……はい。勝手に口外したりはしません」

「おー……私とお母さん以外で青兄と話せる人が増えて、何より何より！ 完全じゃな
いみたいだけど、上尾さん以外にいてよかったね、青兄！」

「あー、あいいいおうあえ。あ、いういいあん、おああいいいあんあおうあ、いうあいいお
うえいうおうあんあつえいおうえあー、確かにそうだね。さ、美月ちゃん、お互い大変

だろうが、いつか治療できるよう頑張っ
て行こうね」

「はいー！」

こうして。

達也がほのかに、深雪が雫に、そして青が美月に「秘密」を明かした夜は、静かに過ぎ去っていくのだった。

*

あいいうういうあ ああああ、あいうえお!

*

アイオンから弱めの視線外して注目を外しながら、有明に行く。シャーツと。

普段から引きこもりがちな僕であるが、全く外出をしないかと言われればそんなこともない。あくまで引きこもりがちであつて、引きこもりではないのだ。学校も行っていないわけだし。

さて、そんな僕が現在何を目当てに有明を走っているのか。

まあ、いくつか理由はあるのだが、一番大きいのは、

「いああ〜……あいおあいおいやあ〜迷子迷子」

そう、迷子である。

僕は練馬区に行きたかつたのだが、なーんてか江東区にいるのだ。

練馬区は僕の家から見て東にある。だから東へ東へ行ったら江東区有明に辿り着いてしまった。江^えッ!? 東^{ひがし}区!?

いや、ごめん。

オイシヤサマに呼ばれて朝霞基地つて所に行かなければいけないのだが、いやほん
と、後どれだけ東に行けばいいのやら。

そんな折。

「——急いでいるんです。通してください」

「まーまー、そんなこと言わないでさ。俺達とも遊んでよ」

「そうそう、そんな坊やより、もっと楽しいコト知ってるよ、オレたち」

そんな、古臭い会話が耳に入ってきたではないか。

今盛大なブーメランが物凄い勢いで僕の首を刈り取りに来たが、僕は華麗に避けた。

まあ待てと。

エリカちゃんにはもう何度も言われている事だが、ヤンキーというのは前時代的で絶
滅危惧種なのだ。保護されない絶滅危惧種なのだ。

しかしなんだろうなあ、やはり見た目を似たようなものにしてると惹かれあうとい
うか、類は友を呼ぶと言うか、同じ穴のきつねというか。

例え中身の僕がどれほどの聖人君子で清廉潔白純粹無垢な男の子であっても、そうい
う人種に引かれてしまうのかもしれない。

「ああ……はあ……」

前にも言ったが、僕は道端でお婆さんが重い荷物を抱えて横断歩道を渡れずにいたら

助けてあげるタイプの人間だ。重量軽減の魔法を使える状況なら、の話ではあるが。無論往來で私用目的での魔法使用は取締りの対称なので、僕がいつもやっているように周囲のカメラや視線の画角をすべて外した上でのみお婆さんは横断歩道を渡れるようになる。

そして、今聞こえてきた会話はとても都合のいい事に路地裏からのもの。

そこに向いているキヤアメラは無い。キヤ、キヤ、キヤアナム。

つまり、条件は整っているわけだ。

そしてさらに、連中は坊ちゃんと言った。

それはつまり、今路地裏には助けを求める女性と、女性を守る男子おのこがいるということ。

そう、それはボーイミーツガール!

だが多勢に無勢! それが成立するのは物語の中だけだ。

で、あるならば。

突然顔の見えない男が現れ、二人を爽快に助ける事は、現実を小説よりも奇な物にするためのフアクター!

二人の恋路を守るため、行きます僕はキューピッド。

「——おえ、あんいおう!俺、参上!」

しかしポーズは桃の鬼!

……あれ、いないし。

*

「Oh yeah, Won's War! (オウイエア、ウオンの戦いだぜ!)」

そんな、意味の解らない事を叫びながら降ってきたのは、金髪の男だった。

その只者ではない佇まいに森崎駿は注意深く構え、彼と対峙していた内情の面々や彼に守られているリンはその男に目を向けた。

金髪長身。赤いシャツの上に青いアーガイルのカットジャケット、灰色のスウェットパンツを履いていて、靴は懐かしのローラーズスケート。

「……何だ、貴様は」

「……黄？」

内情の面々はその男が突然現れた事への警戒を。

リン||リチャードソンは聞こえたその単語に眩きを漏らす。

「Unless you are her fan——お前達が彼女のファンではないのなら——」

この場に女性はリン一人しかいない。

この場合の彼女が誰を指しているかなど、一目瞭然だった。故に内情は男が言葉紡ぎ終る前に、行動を為そうとする。

「民間人がどうやってここまで来たのかは知らないが——眠っている」

催眠効果を持つパターンの模様が刷り込まれた内情のマーク。

それを男に見せようとして、止まった。

顔が見えない。

「光波振動系魔法!? ——魔法師か!」

「Let's elimination! 排除しよう!」

圧縮ガスの発射音が響く。

麻醉銃。その細い針は、真つ直ぐに金髪の男へと向かい——、

「——影印!」

男の手前で逸れ、曲がり、内情の面々に突き刺さった。

「CADも使わずに移動・加重・加速系の複合魔法だと……!?」

「escape! 逃げな!」

金髪の男が森崎とリンに言う。

だが、逃げ場など無い事は分かり切っていた。相手が内情である以上、どこかへ匿うか、国外にでも連れ出さない限りは逃げ場など無い。

だから森崎は、打って出る事にした。

素性も知らない女性を守る為に、味方かすらも見当が付かない男と、日本政府相手に共闘する。

おかしな現状だが、それが最善であると森崎は直感していた。

「Bel home? 男前だな?」

今まで英語で話していた男が、突然フランス語で森崎に話しかけた。

森崎はそれを理解する事はなかったが、からかわれたような意味合いであった事はわかったために、フンと鼻を鳴らす。

相変わらず顔は見えないが、金髪の男はニヤリと笑った、ような気がした。

「制圧する!」

「Yeah!」

その二人の前に、阻み立てる壁は無かった。

*

「うえつ、あんえつ? うえつ、なんで?」

僕、かっこよく登場してかっこよく敵を引きつけて逃走を促したのに、なーんでこの

少年は逃げないんですかねー。メンインブラックも真つ青な黒服はコレ、絶対FBIとかCIAだと思うから、僕みたいな顔を隠しているヤーツに任せの方が良かったと思うのだが。

まあ少年もびつくりするくらい強くて、ものの数分で共闘のちに制圧、までこぎつけられて本当に良かった。

いやほんと、びつくりするよ。不良に囲まれていたボーイアンドガールを好奇心100%でデバガメ……もとい、追いかけて行ったらいきなり黒服に囲まれるんだもん。最初は吊り橋効果のための演出なんじゃないかと疑った。

「おうあう?・告白?」

呟く。

なんかそんな雰囲気だったので、僕はささっと退散しましょうかね。

*

「work out (お仕事おーわりっ)」

そんなことを呟いて去ろうとする金髪の男を、

「待って!」

リン||リチャードソンは焦って引き留めた。

先程聞こえた「黄ウオンの戦い」という言葉に、今の「仕事が終わった」という言葉。それは彼女を取り巻く現状に心当たりの在り過ぎるものたちだ。

「ん?」

「あなたは……ダグラスに雇われた傭兵? 名前は?」

ダグラス||黄ウオン

リン||リチャードソンが聞き覚えのある名前の中で、ウオンと呼ばれる人物は彼だけだ。

だが、金髪の男は、

「——愛あい 餓男うえお」

「は?」

華麗なターンで振り向き、両手でハートマークを作り、胸の辺りで前後に動かしながら、そう言った。

今の「は?」は森崎から漏れたものだ。

金髪の男はそれで勝手に満足したらしく、スイーツと去って行った。

今度は二人とも、止める暇は無かった。

*

僕は母音ーツン以外を発する事が出来ない。

それはもう何度も言っている事だから分かりきっているとは思うのだが、音楽以外にも一つだけ外部機器に母音ーツン以外を伝える方法を僕は持っていた。

それは、「数字」を「選ぶ」という事。

転じて、用意された数字があれば、入力という手段も取れるのだ。手書きでなければ。応用してポケベルのように言葉を伝えられないかと試行錯誤したが、そっちはダメだった。何故か全てが母音ーツンになる。多分これは呪いだと思う。

さて、そんな数字を選ぶことが出来る僕は今、銀行にいる。

銀行で、銀行強盗に遭っていた。

はいはい類友類友。

ただし、今の僕は。パツキンキーヤンアンスツゾオラではない。

カミクロガーネメ（伊達）ガクガクブルブルだ。

「あー……」

「喋んじゃねえ！ いいか、近づくなよ……？」

しかも人質になっている。

少しお金が入用になって、口座からお金を引き出そうとした矢先に絶滅危惧種たる銀行強盗が現れ、銀行員を脅してポストンバックにお金を詰めさせようとしてシールドがガツシャン落ちてきて警備員も落ちてきてどったんバツタン大騒ぎ。

は、まあ良かったのだが、なんと客に紛れていたらしい銀行強盗の最後の一人がザ・真面目君スタイルの僕に拳銃を突きつけたではないか。

僕の見た目がヤンキーであれば「別にヤンキーくらいいいか」となったかもしれないが、残念無念また来年、僕の格好は「あ、ちょっと背が高いが普通に高校生くらいの、しかも気の弱そうな顔をしている少年が現れた！」とでもテロップが出てきそうな程少年らしさを残した格好で、実際僕の顔も引き攣っているからさあ大変だ。

なお、僕に飛び道具は効かない。チート染みた力があるから。

じゃあなーんで顔を引きつらせているのかと言われれば、銀行の中に達也君と深雪ちゃんがいるからだ。

あの二人、デートスタイルで肩を寄せ合って、仲良く首を傾げて僕を見てきやがってますの。多分「何故抵抗しないんだ？」とかなんとか思っているのだろうが、ヤンキースタイルではない僕が突然銀行強盗を殴打蹴打し始めたらおかしいだろう!?

ついでに言うのと、発砲された時の言い訳ができないんだ、こんな大勢に囲まれていると。

だからどーにかして助けてほしいんだわさー。

という念を二人に送ってみるのだが、残念、アイコンタクトで通じ合えるのは妹だけだった。茜ちゃん……。

「まずは俺達の仲間を解放してもらおうか……おい、急げ！ でねえとこのガキぶつ殺すぞ!!」

んあー、不味いね。

当たり前だがアイオーンは履いてきていないので、アイアンは使えない。

エアでぶつ飛ぶことも不可。

とくれば、方法は一つ。

「う、うあああああああああ!!」

殺すと言われ、恐慌状態に陥った学生君、風演技!

軍学時代、「本当に緊急事態と勘違いするからやめろ」と言われたのが懐かしいね!

母音ーツン以外が話せれば直義! じゃない、尚良し!

「き、君! 落ち着いて!」

「暴れんなつたろ! くそ、この——」

銀行強盗の指が改造拳銃のトリガーにかかる。うわそれ安全装置無いんだ……危な。

しかし、やめろと言われればやりたくなるのが人間心理。

さらば銀行強盗犯。人質は取ったら負けだという言葉を知らなかつたようだな！
パン！ と発砲音が響く。

誰もが——達也君と深雪ちゃん以外——眼を瞑ったその瞬間、拳銃が強盗の手元で暴発し、同時に僕は吹き飛ばされた——ようにして、離脱する。

ジャムつたと、FPSなんかで知識のある者は思っただろう。

なんで一発も撃っていない拳銃がジャムるんだよと、ある程度の知識がある者はツツコんだかもしれない。

「——背で銃弾を受け流した、か」

そして目の良すぎる彼は、どこで銃弾がどう曲がったのか、見えていたかもしれない。
「確保!!」

こうして、銀行強盗は全員逮捕された。

拳銃の暴発を至近距離で受けた僕は救急で運ばれたが、駆け付けた救急隊員が「無傷」の太鼓判を押した事で、解放。当初の予定通り口座からお金を引き落とす事が出来た。

ちなみにわざわざ銀行に来てお金を卸しに来たのは、これが僕の口座ではないから。こういうと詐欺でもしているのかと思われるけど、逆である。

詐欺かと思紛う程にぼったくられていた医療費を、ようやく返してもらえたのだ。

オイシヤサマから。

ツケをタダにしてもらったあの日の後、本当に良かったのかと問いかけた所、そもそも金銭が目的ではないからお金自体要らない、と言いやがりましたのだあの老人。

じゃあお金返してください、と言ったらなんと快諾。八月三十一日に口座からお金を引き落としなさい、九月に成るとその口座は消えるよ、なんて証拠隠滅っぽい言葉と共に。

こればかりは妹や母親に任せるわけにもいかず、ネットバンクでの引き落としは僕の体質上できないため、こうしてわざわざ赴いたと、そういうワケである。

引き落としのお金を自分の口座に振り込んで、終了。

無駄な時間を過ごしたで御座候。

さて、銀行を出ますと。

「……」

「……」

方や冷徹無比な瞳の兄。

方や冷気美女な姿の妹。

二人は抱き合うような姿勢で、今まさにキスでもしようとしていたのではないかという格好で、確実に水を差したのだろう僕の存在を射殺するような目で見ている。

僕はサムズアップして、逃げるようにその場を去った。

あの二人は確実にデキていると思うんだ。

そんな、夏休み最後の日であった。

*

ダテガーネメ編

あいううあ うういおあい

*

「オオオオアアッ！」

「オラッ！」

相手の剣の軌道を見ながら、弾かれた場合自身の剣がどのような軌道を辿るかをも見据えて踏み込みを強くする。チート染みた力による逸らしは使わない。使わない故に、躲し切れない下段・中段の斬撃は筋力に物を言わせた強引な引き戻しで剣を合わせ、弾く。

いや、弾かれた。先程から続く何度かの打ち合いでわかったことだが、僕より相手の方の握力に軍配が上がるらしい。カン、と軽い音を立てて弾かれた剣が、回転しながら宙に浮く。左側頭。

「貰っ——」

「アアア！まだだ！」

弾かれ、高速で回転する剣の軌道を見て、しっかり掴む。逆手になってしまったが、むしろこっちの方が僕は得意だ。ククリ刀くらいの短さなら尚良しなのだが。

「何!？」

相手は止めを刺したと思ったのだろう、大振りな右上段袈裟斬りで隙だらけだ。

だから僕は、相手の右側……僕にとつての左側に大きく踏み込み、手元直近の剣の根元を狙い、逆手による突き立てを行う。この剣がソードブレイカーであれば、相手の剣を折る事も出来る技術だ。

まあ、軍用刀ってそこまで接近戦をする事はないのだが。

「そこまで! 勝者、追上青!」

「……ふうくと。いや、負けたわ。流星は新人戦モノリス・コード優勝者だな?」

「……うい」

「こら、桐原君! 後輩をいじめないの。それに、最後のは自分の油断なんだから……わかってる?」

「はいはい、わかってるよ。相手の剣を弾いた程度で油断した俺のミスだ。改めて、良い試合ができた。またよろしくな」

「おう。……あ、うい」

「ははは! 別にどつちもかわんねーよ!」

さて、今さっきまで僕が何をしていたのかと言えば、模擬試合、である。

剣術部と剣道部の交流練習試合……を、やっている第二小体育館の上でいつも通り寝ていた所、「気配があつた」などと言う桐原先輩によって連れてこられたのだ。「暇なら試合わねえか？」と。

長剣道よりは短剣道の方に覚えがある。それに一番得意な銃剣術が使えないのならば辞退しようかと思つたのだが、桐原先輩の「怪我する事じやなきや、何やつてもいいぜ」というありがたいお言葉に感銘を受け、一試合を行つてみた次第である。

正直学生剣術なんかに負ける事はないと思つていたのだが、存外……というか、いやはや。

強い。普通に、なんだったら軍人相手でも勝てそうなくらいには。

なんでこの子学生やつてるんだらう、つてくらいには強かつた。

「……しつかしまあ……随分とトリツキーな戦い方をするんだな。見た目も相俟つて、別人かと思うぜ」

「えー……」

「困んなつて。褒めてんだからよ」

見た目——そう、僕はヤンキースタイルを既に止めている。

夏休みでイメチェンしたまま、ダテガーネメを付けた黒髪真面目長髪男子へと変貌を

遂げているのだ。それゆえ、今朝登校した時は「……えと、誰？」という目線だけでなく、実際に話しかけられると言う案件まで発生した。

だから嫌だったのだがなあ、なんてネガらないわけでもないのだが、美月ちゃんが心配そうな眼を向けてこなかった事で僕の心は晴れやかである。

「さて、もう一試合やるか？ ……どうした？」

「……いえ」

視線が見えたので、そちらを向いただけです。

第二小体育館の入り口。

そこに二つの視線の持ち主達……達也君と、花音先輩がいた。何故か花音先輩は女生徒用の服を着ている。

「……司波兄。お前って見る度に連れてる女が違うのな」

だが、その疑問は桐原先輩のこの言葉で月光蝶された。

……え？

ん？ え？

え？

女の子？

あ、達也君に背中触られて「ひゃん」だって。

かわいい。

女の子だ——!!

「うあーお……」

「ん、どうしたの、青くん」

「い、いえ……」

つまるところ、花音先輩はただのひんぬーな女の子で、啓先輩は男装の美少女と……
そしてその百合カップルなのだと、そういうわけなのだろうか。

……いやいや、この流れから考えるなら、啓先輩は普通に男子生徒……？ ま、まっ
さかー。マツカーサー。

「それより、どうして追上がここに？」

「ん、さつきまで一試合やってたんだよ。司波兄も見ていくか？」

「……いえ、俺は千代田先輩を案内しなければ、」

「えー、いいじゃない？ 夏休みの間だけで更生した件のヤンキー君の経過観察も兼ね
て、つてことで」

復活した花音先輩が言う。

あ、風紀委員の方々にとつてはそういう扱いなんですな。

確かに更生した様に見えるかー、そうだよなー。更生も何も、ハナからヤンキーでは

ないと達也君は知っているはずなのになー。

「……では、一試合だけ」

「おー！ なんだ、司波君物分りいいじゃない」

「諦めただけのようにも見えるけどね……」

先程の試合で審判役をしてくれた壬生先輩（下の名前を知らない）が冷静に言うが、果たして本当にそうだろうか。

なんだか、「見極めてやる」って感じの目線である気がするのだが。

「んじゃ、追上。もう一勝負しようぜ。さっきは剣だけだったが、そこにある武器籠の中から好きな得物を使ってきていい」

「うい」

そこ、と指し示された場所には、ゴルフのクラブ立てみたいな形をした箱があり、そこに様々な模造武器が入っていた。うわ、モーニングスターとかある。誰が使うんだろうというか剣術関係なくない？

まあ、そういうキワモノは置いておいて、僕が取ったのは二つ。

「……直剣と短剣ね……双剣なんぞ、素人が扱えるもんじゃないが……」

竹刀よりは短い、大体90cmほどの直刀と、53cmの短剣。

チート染みた力を使うのであれば、機動力が抜群であるアイオーンを使った蹴り技が

一番得意と言いい切れる自信があるが、一対一で相手が剣を持っていてと言うのならこっちの方が万全だ。

直刀は右手にそのまま、短剣は左手に逆手で。

無論、どちらでも扱えるが、最初に教えられたのはこっちだった……気がする。逆だっけ？

「ハツ、中々様になつてるじゃねーか。……いや、さつき負けたのは俺だったな。んじゃ、こっちから挑むつもりで行かせてもらうぜ」

「おう」

昔とは大分身長が違だいぶんう事を考慮しないとイケないが、軌道視をやめるつもりはないのでたぶん大丈夫だろう。

グリップが無いと持ち難いな……。

「それでは尋常に……始め！」

壬生先輩の掛け声と共に、一気に踏み込む！

*

やはり、明らかに訓練を受けた者の動きだと、達也は内心で再確認する。

降って湧いたチャンスに便乗する形で追上と桐原の試合を観戦をすることになったが、達也は精霊の眼を使っていなかった。使用するとあのクルーザーの時のようにぼやけてしまうのだ。故に、使わずに直接見た方が動きを確認する分には良い。

直剣は主に突きと切っ先による斬撃に、短剣は直前まで忍ばせた後に視覚外からの奇襲に使うそのスタイルは、単独戦闘を主眼に置いたものであると言えた。

孤立無援の状態になった時に、最期の最期まで抵抗するためのもの。

直剣の腹を使わないのは恐らく、そこを銃身と設定しているからだろう。

銃剣術だ。

小銃の銃身に小剣を付けて戦うソレは、二世紀前の日本軍が使っていたもの。もう片方の短剣もまた、銃剣の銃が使えなくなった時に使う物だ。

上尾葵という軍人女性と追上青が密接につながってくる。

思い出すのはあの日。マリーナに集った追上を、あの場にいる誰もが何故か「女性である」と認識していた事。追上葵が追上青であるとわかった後に遥に貰った画像データを見てみると、不思議な事に上尾葵も男性に見えた。資料上で、前知識で「女性」だと思わされていなければ、普通に男性に見えるのだ。

ただ、女性であると思いい込んでいると、「男性である可能性」から意識を「逸らされる」。達也はコレが追上の精神干渉系魔法の真髄なのではないかと睨んでいた。

「らあー！」

「エアアツ！」

桐原の模造剣が力強く振り下ろされる。

追上はしやがみつつ回転し、直剣で桐原の模造剣を絡め取るようにして跳ね上げる。

しかし、桐原は剣を離すことなくむしろ鎌のように自分の方へと引き戻した。

指側への力に思わず直剣を離す追上。桐原は冷静にそれを蹴り飛ばす。

「油断はしねえぞ……」

「……イア！」

そこから始まるのは激しい剣戟。

力強い桐原の攻撃を、追上は全て往なし、逸らし、弾いていく。

生き残るための技術。戦闘訓練だけではない経験がそこにはあった。

そして――、

「そこまで！」

「……へっ、ワケ、だな」

「……うい」

桐原の模造剣は追上の首に、追上の短剣は桐原のこめかみに、ぴつたりと添えられていた。

勝敗は、

「両者ともに危険行為で失格よ。引き分けじゃなくて、ノーゲームね」

「……えー」

「えー、じゃないの」

勝者無し。

敗者が二人という、なんとも残念な結果に終わった。

達也は追上の戦闘技術への評価し直すと、桐原の評価の底上げを行い、その場を後にするのだった。

*

「……？」

「……うい」

「……え、追上か？」

「うい」

ファッシュンヤンキーを辞めてからそういえばまだ会った事が無かったな、等と思いつつ、こちらをジロジロと見ては何やら楽しそうに笑う、ウエットスーツが最高だった

摩利先輩に溜息を吐く。

会う人会う人こんな反応で、疲れた。

増してやクラスメイトの幾人かも話しかけてくるので、結局サボることになってしまった。いや、話しかけてくるのはいいのだが、こちらに語らせないでほしい。ホント、語れないから。話を聞くのはいいのだが。

「ほー、花音や他の奴らから噂だけは聞いていたが……人はこうも変わるものなんだな……。」

それで、何が原因だ？ 小早川か？」

「いえ」

「ぶっちゃけた話、お前の更生話などはどうでもいいんだ。私が気になっている事はただ一つ。」

あの後、小早川との進展は無いのか!？」

摩利先輩は身を乗り出して聞いてくる。

ウワー、タスケレー、タツヤクーン。

うわ無視された。虎の尾は踏みたくありませんよねそーですよね。

「ああそれ、私も聞きたかったのよね。ねえ追上くん、小早川さんと……どこまで行ったの？ もうチューまででした？」

「い・い・え」

まあ待てと。

一度踊ったくらいで、しかも僕としてはなぜか見つけられたという不可解な相手（まあそのおかげで出来る事増えたのだが）と何故カップルみたいな扱いを受けなければいけないのか。

景子先輩は確かに普通に可愛いが、名前を呼べないので対象外だつて何度言つたらわかるんだ！ 言つてないがなア！

「なんだ、つまり……」

「ええ……」

まあ、そんなことだろうとは思つたが。

さて、今の会話からわかるように、今僕は風紀委員に……ではなく、生徒会室にいる。摩利先輩、真由美先輩、あーちゃん（先輩？）、りんちゃん先輩、達也君、深雪ちゃんがこの部屋にいるのだが、凄まじい女性率である。

こんなドキッ☆女だらけの生徒会室！ に僕がいる理由は……実の所、わからない。

真由美先輩に首根を掴まれて連れてこられただけなのだ。僕の意味ではない。

「さて、追上くん。今日あなたがここに呼ばれた理由は、わかっているかしら？」

「いえ」

「……即答ね。今日君を呼んだのは、先月の九校戦についての話がしたかったからよ。大会運営委員からちよつと申し立てがあつてね」

「？」

真由美先輩は少し困つたような表情で、あるものを机の上に置いた。

それはカード型のCAD。モノリス・コードで僕が使つたものだ。

「覚えがあるわよね」

「……ええ」

「モノリス・コードでは、事前に大会用CADに登録してある魔法式を運営委員がチェックして、競技用に適するかどうかを判断するんだけど……追上くんが使つたコレ、何も登録されてないのよね」

「……あー」

ああ、そう言う事か。

そうか、僕が登録しなくていいって言つたんだもんなあ。

「けど、あなたは試合中に光波振動系の魔法を使つた。殺傷ランクはCにも満たない物と判断されたからその魔法自体はいんだけど……CADに登録されていない魔法をCADを通さずに使つた、という部分が問題だね。」

大会運営委員会も今更蒸し返す気は無いみたいで、CADを他に隠し持っていた、と

いうわけでは無い事を証明する映像記録が欲しい、との事よ」

オイシャサマは僕のチート染みた力の事を二つのBS魔法だ、と言っていた。

だが、僕なりに色々調べた結果BS魔法師というのは普通の魔法を扱う事は出来ないらしいのだ。僕の場合、普通の魔法演算領域だけでなく言語中枢にまで圧迫されているこの二つの力がある以上、アイアンやエアなんかの魔法は本当は使えないはずなのだ。

しかし僕は他の魔法を使う事が出来る。

だから、僕のこれはBS魔法なのではなく単なる先天性スキルなのではないかと、最近では思いついてる。いや、ある意味後天性か。

つまり何が言いたいかというと――、

「じゃ、撮影開始するわ!」

「あい。――アイアン!」

風紀委員会本部の地下にある訓練場(?)のような場所で、特別に返してもらったアイオンでもって魔法を行使する。

いつも通りの硬化魔法。

「硬化魔法の反応を検知しました」

「じゃあ、次。そのCADを脱いで、光波振動系を使ってみて」

「うい」

カメラの画角の一部を回転させるように逸らす。

「はい、オッケーよ。……けど、本当に先天性スキルなのね。そういうのを持っている子は第一高校にも何人かいるけれど……任意で発動出来て、発生がここまで早いのはかなり珍しいと思うわ」

「だが、目を瞑っている相手には効かない、か……。この魔法は何か名前をつけているのか？」

「いえ」

「ゲー吐いても知らねえぞ平眼球共！ でいいならありますよ。」

視野交差シヤツフル、なんて名前も言えないしなあ。

「無難に『視界回し』でよろしいのではないのでしょうか。効果から見ても、先方はそれで納得するかと」

「ん、じゃあそれで！ リンちゃん、返信お願いね！」

「はい」

リンちゃん先輩が冷静に名前を決めてくれた。

視界回し。うん、じゃあ今度からソレ使うよ！

「……ふむ、少し興味があるな。追上、一瞬でいいから、私に視界回しをやってみてくれ

ないか?」

「うえ?」

「ちよつと摩利?」

「いいだろう、真由美。強制的に回される視界、というのは中々興味がある。ほら、来い」
……まあ、いいか。

別に疲れるってわけでもないし。

えいつ☆

僕のこの力を、公で使っても問題はないのだ、ということである。

*

あいいうういあ えんいおうおうあ

*

生徒会長があーちゃん先輩に決まったらしい。

生徒総会に出なかつたために「らしい」であるのだが、まあ出なくても周囲のみんなが勝手に口々に口走ってくれるので、情報を取り込むのは簡単だった。

さて、生徒総会という強制参加の会合を蹴ってサボっていた僕は、珍しくソレを名目に呼び出されて、実験棟のとある一室にいる。

「ああ、お待たせしました。……と、市原君に……ええと？」

「甘楽先生、追上君です。追上青君」

「ああ……ああ、君が。なるほど……そうか、それは……困ったな」

僕を呼び出した（強制的に連れ出した）のは市原リンちゃん先輩。もつと正確に言うのなら、呼び出したのが景子先輩で首根を掴んで引き摺ってきたのがリンちゃん先輩だ。

景子先輩は何か焦っているようで、「ごめんね？」とだけ言われてバイバイした。

そんな僕とリンちゃん先輩の前に現れたのは、中年のおじさん……もとい、甘楽先生である。今名前を知っただけで、先生にこの人がいたこと自体知らなかった。

「どうされたのですか？」

「……ううん、これは市原君に話せる内容ではありませんからね。市原君、一応……一応、彼に事情を説明してあげてくれますか？」

「……？ はい、わかりました」

甘楽先生は難しい顔で僕を見る。

そういえば先生という存在自体滅多に近づかないから、とても珍しく感じるなあ。

そんな事を考えながら呆けている僕に、リンちゃん先輩は説明を始めた。

「追上君。平河小春、という三年生を知っていますか？」

「いえ」

「でしようね。」

……平河さんは九校戦ミラージュ・バットに出場した小早川さんのエンジニアを務めていた生徒です。そして恐らくは、ですが九校戦が原因で体調を崩し、現在休養している生徒になります」

へえ。

景子先輩のエンジニアねえ……。そんな存在エンジニアが九校戦メンバーにいた事すら今知っ

た僕としては、正直興味すら持てない存在だ。

それが僕と何の関係があるのかな。

「平河さんが体調を崩している理由は心因的な物。なんでも、小早川さんのCADに自分の知らない魔法が入っていて、それが小早川さんの窮地を救ったという事実に起因しているようなのですが、詳細は平河さん本人と小早川さんしか知らず、二人ともそれを話してはくれませんでした」

「もうすぐ迫った論文コンペに平河君は参加予定だったのですが、どうもそれどころじゃない、と言われてしまいました。参加を辞退してしまったのです。そこで、小早川君にどうか説得を頼めないかとお願ひした所、その知らない魔法とやらは追上君が知っているかもしれない、と言つて来たのですよ」

「それで、あなたを呼び出したわけです。知らない誰かではなく、当校の生徒が行つた事だとわかれば、問題解決の糸口になるかもしれないと、いうよりは、もしあなたの魔法が原因であるのならば、責任を持つて平河さんを説得していただきたいのです」

「……あー……」

あちゃー。

うわ、完全に僕が原因じゃないか。

なんでそんなに落ち込むのかは僕がエンジニアつて人種じゃないからわからない。

しかし、自分が完璧に描いた絵に誰かがアレンジを加えて、そこが評価されてコンクール入賞、なんてした日にはそりやあ落ち込むよなあ、つて事くらいはわかる。多分、少しくらいは掠っているだろうこの例え。

そりやあ、うん。

完全に僕のせいだよ。結果的に景子先輩がどうなったとかじやあなくて、説明せずに隠し通した僕の責任だよ。うん。

「お願いできますか？」

「んー……うーん……」

でも、ねえ。

無理なんだよねえ……説得とか、僕が一番不得意とする所だし……。

さて、それをどう説明したものか……と、僕が悩んでいると。

「市原君。説明してもらって申し訳ないのですが、追上君に任せる事は出来ません。そして、ここからの事は君に聞かせるわけにはいきませんから、席を外してくれますか。えーと、確か司波君でしたか？ 彼を呼び出しておいってください」

「どういう……、いえ、わかりました」

相手の意思なんか聞いていないという口調で話す甘楽先生。その態度に、一度は聞き返しかけたリンちゃん先輩は頷き、こちらへ一度会釈をして部屋を出ていった。

扉が閉まる。

ふう、とため息をつく甘楽先生。

「……盗聴の心配も無し、と。」

ああ、楽にしてくれていいですよ、追上君。いや、まさか君だったとは思いませんでした。大丈夫、君の障害の事は聞いていますから、君に説得なんて無謀な事を押し付ける事はありませんよ」

「え……あ、ああ。うい」

素で驚いてしまった。

ああ、そうだった。学校にはちゃんと伝わっているんだった。全く接触してこないから完全に忘れていた。遙ちゃんも知らなかったし。

「老師からの直々の推薦と忠告……いやはや、本当に今年の一年生は粒揃いですね」

「おうい？ろうし？」

「……今のは『老師？』かな。なるほど、確かに話には聞いていましたが……中々、大変そうな症状だ。く……いえ、Ninesと名乗っていらっしやる医師の事です」

「ああ、オイヤアアああ、オイシャサマ」

学校へ症状を伝えてくれたのもオイシャサマだったし、学校関係者なのだろうか。

参ったな……じゃあ、僕の不良行為はオイシャサマの面汚しになるのか。知らなかつ

た。

これからはもつとまじめにやろう。

「一応聞いておきますが……小早川君の窮地を救った、という魔法を使ったのは、追上君で間違いないですか？」

「あいはい」

「ええ、それを聞く事が出来れば十分です。君のその先天性スキルには興味も惹かれませんが、今は良しとしておきましょう。私の得意魔法とも掠る部分がありますから、いつか魔法大学へ来た時は是非とも私の元に来てほしいのですけどね」

甘楽先生は芝居がかった口調で言う。ウインクもしてきた。

中年のおっさんにされてもなあ……。女性？ 女性ならウエルカム！

「君の言葉を翻訳する装置を作れるかもしれませんよ？」

「えい是非」

「……今のは『是非』、かな？ うん、正解という顔ですね。なるほど、老師は軍に欲しがっていたようですが……君の進路は、君が決めるものですから」

……中年のおっさんでも、まあ、かつこいいのだが。

あー、というか、第一高校に来てから初めて「先生」という人種に触れた気がする！
僕の記憶にある高校の先生……あつ、前はそもそも高校じゃなかったような……けほ

ん。

「さて、話が長くなってしまいましたね。呼び出しておいてすみませんが、今回の件で君にできる事は恐らくありません。本当は君だと分かった時点で帰しても良かったのですが、それだと市原君が納得しませんからね」

「あー、あいあいあー、確かに」

「……はいはい、かな？」

違うが、まあいい。

翻訳機欲しいなあ、なんて思いは強くなる一方だが、軍には入りたくない。

大学、どうにかして頑張れないものかなあ。

甘楽こ先生人に推薦貰うとか。

……無理だろうなあ。

そんな感じで、僕は下がった。

*

言うまでも無い事なのだが、魔法の正当な理由の無い私的利用は犯罪である。拳銃の
ようなもので、バレたらお縄である。

それでも僕がアイオンでビュンビュン飛び回っているのは単にバレないように細工しているからで、今日はそれが役に立った、と言えるだろう。

「!？」

ソイツは、高いビルの上に寝そべっていた。

驚いた事だろう。いきなりソイツが一発撃ち終えたモノの上に、男が立っていたのだから。

「おんいいあ、えんあいあんおうあい？ こんにちは、天体観測かい？」

「……You are wrong, Japanese. Correctly it is "The Only Neat Thing to Do".間違えてい
るぞ、ジャパニーズが。正しくは「The Only Neat Thing to
Do」だ」

……？

何が？

え、「たった一つの冴えたやり方」を知っているって、この男何歳だ？ というか、なんで今それ？

「I have heard of you. Don't you stop interfering with our work? 貴様の事は聞いている。俺達

の仕事の邪魔をしないで貰おうか？」

「Work」
ウオーク

仕事。

仕事、ねえ。

僕が乗っているコレ、空じゃあなくて地を向いているのだが。

さてはて、これでやる仕事とは何か。

コレの先から出ている軌道が向いているのは、なんなのか。

「If you do not retreat, we will kill you, too. 退かないのなら、お前も殺すぞ」

「ウアーオ」

怖い事言うなあ。

って、うわ。拳銃取り出してるし……というか、僕の事は聞いてるって、どういうこと？ 何、僕有名なの？ もしかしてアレかな、有明の一件のメインブラックがかなーりヤバイヤーツだった？

いやいや、顔は隠していたし、今金髪ヤンキーじゃないのだが……。

「Darn, The target realized here !! クソ、ターゲットに気取られたか！」

——瞬間、ナニカが来た。

ナニカ——そう、ナニカとしか表現のしようがないソレは、どこかあのクルーザー上で感じていたソレと似ていて。

僕はその悪寒に、咄嗟にそれを逸らした。

それその物に軌道はなかつたので、視線を無理矢理逸らしたのだ。

世界情報から情報体を覗く視線を。

直後、ソイツの横にあつた装備一式が消える。

忽然と、世界から揺らぐように。

「What happened!?!なんだ!?!」

「Arrrrrrrr!動くな!」

視線はまだこちらを——コイツを探している。

正直な所街中をソレ——ライフルで狙っているような奴を助ける義理は無いのだが、目の前で不可解な現象に殺される人間を見逃すほど僕は人間をやめていない。何より僕の寝覚めが悪いし、この視線はクルーザーの時も僕を狙っていたのだから、もしかしたら僕と接触した事でコイツが狙われているのかもしれないのだ。

どこの誰かは知らないが、僕のせいで命を狙われるのだとしたら、その命を守る責任は僕にあるだろう。

「Why are you protecting me!? 何故俺を守る!」

「あいおんおういあおうあ! なに、その次は僕だ!」

この視線の持ち主の狙いが僕であるのなら、コイツを消した後に僕も狙うだろう。

つまり、どちらにせよココでこの視線を撃退しなければ、僕もコイツも消されてしまうということ。

「I only know that. ……それしか知らないからな、か……」

「ああ!」

視線と揺らぎの頻度は凄まじく高くなっていて、後ろで小さな声で呟かれても聞き取れない。視線と揺らぎのタイムラグはほとんど無いも等しいので、集中しなければ消されてしまうのだ。

……自分で言っていてなんだが、消されるって……怖すぎるだろう。

「A pickup car will come soon. Can you protect it? もうすぐ迎えの車が来る。お前はそれも守る事は出来るか?」

「Yeah!」

と、ソイツの言う通り、高層ビルの下に一台の乗用車が来た。

相手も気付いたのだろう、そちらへも視線が向かうが、それも逸らす。下は町中だ、変な所へ逸らすわけにはいかないが……。

「I will definitely return this gratitude!
e! この恩は必ず返すぞ!」

そう言つて、ソイツは高層ビルから飛び降りた。

身軽に壁を伝い、勢いを殺しながら下りて行く。忍者かな??

しかしアイデアから直接覗かれているのだから、距離を稼いだ所で意味は無いだろう。どこまで捕捉できるのかは謎だが、クルーザーに乗っている間かなりの距離を追跡してきたことを考えても10kmや20kmではないだろう。

しかたない。

それがどこに繋がっているかは見えないが、先程のアイツが狙っていた軌道は覚えてる。アイツは「気付かれた」と言っていたし、アイツが狙っていたのはこの視線の持ち主なのだろう。

ならば、こちらからも打つて出る事にしようか。

小石を拾い、軌道に乗せる。

自分から逸らす事、車から逸らす事、そして小石を真つ直ぐ飛ばす事。

僕の処理能力はそこまで高いとは言えない。処理速度は確かに早いかもしれないが、容量的にはそこまででもないのだ。その脳が、オーバーヒートでもするかのようになつていく。

だが、なんだろうね。

己の性能限界を知る事は——快い。

まだまだ、先があるように感じられる。

思い出すのは、スピード・シユーツ・テイング。

いや、もつと昔かな。

あの、高速の、鉄の鳥を——。

「A^エi^アr」

左の女性をモチーフにしたアイオーンで小石にエアをかけながら蹴り飛ばす。

調整された小石の軌道は真つ直ぐに、落ちる事無く目標にまで飛んでいき——消し飛

ばされた。

反応速いなあ……。

だが、今のシヨットを機に車への視線が止んだ。もしかしたら、アイツがまだここに
いると勘違いしたのかもしれない。

だというのなら、あとは僕が逃げ遂せれば万事解決だろう。

逸らす範囲を広げていく。

僕を囲う球体から、視線を包む細長い楕円形に。

視線は楕円の中で逸らされ続け、やがては——己を見る。

これを普通の視線外しで行うと、目の前に自分が見える事に成るのだが、さてはて世界情報や情報から見るとどう見えるのか、皆目見当もつかないな。

僕に視線が集中しているからこそできる事で、先程のように逸らす対象がいくつもあると使えない。いや、出来るのだろうが僕の脳の処理が追いつかないのだ。

デイスコホールのライトアップを両手に持った鏡でミラーボールに同時に返す、みたいな……うん、分かり難い例えでごめんね。

とにかく、これで大丈夫だろう。

今は、だが。

これからは競争になる。

僕が視線に気づく方が早いか。

視線の持ち主が僕を消す方が早いか、だ。

……恐ろし過ぎない？

僕が何をしたって言うんだ……。

*

あいいいうういあ ああいいんあおおうえい

*

「あの……青さん、なんだか視線を感じませんか？」

昼休み。弱めの視線逸らし（良く使うソレのように思いっきり曲げなければ軽い認識障害になる）を纏って眠ろうとしていたところ、こそそと美月ちゃんが話しかけてきた。

別荘の一件以来美月ちゃんは僕を「青さん」と呼ぶ様になったのだが、その理由は聞けていない。特に聞く気もないし、多分大した意味は無いのだろう。まさか僕の中身がわかっているとかいうわけでもあるまいし。

さて、そんな美月ちゃんが持ちかけてきた話題は、僕にとっては日常茶飯事過ぎるソレ。視線が可視状態にある僕にとって、視線を感じない日は無いのだが……。

「いおいあうい？ 気持ち悪い？」

他の人に聞かれないよう細心の注意を払いながら聞く。美月ちゃんは一瞬静止した後、コクンと頷いた。なるほどね。

これほど豊満な果実を持つ美月ちゃんの事だ。

ストーカーの一人や二人、いや三十人くらいはいてもおかしくは無いだろう。

「いとおおあつええちよつと待ってて」

自身への視線外しを切つて、その視線とやらを探查する。

正直に言えばこういう細かい仕事は苦手だ。例の視線のような余りにも異質なものだとか、対面している時のように発信元が見えている時ならまだしも、数多の視線が行き交う場所であつた一つの視線を見つける、というのは中々に面倒くさい。まあ面倒くさいだけで困難ではないのだが。

視覚情報をカットするために目を瞑り、生徒の視線に色を付けて分類していく。無論教室内に行き交う線は視線だけではないのだが、視線は放射状というわかりやすいカタチがあるので他の物を分類する必要はないのだ。

そうして、上空と……これまた後方上空に、プシオンの塊のようなものから放たれる広範囲の視線を見つけた。

これ、九校戦で小早川先輩のCADに入っていた奴と似てるなあ。

「青さん、どうです、」

「よ、青。どこに行つてんだと思つたら、珍しく教室にいたのか。で、なに話してたんだ？」

「美月、ダメよ？　いくら真面目っぽい外見になったからって、ソイツがやってきた不良行為が無くなったわけじゃないんだから……」

「あ、いえ、その……視線を感じたもので」

見つけた事を美月ちゃんに告げようとした矢先、レオ君とエリカちゃんが話しかけてきた。まあ視線外しを切ったのだから当たり前である。ちなみにレオ君の「珍しく教室にいた」というのは、毎日のように視線外しを使っているがための勘違いだ。昼休みはいつも教室で寝ているからね、僕。

さて、美月ちゃんそのその発言に当然のように色めき立つ二人。僕と同じように美月ちゃんを一度見てから領き、ストーカーね？　ストーカーだな？　と手のひらに拳を当てた。

何も言わないが奥の幹比古君も似たような顔をしている。

「い、いえ……私個人を狙っているというよりは、もっと大きな網を待ち構えている、というような感じで……」

確かにこの視線、誰かひとりを絞って監視する、というには視野角が広すぎる。ストッキングミッションには向かないだろう。

「美月、その話をもう少し詳しく聴かせてくれないか」

「柴田さん、その感覚は多分間違いないと思うよ」

と、そこへ。

論文コンペの話に駆り出されていたらしい達也君と、出るか出まいかを迷っていた幹比古君が介入してくる。珍しく僕に強い目を向けていない達也君。

幹比古君は彼の使う魔法とは違う体系のソレが放たれていると説明し始めた。式、つていうと一気にオカルト臭くなってしまうが、古式魔法ではそれが普通らしいからびつくりだ。ということは、小早川先輩のCADにいたプシオンの塊も式だったのかな。

あれ、それって誰かが意図的に九校戦……それも第一高校を妨害しようとしていた、つて事なんじゃあ。

……もし、摩利先輩の一件も同じだとしたら、許せないなあ。摩利先輩は三年生最後の九校戦だったっていうのに。

「それで今、追上君にも相談して……」
「ん？　なんでそこで追上が出てくるんだ？」

あ、呼び方が追上君に戻っている、なんてことを指摘する前に、美月ちゃんが爆弾をぶっ込んでくれた。生徒会にも認められた先天性スキルだから別にバレても問題は無いのだが、僕にはその説明能力が無い。

だが、無視すると言うのもなんだし、かといって僕以外に説明してもらおうのはそれまたおかしな話になる。

そんな躊躇の最中、僕を助けてくれたのはなんとエリカちゃんだった。

「イテツ!？」

「他の魔法師の隠している魔法を詮索しない! マナーよ!」

弁慶の泣き所への凄まじい蹴りと共に。

一応、エリカちゃんへ会釈をしておく。

「追上。どこだ?」

「ん」

人差し指をピンと立てて、霊子の居た場所を指し示す。方角は言えないが、指で指す事は出来るのだ。まあ、「東を示せ」や「西はどちらだ」という質問の場合はなぜか伝わらなくなるのだが。今回は方角を聞かれたわけではないので、恐らくしつかり伝わっているだろう。

「見つけたのかい? ……本当だ、その辺りから……捉えづらいけど、いるね」

「幹比古。さっきも言っていたが、捉えづらいというのは……お前の使う神道系とは違った術式ということか? それとも、この国の古式魔法の術式とは異なると言う事なのか?」

その言葉に、一瞬にして緊張が高まる。

あー。なるほど。

スパイか。確かにここ、機密文献だらけっていうし。

「我が国の術式じゃない……と、思う」

「そうか。追上。知っていたか？」

「ん、いいあん、いいや」

わかつたか？ ではなく知っていたか？ というのは含みがあるように感じられたが、達也君はそれ以上を聞くつもりはないようだった。

そこで昼休みは終わってしまい、僕は例の視線を逃さないように気を付けながら、午後の授業を珍しく真面目に受けたのだった。

*

九人という大所帯で校門を出る。内訳は達也君と深雪ちゃん、ほのかちゃんに雫ちゃん、レオ君とエリカちゃんに、美月ちゃんと幹比古君。プラス僕。あれっ、僕の余り物感が凄い。

道中エリカちゃんの放った「錬金術師」という言葉に両の掌をパンツと合わせたが、誰もわかつてはくれなかった。まあ一世紀前の作品だしね……というか、こっちにあるかすらわからないし。

祈る神はいないし、神という言葉自体嫌いな僕にとつて縁遠いこのポーズ。でもアレはかつこいい。実写版を見に行けなかったのが悔やまれる……！ なんでもう一年早くやらなかったんだ！

あ、そう考えると追上つて苗字はなんとも皮肉が聞いているね。
読み方を変えればオイガミつて……。

「ちよつと寄つて行かないか？」

そんな中、達也君が喫茶店「アイネブリーゼ」の前でみんなに呼びかけた。流石にコレの意図くらいは僕でも気付く。というより、視線でバレバレですよその人。

とはいえ、ほのかちゃんや雫ちゃん、美月ちゃんといった非戦闘員を荒事に巻き込むわけにはいかない。これは達也君が引き受けてくれる、という事でいいのかな。

エリカちゃんとレオ君、幹比古君までもがやる気の様子だが、まあ物騒も物騒な話。もつともの話をすれば、僕らを尾けてきた、というその一点の事実がまず物騒なのだが。喫茶店へと入り、適当な理由をつけて店を出ていく二人。む、しまった。適当な理由は思いついても口に出せない。

「お前が出る程か？」

「あー……おう」

「そうか」

短く、それだけ。

手を軽く上げて、その場を後にする。

*

「グホッ！」

うん、まあ。

着いた時には、男がレオ君の足蹴にされて倒れていた。

常々思っていた事ではあるが、魔法科高校は戦術科高校辺りに名前を改めた方がいいのではないかと思う。

「よ、遅かったな。もう終わってるぜ」

「……………ここに来れたワケについて聞きたい所だけ……………まずはコイツが先よね」

ああ、なんかこの辺僕の視線外しに似た膜があったね。もしかしてこの場にはない幹比古君の魔法だったのかな？　もしかして壊れちゃったのだろうか。それは申し訳の無い事をした。まあ電子機器やら検知器、その他人払いも兼ねた視線外しを周囲一帯に行っているので大丈夫だろう。

エリカちゃんとレオ君は尋問気味に男に問いかけをしていくが、これと言ってしつか

りとした情報は得られない。まあ、そう簡単に言うのであればあんなに近づいて尾行をしたりしないだろうし。

「私はスパイではなくそれを阻止する立場にある。私は君達の敵ではないし、私と君達の間に関害の対立は無い」

そう言いながら立ち上がる男は、大げさに埃を払う動作をする。

エリカちゃんとレオ君の間に入る。ズボンの裾先に膨らみが見えた。というか、裾先から伸びる軌道が見えていた。

「……なんのつもりよ」

「……どうやら、お友達の方は多少の危険察知能力があるようだ。前に出てきたところで何が出来るとも思えないが……」

「っ!? てめえっ!」

案の定、男の手には小型の拳銃……デリンジャーだろうか、それが収まっていた。

暴発させるのも手だが、さてはて。

……いや、そう。

近づけばいいんだ。

「なに……? これは玩具ではないのはわかっているだろう?」

「おう」

こういう時はパツキンヤンキーの方が良かったと思う。ニヤニヤ笑う威嚇は相手を焦らせるから。今の僕は真面目フアツション過ぎて、演技である事が丸わかりになってしまう。

だから無表情で、何も気にしていないと言う風に……ゆつくり、歩を進める。

目は開いたまま。男をまつすぐに見据えて。

「止まれ。それ以上近付くと、本当に撃つぞ？」

「いい」

そう言つて、一步踏み出す。

男の人差し指に力が入ると同時、銃口へ掌底を叩き付けながらチート染みた力を使う。

銃身内で弾丸があらぬ方向へと曲がり、暴発が起きた。

「グッ!？」

爆発は男が隠し持っていたらしい煙幕入りの缶を破裂させたらしく、ジャケットの内側から濃密な煙が当たりにはら撒かれた。これを好機とみたのか、男は手の火傷を全く気にしていない素振りで駆けだした。

レオ君とエリカちゃんは咄嗟に口を塞ぐ。

僕は今の今まで視線外しで見せないようにしていたアイオーンで以て、男を追跡す

る。

気絶させるのはいいとして……普通に交番に突き出せばいいかなあ。

*

「……まさか、監視システムの目すら欺くなんて……」

街路カメラに付属している監視システムは、それがたとえSB魔法であろうとも記録する。「誰が魔法を使ったのか」は判別しづらくなるが、「魔法が使われた痕跡」はしっかり記録してしまうのだ。

本来は。

「吉田家の神童、吉田幹比古君か……。果たしてここまでの技術……。ううん、術式を本当に彼一人がやったのか、あるいは……」

街中での魔法使用の痕跡のみみ消しという任務に急遽駆り出された藤林。

途中までは痕跡がしっかりあったのだが、数分が過ぎたあたりから一切の痕跡が消えうせた。まるで、監視システムが一齐に目を背けたかのように。

それに、と藤林は思い出す。

藤林は、今の今まで「監視システムの目を欺いている」という事実を焦点を当てる事

が出来ずにいた。もみ消しの任務で来たはずなのに、直前の数分のもみ消し作業の後に突然思い至ったその事実を調べてみた所、綺麗に記録が残っていない。

考えすらも逸らされた。意図的に「監視システムの目は生きている」と勘違いさせられていた。そんな印象すら抱く先程までの自分の思考に、うすら寒い物を覚えた。

これがもし、吉田幹比古のものではなく、非合法工作員や敵国の魔法だったら――。同時に思い直す。

もしそんなものを使える魔法師をこんな所に配備できる敵国が存在するのなら、とつくのとうに日本は陥落しているだろうと。

そう、思う事にした。

*

競走馬もびつくりな速度で疾走する男を追いかけ、一駅分ほどの距離を行つた辺りで、男は止まった。路地裏。

諦めたのか。いや……。

「……君。悪いことは言わない。早く逃げるんだ。この腕では、君を守り切れる自信は無い」

振り向くことなく男が言う。

「気配」というものは僕にはよくわからないが、男はそれを探っているようだった。その言葉を鵜呑みにできるはずもない。

無視して、男に近づこうとして……。

「ツ!?!」

いつのまにか男の正面に立っていたソイツに気が付いた。

いつのまにか。視線を見る事が出来る僕にとって、神よりも縁遠い言葉。

なんだ、こいつ。

The man eating tiger
「人 喰 い 虎 —— 呂ウカンフウ」

男がソイツを見て、言う。

リユーカンフー……。容姿的にアジア人。竜功夫？

クンフーが足りてそう。

「逃げッ」

男がその言葉を発した瞬間、リユーカンフーは動いていた。

明らかにヤバイ物を感じて、咄嗟に軌道を捻じ曲げる。スパイの目がどうのこうのと
言っついてられる相手じゃあない!

斜め右上へと捻じ曲げられたリユーカンフーの身体は、路地の壁へとぶち当たる。お

「おい、人間が出して良い音じゃないよ、それ……。」

「なツ……!!?」

「Get away!逃げろ!」

守り切れる自信なんか、僕の方が無い!

アイオーンしかないのは非常に不味い。明らかな接近戦タイプを相手に、足の先でしか攻撃できないなんて恐ろしい以外の何物でもない!

「馬鹿を言うな、私は」

「Iron!」

「ギイイイーン!」と、使用用途上とてつもなく頑丈に作られているアイオーン（しかも硬化魔法をかけてある）とリューカンフーの身体がぶつかり、まるで金属同士の衝突音のようなものが響き渡る。

一瞬の硬直を利用してリューカンフーの視界に対し、リンちゃん先輩命名視界回しを掛けて、離脱する。蹴り飛ばさそうと思ったが、重すぎて無理だった。僕のチート染み力は最初のベクトルが0だとどうしようもないのだ。どこぞの何でも反射できる人とは違う。

リューカンフーは目を覆い、大きく仰け反った。が、すぐに対処法——目を瞑って突進してきたではないか。まさか「気配」とやらを読んでいる、というのか。魔法なんか

よりそれが一番オカルトだってば！

「ッ！ うお！クソ！」

しかもコイツ、僕よりも先に男の方を殺そうとしている。面倒な、早く逃げてくれ！
こんな化け物相手に集中切れるような荷物を抱えていたくない！

「おあああ！」

視線外しと視界回しが通用しなくなったので、もう構うモノかとリューカンフーの拳
自体の軌道操作を行う。明らかに不自然な軌道を描いて男に向かっていた拳はリユー
カンフーの顎へと突き刺さった。

流石に厄介と感じたのか、リューカンフーは僕の方へ突進してきた。脳震盪くらい起

こせよ！

「Iron、ッ!?」
アイアン

右足全体に痛み。

リューカンフーは僕のアイオーンに向かって思いつきりタツクルをかましたのだ。
先程は軌道操作による賜物で受け止めたが、今は完全にアイアンに頼り切りだった。レ
才君の全身装甲と違い、僕のアイアンはあくまでアイオーンを硬化させる魔法。足首か
ら上は対象範囲外だ。せめて左足なら、と思ったが、それだとアイオーンが壊されてし
まう。

「このッー！」

発砲音。

先程のデリンジャーではない、見た事の無い形の拳銃を持った男。

だが、リユーカンファーは首を少し捻るだけでそれを躲していた。いやいや。

「エアアアアッー！」

折れたと思ったが、アイアンで大分吸収されたらしい衝撃は、膝の脱臼だけで済んだ。

無論それにしたって重傷なのだが、折れていなければまだ使える。痛みは問題ない。

それより痛いのは経験済みだから。

軸足を回転させ、ぶらんとした右足をブラックジャックの如くりユーカンファーにぶち

当てる。あ、だめだ。全然効いてない。

「ウツ!?!」

腹を掴まれた。

リユーカンファーの指が腹肉に入り込もうとする。咄嗟に惑星自転を使った軌道逸らして、リユーカンファーの身体を吹っ飛ばした。危うく裏面ケンシロウに成るところだった。

軌道を逸らし続ける事で、路地の壁にリユーカンファーの身体をめり込ませていく。

どこかもしれないこの家の持ち主さん本当にごめんなさい。

壁の耐久度を鑑みるに、良くて数分、悪くて今すぐにも抜け出されるだろう。

逃げるが勝ちだ。男を見遣る。

「……助かった。礼だけは、言っておく」

「おう」

その言葉だけで、二人同時に一目散に逃げ出した。

先程の男の話やリユーカーンフーが狙って来たことを考えるに、この男は直接的に敵対するわけではないのだろう。僕のチート染みた能力がバレたのは痛い、背に腹は代えられない。実際腹を負傷しているわけ。

念のため僕に視線外しの応用、姿晦ましを使ってようやく、命から逃げて遂げたのだった。男の方は……わからない。逃げ切れたと思う方が、後味はいいのだが。

*

とりあえず、足と腹、あといつの間にか切れていた顔の負傷が不味い。足と腹はまあいい。隠せばなんとかなる。だが、顔は不味い。何が不味いつて、僕は妹と同部屋なのだ。怪我をしたら、隠しようがない。

恐る恐る家に帰って、いつもなら「ああああー」を言う所カットでソローつと部屋に

入ろうとして、

「おかえ……青兄。どうしたの、その怪我……」

丁度ドアを開けて出てきた妹にばったり見つかつた。

引き摺つていた足も丸見えである。

「え、えんあいえ……け、ケンカして……」

「お母さん!! 青兄が大変だから、救急車!」

「……Oh」

搬送された病院で腹の怪我もバレ、意思疎通は妹がずっと傍にいてくれたので問題なかつたものの、僕は次の日学校を休む事になつたのだつた。

*

あいいううあんあ おんあおいーおあおいーお!

*

学校に隣接する丘を改造して作られた野外演習場。その人工森林の中を、模擬ナイフと模擬長刀を両手に疾走する影が一つ。

僕だ。

「イッー」

「む」

完全に視野角外から接近したはずの一撃は、突如出現した透明の壁に阻まれる。驚く意味なんてない。もう何十回も繰り返し返した事。よって、すぐに離脱する。こういう時高身長は不便だ。昔の様な、低い身長があればもつと違ったのだろうが。

直後、先程僕が攻撃した相手——十文字克人先輩の足元が崩れ落ちる。

小石を拾い、克人先輩の目へと向かってソレを投擲。避けられた。逃走。

なるほど、九校戦の時は「相性がいい」なんて思ったが……真逆も真逆。相性は最悪だ。座標指定で出てくる防壁。攻撃にも転用可能なんて、チートだよチート。

森の中を駆けずりまわりながら、心の中で悪態を吐いた。

*

怪我が完治したわけではないが、退院の許可を貰ったその次の日の話だ。克人先輩から、練習相手の話が来たのは。

論文コンペの警備に駆り出されるらしい克人先輩は、多対一の訓練相手を求めているらしく、僕や幹比古君といった二科生にも練習相手の話が来た。

妹に話せば絶対に大目玉を食らうのだろうが、僕にとつてはいい機会だと、絶対安静だとか言われた腹の傷を隠して参加の意を示したのが数時間前。

前回の敗北で痛感した格闘技術の再習得のため、僕は今アイオーンを使わずに模擬刀二本だけで戦闘を行っている。ある程度の所まではこれで行くつもりだ。

僕の本来のスタイルは銃剣術を基礎とした長刀術と短剣術の二つ。アイオーンによる蹴撃は、あくまでチート染みた力が万全に振るえる状況下でのみの戦闘スタイルだ。

たとえ16年程度のブランクがあつたとしても、染み付いた動きは覚えている。

そこに、克人先輩という本気で打ち込んで倒れない相手が自分から来てくれたのだ。しかも模擬戦という、死傷リスクの少ない機会を引っ提げて。

これは乗るしかないだろう。

「オオアッ!」

「……………」

リューカンフーを真似て、防壁に止められた長刀をそのままに、引き絞った身体で短刀による突きを行う。防がれる。いや、圧されている!

「どうした、魔法は使わないのか」

「ッ! Air!」

当分はこれだけで行こうと言ったね! あれは嘘だ!

口ではAir^{エア}と言いながら、実際はチート染みた力で長刀に触れている克人先輩の防壁を動かす。

「何?」

克人先輩の防壁は、実際には「ただの壁」を造り出す魔法とはワケが違う。

何重もの紙を絶え間なく組み合わせを変えながら重なり合わせ、その紙に対応した魔法でないと通さない「面」を造り出す魔法。しかも対応する魔法は変わり続ける。例えば最初の一枚を突破したとしても、次から次へと枚数は増え、変化し、故に阻まれる。

そんな面倒くさい魔法の上に、克人先輩の凄まじいまでの干渉力があって、初めて「防御不能」の壁となるのだ。

とはいえ、三次元的であれ四次元的であれ「輪郭」があつて「軌道」があるのなら、僕のチート染みた力の効果範囲内だ。

軌道が見えるのなら、操る事が出来る。

それがどういう作用を齎しているのかは、正直わからない。克人先輩の驚き様から察するに、有り得ない事なのかもしれない。

だが、起こせているのだから、何か原理はあるのだろう。

それを深く追求する気は、今の僕にはない。

「オオオオオ!!」

「クッ……」

短刀による再度の刺突。それを避けようとするも、克人先輩の足にはいつのまにか草が絡み付いていた。さらに、地割れが起こる。ぜったいれいどに並ぶいちげきひつさつ!

地割れと僕の刺突。これは一撃入ったか——と、思った次瞬間。

「ウツ……う？」

ガク、と崩れ落ちる。

あ、膝が。不味いな、外れ癖が付いちやったかもしれない。

しかも、喉に鉄分の味が……。

*

「はあ。全く……絶対安静って、私言ったよね、青兄」

「……うん」

「全く……まあ、学校の授業だったなら、仕方ないとは思うけど……いいえ、は言えるんだから、ちゃんと断らないと」

「……うん」

「流石に病院を抜け出すことはしないだろうから、今日は帰るけど……いい？ ゼツタイ安静、だからね？ ゼツタイ、だよ？」

「……あいはい」

そんな感じで、再入院である。いやはや、全く。

情けないなあ、本当。

「……えおでも」

ちよつとは、掴めたような気がする。

次は負けないぞ、と拳を握りしめ——うすら寒いあの視線がこの部屋を向いている事を感じて、ナースコールを押そうとして踏み止まる。アイツ相手にナースの一人、何が

出来るというのか。

そうしているうちに、扉が蹴破られた。最初から正規の方法で開けるつもりなどなかったのだろうその蹴りは、僕にとっては好都合。

克人先輩の防壁を真似て、扉ごと奴を吹き飛ばす。

「何者だ!？」

外で若い男性の声がある。まずい、病院の職員だろうか、リューカンフー相手に一秒持つとも思えない。

次は負けない、とか思ったが、この状態で勝つのはどう考えても無理だ。得物もないし、アイオンすらない。絶望的——、

「幻刀鬼——千葉修次」
フアドオクアイ ナオツク

と、吹き飛ばしたりリューカンフーのそんな呟きが聞こえた。

千葉? 千葉って、エリカちゃんの苗字?

そして、扉が吹き飛んだ廊下——吹き抜けになつていたのでシャンデリアが綺麗——の左から右へ、イケメンが黒い刀のようなものを構えて飛びかかつて行つた。今直感的に「黒」と表現したが、実際は見えていないナニカだ。外側に、僕の視線さえも弾く何かが発生していた。

そこから繰り広げられる、化け物同士の戦闘。

リューカンフーは分かっていた通りだが、イケメンこと修次さんも化け物だ。僕のよ
うに軌道が見えているわけでもないだろうに、リューカンフーの全ての攻撃を避けきつ
ている。リューカンフーもリューカンフーで、見えない刀を避け続ける。

数瞬という僅かな間に攻防を繰り広げたのち、修次さんはリューカンフーの打ち込み
を手刀で逸らし、その腹に見えない刀を突き入れたではないか。

だが、リューカンフーも身体を捻る事で内臓の損傷を避け、倒立。さらには修次さん
に踵落としを落とす。

喰らえ!

「!?」

ボキツという音が響く。凄まじい勢いで振り下ろされた踵落としの軌道を変えて、も
う片方の足へ直撃させたのだ。

今です!

隙を逃さず、修次さんの見えない刀がリューカンフーを襲う。しかし、今度は大仰に
避けられた。リューカンフーはそのまま階下へと身を投げ、ガラスを割って逃走したよ
うだった。

「シュー!」

そして始まる、摩利先輩と修次さんのラブラブ風景。

僕が見てるって気付いていないらしい。デバガメ精神を遺憾なく發揮して、始終を見させてもらう事にした。キス……はしないかあ。残念。

ちなみに、僕が凝視していた事に気付いた摩利先輩は、顔を赤くしながら怒ってくる姿が何とも可愛らしかったです。

*

「ええ、顔と足はもう大丈夫ね。お腹の傷も、ほとんど塞がっているわ。とはいえ……」
「ういあえんいん、えうえ無理は厳禁、ですね」

「わかっているならよろしい」

登校してすぐに保健室へと向かった僕は、安宿先生のもとで診断を受けていた。

幸い膝の脱臼は癖になることもなかったし、顔の傷も瘡蓋は残れども深くはなかったようだ。

腹筋は未だにジクジクと痛むのだが、内臓が傷ついていないだけマシである。

「……それと」

「あいはい」

「君の頭……ああいえ、その症状の事じゃなくて。君の頭の中にある“それ”……自分

で気付いているの?」

「……………」

なんでも、安宿先生は身体の異常を生体放射として視覚的に捉える事が出来るらしい。

それは僕のチート染みた力における視覚的部分に良く似ていて、相手を見ただけで「わかる」のは当たり前なのだそうなの。

そして、そんな安宿先生の言う、僕の頭の中、

「ええ………いういえいあうおええ………気付いていますよ」

「それなら、いいんだけど」

普通の病院で検査を受けた時にはこの脳は正常だった。

オイシャサマの検査では微量の霊子が検出された。

そして僕は、昔をしっかりと覚えてる。

「えあでは」

保健室を出る。

そう、わかっているから。

*

「青……その、傷は大丈夫なのかい？」

「ん？ ああ。おう」

克人先輩との訓練時に共に戦っていた幹比古君が氣遣うような口調と態度で話しかけてきた。

最初から勝てるとは思っていなかったが、僕の搬送後に再開された訓練試合において幹比古君は一人で善戦したらしい。摩利先輩が褒めていた。

幹比古君は魔法師らしくない、どちらかといえば魔法使いらしい魔法を使う。

そんな後衛一辺倒な幹比古君が、僕のような遊撃手や他のアタッカー無しであるの克人先輩に善戦したというのだから、その実力は推して知るべしだろう。なんでこんな子が二科生なんだ。

というより、レオ君といいエリカちゃんといい達也君といい、二科生ってなんだっけ……？ と深く考え込まざるを得ないような人材が溢れかえっているのがこのE組である。

「十文字先輩が青の事を褒めていたよ。軍人のような手堅い動きかと思えばトリッキーな戦法も取る、複数人を相手しているかのようだった、って」

「うああおわああ」

克人先輩怖っ!

だいたいあつてる。

「それと、君の使った移動魔法についても都合が悪くなければ二、三聞きたい事がある、つてき。論文コンペ前に聞いておきたいとのことだったけど……」

「ういうい」

「うん、じゃあちゃんと伝えたからね」

恐らくはその伝言の方が用件だったのだろう。

幹比古君はそういつて、自分の席へ戻って行つた。

都合が悪くなければ、ということなので。

都合悪いから行かなくていいよね。

*

あいいいいううおんあ　　おーう・えんい・いうーお

*

「よ、青。お前、明日って暇か？」

「え。……あー、おう」

「じゃあよ、達也のコンペって奴を見に行こうぜ。どうせお前、怪我で遊びにも行けないだろ？」

「ん、ou^うi^い」

——というような会話が、今日の朝行われた。

なんでも明日、達也君が抜擢された論文コンペなるものが開催されるらしいのだ。もつと言うならば、そもそもあの克人先輩との訓練はこのコンペの警備のためのものだったらしい。

さらに詳しく話を聞けば、レオ君とエリカちゃんはこのコンペの見張り番——コンペにて発表する機器が例年狙われているため——になろうと画策しているようだ。まあその辺りに関して、僕は何も口を出せない。文字通り口に出せないのもあるのだが、妹

をこれ以上心配させるわけにはいかないのだ。

この身体をあんまり傷付けられるのも、本意ではないしね。

一限目が終わり（と言つてもほぼ自習なのだが）、エリカちゃんがまず達也君にアタックを開始した。明らかに余所余所しく、明日のコンペの開幕時間などを訊ねるエリカちゃん。

八時に現地集合、九時に開幕。第一高校の出番は午後三時から。

どうしてそんなことを訊ねるのかと達也君に問われたエリカちゃんは、たじたじとしどろもどろになる。助け船を出したのはレオ君だった。助け舟というよりは、モーターボートで直球に無理矢理割り込んだ感じだった。

なんでもレオ君とエリカちゃんは特訓とやらをしていたらしい。僕が昔の勘を取り戻す為に訓練を行っていた時に、彼らも同じように身体を鍛えていたのだ。僕も混ぜてもらえばよかった、などと思いつつも、流石に妹の居ない合宿は色々キツイものがあるだろう。

どの道、入院していたので行けなかったのだが。

こういう危ない事（？）に学友を巻き込まないようにする……という精神は無いよう
で、むしろ学生とは思えない程の戦闘経験に溢れる二人を文字通り戦力になると思った
のだろう、達也君は見張りの話を快諾した。

ついでに、幹比古君も仲間になったようだ。前衛三人に後衛一人……まあ、そこそこバランスのいいパーティなのかもしれない。出来る事なら白魔か時魔が欲しい所であるが。

と、視線。

それは話の中心に居た達也君からで、残念ながら僕に彼のアイコンタクトは伝わってこなかったのだが、とりあえず肩を竦めておいた。

はいともいいえとも言わないこのボディランゲージは素晴らしく有用だ。ここ、テストに出るよ！ 僕は答えられないのだが。

*

全国高校生魔法学論文コンペティション開催日当日。

この大切な日に寝坊する、等という事は無く、真紅朗と将輝は予定通りの時刻で開場に到着した。

それなりに大きい舞台装置を乗せていた大型バスは、既に装置を下ろして所定の駐車場に止まっている。

欠席は一人もおらず、皆万全の準備を終えている。もつとも、どうしても心配は残る

物で、チエツクだけは何度も行っているのだが。

そんな時だった。

ふと、将輝は気配を感じた。

そちらに顔を向ければ、片目だけに仮想型ディスプレイを付けた、どこか見覚えのある長身の男が平行移動をしているではないか。左手で仮想型ディスプレイを押さえ、右手には缶ジュースの缶を持っている。見た目こそ真面目そうなのだが、行為は不良生徒そのものだった。

将輝の視線に気づいていないのか、気付いていて無視をしているのか。

彼は将輝達の目の前を通り過ぎて行く。

缶ジュースの中身が無くなったことに気付いたのだろう、彼は無造作に缶を放り投げる。

それを受けて、将輝は眉間を蹙めた。同じく気付いた真紅朗も同じだ。

その行為自体に嫌悪を示している事もあるが、私服ではなく第一高校の制服を纏ったままに、このような全魔法高校及び関係者の集まる場所で不良行為を働いているのだ。

第三高校にとって第一高校は久しく見ない好敵手だ。につき、とまではいかないものの、散々苦汁をなめさせられた司波達也や、将輝が密かな——将輝は密かだと思っている——思いを寄せている司波深雪のいる学校。

他校であり敵校とはいえ、元より正義感の強い将輝にとつて、見逃せるものではないか。

注意を行おうとしたのだろう、将輝が口を開いた——その直後。

ガコン、と。

将輝達の右後方——先程無造作に缶が投げられた方向——から、奇妙な音がした。

50mほど先の、そこにあるもの。

それは、一世紀前から形を変えながらも存在し続けている、ペットボトルや缶のゴミを入れるための、屑入——もとい、ゴミ箱。

そこから、まるで投げられた缶がホールインワンを果たしたかのような音が響いたのだ。

二人はその瞬間を目視していない。だから、もしかしたら丁度中で挟まっていた缶類が落ちただけかもしれない。

だが、投げられたはずの缶がどこにもないことが、その、まるで、に真実味を帯びさせていた。

「……ジョージ。今のは……移動魔法、か？」

「いや、単なる移動魔法じゃあの軌道にはならないよ。加速、加重系……あの瞬間にそれだけの事を？ もしくは技術で……ううん、どう考えても、どう見てもあの速度で投げ

られた缶が、あの角度の穴に入るはずがない……。

それに、彼はCADを付けている様子も無ければ、魔法式を構築した様子も無かった。単なる技術でも、系統魔法でもないのなら……」

「常識にとらわれないBS魔法師、もしくは、ジョージの知らないSB魔法師か……。何処か見覚えがあるんだが、九校戦にいたか？ あんな男」

「ごめん、将輝。僕も覚えているような、覚えていないような……そんな印象だ。けど、あの速度でああいった魔法を扱えるのなら、クラウド・ボールに出て来なかった理由がわからない。」

「この時期に転校してきたとも考えられないし、隠しておく意味もない」

「……なら、何かの理由で目立たないようにしていた生徒、という事か？」

「……将輝は、どんな理由だと思う？」

「……身を隠さなければいけない理由と、名前を知られてはいけない事情……」
「それだけ聞くと、どこかの国の間者みたいだね」

「……一波乱起きる可能性は危惧しておいたほうがいいのかもしれないな」

*

「司波さん！」

五十里と花音に見張り番を交代した達也が客席に戻ってきた時、それは起こった。

事件などではない。尤も、声をかけてきた本人にとつては事件にも等しい事だったのかもしれないが。

「一条さん」

一条将輝。

九校戦で達也と死闘を繰り広げた第三高校の彼が、頬を赤らめながら深雪に話しかけたのだ。深雪もまた、お嬢様然とした仕草で名を呼び返す。

隣にいるのがカーディナル・ジョージではない事に違和感を覚えながらも、自分と深雪がそうであるように常に共に居るわけではないのだと思ひ直す。そもそも吉祥寺真紅朗は控室にいるのだろう。

戦力として申し分のないクリムゾン・プリンスは、見回りといった所か。

完全な外交モードで対応する深雪を余所に、達也は会場を見渡す。

深雪の煽りに舞い上がる将輝を視界の端に収め、今日一日彼が最後まで持つかどうか、他人事ながら達也は懸念を覚えるのだった。

「おい」

と、深雪と会話を終えたらしい将輝が、達也に話しかけてきた。

珍しい事もあるものだと思ひながら、達也は彼を向く。

「なんだ」

「黒髪に仮定型ディスプレイをつけた、ローラースケートを走らせる長身の男。この特徴が当てはまる奴は、第一高校にいるか？」

そのあまりのピンポイントな質問に、少しだけ面食らう達也。

答えるのなら、いる。だが、

「……それが何か、お前達に関係があるのか」

「……いや、いるならいい。今朝、少し不審な動きをしていたからな。第一高校の生徒に扮した者の可能性を考えていただけだ」

それだけ言つて、将輝は警備のパートナーとなつたのだろう小柄な少年と合流し、去つて行つた。

彼の背中を見送りながら、達也は心の中で眉をひそめる。

昨日、達也はその特徴のあてはまる男に対し、「お前は今回関わつて来るのか」という意の目線を向けた。

結果返つてきたのは、肩を竦める、という行為だけ。

達也はそれをNOだと受け取つていたのだが。

——何の目的があつて、ここへ来たんだ？

このコンペは、大学、企業、研究機関等と言った国内の大人を相手にした発表会だ。フランスの間者か、軍に何かしらの縁のある者か。

その正体は未だにはつきりしないとはいえ、コンペテイションの内容に興味があるとは思えない。

ならば、彼がここに来た理由は。

「……」波乱は、確実にあるというわけか

危惧していなかったわけではないが、何も起きないと言う可能性を期待していなかったわけでもない。確実に守りきる覚悟があるとはいえ、必ず危険に脅かされると決まっているような場所に、深雪や学友を連れてくるような残酷さは達也にない。少しだけ痛くなった頭を余所に、達也は一層の気を引き締めるのだった。

*

会場に到着した僕は、危機に立たされていた。

「……」

「……あー」

克人先輩に、睨まれているのだ。

いや、本人に睨んでいるつもりはないのだろうが、その眼力があんまりにも強い。

都合が悪いので口伝を突っぱねた事を怒っているんじゃないかと、そんな気分になつてしまう。

「……追上」

「うい」

「傷は……大丈夫か？」

「え？ ……あ、ええ」

そう返すと、克人先輩は少しだけ安心したような呼気を吐いた。

……ああ、そうか。

克人先輩との訓練中に、しかも克人先輩と鬨ぎあっている途中に吐血&出血をしたのだ。

その原因が克人先輩に無いとはいええ、自校の生徒を守るべき存在が生徒を傷付けたとあつては、罪悪感やら何やらに苛まれた事だろう。

悪い事をした。

しかし、僕には説明をする言葉も補填する物品も持っていない。

……確か、克人先輩は僕がフランクスを動かした魔法について聞きたかつたんだっけ？

「あー……」

これで伝わるかなあ、と握手をするように手を差し出す。

意図を理解したわけでもないのだろう、克人先輩は「？」を浮かべながらも、それに応じてくれた。

その手のひらに僕の手が触れた瞬間、軌道を逸らす。

「!?」

「うい」

驚いて手を引く克人先輩に、ペこりと頭を下げてから、口元に人差し指を当てる。

これを守ってくれるかなんてわからない。だが、せめてものお返しがこれしか思い浮かばなかったのだから、仕方がない。

後ろ手を振ってその場を去る。

声がかかる事は、無かった。

*

案内板のしつかり整備された会場内は、僕が迷うことなく客席に辿り着くのに大いに役立つてくれた。そうだよ、街中もこれくらい至る所に案内板を置いてくれるなら、

迷ったりはしないのに。

客席には既にレオ君やエリカちゃん、幹比古君に……というか、1—Eのみんなが来ていて、さらには見覚えのある顔がちらほらと見えた。まあ、劣等生クラスである僕達の期待の星が壇上にいるのだ、ノリの良い彼らが応援しに来ないはずもない。

既に第一高校の発表は始まってしまっているようだったので、座高の高いレオ君を目印にいそいそ彼らの元へ行く——という事は無く、壁にもたれかかった。

今僕が客席に行けば、どうあつても他のお客さんの視界を遮ってしまう。

こういう場での長身の邪魔さ加減はわかつているつもりだ。別に、ここでも十二分に聞けるのだから、問題はないだろう。

そんな途中から聞き始めた論文コンペは、やつぱり、案の定、予想通り……あまり楽しい物ではなかった。いや、僕も魔法科高校の一生徒として、内容自体は理解できる。だが、目を輝かせるようなスパー技術かと問われれば、うーん。である。

だから、僕は壁にもたれかかったまま——すやすやと、眠りの世界へ落ちていったのだった。

*

あいいいいうおあ　いつえあ

*

遠くで聞こえたその爆音に、僕はゆっくりと目を開けた。

昔懐かしい、鉄の箱が衝突して炎上するその音。

直後、ほど近い場所で轟音と振動。これは会場の入り口の方からだろうか。

会場はざわめきを始め、すぐにでもパニックに陥ることは手に取るようになった。

僕に集中する視線は二つ。達也君と、深雪ちゃんの視線だ。

それよりも廊下の方から散乱している軌道が気になって、そちらを向いた。

人間の肩くらいの高さで上下に揺れる軌道。

その真つ直ぐな軌道から、それが銃器である事は容易にわかる。

鉄臭い事とは前世と一緒におさらば出来たと思ったのに、高校に入ってから恐ろしい

程そういったトラブルに見舞われている気がする。トリアルメーカー疫病神が第一高校の、それも――

Eにいる気がしてならない。

僕じゃない事は確かだ。何故なら、高校入学前は平穩無事な生活を送っていたのだから

ら。

近い。

こんな場所に銃器を引つ提げてくる奴など、大抵は敵である。軍人のように規則正しい走りでもない。なら、問題はないだろう。

バン！ と開け放たれた扉から出てきた男に向かつて、思いつきりヤクザキックを放つ。アイオーンはカバンに入っているからね。コンペ会場内でローラースケートを履いている、なんて非常識さは流石に持ち合わせていない。

僕の数少ない自慢の一つである長身から放たれたヤクザキックは、男の鳩尾にクリーニヒット。後ろの男から銃声。しかし残念ながら、文字通り見えている。

平手打ちするように銃弾の軌道を掌で逸らせば、ほぼ直角に曲がった弾丸は壁へと突き刺さる。一発、二発、三発。美容院。

神明流に飛び道具は効かない……とでも言いたくなるが、神明流のん・い・うしか言えない僕では伝わりすらしないだろう。

しかし丁度いい。その銃と、腰についているコンバットナイフ。
貰おう。

*

第一高校の論文発表が終わり、第三高校へ引き継ぐ……という時に、それは起きた。鈴音が言葉を発し、魔法式の起動などは五十里と達也の二人で行っていたからある程度の余裕があった事が、その様子を視界に収める事が出来た要因だろう。

達也の視界の隅、何故かこの場に現れ、席に着きすらない長身——追上青が目を開くとほぼ同時。

轟音と振動が会場を揺らしたのだ。

精霊の眼を使うまでも無く、それが擲弾の爆発音であると達也には理解できた。

だから焦る事無く追上を観察する。

彼が突然足を振り上げ、扉に向かって蹴りを放つと、まるで図っていたかのようなタイミングで武装した男が扉を開けた。

蹴り返される男。その男の後ろにいたのだろう他の侵入者が発砲したようだが、九校戦で見せたあの受け流しのようなそれで、銃弾を払う追上。

そのまま追撃に行く彼を追いみたい気持ちもあつたが、反対側の出入り口から武装集団が侵入してきたのでは対応するしかない。

自分たちの出番を妨害された第三高校の生徒たちがCADを掲げるが、それよりも早く武装集団から銃弾が飛ぶ。それは第三高校の生徒たちの後ろの壁に突き刺さった。

対魔法師用ハイパワーライフル。生半可な干渉力を受け付けけない速度と貫通力を持った弾丸を発射するこのパワーライフルを用意できる国など、限られている。達也は早々に当たりを付けつつ、その銃の持ち主の元へ歩いていく。

「デバイスを置け！ オマエもだ！」

たどたどしい日本語。そして向けられた銃口を意に介さない達也。

もう仕方がない。出来れば誤魔化しの効く魔法で済ませたいと思いつつも、これだけ大勢の前ではどうしようもないのかもしれない。

「おい、待て！」

勇気と無謀は違う。

既に向けられた銃口に対して、魔法師が出来ることなどほとんどないと言っている。

だが、そんなことは承知の上でなお……何の感情も見せない顔で向かってくる達也に恐怖したのだろう。

仲間の制止を振り切って、銃口を向けていた男が銃弾を発射した。

達也の手が動く。

その手はグーを形作っていて、彼の身体に開くはずだった穴はどこにもない。

「銃弾を、掴みとったっていうのか……？」

「いったいどうやって……」

誰かが呟いた呆然に、呆然を返す誰か。

誰も理解できない。理解できない物を、人は恐れる。

「化け物め！」

混乱したのだろう。銃は効かないと判断したのだろう。

その男は、達也へとナイフを持って斬りかかる。

掲げられた腕。

達也はそれを、いとも簡単に、バターナイフでバターを取るかのように。

何の抵抗も無く、手刀で斬り落とした。

「ぎゃー——」

短い悲鳴さえも上げる暇なく、男の鳩尾に達也の拳が入る。

「な——」

残った男が震える手で銃を構えるが、達也に気にする様子は見られない。

そうだろう、弾丸を掴みとる事が出来るのだ。その弾速に、わざわざ銃口を向かなければ反応できない等という事も無い。そう、彼らは考えた。

一步。達也が進む。

二歩——進む前に、男の後ろから影が這い寄った。

まず男の左右の眼球がぐりん、と上下を向き、次にその首筋をガン！ と殴打され、崩

れ落ちる。

「E n d」^{エンツ}

追上だった。

ぐるりと回って、片付けてきたらしい。その気配に気付いていた達也に驚きはない。追上は右手にハイパワーライフルを、左手にコンバットナイフを持っていて、制服を着ていなければ侵入者の仲間とも取れる格好だった。

「あ……縛り上げろ！」

と、そこでようやく呆けていた生徒たちが動き出す。

取り押さえる必要はない。だが、復活されてはかなわない。

ここにいるのは戦闘経験こそ少なけれど、手練れの魔法師たちだ。

武装集団を完全に再起不能にするのに、時間はかからなかった。

*

会場への侵入者を捕縛した後、突破する、なんて言うて達也君達は今場を出て行つてしまった。

会場はざわついたままで、一部僕へ、大部分は出て言つた彼への恐怖も見られる。僕

も傍目に彼の所業をみていたが、あんなに恐ろしい魔法を扱えるとは思ってもみなかった。

何度も言う様に、僕は軌道が見える。銃弾がこれから行く先も、これまで辿っていた軌道も見えるのだ。

だが、達也君の掴みとりは、その「行く先」をバラバラにしていた。

分岐という意味でのバラバラではなく、軌道そのものを粉々にしていたのだ。

第三高校の小さい子（確かシンクロウ君）が言っていた「分子デイベイダー」という魔法は、物体の軌道まで分解してしまうものなのだろうか。

なんて恐ろしい魔法だろう。僕のチート染みた力が何の意味も無さなくなってしまうんじゃないか。

……いや、そんなことはないか。

敵対しなければいいのだし。あれ、なんだろう、この落ち着いた気持ち。

さつきあーちゃん先輩がステージの前で何かやっていたのが関係しているのかな？
あー、リラックス。

「あの……残ってくれた、という事は……その、こちらに付いてきてくれる、ということ
でいいですか？」

「ん？」

リラックスしていると、突然声をかけられた。

あーちゃん先輩だ。後ろには甘楽先生もいる。

あれ、いつの間にか真由美先輩がいない。

……なんだろう、彼らは置いてけぼり組かな？

まあ、一人でうろつくのは危険だろうし。

「ええ」

「……ありがとうございます」

ぺっこりん。

そう、あーちゃん先輩は僕に頭を下げる。

おかしいな、この人二年生じゃなかったっけ。

先輩なんだから、ありがとう、だけでいいのに。

「では、地下通路を行きます」

「えっ」

急いで会場内にある案内板を見る。

……わお、色々なとこに繋がってるう！

急いで甘楽先生の元へ向かい、案内板の元へ引つ張り出す。

何故いないんだ美月ちゃん！ 僕の言葉はある程度翻訳できる君にいてほしかった

よ……。

*

「あー、ん！　んー、おーいっえ、おーあうお……あー、ん！　んー、こー行つて、こーなると……」

「……僕達がここにいて、他の集団が他の通路から来た場合、鉢合わせになる……そう言いたいのかな？」

「あいはい」

言葉がわからなくても、言いたい事はわかる。

それは甘楽の頭脳によるところが大きく、少なくとも一緒にいた安宿には何が言いたいかまではわかっていなかったようだった。

だが、一人がわかれば十分だ。

丁度様子を見に来たらしい十文字克人に訳を話し、沢木と服部をこちらに付けてもらう甘楽。あずさも異論は無いようで、改めて地下通路へと向かう。正面衝突の危険性があつてなお、この大人数で地上を行くのは危険であるからだ。

殿は青が務める事となった。

気付けば青はいなかった。

*

迷った。

不味い不味い。

殿が一番やつちやいけない事をやってしまった。

——守るべき集団から離れる。

敵の攻撃を一手に引き受けて、とかならまだしも、単純に道に迷ったは不味すぎる。

服部先輩と沢木先輩は強そうなのでまあ戦力は問題ないのかもしれないが、それでも後方注意は大切だ。

彼らの位置はわかる。もしものためにとマーキングして置いた視線があるから。

だが、そこへ辿り着く方法がわからない。目の前には壁。もしこれを某かの手段で崩そうものなら、地下通路自体が崩れると言う恐れさえある。

一度地上に出るしかない。地上に出て、そこから探そう。

「A^エi^アr^ア」

既に履いていたアイオーンで以て、飛び上がる。

単純に梯子を飛ばしたというだけで、天井にぶち当たりにいったわけではないのであしからず。ヘビガラス。

地上へ這い上がった——そこで、僕はソレを目にする。

何かの建物へと猛スピードで突っ込んでいくトラック。

僕が軌道を変える暇も無く、そのトラックは。

サラ……と、その全てを粒状に変えられて——消滅した。

消滅した。

「え……あ……う？」

言葉が出ない。

何だ、今の。

いや——知っている。

いつか、あのスナイパーの男を守った時に、交戦した。

あいつだ。あいつがここにいる。

怖気が走る。

だが、それよりも先に対応しなければいけない軌道があった。

放物線を描いて飛来する、恐らく小型ミサイルのものだろう軌道を直上へと捻じ曲げ

る。

幾本も幾本も重なっているそれを、捻じる様にして一本に束ね、交差させる。

横合いから放たれた波のような物も捻じ曲げる。放射状の波なら僕の手にも及ぶ物ではないが、範囲が絞られた波ならば軌道が存在する。

傍から見れば、珍妙不可思議な光景に映った事だろう。

真つ直ぐに建物へと向かっていたはずのミサイルは、いきなりその軌道を直上へと変更し、絡み合いながら天空にて爆発したのだから。たーまやー、である。

春先の事件と違って、幾つものミサイルがあつたからわざわざ蹴り砕かずに済んだ。

「……今のは」

「流石は九島老師の懐刀。我々の出る幕はありませんでしたか」

ほど近い場所から声。

一つは克人先輩のもので、もう一つは知らない声だ。小枝ちゃん。

知らない声の人はどうも僕に言っている様なのだが、九島老師って誰。

「ああ、失礼しました。国防陸軍第一〇一旅団独立魔装大隊大尉、真田繁留であります。

上尾葵特別二等兵殿、これを」

「上尾葵？ ……ああ！」

渡された通信機のような物を付けながら、思い出す。

確かあれは、十年前……オイシヤサマの診療所に入るためには診察券を作らないといけないとかで、でも幼い僕では診察券を作る事が出来ないから仮の名前を作ったのだけ。

確か診察券は筆筒の中に仕舞ったつきりで、最近はてんで使わなかったはずなのだが……。

というより、特別二等兵って何。

『聞こえるかね、青君……いや、上尾葵特別二等兵』

「……あはいはい」

通信機の通信相手はやつぱりオイシヤサマだった。

真田大尉と十文字先輩は既にここを後にしていて、またも置いてけぼりである。この翻訳機があれば僕の言葉を伝えられるのに！

『君を騙す形となつてしまつて申し訳ないのだが、君は既に軍属だ。昔、私の所へ君を呼び込んだときに作らせた診察券……あれが軍属の身分証明書となる』

「うあーお。おえあいつういえうえわあーお。それはびつくりですね」

『いつか君が言っていた、君の過去……二世紀ほど前にこの日本国を守っていた、国防軍の青年よ。こうして都合のいい時だけ君の力を頼る私を、罵ってくれても構わない……。だが、今だけはその力を貸してくれないだろうか？』

「いいあえんおおんあお。おっおおいおえいいうああい知りませんよそんなこと。とつとと除名してください」

何言ってるんだこの人。

いつ僕がそんなこと話したって言うんだ。

『君は優しいな……。ああ、既に応援は出ている。では、頼んだよ』

「え？」

ガチャ。

そんなレトロな受話器を置く音はしていないが、それだけで通信は切れてしまった。

……優しい、とは一体。

*

『言いませんよそんな事。とつとと助勢してください』

今しがた切れた通信の先にいた少年の言った言葉を思い出す。

その先天的なスキルに目がくらんで抱き込んだ幼い少年。検査の折、ある種の自白剤を用いて聞き出した彼の過去は、想像の及びつかない物だった。

彼には前世というものがあり、それをすっかり覚えていると。

1915年に生まれた軍曹止まりの軍人だった——十年前、彼はそう言っていた。若くして命を散らしたと言う彼。それが此度も騒乱に巻き込まれる運命にあらうとは。

せめて今世は、彼が道半ばに命を散らすことの無いように。
九島は、切なる願いを天へと向けるのだった。

*

あいいううおうあ うあんあいえい

*

少しばかり不可解なオイシヤサマとの通信を終えて、改めてみんなの元へ向かう。ごちやごちやとした陸路より、空路の方がいいだろう。またああいった小型ミサイルが飛んでくる可能性もあるから、発見がしやすいし。

エアで手頃な建物の上へと飛びあがり、辺りを一望する。

その辺から火の手や粉塵が上がっており、悲鳴や怒号まで聞こえる。なるほど、一方向からではなく全方位から襲撃されているのか。

厄介だな。そう思う。

確かに僕のチート染みた能力は距離を関係なく軌道の視認・操作が出来るのだが、だからと言って全方位、ここら一体全ての軌道を把握しきれるかと問われれば、それは無理だ。

勿論僕なんかが行かなくてもここに集う魔法師や国防軍が何かしら対処をするとは思うのだが、凡そ銃器というものに限定するならば僕のチート染みた力が最善の対応策

のはず。万一が無いとは言い切れない戦場において、絶対という言葉がどれほど魅力的か。

シエルターに向かった組は学生と先生方。まだ親の庇護下にある子供が、殺される前に殺す、を実践できるかどうかなんてわかりきっていることだ。だから、応援に行くならあそこが最適なのだろう。そもそも殿を任されていたわけだし。

だが、地下シエルターの直上辺りにいる戦車みたいな奴も見過ごせない。

あれこそ僕が対処すべき敵じゃないのか？

って、あの戦車なんで砲塔下に向けて——ッ！

暴発しろ！

そして、直行！

*

なんかトラ○スフォーマーみたいな奴がいる。

戦車だと思って急行したその場所にいたのは、ちよつと重機臭さはあるものの、男の子ならみんな憧れる可変戦闘車両……的な物だった。

平時であればじっくり細部を見てみたいのだが、生憎と今は平時ではない。

さらに言えば、そんなトランスフオ○マーと対峙しているのが真由美先輩や深雪ちゃん達だと言うのだからいただけない。というか達也君どこ行つたの。深雪ちゃん置いて、もしかして僕と同じで迷つてる？

とりあえず加勢しようとか適当な弾丸の軌道を曲げ——ようとしたその前に、トラン○フオ○マーは穴だらけになつてから真つ白に凍りついた。

氷……深雪ちゃんだろうか。あれ、もしかして深雪ちゃんって、物凄くヤバイ子？
 というか、ここは加勢とか要らなそうだね……。

他の場所……まずはさつき大きな爆発があつた駐車場の方へ行つてみよう。

*

「——ん？」

意識外からの狙撃などを考えて視線逸らしを纏いつつ空を跳んでいると、前方に黒い人影がある事に気が付いた。人影——人影だ。そうとしか表現できない。フライングマン？

人影は僕のように跳んでいるわけではなく、どちらかといえばそう——飛んでいる、という表現が似合う速度でこちらに向かつてきている。

だが、その軌道は微妙に僕の軌道とズレていて、その速度や体勢からして人影が僕に気付いていない事がわかった。

とりあえず、避けておく。もしかしたらアレは吉田君の使うと言う精霊なのかもしれない。僕に当たってそれが雲散霧消してしまったら申し訳ないし、こつちにどんな影響があるかわからないし。

ただ、そう、一瞬——うすら寒い物が、背筋を伝ったような。

うーん、スピリチュアルスピリチュアル。

人影との邂逅は一瞬の事で、その後すぐに僕は目的の場所である駐車場に着いたのだった。

*

「……お前は」

一条将輝は自らの家の秘術「爆裂」を使つて侵入者を撃退していた。

「爆裂」——対象物内部の液体を瞬時に気化する魔法。対人、いや、対生物戦においては、無類の強さを発揮する攻性魔法。

その魔法の凄まじさは、彼の周囲に広がる赤い花が物語っている。

鮮烈に鮮血を撒き散らして咲いた花弁は、全て侵入者の物。クリムゾン・プリンスト
いう名が伊達ではない事を証明する、子供ではなく戦士である事の象徴。

そんな、真赤な花畑に。

ローラースケートを履いた眼鏡の男が降り立った。

司波達也に所在こそ確認したが、だからといって不審である事に変わりの無かった長
身の男。この血まみれの大地を見ても眉一つ動かさない辺りにはどこか納得している
自分もいるが、同時に警戒も最高にまで引き上げる。吉祥寺真紅朗の知らない魔法を使
う、空から降りてきた男。

何が目的なのか。敵なのか、味方なのか。

「……And to world the wars……そして世界大戦へ、か……」

「何?」

小さな声で呟かれたソレ。

将輝はそれを聞きのがさなかった。

聞き逃せるような内容ではなかった。

将輝も今回の敵が外国の、それもすぐ近くの勢力であるという事は気付いている。そ

うであろうということは、敵の武装や人種、使用言語からわかっていた。

そして確かに、事が事ならソレもあり得るということも。

即ち、世界大戦。

「ッ、待て！」

再び飛び立とうとする男に牽制として空気弾を放とうとする将輝。しかし、どこか覚えのある感覚によってその矛先を逸らされ、次の瞬間には男の姿を見失っていた。

憶えの或る。それは、あの苦汗を散々なめ啜った九校戦で。

「……追上、青……だと？」

あの男が追上だとするならば、何故今朝司波達也がそれを言わなかったのか。

否、あのような移動魔法を持ち得ているのならば、なぜ九校戦の時にそれを使わなかったのか。真紅朗と話していた仮説は違う。何故なら、現に奴はモノリス・コードというとても目立つ競技に出ていた。

いや、だから、そうか。

「隠す必要が、無くなった……ということか」

今の将輝の考えがあっているのなら、それは確実に起こってしまう事なのかもしれない。

全世界を巻き込んだ、最悪の事態が――。

*

駐車場は真赤だった。

ヒトだった物の残骸が絨毯の様に敷き詰められたそこに降り立つ。むせ返るような血臭は懐かしさを覚えるが、何も思わないという事はない。

「あうあいあうう……南無阿弥陀仏……」

やつこさんが敵でも、死体は死体。

凄惨な死に方をしていればしているほど、そして血液とはいえその死体を踏んでしまったのだからこそ、お祓いの意味も込めて。

恐らくこれを起こしたのだろう下手人はすぐ近くにいて。

それはなんと、あの九校戦で戦った三高の将輝君で。

絶対に恨みを買っている。そう思った僕は、一目散に逃げる事にした。

予想通りすぐ近くに視線が飛んできたので咄嗟に逸らして、エア。

あと数瞬逸らすのが遅れていれば、僕も仲良く真赤なカーペットに仲間入りだったかもしれない。

もう一生第三高校には近づかないようにしようと、心に誓ったのだった。

*

先程のトランスフォーオーより動きの良いトランスフォーマーを見つけた。

どうやら何か——いや、誰かと交戦中らしい。

あの質量の相手に、少年少女——レオ君とエリカちゃんが剣で対応している。

時代錯誤……一周周って現代らしい光景。

あの二人は大丈夫だろう。多分、あれほどの火力と機動力があれば、鈍重な戦車の一つや二つは相手にならない。それより、少し先の方に見えているヘリの方が心配だ。

蝗害と称するべきだろうか。

黒い蝗の大群がヘリに群がっている。奈落の王か、赤い蛇か。

凄まじい量の蝗は一匹一匹に軌道があり、乱雑で、とても把握し難い。

僕は火を出したり相手を凍らせたりする魔法を持っていないので、直接蹴りに行くのも悪手だろう。

深雪ちゃんをあそこに投げ込めば……なんてあほらしい考えが出てくるくらいには焦っていた——その瞬間だった。

ジユ、と。

先程からヘリに乗っていたのだろう魔法師が発していた白い光とは違う、もつと恐ろしいチカラで。

蝗害そのものが蒸発するように、消滅するように消えて行ったのは。

そしてその黒い暗雲が晴れた場所にいたのは——あの、黒い人影。

拳銃を構え、無機質な居住まいで空を跳び、瞬時に蝗害を消し飛ばしてしまった。

僕はその魔法に覚えがあった。

スナイパーと僕が狙われた時の、あの魔法だ。

あれは、あの人影の魔法だったのか!!

「ウツ……」

怖気づく。戦争は正直慣れている部分もあった。血腥い事もある程度は耐性があった。た。

だが、こうも恐ろしい相手と対峙した経験など欠片たりとて持ち合わせていない。

対抗手段が逸らし続ける以外にない相手。先程の軌道の乱雑な、あやふやなものでさえ消滅させてしまう相手にどう立ち向かえばいいというのか。

しかし、僕が勝手に怖気づいて一步下がった所で、人影はどこかへとその拳銃の矛先

を向けて、何かをしている様だった。僕等、もう眼中にない……そういうことだろうか。良かった。そう、これが「今は見逃してやる」でない事を祈りつつ、逃げるようにその場を去った。

追いかけては、来なかった。

*

へりに着かず離れずの位置を保って哨戒していると、目的の場所に着いたのだろう、へりからロープが下ろされていくのが見えた。下にいるのは摩利先輩達だ。

丁度いい頃合いなので、合流する。わざとアイオンの音を響かせれば、一瞬の警戒の後に桐原先輩がこっちに気づき、手を挙げてくれた。

「お前、何処に行つてたんだ？ シェルター組と一緒にやなかったのか？」

「あー……、えー」

どう言い訳した物か。

素直に迷いました、と言つてもいいのだが、言える口が無い。

迷いました、つて英語でなんて言うんだっけ……ああ、英語じゃ言えない。どうしようか……という、普段は心中にすら出さない考えを表出させていたのは、偏に味方と合

流出来た、という安堵から来るものだったのだろう。

その油断は、余りにも致命的だった。

「危ないっ！」

ゲリラ——その恐ろしさは、魂に刻まれるほどにわかりきっていたはずなのに。

その摩利先輩の声に、紗耶香先輩と啓先輩へ向かう軌道を目視して、チート染みた力行使した。

みんなが集まっている場所だ。横方向のどこに逸らしても危ないし、上にはヘリがいる。下は跳ねる可能性がある。

なら、何処が一番いいか。

それはもちろん、僕の後ろだろう。

何故なら僕は今しがたみんなの所へ来たばかり。僕の後ろには瓦礫しかない。

計算は完璧だった。真っ直ぐに二人へと向かっていた弾丸は急激なカーブを描いて僕の元へ来て、残念ながらそれ以上曲げるには至近距離すぎたが、狙い通り僕の脇をかすめて背後の瓦礫へと着弾する軌道になった。

「ぐっ……」

余りにも不運なタイミングで、リユーカーフーに傷付けられた腹筋が傷まなければ、僕は一瞬だって硬直なんかせずにいられたのだろう。

実際は二発の銃弾に左肘を両側挟られて千切られるという、なんともまあ無様な結果に終わったのだが。

「追上!？」

目の前にいた桐原先輩と、奥にいた摩利先輩が驚愕に目を見開く。

前者は目の前で起こった事実、後者は恐らく弾丸の軌道に、だろう。

全身が潰れる痛みは16年前に味わった。

だからといって、痛み慣れているかなんて言われたら答えはNOだ。

叫び出したほど痛い。だが、それよりも先にやらなければいけないことがある。

右手のコンバットナイフを投擲。勿論発砲者へ向けて、真っ直ぐに。

それは吸い込まれるようにして発砲者の肩口へと突き刺さり——直後、世界が凍りついた。

わかる。

その、恐ろしさが。

あの発砲者は、精神を凍らされた。

僕はその恐ろしさが、よくわかる。

「お兄様!!」

その下手人だろう、深雪ちゃんが叫ぶ。

お兄様。達也君か。

その声に反応して降り立ったのは——なんと、あの黒い人影だった。
はは。

兄妹揃って、なんて恐ろしいんだ。

精神を凍らせる妹と、全ての物を消滅させてしまう兄だつて？

そんなのチートだよチート。

「お兄様、お願いします!」

出血からだろう、ぼやけていく視界の中、達也君の顔をした黒い人影は僕に拳銃を向けた。

集中力が足りない。視線は真っ直ぐに僕を貫いていて、もう逃げられない事を悟る。

「
」

そうして、僕はこの世から消え――。

*

あいいううあああ いあつおおえいうう

*

——なかつた。

「え……う？」

戦場で恐怖に目を瞑ることなど狂気の沙汰だ。

だから僕は、その事象をしつかりと目にしていた。

生えた訳ではない。ただ、千切れた左腕が引き寄せられ。

最初から失くしていなかつた、とでもいうように……左腕がくっついていった、その瞬間を。

人影……達也君の顔を見る。

無表情。だが、無感情ではない。

助けてくれた、というのか。

まるで奇跡のような魔法。学問ではない、ファンタジーの魔法のようなソレ。それを何故、僕に使ったのだろう。

「あ……」

「その気があるなら、動け」

「ん……—ああ—」

簡潔な言葉。

僕に吐き捨てるように言った後、達也君は深雪ちゃんを抱き寄せて何かを囁き、また飛び立とうと背を向ける。

その背に向かつて、慌てて言う。

「ツ……えいおいう礼を言うー！」

僕ではなく、俺の言葉で。

僕を助けてくれて、本当にありがとう。

達也君は一瞬だけ立ち止まる。だが、何も言わずに、振り返る事も無く飛び立って行った。

さあ、僕も——拾われた分、貢献をしなければ。

*

「The aim 'EU'！俺達の狙いは、EU'だけだ！」

任務に戻る達也の背中に投げかけられたのは、そんな言葉だった。

追上青。九島烈とフランスに繋がりを持つ謎の男。

達也はその一部始終を精霊の眼で視認していた。常時ぼやけたままの追上と、生徒たちには放たれた凶弾の行方を。

紗耶香と啓に着弾するはずだった2つの銃弾は異様な速度でエイドスを書きかえられ、追上の元へと引き寄せられた。数瞬の間に、達也の持つ「分解」や「再成」に匹敵する速度で行われたソレは銃弾の勢いを保ったままに軌道を逸らし、誰にも被害を出さずに集団から抜け切ったのだ。

恐らく術者だろう、追上を除いた全員に。

彼自身も避けるつもりだったのだろうが、恐らくは前日に負っていた怪我が邪魔をしたのだろう、ぼやけなくなっただけを確認した時には左腕がもげていた。

妹に呼ばれるまでは、達也に、その、つもりが無かったことは事実だ。

だが、心優しい妹はそうではなかった。達也の持たない感情を持つ深雪は、追上の「再成」を願った。

それに応えないはずもない。

「EU……・tats—Unis。なるほど……」

自らの「再成」に対して、礼の代わりとして放ったのだろうその言葉。確かに、有益な情報だ。それも、この上なく。

・tats—Unis……フランス語で、アメリカ合衆国。

自分たちの目的は日本ではないと、そう言ったのだ。

それだけで、長らく不明だった敵対する可能性も、身分を隠している理由も掴めたというもの。

「……」

先程追上のエイドスを遡った時に見つけた、ソレ、も、恐らくはそちらに対する対策なのだろう。

常に精霊の眼をぼやけさせるソレを纏っている理由にも納得が行く。なにせ、アメリカ合衆国が超高精度の衛星カメラを持つ事は達也でも知っている事だ。魔法的にせよ科学的にせよ、姿を見せたくない理由はソレだろう。

ソレ……追上の脳に棲み付いた、化成体。

美月の言っていた頭の辺りから漏れ出でる光。

追上の魔法にもこれで納得が行った。その技術の再現が可か不可かはともかくとして、移動魔法と精神干渉系魔法、そのどちらかが追上の演算領域で、どちらかが化成体

の演算領域で行われているものなのだろう。

結果は違うが、脳をもう一つ持つているようなものだ。ソーサリーブースターに通ずるものがある。

ああ、だから今回の論文コンペにも出向いたのかと、達也は独り言ちた。

春の一件、九校戦、今回の事件。

そのどれもに無頭竜が、ひいては大亜連合が関わっていて、九校戦と今回の事件にはソーサリーブースターを付けられた尖兵が日本に來ている。

もしもその技術がフランスを元にする物だったとすれば、これ以上の流出を抑える為に予定外任務として組まれた……と考えても不思議はない。

バラバラだったピースが埋まっていく。

追上家。化形体。不可思議な経歴。戦闘経験。

「
」
そこまで考えて、達也は思考を切り捨てた。

これ以上は自分が踏み込む事ではない。九島烈が追上青と手を組んでいる以上、あるいは先の未来であの大国を相手に共闘をする可能性も無きにしも非ずだ。

そこに余計な情報はいらなだろう。

戦場を俯瞰し、一〇一旅団の圧される戦場へと向かう。

これから幾人にも行うだろう「再成」による苦痛への恐怖は無い。思考の雑味が無くなった達也はまた、真赤な戦場へと降り立つのだった。

*

「おい！ お前は怪我人なんだ、早く乗れ！」

「いいえ」

達也君が飛び立った後、すぐに戦場に戻る——という事は出来なかった。弊害がいたのだ。

「治癒魔法は一時的なものだ！ 今治っていても、いつ達也くんの魔法の効果が切れるか分からないんだぞ!？」

「ええ」

「ええ。じゃない！ ええい、司波！ 達也くんの魔法はどれほど効果が持続するんだ？」

摩利先輩である。

彼女が妙に、異様に僕を引き留めるのだ。いやまあ、目の前で腕が引き千切れた奴を放って戦場に行かせる、という人間も中々珍しいのかもしれないが。

でもさつき千切れていた腕を物凄い腕力で掴んで離さないのもしかと思えますよ。
「永続的なものです」

簡潔に、深雪ちゃんはそう答えた。

その言葉に、摩利先輩に空白が生まれた。隙を突いて抜け出す。

達也君の事を一番よく知っているだろう深雪ちゃんがそういうのだ。

説明を聞かずとも、それが真であることは信じられる。

戦場でいきなり腕を失くす可能性も無くなった。

これで、僕を阻害する理由も無くなったわけで。

「待てよ」

「ん？」

「これ、持ってけよ」

そんな僕を制止したのは桐原先輩。

だが、先輩は僕を止めたわけではなかった。彼が放ってきたのは、コンバットナイフ。

先程僕がゲリラに投げ、凍りついた物ではない。

「さつき、殺したゲリラから奪った奴だ。使うだろ？」

「ああ」

放られたソレを掴みとり、逆手に持つ。

よく馴染む、という事はないが、やはり短剣があるのは落ち着く。

「I, m, g o i n g 行つてきます」

「おう、行つて来い」

駆け出す。

「エア―」

そして、飛び出す！

先程からひしひしと——見えていた、その色の視線。

忘れもしない、忘れるはずがない！

リューカンフーの居る場所へ！！

*

「オオオオオオアアア！！ アイアン！」

上官である陳祥山チエンシャンシェンに言われた、「個人的に思う所はあもしれんが、報復は考える

な」という言葉。

確かに思う所はあつたが、呂剛虎は軍人。上官の命に背く事はない。

だからこそ、その蹴撃は幸運であつたと言えるだろう。

自らが襲撃していたベイヒルズタワー、その入り口手前。

背後に感じた気配は、まさしく自らの報復対象そのものだったのだから。

呪法具・白虎甲バイフクジヤは中華古代魔法・道術によって造られた、呂の鋼気功ガンシゴンを増幅する鎧だ。

そんな装甲車の機関砲さえも跳ね返す防御力を持つソレに、一切の躊躇いもなく蹴りを入れてきた男に獐猛な笑みを向ける呂。

想像以上の威力に少しばかりとはいえ後退したが、その身体を跳ね飛ばす。

自らの率いていたはずの奇襲部隊は皆、いつのまにか北東方向に吹き飛ばされていった。

あの住宅街で自身も受けたその魔法。体感加重魔法だったが、それを知る意味はない。

男は左手にハイパワーライフル、右手にコンバットナイフ、両脚にローラースケートという珍妙な格好で、鎧やプロテクターなどはつけていない。

典型的な魔法師ではない。だが、呂のように自らの肉体だけで戦う者でもない。

アンバランスなその立ち姿に、しかしなんの迷いも無く突貫する。

敵が何者であれ、排除以外に道はないのだから。

*

道中、ゲリラから奪い取ったハイパワーライフルと、桐原先輩に貰った短剣。

ハイパワーライフルの先端に短剣をつけた銃剣術にするか迷ったが、完全に接近戦タイプのリユーカーファーにそれは悪手だと判断し、最初から取った状態で挑む事にしたのだ。

そんなことより、と。

先程奴を蹴った感触を思い出す。

自らが下に落ちる、つまり地球の重力による軌道を逸らして威力の底上げを図った飛び蹴りは、いとも簡単にとめられ、跳ね返された。建造物でも蹴ったかと錯覚するような硬さと重さ。恐らくはあの白い鎧がなんらかの役割を果たしているのだろうが、打撃は更なる威力を求められる事がわかった。

油断はしない。奴の軌道を見続けて、確実にここで殺す。

テロリストだ。国の敵である。罪になる心配もない。

僕の持つ魔法は、チート染みた力を含めてそのままでは殺傷力を持たないものばかりだ。

達也君の消滅や深雪ちゃんの凍結みたいな魔法があればよかったのだが、今ない物ねだりをしてもしかたがない。

そのまま殺傷力が無いのなら、工夫するまでだから。

「グオオオオオ!!」

正に獣のような——猛虎のような雄叫びをあげて、リユーカーンフーが突っ込んでくる。

僕も母音ーッンしか発せない性質上人の事を言えたものではないが、この雄叫びは人間をやめている。

その速度に、しかし落ち着いて軌道を逸らし、その後頭部へ向けてハイパワーライフルを発砲。しかし薄い膜のようなものに阻まれた。

意識外でも効果なし、と。

「ウツ!?!」

顔を貫く軌道が出現する。一瞬遅れてそれを避けると、さらに一瞬遅れて僕の顔の在った場所をリユーカーンフーの蹴りが貫いた。

仰向けに倒れ行く僕の身体を上下に裁断するかのような軌道が現れる。伸びた足を振り下ろそうとしているのだろうが、その軌道が一切乱れる気配がないというのはどういうことか。

即ち、この威力の踵落としをモロに食らうと、僕の身体がぶつつんするということがほかならない。

「エア―^{Air}」

仰向けのまま脚力のベクトルを変えて真横に身体を射出しつつ、リューカンフーの踵落としを反対方向に逸らす。

骨が折れた音は聞こえない。化け物め。

離脱中にハイパワーライフルを3発発砲。鎧の無い部位に当たっても効果なし。

次の瞬間、振り向きざまに――視界外だったというのに――裏拳が飛んできた。逸らされた自らの脚の遠心力をそのまま利用したらしい。

「アイアン^{Iron}」

足を曲げて、裏拳を硬化させたアイオオンで受け止める。

トラックが衝突してきたかと錯覚するような重みに膝が悲鳴を上げるが、ここは空中。リューカンフーの拳と寸分たがわぬ方向に身体を逸らし、衝撃を消した。

身を振って体勢を立て直すと同時に、無用の長物となったハイパワーライフルを捨てようとする。

あの距離で当ててなんの効果も無いのだ、例え零距离でも意味はないだろう。体内も試してみたかったが、そんな隙を奴が生むはずもない。

……いや、どうだろう。

少し想いつき、残弾を全て適当な場所へ撃つてから捨てる事にした。

軌道を整え——全弾奴の顔へ！

「フンッ！」

だが、7発は有ったハイパワーライフルの弾丸を、奴は腕の一振りですべて弾いてしまった。威力は損なっていないのに、だ。しかし弾いたということは、効果は零ではないのかもしれない。

かもしれないが、もう残弾は無い。自分の無計画さが嫌になるね。

だが愚痴を吐いても仕方がない。

後はこのアイオン2足と桐原先輩からもらったコンバットナイフで、この難敵を倒すしかないのだから。

*

あいいいいううあいい　うあいいーおおんあえい

*

呂剛虎は怒涛の攻防を繰り返す中で、思案する。

初めにハイパワーライフルの試し撃ちをしてきた辺り、自らの魔法である剛気功、伴って白虎甲の効果を知っているというわけではないのだろう。

だが、男の移動魔法はこの呪法具、及び剛気功の情報強化の上を行くらしい。

ラグの一切を無くして発動するそれは、今のところ呂にさえ兆候を掴ませない曲者だ。

反応速度も奇妙だが悪くはない。蹴撃とコンバットナイフによる刺突、そして移動魔法と硬化魔法のみで呂と渡り合えている事は褒められる事だろう。

だが、と。呂は獰猛な笑みを浮かべる。

「うおっ!？」

視覚外からの攻撃に弱い——それは男の視覚外ではなく、呂の視覚外からのものであると、呂はただの二戦で悟っていた。それほど判りやすかったとも言えるだろう。

元より男は呂達侵攻軍の扱う幻影、それも化成体に似た異様な気配を持つ存在だ。そのもつとも強い場所が、人体としてもつとも弱い部分にある。

呂にとって、視認せずにその気配を打ち砕く程度、造作もないことであった。

「グオオオオ!!」

「うっ」

雄叫びは自らの鼓舞と威嚇。

自らの纏う白虎甲、そして呂の通り名の通り、虎の如く。

豪快に、剛胆に、圧壊する。

逸らされた腕は勁として足へ伝わり、それが逸らされれば今度は腰へ、上体へ勁を増幅させながら流していく。

勁は魔法ではなく、運動エネルギーの事を指す。“止める”のではなく“逸らす”だけであれば、勁は減らずに増えていく。

己が身をすり抜ける蛇のような戦い方をするこの男も気付いたのだろう、逸らすのではなく避ける割合が多くなってきた。その避け方も人間というには難しいものがあるが、呂程ではない。

虎にとって蛇は捕食対象であるのだから。

「鋼鉄!」

だが、男も然る者であつたと言えるだろう。

防御においては回避一方になつていたが、攻撃は苛烈。

真直ぐピンと伸びていた脚を食い千切らんと腕を伸ばせば、凡そ人体力学において有り得ない軌道を取つてそれをすり抜け、呂に蹴撃を入れる。その蹴り自体の威力は大したものではないのだが、問題は直後に行われる移動魔法だ。

呂が完全に静止した場合であれば発動しないそれであるが、その蹴撃に一步でも後退しようものなら思いもしない方向に吹き飛ばされる。水平方向、上空、地面。白虎甲の情報強化などものともしないその移動魔法は脅威であり、厄介だつた。

呂の剛拳が男を捉えるか、男の流脚が呂を吹き飛ばすか。

奇しくも白虎の名を持つ呪法具と、青の名を持つ男の一騎打ちとなつたその勝負は、「シッ！」
突如として現れた茶髪の少女によつて幕を下ろされた。

*

その軌道は見えていたから、即座に反応する事が出来た。

予想を軽々と超えるその速度には驚いたが、なるほど、これが特訓とやらの成果なん

だね。

エリカちゃん。

「せやあつー！」

レオ君が極薄の刃でもってリユーカンフーに斬りかかる。

しかし反応している。なら、少し手助けをしよう。

「ぐおっ？」

リユーカンフーの視界を回す。

目を瞑られてしまえば簡単に取りられてしまう対策も、この極限状態では隙となるだろう。

「オオオオオ!!」

だが、それでも奴は反応した。

恐らくまた気配というものだろう。視界を回されてなお、2人の気配を読みとった、とてもいうところか。

エリカちゃんの凄まじく重そうな剣を往なし、レオ君の斬撃を避けながら回し蹴り。

——飛んだな！

僕と闘っている時はそれに気付いていたのだろう、最初のベクトルがゼロ……つまり地に足付いて静止した状態であると、僕のチート染みた力がほとんど効果を発しない事

に。だから奴はずっと地に足付けて戦っていたし、僕の蹴撃を受ける時はさらに強く地を踏みしめていた。

だが、レオ君とエリカちゃんが間に入って来たことで一瞬でも僕の力が意識外にいつたらしい。

「――」

そのベクトルで、十分だ。

リユーカーンフー自身の強靱な脚力に寄る上昇軌道を、今まさに出現しようとしていた氷の礫のようなものに真つ向に向かわせる軌道へと修正する。氷ということは深雪ちゃんだろうか。良い仕事するね！

一発一発は大したことの無い威力なのだろうが、それが数百と連なれば人体を弾き飛ばす威力にもなる。その弾き飛ばされるべき方向と真逆に飛ばしているのだから、その威力は単純に倍。

「パンツァー甲冑!!」

自らの脚力と氷の礫の威力の相殺で空中静止を果たしたりリユーカーンフーに、レオ君が硬化魔法を施した左拳を叩き込んだ。

「グオオッ!!」

「はあっ!」

氷の礫の射出が終わり、リューカンフーの身体が重力に従って落ちようとするが、そうはさせないのが僕だ。

もう隠すつもりはない。エリカちゃんが踏み出した軌道を視認し、その上段斬り掛かりに対抗するような軌道へリューカンフーを乗せる。リューカンフーは避けられないと断ずるや否や、全身に力を込めてエリカちゃんの斬撃を受け止めた。

エリカちゃんの斬撃がリューカンフーを弾き飛ばそうとすればするほど、リューカンフーの身体はエリカちゃんの斬撃の方へ押しやられていく。

またも空中で拮抗を続けるリューカンフー。その仰向けの体勢であつた頭部に向かって、三本の容器のようなものが投げつけられた。

摩利先輩だ。

その容器を目にした途端、リューカンフーは苦渋に顔を歪めるも——なんとその一本に噛み付き、刹那の後にエリカちゃんへと放った。

「うっ」

エリカちゃんの意識が落ちる。反して、リューカンフーの意識は落ちていない。

掌打の軌道がエリカちゃんのお腹に向かっている。その掌打の軌道をズラしつつ、重力に従うエリカちゃんの身体をリューカンフーから引き剥がすような軌道に修正する。

重力程度の速度じゃ間に合わないかもしれない。そう思つて駆け出すが、既にリュー

カンフーは裏拳の姿勢に入っていた。

「パンツァー甲冑!! ぐうっ!」

だが、その裏拳とエリカちゃんの間は無理矢理入ってきた存在がいた。

レオ君だ。彼は硬化魔法を纏ったまま特攻し、文字通り肉壁となつてエリカちゃんを守った。

「エオL e o!」

「ツ……大丈夫だ!」

僕のチート染みた力は時間をかけなければ速度を削ぐことが出来ない。

出来る限りの事はしたが、それでもかなりの速度を以てエリカちゃんを抱きしめたレオ君は自動車に突っ込んでしまった。

返答が出来るのだ、頭など危険な場所を打ったわけではないと信じたい。

「はっ!」

「オオオオオ!!」

摩利先輩による、いつか見た摩利先輩のイケメン彼氏さんが使っていた黒い剣がリユーカーンフーに襲い掛かる。流石にアレを受けるといふ選択肢は無かつたのだろう、リユーカーンフーはそれを、上体を反らすだけで躲し、回し蹴り。今度は僕対策なのだろう、地に足を付けたままで。

その速度に僕の操作は間に合わず、だからこそ摩利先輩の方の軌道を操作して衝撃を緩和させた。

その手応えに顔を顰め、心から煩わしいという表情で僕を睨むリューカンフー。機を窺っているのか、深雪ちゃんからの援護射撃はあれ以降来ていない。

範囲攻撃を得意とする彼女のことだ、僕達を巻き込んでしまわないように出るに出来ないのだろう。

ならば僕のやるべき事はただ一つ。

もう一度リューカンフーの身体を地から離し、空中へ追いやる事。

激しい動きのせいか腹筋の傷がジクジクと痛むし、先程から左膝も妙な音を上げている。

意識の無いエリカちゃん。負傷したレオ君と摩利先輩。

「——うん」

国の為に死ぬと言われたあの時に比べたら、何という事はない。

蛇にとっても、虎は捕食対象となり得ることを思い知らせてやる。

*

啖呵を切ったはいいものの、防戦一手という他なかった。

先程の戦いでようやく——初めて気が付いたのだが、僕のこのチート染みた能力は“仲間の補助”にとことん向いている。勿論自らの接近戦においても大いに役立つ事は間違いないのだが、誰かアタッカーがいてくれた方がその真価が輝くのだ。

一応リユーカーンフーにも疲労やダメージが見え隠れしており、消耗している事はうかがえる。

だが、消耗具合で言ったら僕の方が酷い。元よりチート染みた能力で身体を動かすのは多大なる負担がかかるのだ。その急激なGはがっつりと僕の体力を奪う。

一瞬たりとも集中力を乱すわけにはいかないし、かといって視線や既存の軌道に集中し過ぎれば、突然現れた必殺性の高い攻撃に反応できない。

今更になって、この“軌道が見える”という力を活かすために必要な立ち位置は中距離であるという事に気が付いたのだ。気が付いても、どうしようもないのだが。

「——？」

その窮地に、一筋の光が差した。

僕の力を警戒して地に足を付け続けるリユーカーンフーは、その性質上頭の高さがほぼ変わらない。

そしてその頭を貫く様に、細く、長く——鋭い軌道が通っていたのだ。

僕はその軌道に、心当たりがあった。

だから、ずっと手に持っていたコンバットナイフ——桐原先輩に貰ったそれで、リューカンフーに斬りかかる。

刺突ではなく、斬撃。

それは当たり前の様に、リューカンフーにさえ意味が解らないという表情をされながらカキンと弾かれ。

大きくできた隙に、虎形拳……吹き飛ばしの十二形拳が突き刺さる。

「吊糸^{イアン}！」

その直前に使用したのは、エアやアイアンのような一工程の魔法とは違う、二工程の

魔法。幾度か話題に出した加重系・重量軽減魔法。吊糸^{Yarn}。

それをかけるのは、僕の身体。

凄まじいダメージが内臓を貫いたが、それでも大分軽減されたはずだ。

その吹き飛ばしを使って、僕の身体を細い軌道から逸らす。

「ッ!？」

轟音。先程いた装甲車の機関砲やハイパワーライフルの銃弾など足元にも及ばない

衝撃が、リューカンフーの頭部に着弾、これを吹き飛ばした。

狙撃だ。

この恩は必ず返すぞ、という言葉が思い起こされる。

ああ、ここぞという時に返してくれたようだ。

「ゴア……！」

仰向けに吹っ飛んだりリューカンフーの目の前に、氷の礫が一つ、形成される。

脳震盪を起こすと言う概念を持たないのか、奴はそれにすら反応し、防ぐために手を伸ばした。

だが礫は、リューカンフーの拳に着弾する前にその身を崩し、気体へと昇華する。気体と見るや否や口を閉じようとしたリューカンフーだが、そうは問屋が卸さない。

普段は気持ちが悪いからやらないが、顎にも、舌にも、軌道はあるのだという事を思い知れ！

「カッ……！」

昇華した白い気体がリユーカンフーの口内に侵入する。

リユーカンフーは喉元を押さえたが、苦しむ暇も無く気絶した。

流星は深雪ちゃん。恐ろし過ぎる。

*

「エオツ」

こんな時でさえケホ、と言えないこの口には嫌気も差すが、今回ばかりは許してやろう。

そんなことに気を遣えない程に、疲れたから。

最後の掌打で内臓系のどれかが裂けたのだろう、先程から血が上がってきて仕方がない。粘性のある血を無理に飲み込もうとすれば最悪窒息の可能性もあるので、吐き出す力が残っている内にしっかりと吐き出しておく。

リユーカンフー含めた奇襲部隊は全員拘束、こちらの勢力が侵攻軍を押し返した事で自体は次第に収束の影を見せ始めていて、だからこそこんな所で座り込んでいられるのだ。

「大丈夫ですか!？」

「ん……ああ、いういいあん……ん……ああ、美月ちゃん……」

レオ君やエリカちゃん、摩利先輩が救護される中で、ただ一人僕の方へ来てくれた美月ちゃん。その心配そうな顔がかわいい。あと走り寄ってきた時に揺れていた果実が癒し。

だが、流石に大丈夫ですか、と問われてへーキへーキモーマンタイ！ と答えられるような体調ではなかった。というかちよつと無理だった。

「あー……おう、いい、いい、あおえおういいあいあ……いおつお、えうえ……あー……もう、意識が、保てそうにないや……ちよつと、寝るね……」

「いい、いい、いい、いい……？ あ、青さん？ しつかりしてください！ 青さん!」
やつぱりまだ、茜ちゃんほどの翻訳力はないんだな、なんて事に苦笑しつつも、揺さぶられた程度で覚めることの無い目は次第に重くなり、僕は暖かな微睡の中へと落ちて行った。

……なんか本当に暖かくて、柔らかかった気がする。気のせいだよな。

*

あいいうういううあ えおううん

*

ヘリコプター特有の振動に落ちていた意識を取り戻しながら、僕はうつすらと目蓋を上げた。枕をしいてくれているのか、暖かで柔らかい感触が側頭部に伝わる。

そうしてぼやけた視界に映ったのは、圧倒的で暴力的なまでの破壊。

灼熱にして焦熱にして鮮烈な炎のドーム。

強く強く、記憶を揺さぶられた。

時は2016年。今から大体80年程前の別世界の地球で僕は生きていた。別世界と言つてもただ1点——魔法が存在しないとすることを除けばこちらとほとんど変わらない世界だ。

そしてその世界で僕は……多分、天寿を全うできなかつたのだろう。気付けば僕は、こちらの世界に生まれていた。

こちらの世界の、1915年に。

二度目の生を受けた時、しかし日本は戦争の真つ只中だった。

その時から僕は多少死にたがりだったのかもしれない。すぐに軍の戸を叩き、長く訓練や戦場を巡った。幸か不幸か、21歳の時にはお嫁さん……つまり結婚をすることまで出来た。もつとも、ほとんど会う機会なんて無かったが。

僕の最初に生まれた世界の通りに事が進んで、でも僕は何かを捻じ曲げる気にはなれなかった。もつと悲惨な結果になることが恐ろしかったし、何より僕がなにを言ったところで変わる組織でも無かったから。

僕は死にたがりに見えていたのだろう。

そしてそれは、僕が神風特別攻撃隊に自己推薦した時、確信に変わったはずだ。

僕が30歳の時だった。

周りからは止められた。勿論止めてこなかった、肩を押してきたお国至上の奴もいた。

奥さんには泣かれてしまった。何も言えなかったし、何も言わなかった。

自己推薦をした理由はとても簡単だった。

二度目の生などという贅沢を受けているのだから、僕の生は他の人の生よりも価値が低いと思っていた。僕が入る事で死ぬはずだった誰かが死なないのなら、それはなんて素敵なことなのだろうと、当時の僕は本気で思っていた。思いあがり甚だしいのは重々

承知だが、本当にそう思っていたのだ。

そうして僕は爆発と鉄の箱に押し潰されて死んだ。最終階級は軍曹だった。

だが、それで終わりじゃなかった。

気付けば自身の死後から135年もの月日が経った、平和になった日本に生まれてきた。

オイシヤサマの推測はほとんどが正しいのだろう。

僕は21世紀初頭から20世紀初頭へ転生し、20世紀中頃から21世紀終わりにまた転生を果たしたのだ。「物事の終端と先端を繋ぐ軌道をしつかり認識してきた」のだから。

こうして僕は、僕という魂は追上青という少年を蹴飛ばしてその身体に入った。

僕は知っている。追上青という少年が、僕とは別の場所に存在していた事を。

そして彼の行方は、美月ちゃんが見てくれた軌道の先……天にあるのだという事を。

それが天国という意味なのか、宇宙という意味なのか、はたまたアイデアの中という意味なのかは分からない。そういう分野を研究するためにも魔法大学に行きたかったんだ。

軌道を見る事が出来るのも、操る事が出来るのも、そして言葉の終端である母音ーツンしか操れないのも僕だけの話。僕という化たま成まし体がそうであるだけで、恐らく追上青君

はチート染みた力を使えないし、普通に言葉をしやべる事が出来るし、普通に魔法が扱えるし、普通に恋をして普通に結婚出来るような……そんな、普通の少年なのだと思う。エアやアイアンといった普通の魔法は、青君の魔法演算領域を使用させてもらっているのだから。

青君の妹である茜ちゃんはとても鋭くて、自身がちゃん付けされている理由をわかってしまっていたのだろう。彼女がちゃん付けに怒るのはそう言う理由だ。「他人扱いをしないで」と。

でも、仕方がない。あの21世紀を生きていた頃の年齢が不確定だから数えないとしても、僕はもう46になるのだ。奥さんももらっていたし、お酒も飲んでた。茜ちゃん含め、学友たちを子ども扱いにしてしまうのも仕方がないと、そう許してほしい。自分の妹だなんて、想えない。

いつか必ず、この身体は青君に返す。

もう十二分に僕は生きた。だから、僕はそもそも幸せになろうなんて考えていない。楽に生きたいならもっと方法はあったが、自分で茨の道を選んだのだ。残念だが、こればかりは変えられない。

九校戦のあの時、僕は小早川先輩のCADから化成体を追い出した。

僕に同じことをすれば、僕を追い出すことは容易なのだろう。

あとはどうにか、青君を引つ張つて来れば——万事解決だ。茜ちゃんにも本当のお兄ちゃんに戻つてきて、両親の本当の子供が帰つてきて、上手く意思疎通の取れない僕なんかじゃなくて、青君自身が友達と笑つて過ごす事が出来る。

だからもう少しだけ待つていてくれ、青君。

君の友達として、僕は必ず君を取り戻すから。

*

「青さん……大丈夫ですか？」

「ん……ああ、えいいあおん……ああ、平気だよ」

「よかった……ホツとしました」

近くで美月ちゃんの小さな声が聞こえて、僕も小さく返事を返す。

近くというか、頭上というか。

あとこの枕柔らかいし……その、手触りが、肌っぽいというか、布越しの肌っぽいというか！

「え……いあああ？え……膝枕？」

「いああうあ……司波達也？ 達也さんがどうかしましたか？」

キツと強い視線を感じた。

深雪ちゃんからだ。

「あんえおあいお……なんでもないよ……」

「そう、ですか？ ……でも、本当に……無事で良かったです」

「ああ、うん。おうおうおうおうおああ、うん。僕もそう思うよ」

この戦火で、誰一人死なずに帰る事が出来たのは……本当に、素晴らしい事だと思う。

*

「司波達也？ 達也さんがどうかしましたか？」

救助ヘリの中、隣で美月に膝枕をされていた追上青が、そう呟いたらしい。

彼の視線の先にあるもの。

それは、お兄様のマテリアルバーストによる灼熱の光球。

アレの術者を、この距離で見抜いたというのか。

「And end my wars……これにて俺の戦争は終わり、と……」

そう。あくまでここで終わるのは、このテロにおける戦争のみだ。

これが始まりである予感など、恐らくは自分や追上青以外の魔法師たちも感じている事だろう。

ここから、更なる苦難が待ち受けているだろうと言う、漠然とした不安も。

*

「いあ、いあ……（いや、いや）」

まさか、まさか。

十月にあつた横浜の事件から既にひと月まるまるが過ぎて、今は十二月。

僕はまだ学校に在籍できていた。

あれだけ暴れたし、なんだつたら人を殺めたりもしたのだが、全てが正当防衛、とのこと。わざわざオイシヤサマに確認してもらつたので間違いない。

オイシヤサマといえは、僕の軍属の取り消し要求を一切呑む気が無いらしく、だつたら翻訳機貸してくださいよと言つたら軍備品を外に出すのは云々と、まあ一応尤もらしい答えを返されてしまった。

この身体が僕の物だつたら軍に襲撃を仕掛けて翻訳機を奪い去るレベルの怒りがその時は湧いて来たのだが、流石に申し訳ないと思つたらしいオイシヤサマは代案を用意

してくれた。

それが、これ。

「お帰りなさいませ」

「あいまいおうおういいえんいいうい、おいうえあお第一高校一年E組、追上青」

「はい、認識しました」

二十代後半の女性……その声は非常になめらかで濃淡が無く、その瞳は何処を向いているか分からない無機質なものだ。

それもそのはず、この女性は Humanoid Home Helper……通称3Hと呼ばれる人型家事手伝いロボットで、この子の型番は「3HタイプP96（3Hパーソナルユース九十六年型）」。型番からわかる通り、最新も最新型な四次元ポケットの無いドラ○もんである。

「ああえいあंनी、あえつあつええーういおいえうえう？ 茜ちゃんに、帰ったつてメールしといてくれる？」

「はい、了解しました」

何が最新型かといえば、勿論この機能。

「追上青専用自動翻訳機能」！

多分この子をバラせばその装置が手に入るのだが、それで壊してしまったら意味が

無いし、恐らくオイシャサマの事なので僕みたいな素人が手を出せる位置に置いていないと思う。

ただ、この子のおかげで家族との意思疎通が大分楽になった。

この子自体が軍属の機械ということで友人々々には繋がらないように設定されているのだが、オイシャサマが特例として家族にだけは許してくれたのだ。

そう、家族との、メールのやり取りを！

茜ちゃんはあくまで僕のイントネーションから母音ーツン語を翻訳している。

なので、今までは文面での意思疎通は出来なかった。

それが、なんと！ 自動翻訳機能によって、この3HP96ちゃんが！ ウチでの愛称ミクロちゃんが！ メールを書いてくれるのである……！！

それを通して、ようやく僕の言葉は普通に伝わる！ 本当に、茜ちゃんの翻訳方法作成と上尾さんのプログラム作成には感謝の念しかない。

「いうおいあん、あおうあああんあうおえーうおあいあいんあ。おいしいいうおうあおああんえおえあいミクロちゃん、仮想型端末のゲームをやりたいんだ。お気に入りフォルダの7番目お願い」

「はい。起動します。『お気に入りフォルダ7番』ゲームアプリは検出されませんでした。が、このまま起動いたしますか？」

「えっえっ」

な……そんな馬鹿な!?

だつてそこには……そこには!!

「フォルダ内、テキスト1件、です」

「……いあいえ開いて」

「読み上げますか?」

「うん」

「肌色多すぎ。妹にこんなもの見せないでよね!」読み上げを終了します」

膝から崩れ落ちた。

いや、いや。

まさか、まさか。

CEROはDだったのに……!

何はともあれ。

こうして僕は、一応の意思疎通手段を得たのだった。

*

あいあんいううあ あおあおあうえあううあう

*

「ぐあー、わっかんねえー！」

「叫ぶな、鬱陶しい！」

豪邸も豪邸。

屋敷と表現する他にこの家をあらわす単語が見つからないような、そんな北山さん家邸宅に僕、レオ君、エリカちゃん、美月ちゃん、ほのかちゃん、幹比古君に達也君、深雪ちゃんはお邪魔していた。ペこりと会釈をくれた航君は良い子だと思う。彼になら妹を上げてても良いぞなもし。

「なあ、涼しそうな顔してるけどよ、青も結構やばいんだろ？ 定期試験」

「あー……うん」

結構、なんてレベルじゃあないが。

やばいかやばくないかで言えば——どちらかと言えば、超絶ヤバイ。

ミクロちゃんが使えるのはあくまで家の中だけで、学校での僕は普通に今まで通りだ

から。

無論勉強はしているし、なんだつたら満点を取る自信だつてある。——母音ーツン以外を書ければ、の話だが。

「……そういえば」

そんな緊迫——というほどでもない空気の中、ポツリと。

雫ちゃんが、眩いた。

「実はアメリカに留学する事になった」

「Wha^{ウァッ}t?」

「ごめん雫もう一回言ってくれろ?」

理解が及ばなくて、雫ちゃんに聞き返す僕とエリカちゃん。

「実はアメリカに留学する事になった」

一字一句変わらずに雫ちゃんは言う。

僕とエリカちゃんの頭上には、疑問符が浮かんでいる事だろう。

いや、単語の意味も文の意味もわかるのだが、意味が解らないのだ。

いや、意味はわかるのだが。

魔法師というのは国の資源だ。

それも軍事資源。表面上は手を組んでいるものの、競争相手といつても過言ではない

アメリカへ魔法師を渡らせるなんて、政府が許すはずもない。

だが、雫ちゃん曰く交換留学だから許可が下りた、とのこと。

プラマイゼロ、つてこと？

まさか。

検索が出来るようになった僕は、雫ちゃんの家柄……つまり北山家の事もある程度は調べている。こう言つては何だが、雫ちゃんにもしものことがあつても、雫ちゃんを人質にとつても、雫ちゃんがあちらで何か粗相をしても、日本とアメリカの両方に損しかない。

それとも、それほどに価値のある人材が日本に来るといふことだろうか？

「じゃあ、送別会をしないとな」

達也君が言う。

……素晴らしい案であるはずなのに、こうも違和感を覚えてしまうのは、やはりあの黒いヒトガタが彼自身であった事実が焼き付いて離れないからだろうか。

何故かあの十月の事件以降は、あの変な視線を一切向けて来なくなつた彼。

助けてくれた事には感謝しているし、青君の身体を治してくれた事は言葉が尽きない程に礼を言いたい。

だが同時に、僕をこの世から滅そうとしていたのも彼なのだ。

「いえんああああ……ジレンマだなあ……」

まあ、乞い願わくは、彼が僕への興味を失っている事だろうか。

*

「When we up…俺達の出番か……」

その小さな呟きを、達也は聞き逃さなかった。

アメリカ。そして、青の目的。

また一波乱あるのだということは火を見るよりも明らか。

横浜の一件では、俺の戦いが終わった、という旨を青が話していたことを妹から聞いていた。

だが、達也は気にしない事にした。

彼らの目的がアメリカにあり、自身や深雪の妨害をしないというのなら、九島烈の懐刀と呼ばれているこの長身の男に深く関わるべきではないと、そう判断したのだ。

そしてそれさえ気にならなくなれば、この男は幹比古やレオ達と同じ、単なる学友でしかない。

此処で初めて、達也は追上青を学友であると認識したのだった。

*

2096年の元旦を、僕は——家で過ごしていた。

より正確に言うならば、家の中のこたつの中で、マイクロちゃんに寄り添われながら仮想型ディスプレイを付けていた。

「音声メッセージを再生いたします。」

『青兄、今年くらいは初詣行こうよー、去年はゼツタイ厄がついてまわってたんだから、神様に取ってもらった方がいってー』

再生を終了いたします」

「んー、おうあいああいあああーんー、僕神様嫌いだからなー」

なんせその名前のついた作戦で死んだモノでして。

何よりその厄は、僕に憑いているわけじゃないと思う。

一年E組の誰か。というか、達也君の周りの誰かにねばつくく憑いているのだと思われる。だから、僕の厄を取っても無駄なのだ。

「2件目の音声メッセージを再生いたします。」

『これ聴いてるって事は、来なかったんだね……。はあ、お母さんがお雑煮作ってくれ

であるから、暖めてそれ食べてね。おせちは冷蔵庫だから』

再生を終了いたします」

「うんー、あええうあええう。えついあおいいいうんー、食べてる食べてる。めっちゃ美味しい」

みよーん、とお箸でお餅を伸ばしながら、行儀悪く答える。

どうせ誰も見ていないのだからよいのだー。

「3件目の音声メッセージを再生いたします。

『あと、何回も何回も言うけど、茜ちゃんって呼ばないで。折角メール打てるようになったのに、文面でも茜ちゃんはや・め・て。やめなかつたら今度から青兄の事兄貴って呼んでやる！ やさぐれてやるから!!』

再生を終了いたします」

「うんー、ああつあおあえいあんーうんー、わかつたよ茜ちゃんー」

兄貴呼びもいいものだ。

まあ、どうせ茜ちゃんは自分で自分に耐えきれなくなつて、元の呼び名に戻すのだから。過去も兄貴とか、なんなら青君なんて呼び名にしようとしたこともあったが、悉くが失敗している。失敗している事を覚えていないのか、無かつたことにしているのかはわからないが。

「4件目のメッセージを再生いたします。」

『青君、物は相談なんだがアイオーンを改良してみないか？ ようやく翻訳機を通して君の言葉が聞けるのだし、折角だから移動系等の魔法を強化したり、他の魔法を増やしてみたりしたいのだが……どうだろうか。もし都合が付くのであれば、私のメールアドレスに日にちだけ送ってくれたまえ』

再生を終了いたします」

「ん？ いあお、あえああ？ん？ 今の、誰から？」

「あけおまな上尾愛様からです」

「あー」

僕のアイオーンを作ってくれた魔工技師さんだ。

いつもはこんなテンション高くないから、わからなかったや。

「いいあう、いうあえー一月、五日でー」

学校が始まる前に行っておきたい。

あの学校、すぐテロとかに会うからね！

「送信いたしました」

「うん、あいあおーうん、ありがとうー」

ああ………炬燵つて、いいなあ。

* 平和だなあ……。

第二部 ダツテガーネメ編

あいあんいうういいあ あいあいんあ

新年。

あけましておめでとうございます、略してあけおめ、さらに略してあお。僕でも言える新年の挨拶である。

言う相手はいないが。家族相手なら、略さずに言う。

とまあそんな話は置いて於いて、あ、でもこれは一応記録しておこうかな。

初夢……というものがある。人体医学的にはなんの変化も無いのだが、一応、年の切れ目、区切りに見る特別な夢のこと。一富士二鷹三茄子つてやつね。

僕はそれが悪夢だった。

実は初夢が初めての悪夢というわけじゃなくて、あの横浜事変が終わってから一月後くらいから見るようになった夢であるのだが、一応、新年あけましての夢も変わらずに悪夢だったので、初夢が悪夢である。

夢の内容は、どこかよくわからない場所……というか方向へ誘われるというもの。

おいで、おいで……ではなく、こちらだ、お前の居場所はこちらだ！ という、どこ

か威圧的なもの。

初めは横浜事変で強く思い出した前世の……戦争の記憶が見せているPTSDかとも思ったのだが、前世で強く誘われた経験など無い。というか、僕はトラウマになる程あの記憶を後悔してない。満足してやったことだから。

じゃあ何なのか、と考えた結果……アレはつまり、サンズ・リバーの向こう側で、あの時共に死んだ仲間達が手を引いているのだと、そういう結論になった。

だつて僕は死んでいて、死んでいるはずなのに追上青君の頭に憑いちやつて。

本当に居るべき場所があたりであるのは、間違いない。お前だけずるい、お前もこちらにこい！ という、強い怨念みたいなものが、僕を引きずり込もうとしているんじゃないか。そう考えたわけだ。

ま、例えそうであつたとしても、行ってやるつもりはないのだが。

青君が戻ってきたら、その時は潔く、意気揚々と、「そんなに僕の事が好きだったのか！」とでも言いながら飛び込んでいくつもりではある。もしかしたら前世の奥さんにも会えるかもしれないね。

ただ、疲れはするもので。

悪夢は悪夢なのだ。何処か知らない場所に誘われると言うのはストレスで、何より起きている間はこうやって分析できるものの、寝ている間は対峙している……気がする。

正直、あけましての授業は酷く疲れていて、なんなら午前の座学はがつつり睡眠した。なんだかざわめかしいとは思っていたが、それもいつもの事だ。特に達也君の居るこのE組はいつも騒がしい。彼が「騒がしい」の中心に居ながら静かに過ごしているのは少々腹立たしい。

ちなみに中でも騒がしいのはもちろんレオ君とエリカちゃんである。あの二人はキヤイキヤイワンワンニャーニャーと、犬猫最終決戦でも繰り広げているのではないかと思う程に騒がしい。大抵は猫の勝利で終わるのだが。

睡眠と闘いながらも、なんとか午前最後の実習をこなした（と言っても結果はお察しである）僕は、うつらうつらとする頭をなんとかすつきりさせるため、なんとか外の水道に辿り着き、なんとか顔を洗ってなんとかかんとか……ハッ。

少しだけスッキリした（きもする）頭で学食の方へ顔を出すと、見慣れないパツキンチャンネルが。ごめん古すぎたね。金髪美少女が。

あれが雫ちゃんと交換留学で来たアメリカ人かな？

顔を洗った直後なので目がしばしばするが、それをはねのけるほどの輝かしい金髪美少女。注視してみると、周りには見た事のある……というか、ありすぎるメンツが。

「エリカ、ミツキ、レオ、ミキヒコね。よろしく」

どうやら自己紹介をしているらしい。ミキ☆ヒコ君以外は流暢な発音で、僕より日本

語が上手い。まあ当たり前なのだが。
と、レオ君と目があつた。

「おつと、そのノツポも紹介しておくぜ。アイツは追上青。英語とフランス語はイけるけど、日本語はあんまり得意じゃないからな、むしろリーナと会話が弾むんじゃないか？」

「へえ、そうなの？　ワタシはアンジェリーナ・クドウ・シールズ。よろしくね、アオ」
……何？

え？

え？　か、神様……は、嫌いだが、今、今なんて言った？

アンジェリーナ、つて……言った？

驚きに目を見開く。開かざるを得ない。

唇をわなわなと震えさせる。震えさせざるを得ない。

こんな……こんな、美少女が……。

「アン……？」

名前を呼べる女の子だなんて!!

*

その変化は、劇的だった。あまりにも、そう、あまりにも。

早めに教室を出たにも拘らず、遅れて食堂に來た追上。

その時はまだ、何かを思い起こす様な、思いつめたような顔でリーナを見つめていた。それだけだった。

だが、レオの仲介の後……リーナの名前を聞いた瞬間、表情は懷疑から驚愕へ変わった。

まるで、この世界で出会えるとは思っていなかった相手に出会えた、とでもいうような、感動と感激と驚愕、様々な感情が入り混じった表情に。

「アン……？」

さらには信じられない物を見たかのような声色で、そう呼ぶではないか。

「えっ？ あ、その……アオ、ワタシの事はリーナって呼んでほしいの。そっちの方が、呼ばれ慣れているから」

だが、リーナの方に全く心当たりはないようで、困ったように呼称変更を頼む。

その理由を達也は大体見抜いていたが、確証を得た訳ではないので口を噤む。

「あ……あ、ああ……うん……」

そしてリーナの反応に、追上は消え入るような声で了承の意を返す。

それは「大きな期待が外れてしまった」、とでもいうような声。

正直な所達也は追上がここまでの感情を表に出す事自体に驚いていたが、それ以上に色々な推測がバタバタと音を立てて立ち上がり始めていた。

リーナの正体は大体わかっている。

追上の正体も判明している。

追上の所属組織と、その目的もわかっている。

であるにも拘らず、追上がここまでの感情を表に出したのは……組織ではなく、個人の問題か。

アン。リーナと呼ばれ慣れる前の愛称。つまりは、幼少期。

あの驚き。リーナの正体と所属組織。秘匿されるべき組織。

追上のおかしな経歴。小さい頃から海外にいたという、一般人である家族の証言。

リーナのクドウ姓。追上は誰の懐刀だったか。

導き出される答えは――。

そこまで考えて、達也は頭かぶりを振った。

これ以上は踏み込みすぎであると判断したのだ。

見るからに意気消沈した追上から眼を外す。

それはもしかしたら、「なんだか本当に落ち込んでいるようだな」という、彼なりの気

遣いだったのかもしれない。

まさか達也も、追上が「人生で最高レベルに落ち込んでいる」などとは思っていないかったのだが、結果的に彼が目をそらした事は、僅かとはいえ青が目の端に涙を浮かべているなどという、ある意味で決定的シーンを見逃す次第となったのである。

*

「オイウエアオ、ですか？ その方が、過去のリーナを知っていると？」

第一高校から二駅ほど離れた、ファミリータイプ少数数家族用のマンション。

そこに、三人の人間がいた。

一人はリーナ。アンジェリーナ・クドゥーシールズ。

一人はシルヴィア・マーキュリー・ファースト。

最後の一人はミカエラ・ホンゴウ。

上からアメリカはスターズの「アンジー・シリウス」、同じくスターズの惑星級魔法師「マーキュリー」、USNAから派遣された諜報員である。

「ええ………確証はないんだけど、あそこまで」如何にも「な反応をされちゃうとね………」
リーナは思い出す。

レオに紹介された、追上青という人物が自分に向けた視線を。

あれは、明らかにアンジェリーナ・クドウ・シルズという一個人を知っている驚愕だった。そんなはずはない。リーナは幼いころからスターライトの隊員候補として訓練を受けていたし、何よりリーナに覚えがない。

だが、それよりも前……リーナが物心つく前の話であるのなら、文字通り話は別である。

そしてその時期に出会っていた人間が、日本の魔法科高校にいて、且つリーナを覚えているとなると、色々と都合が悪い。

「ふむ。まあ、日本の高校生を調べる程度なら、特に問題は無いでしょう。どれほど隠しているか、こちらの目を逃れる事は出来ない筈です。それほどの隠蔽技術を有しているのだとすれば、リーナの前でそんな失態を見せるはずがありませんからね」

「ええ、お願い」

ただ……と、リーナは心の中で呟く。

リーナは一つ気になっていた。

それはターゲットの少年……司波達也が、彼、追上青を鋭い視線で見ている事。

彼らが「信頼のおける仲間」と呼べるような間柄ではないことは、いくらスパイに向いていないと言う自覚のあるリーナでもわかる。

タツヤに警戒されているアオ。自分を知っているらしいアオ。

考えても答えの出ない事であるのに、奇妙な不快感が頭を支配して離れない。
不快感？

「……………」

それは、直感だったのか。

無意識に思ったそれは、自覚をすると、泡のように消えて行つた。
その感覚の再来は、すぐに彼女が向き合う事態で明るみとなる――。

*

あいあんいうういあ　　いいおいえあああつお

*

週明けの教室は、なにやら怪事件とやらの話とやらでもちやら……もちきりだった。やらやら。

ミクロちゃんを使つてまで何かを検索する程知識欲の無い僕にとって、その話は新鮮。

しかもこの3000年間近の近未来……もとい現代において、『吸血鬼』なんていうのだから驚きである。

話題で餅をついているのはいつもの面々も変わらない。

特に血の気高いエリカちゃんは達也君の机にぐんにやりと座つて彼に話しかけている。

吸血鬼、臓器売買ならぬ血液売買ではないのか、とか。

それだと一割しか抜かなかつた意味が解らない、とか。

血液工場、死体放置など物騒な単語ばかりが出てくる。

吸血鬼。ヴァンパイアか、ドラキュラか。反対にしてアルカードか。

僕はどっちかというといイブモズなので、妖怪としての格は下の下だろうなあ。あいや、タソウグかも。

「いやですね、人間主義みたいな風潮が強くないといいんですけど」

美月ちゃんの言った、人間主義。

確か、魔法師を排斥して人間だけの元の社会に戻ろう、という主張を掲げている人たちの事だったか。

まあ、気持ちはわかる。

僕だって意味の解らない軌道を粉々にする能力を持った魔法師とか、精神まで凍らせてしまう凄まじい魔法を持つ魔法師とか、今でも怖い。

その銃口が絶対にこちらに向かないという自信が無いのだから、尚更に怖い。

僕に身を守る術が無かったら、やりたいことがなかったら、早々に学校をやめていただろう。

だから彼らを批判する事は出来ない。出来ないと言うか、するつもりがない。

僕だって魔法の無い時代を二つも生き抜いたのだ。別に、魔法が無くとも生きていく。

殺されると言うのなら全力で対抗するが、使つてはいけなと言われるのなら普通に従うだろう。僕の問題を解決した後、ならだが。

「おーっす」

と、レオ君がその輪に入ってきた。

なんだかお疲れモードだな。夜に何をしていたのだろうか？ 他意は無い。とりあえずそろそろ一限目。朝の井戸端会議は終わりだよー。

*

「……………さん？ ……青さん？」

「ん……………」

美月ちゃんの声に目を覚ます。

酷く悪い夢を見ていた気がする。気がするだけ。

それも全て美月ちゃんのスイカで癒されました。

「……………ああ……………」

大きく欠伸を一つ。

辺りはすっぴかり茜色。

夕方だ。

「おおいえうええあいあおう起こしてくれてありがとう」

「いえ、大丈夫です。……あの、酷くうなされていましたが……」

「うん、あううあつああえうん、悪夢だったからね」

「大丈夫、ですか？」

「うん」

どうやら待っていてくれたらしい。

頭が下がるね、ほんと。

……悪夢。

適合がどうのとか、血液がどうのとか……正夢じゃないといいんだが。

「あえおうあ帰ろうか」

「はい」

いやあ、良い子。

幹比古君は幸せ者だねえ。

*

次の日、レオ君は学校を休んだ。

なにやら訳知り顔の達也君たちは暗い雰囲気。何かあったのだろうか？

「その……レオさんが」

かくかくしかじかまるまるうまうまなっとうねばねばよーんびよーん。

そんなふざけた纏め方をしていない場合ではない。美月ちゃん曰く、エリカちゃんからのメールにより——レオ君が、吸血鬼事件の主犯、吸血鬼の被害に遭ったと知らされたのだ。

ミクロちゃんのメールアドレスは家族にしか教えていないので、僕には届かなかったという次第である。

僕の中の吸血鬼に対する敵愾心がぐーんとあがった。

「放課後、皆さんでお見舞いに行くことになりましたけど……」

「うん、いうお行くよ」

学校なので、小声で。

コエカタ○リンのような軌道で飛ぶならともかく、音は波なので軌道を操り辛い。だから、こちらにできる事……声を小さくするという手法で対策を取るのである。大丈夫だと、いいなあ。

*

「多分、レオが遭遇した相手は『パラサイト』だ」

放課後、レオ君の病室に向かった僕達は、レオ君に事の次第を聞いていた。

戦っている最中に力が抜ける、と言った時点で幹比古君は何かに気付いたようで、彼はその吸血鬼をパラサイトと呼称した。

幹比古君曰く、パラサイトとは超常的paranormalな寄生生物——略してパラサイトで、妖魔や悪

魔、ジン、デーモンといった、各国でそれぞれ呼ばれていた“ソウイウモノ達”の事を指すのだそう。

僕がまさにそれだよ、とは流石に言えなかった。美月ちゃんがいるとしても。

人に寄生して、人を人以外の魔性に作り替える。うわ正に僕じゃん、とは思った。

「レオ、君の幽体を調べさせてもらってもいいかな」

「お、おう。良いぜ」

疑う事無く、レオ君は応じる。

幹比古君のすごい剣幕もさることながら、レオ君の度胸もやっぱりすごい。

曰く、幽体というのは精神と肉体を繋ぐ霊質で造られた、肉体と同じ形状の情報体らしい。まず霊質がわからない。でも要はアストラル体ってことでいいのかな多分。

幽体とは精気、つまり生命力の塊で、パラサイトはこれを食べるのだと。あ、僕とは違うね、良かった。僕はそんなもの食べないし。

で、幹比古君はこの幽体を調べる事が出来るのだと。
なんで君二科生なの？

そして、何か大層な呪具（というらしい）を取り出して、瞑想を始めた。
ものの数分。

「なんとというか……達也も大概凄いと思ったけど、レオ、君つて本当に人間かい……？」
「おいおい、随分なぐ挨拶だな」

幹比古君の言葉に気分を害したような顔になるレオ君。

だが、幹比古君は気付かない。

なんでもレオ君は並みの魔法師なら昏倒して意識不明になる程精気を抜かれているらしく、こうして起きて話していられるのは有り得ないのだとか。

その悪意の無い物言いに、レオ君は声を荒げる事は無い。傷ついてはいるが、抑えている。

とても高校生の忍耐力には思えないよ。

「そろそろ面会終了の時間です」

その元気な様相に忘れがちだが、彼は病人。

無理させてしまつてはお見舞いの本末転倒。

エリカちゃんとカヤさん（どんな字か知らない）を残して、僕達六人は病室を出るの

だった。

*

「やつぱり先輩たちと協力した方がよかつたんじゃないかな……」

これで通算十一回目となる弱音を吐く幹比古君。まあ、確かに同意だ。あんまりにも危険すぎるから。

だが、エリカちゃんはそんなことは聞き入れない。

報復。この一点に染まっている。

「青も何か言つてやつてよ……」

「え？ うーん……」

レオ君や美月ちゃん程僕を理解しているわけではない幹比古君は、よくこうやつて僕に無茶振りをする。何か言つてやつてよと言われましても。

今僕達は、深夜の街を三人で歩いている。大分早歩き。

目的は勿論、吸血鬼。ヴァンパイアハントである。

「ミキ、どつちっ？」

エリカちゃんと幹比古君に同行するに至つたのは、エリカちゃんの「アンタも腹の虫

がおさまらない、つて顔してるわね」という言葉。

抑揚高く頷いて、此処に至る。

ちなみに幹比古君は案内役らしい。

案内方法は、

「……はあ」

交差点の中央に立てた棒。

直立するソレは、幹比古君が離れてから数秒後——ある方向に倒れた。

そう。

棒占いである。これ運じやないのかなあ、とか思う。いくらなんでもそんな魔法は無
いだろうなあ、とかも思う。

でも幹比古君は真面目だし、エリカちゃんも信じている。

僕が口を挟むわけにもいかない。まあ、何もなければいいのだ。レオ君に
手を出されたとあって、達也君が出ないとも思えないしね。

「……ちか……」

でも、そういう時に限って本命を引いちやうんだよな……。

目先にある、防災用の小さな公園。

そこに、乱舞する軌跡を認めながら……僕は二人の後を追った。

*

「見つけた！ ミキと青はコートの方を。あたしは仮面を抑える！」

お、初めて青って呼んでくれたな、なんて感想が出るのも束の間、すでに交錯……と
 いうか戦闘の始まっているコートと仮面に対し、エリカちゃんも物凄い速度で突っ込ん
 でいく。

幹比古君に目配せをして、僕も行く。両手にはそれぞれ長さの違う鉄棒。流石に刃物
 を持ち歩くわけには行かないからね。

上尾さんに頼んで色々と機能の追加された（と言っても微々たるものだが）アイオー
 ンを蹴り進め、コートの方へ肉薄する。

帽子に白い覆面、ロングコート。

武器は持っていない。リユーカーンフーと同じく徒手空拳か。

「エアツ！」

軌道修正を伴った右の長剣……もとい鉄棒による打撃。

側頭部にあたれば一撃で昏倒必至のソレを、しかし相手は躲す。スピードタイプ！

「!？」

だが、躲すのは僕に対して最大限に分が悪い。

その軌道は見えている。見えているのだから、対処も出来る。

「アアイアンツ!!」

思いつき振り抜いた脚（というかアイオーンに）アイアンをかけ、ロングコートを蹴り飛ばす。めちやくちや重い、関係ない。軌道操作に重量は関係ない。

さらに追撃。鉄棒を滑らせて中間を持ち、槍投げをするような体勢で身体を引き絞り——射出!

「!」

鉄棒はガンツという音を立てて弾かれる。慣性に従い、ロングコートも叩き落された。

さつき蹴った時も思ったが、人体の立てる音ではない。何か魔法を使っているのだろう。

こつちが一つ武器を失ったと見るや、ロングコートが急接近してくる。

僕をまじまじと見つめて——まあ、回しやすい視線だね。

「!？」

自分が何故倒れたのかもわからないだろうロングコート。その背中に、弾き飛ばされていた長い方の鉄棒が突き刺さる。勿論計算して弾かれた、なんてことは無い。チート

染みた能力万歳である。

ただ、自由落下程度の威力しかないので奴にダメージは無いだろう。

そもそもダメージ目的ではない。

鉄が奴の身体に触れている事が目的なのだから。

カツと夜闇には凄まじい光量——局地的な雷がロングコートの身体を貫く。

「アアアアツ！」

女性っぽい体つきなのに、悲鳴は獣のようだ。

人を造り変える魔性。なるほどね。

「ツ、不味い！」

「A-^{オー}ll-ri-^イght」

背後、倒れるロングコートが幹比古君の雷を溜めて放とうとしていたソレ。本物の雷は軌道が非常に見えづらいのだが、これは魔法。何処に落ちるか、どこに放たれるか決まっているモノならば、軌道が存在する。

であれば、僕が操れるのも道理である。

「軌道屈折術式!？」

「貰った!!」

エリカちゃんと闘う仮面が何かを叫んだが、それが隙となつたのだろう、エリカちゃ

んの勇ましい声が聞こえた。

あつちは大丈夫かな。まあ、こつちを手早く終わらせればいい話か。

放たれた雷撃の軌道を逸らし続ける事で、まるで僕自身が帯電しているかのように身体を周囲を雷撃が走る。

放出系魔法は拡散するから苦手だったのだが、いつぞやの小早川先輩のCADに巣食っていたナニカを取り出した時から、上手く操れるようになった。拡散すると言ってもそれは端の話。芯を抑えれば操り様はあるのだ。

(……何故、我々に敵対する)

「あ?」

今何か――。

「青、早く!」

「っ、おう!」

ロングコートが放ち続けていた雷撃の全てをロングコートに差し向ける。

目を灼く光量。あと僕が凄く熱い。雷熱い。めちゃくちゃ熱いっていうかこれ火傷してる。

(お前はこちら側だろう!)

アアアアア

「a r r r e t e ! お縄だ!」

ともすれば本物の雷にも届くかもしれない雷撃がロングコートを焼く。

過言である。こんな至近距離で本物の雷が直撃したモノの傍にいれば、僕どころか幹比古君も無事じゃすまないだろう。

それくらい威力はありそう、という話。

幹比古君とのコンビネーションアタック。

名前は……そうだな、デイグ・ヴォルトとか……あ、イとオしか発音できないや。

「アアッ！」

「……ああつーやばつー！」

未だ意識を失っていないのは正直信じられないのだが、あろうことかロングコートは雷撃を収縮し始めた。

全方位に放つつもりだ。これだから放出系魔法は嫌いなんだ！

全方位だと、軌道もクソもない！

エア——最初のベクトルが足りない。間に合わない。

軌道操作——何を？

アイアン——雷撃は防げない。アイアンも同じ。

残念ながら新しく追加された魔法に克人先輩のようなバリアは入っていない。

全力で逃げる——も、相手の魔法が放たれる方が早い。

万事急須か。お茶を淹れてどうするんだ。

その雷光を。

いつか、九校戦行のバスを追いかけている時に見た——不可視の暴風が消し去った。風上にいるのは、バイクに跨ったまま銀色の拳銃をこちらに向けている、ヘルメット。

……達也君か。

あ、という声。幹比古君の方を向けば、幹比古君も此方を向いている。

「あ」

ロングコートが逃げ出していたのだ。

そりやそうだ。僕の注意が逸れば、そうするのは道理。

仕方がないので視線回しを行おうとして——一瞬にして辺りを包み込んだ莫大な光に目を灼かれ、仰け反った。

破裂音からして閃光弾だろうが、折角雷光から暗闇に慣れかけていた目にそれはダイレクトアタックが過ぎる。

視力が回復した時には、仮面の魔法師もロングコートも、姿を消していた。

……おかしいな、既に逃げていたロングコートはともかく、仮面の魔法師まで見逃すなんて。僕の軌道視認を掻い潜ったっていいのか？

……それは、脅威だなあ。一難去つてまた一難。

*

「三人とも、無事か」

珍しく僕の安否も気遣つてくれた達也君に頷く。

実は腕を火傷しているが、まあ些細なモノだ。

その……アンダーウェアこそ着ているものの、上着を無残にも切り裂かれたエリカちゃんに比べれば。

「青、それ……」

「いい」

一番近くで戦っていたからだろう、気付いている幹比古君が何かを言いかけるが、制止する。出来るだけ達也君のあの治癒魔法のお世話にはなりたくない。あれを受けてから悪夢を見るようになったのだ。何かあるのかもしれない。

「どうして達也君がここに？」

「幹比古から連絡を受けていたからな」

この場の三人の総意をエリカちゃんが代弁したと思つたら、二人だったようだ。

即ち、幹比古君は知っていたということ。

エリカちゃんのジト目が飛ぶ。

でも、頼れる人に頼るのは正しい選択だ。

「そろそろいいか。人が集まってきているぞ」

その言葉に、急いで幹比古君がトレーサーのモニターを視る。

僕にはよくわからないが、光点がいくつか見えた。エリカちゃんの言っていた他の捜索隊、というやつだろう。

「エリカ、乗って行くか」

「うん、お願いっ」

達也君がエリカちゃんを後ろに乗せる。

ノーヘルは罰金だぞ〜。

「達也、僕はっ!?!」

「幹比古は追上に乗せてもらえばいいだろう」

「ぷはっ」

エリカちゃんが噴き出す。

乗せる、と来たか。

ふむ……よかろう。

「え、ちよつと、青？」

「うん」

「うんじやなくて！」

俵抱きとお姫様抱つこ……後者でいいかな！

*

テレビの中継車に偽装した移動基地。

そこで、アンジー・シリウス——の姿のままのリーナは、エリカにやられた傷を癒しながら愚痴と思案を巡らせていた。

(……一瞬しか見えなかつたけど、アオの使った軌道屈折術式……あんな強度、見た事が無い。……いいえ、つい最近。アオのものには遠く及ばないけど……サリバン軍曹の使った軌道屈折術式は、もともと彼が使っていたものと比べ物にならない強度を持つていた)

彼女が処理した部下。

その部下の彼が使っていた術式と、先程見た追上青の術式。

こんな短期間に同じ術式を偶然使う者が現れるなんて、リーナには思えない。

(それに、アオは凄まじく高い身体能力を持っていた。背も高いし体格も良いから有り得ないとは言いい切れないけど……人間をあんな距離まで蹴り飛ばせるもの?)

女性型とはいえ、人間の身体を何mも蹴り飛ばした上に、そこに投擲した棒を当てる。

反射神経、動体視力共に高校生の成し得るモノではない。

(……もしかして)

思いついた可能性を、リーナは捨てきる事が出来なかった。

*

あいあんいううあんあ　　おうあいあいい

*

結構なドタバタがあつた次の日。

夜にあんなに激しい戦闘をしたにも関わらず、僕や幹比古君、エリカちゃんは何もお咎めなし。先輩たちに呼び出される事も、警察に事情聴取されるような事も無かつた。魔法師特権つて怖いね。

唯一達也君だけは真由美先輩と克人先輩に連れて行かれたようなので、そこで少しお小言があるのかもしれないが。

吸血鬼に関するウワサ、及びその被害者のウワサは留まる事を知らず、広まる一方で。僕も実物を見てしまったものだから真つ向からの否定なんて出来ない。出来ないが、余り尾ひれがつき過ぎると危ういなあ、というのが正直な感想である。

敵の正体が“ちよつと異常出力な魔法師である”と言う事がバレたら、今までに膨れに膨れ上がった尾ひれがそのまま「恐怖」として魔法師全体に向けられる視線になるだろう。そうなれば人間主義の思うツボというか、これ幸いにと排斥運動を激しくする事は容易に予測できる。

そうでなくとも、「魔法師の中には連続殺人を起こすような者が存在しうるのだ」という認識は厄介だ。

魔法の使えない一般人にとって、善良な魔法師と悪意ある魔法師の区別なんてつかないのだから、無意識のうちに人間主義に取り込まれる結果となるだろう。

早期解決が望ましい。

多分それは、達也君も、先輩方も、なんなら警察も。

わかっていることなどは、思うんだが。

早期解決といえば。

「ああ……はあ……」

昼寝にまでついてくるようになったこの悪夢を、ホント、早い所どうにかしたいものだなあ。

*

「ん……？」

夕方……というか、夜の帳の落ち始め。

フルフェイスだが、見覚えのあるその姿に気を引かれた。

達也君だ。

バイクに乗って……どこへ、なんて。

分かりきった事だ。吸血鬼事件の搜索、もしくは解決に乗り出したのかもしれないな。

「ああ、あうあうんいああえおうまあ、達也君に任せよう」

この間はエリカちゃんと幹比古君が居たから引き下がらなかつたが、リユーカンフーに学んだ通り、異常出力を持つ魔法師は出来るだけ相手にしない方向で行つた方が良い。

対人戦で負けるつもりはないが、相手が人間とも思えないような行動をしてくるのなら話は別。昨日戦つた限りでは僕でも対処できそうだったが、それでも隠し玉があるかもしれないことを考えて自重するのが正しい判断だろう。

「へえ……と言う事は、キミは既に何かを掴んでいるのかな？」

「ん？」

振り向く。

光る頭。

「やあ、車内から失礼。追上青君だね。」

僕は九重八雲という者だ。まあ、九島の懐刀である君なら、既に知っているとはおも

うけどね。ちよつと付き合つてくれないかい？」

電動四輪から、いかにも胡散臭い糸目が、僕を見て笑つていた――。

……え、誘拐？

*

「A w a r e, O u t w i t a n a r r o w : 意識を逸らす事が出来たようだな
……」

達也の向かった方向、そして今自分たちが向かっている方向をみながらボソつと呟かれたその言葉に、深雪は顔を顰めた。

兄の、そして自身の師でもある九重八雲に連れ出され、ハイウェイに乗る寸前に何かに気づいたように弟子に指示を出した八雲が示したそこに、彼はいた。

追上青。

兄に聞く限りでは、相当複雑な経歴を持つ、一概には味方とは言えずとも、とりあえず敵ではなくなった存在。

だが、今の言葉は……。

まあ、乗つた乗つた、と非常に軽く、しかし仄暗い何かを感じさせる八雲の言葉に、一

瞬の躊躇を見せながらもキャビネットへ乗り込んできた追上。

既に走行を再開し、ハイウエイへと乗り込んだキャビネットの室内の雰囲気は、重い。八雲と、深雪。ハンドルを握る八雲の弟子。

世俗を捨てたとはいえ、兄と自身の師である八雲とその弟子は言わずもがな、深雪個人も特殊な異能が封じられているとはいえ、相当な戦力を有する。

にも拘らず完全アウエーであるはずの追上が自然体なのは、この三人を相手にしても問題ない自信があるからか、それとも敵対する気が無いからか、はたまた……。

「さて、直球で聞くけれど……追上君。

君は怪異……ああ、君達の言い方だとパラサイトだったか。その正体を知っているね？」

「……いいえ？」

肩を竦め、両掌を上に向けて。

何を言っているのか全く分かりませんね、とでも言いたげな表情で、追上は八雲の問いかけを否定する。

パラサイトの正体——。

西城レオンハルトが襲われ、エリカ、幹比古、そして達也が追っている吸血鬼の、その正体を。

追上青は知つていながらに、黙っていたと言うのか。

「知らないはずがないんだ。」

だつてキミ——同類だろう?」

その言葉を聞いた瞬間の、追上の表情。

それは怒りや困惑——ではなく。

気付き、だつた。

「……ふむ。その様子だと、もしかして君は“捕えられた”のかな?」

「Enoughもういい」

八雲の更なる問いかけを制止し、追上は居住まいを正す。

それは兄にも自分達にも見せた事の無い——おかしな表現をすれば、“大人”な雰囲気

気だつた。

「Where did you know?どこで知つたんだ?」

「知つた、のではなく、知つていたんだよ。」

僕達忍びは、君みたいな者を古来から相手にしてきたからね」

「……Really……そうかい」

ああ……と、感慨深いような溜息を吐く追上。

二人の会話は断片的にしか理解できないが、多少空気が和らいだことを、深雪も……

加えてハンドルを握る八雲の弟子も感じ取っていた。

八雲の放つ言葉、所作には同情が。

追上の雰囲気には、疲れが。

ようやく一つの山場を越えた、という……憑き物が落ちたような。

「それで、物は提案なんだけどね。

彼らを追い返す事に、協力してやってくれないかな。僕は忍びだから、僕個人の用件以外に口も手も出すつもりはないけど……結果によつては、君の願いも叶うかもしれない」

「……J e l , a i e u 了解」

最後に言語を変えたのは、立場を変えたからか。

何やら八雲へ大層感謝している様子の追上の姿に、深雪は一層の尊敬と、ちよつとばかりの胡散臭さを八雲に抱いていた。胡散臭さは、主語の無いその会話に対して。

*

すわ誘拐事件かと思つたが、大変収穫のある話し合いだった。

九重八雲と名乗つたつるっげの男性。自分をシノビだなんて言うからちよつと身

構えていたのだが、なんと彼は僕を見ただけで、見抜いたのだ。

僕が転生てんしょうした存在である、って。

そして、その直前に言ったパラサイトと僕が同類で、正体を知っているとどう言葉。あれはつまり、パラサイトもまた転生したダレカであるという事なんだろう。

そう考えれば色々合点が行く。

通常の人間には考えられない異常出力。

僕のチート染みた力が、転生によるものであるのなら、相手にそれがあってもおかしくはない。

あの獣じみた悲鳴。

同じく言語系に何か異常があるとしたら、共通項がまた増える。

八雲さんによれば、シノビは昔から転生した人間を相手にしてきたという。

つまり僕は然程特別というわけではなく——普通の人に比べれば特殊だが——それなりに件数のある内の一つ、という事なのだ。

それがとても、安心した。

昔からそういう事例があつて、しかも対処する人間が歴史を重ねているということ。は、対応策、治療方法が存在する、ということだ。

八雲さんが最後に言った「願いが叶うかもしれない」という言葉が最たる証拠だろう。

つまるところ、追上青君を引き戻し、僕を剥がす方法が、此度の事件の結果次第では手に入るかもしれないのだ。

そうとなれば、協力要請に応えないはずがない。

達也君に任せればいい、なんて言っていないで、積極的に動くとしよう。

そうと決まれば早速捜索に向かいたい……のだが、そういうはこの車、どこに向かっているんだろう？

*

自分が何者かわからなくなっていたパラサイト——それが、九重八雲が下した追上青の正体だった。

解決するのは達也君の仕事だから。

そういう理由で口にする事はしなかったが、八雲の中で今回の事件の全貌は既に視えている。

マイクロブラックホールの生成実験があったこと。

その実験が、灼熱のハロウィン事件を経て行われた事。その時期から吸血鬼事件が発生していた事。

パラサイトとは、八雲たちの常識で言うのならば“外部からの闖入者”、もしくは“意図無き漂流者”であり、現代魔法の知識と照らし合わせても、それは確実である事。

そして、複数いるパラサイトが今回のマイクロブラックホール生成実験で“入ってきた”のだとすれば——追上青は、もつと昔に行われた実験の際に“入ってきた”のだという事。

これ以上は憶測だが、追上青に憑いているパラサイトは“入ってきた”時に、捕えられてしまったのだろう。恐らくは、フランスに。

そうして長い時を過ごしている内に、自身の存在を忘れた……もしくは忘れさせられ、駒として今まで扱われていた、と。

だから、八雲は彼に同情の眼を向けていた。

神祇魔法でさえ、精霊との対話がある。東亜の使役魔法だってそうだ。

それを、無理矢理抑えつけ、記憶を改竄し、良い様に使うというのは……俗世を捨てた八雲が義憤に猛る事は無いにせよ、可哀想ではあつた。

パラサイトというのは皆願いが共通している。

帰りたい。

自身の意志で“こちら”に来たパラサイトはいない。皆、引きずり込まれ、それに対しての怒りから暴れているケースや、帰る為に、生きる為に人間を襲うケースが九割を

超える。

追上青に憑いたパラサイトはそれを忘れさせられているのだろうが、本来の仲間と接触し、その意思に触れる事が出来れば全てを思い出すだろう。

帰る事が出来るかどうかは、八雲の知るところではない。

だから、かもしれない、と言った。

これもまた忍びとしての役割の一つだ。

何も退治する事だけが妖魔、怪異への対処ではない。

鎮め、還す事。

穏便に行くのなら、それに越したことは無いのだから。

顔つきの変わった追上を見ながら、八雲は細い目を更に細めて、にこりと笑った。

*

あいあんいううおんあ　　おいう、いおうえうおうあい

……………？

*

「我々が追いかけている吸血鬼の正体ですが、USNA軍から脱走した魔法師のようです」

河川敷でお互いの信念をかけて殴り合う（魔法）という青春真つ盛りな——と言い切るにはあまりに地獄の様相を呈していたが——事件があった、翌日。

幹比古君、エリカちゃん、克人先輩、真由美先輩、深雪ちゃんに達也君、そして僕。

それぞれなるほど、ペア、という言葉がしっくりきそうな面々+僕という、要らない子一人いますよね状態の生徒会室にて、そんな爆弾発言が発せられた。

発声元は達也君。

「……………」

驚きすぎて声も出ない。だってUSNA軍だよ？

USNA軍がなんでレオ君を襲うのさ。というか僕らが交戦したのもUSNA軍つ

て事？

……いやさ、確かに前世ではそれはもう殴り合いました。それはもう。血みどろに。でも今の僕は追上青くんなワケで。

軍人に喧嘩を売るのはマズインじゃないかな、と思わないでもないわけで。テロリストなら話は別。

他国の軍となると、十師族の権力とやらも効かないんじゃないかなあ、という懸念。

「……パラサイトはなんのために軍を脱走したんだろう」

「軍に所属している事が無意味に思えたのか、軍に所属していたら成し遂げられない目的があったのか、その辺りはパラサイトを捕まえてみない事にはわからないだろう。

そうだな、追上」

「う……あ、ああ」

「青？」

やめてくれー、達也くんはもう確信あつて僕の事を旧日本軍扱いしてくるから、幹比古君たち事情を知らない組にとつてはちんぷんかんぷんな話題フリになってるじゃないか！

八雲さんも達也君もどうしてそう……内緒話を内緒話にしておけないんだ！
というかUSNA軍のことなんてわからないからね！

同じ軍だから、とか通用しないから！

「……何うろたえてんの？ コイツ」

「USNA軍やパラサイトの事について何か知っているのかい？」

「いや……言えん」

「……ふーん」

横浜の事件のようなことがあつたとしても、まだまだ彼らは子供である。

戦争の事とか、特攻の事とか、わざわざ語ることもない。

だからこれ以上は、という思いを込めて達也くんアイコンタクト。

……流石だね、達也くん。

表情一つ変えない。伝わっている気配がゼーロー。

「追上。お前は自力でやつらを追えるな？」

「……おう」

何の話かはまったくわからなかったが、NOと言うのは許さない、という声色だったので頷く。奴らつて件のUSNA軍の吸血鬼とやらのことだよな。

まあ、奴ら特有の化成体の軌道を辿ればいけるかな。

そこで話は終わり。

解散となった。

まあ、軍に喧嘩を売るのがどうこう、つて悩んではいたが……レオ君を襲った存在だ。慈悲もない。

ただちよつと、顔くらいは隠していこうかな！

*

昼休み。

いつもは眠りこけている僕だが、今日だけは違った。というか無理だった。

煩いのだ。

眠る——以前に、目を瞑っただけで聞こえてくる、声、声、声。

悪夢もとうとう現実にまで浸食したか、なんて感慨に耽っている場合じゃない。

何か他の事に集中しなければ、目を開けている時にさえ聞こえてきそうだったので、とりあえず学校中の軌道に色を付けて空間把握能力を養っている、そんなときだった。

「痛ッ」

と、美月ちゃんが悲痛な声を上げ、瞳を抑えて倒れ込んだのだ。

いつもは心配するところだが、こつちもそれどころじゃなかった。

把握空間の中に突如現れた膨大な点。移動しているから軌道によって視認できたの

だが、なんだこれ。化成体……それも、吸血鬼とは比べ物にならないほど。そして。

「アンチ・ステルス・フィールド偽装解除法陣とは……たかだか高校生と侮っていたのが間違いでしたか」

「う、う、うう！」

「そのようだ」

「青!？」

「偶然ではないか？」

「アンタまで!? 何が起きてるっていうのよー！」

「わからないな」

懸念していた、目を開けている時でさえ聞こえてくる声。

それは明らかに、その巨大な軌道から聞こえていた。

「気づかれたと思いますか？」

「ううあいんあお!うるさいんだよー！」

「我々の気配を察知できる者がいるとは思えんな」

思わず人前で、英語でも何でもない、僕本来の母音ーツン語で叫んでしまった。

それくらい、余裕がなかった。だって今日以降——この幻聴が、ずっと続くかもしれないのだ。

「気にする事はないだろう」

「アンタ、何？ どういう事!? 何か知っているの!？」

「私もそう思いますが……やはりここには来るべきでなかった」

声は止まらない。

何をしゃべっているのか、内容はわかる。でも、心当たりが全くない。

だが同時に、その堅苦しい喋り方が……前世を、彷彿とさせた。

今はもう、あの巨大な軌道はない。

だが、そのあとに残された人型の軌道。アレがカギになるのは間違いないだろう。

アレがなんのなか——三途の川の向こうからやってきた亡者達どうぼうなのか、それとも悪鬼

羅刹なのか。わからないが、もう行くしかない。

伝わらなくてもいいから、一言。

一言言いたいのだ。

「あつ、どこ行くのよ!」

「待ってエリカ! ……捉えた!」

窓をガラツと開けて、身を乗り出し——そのまま木、校舎、中庭へと三角跳びで着地。

アイオーンは預けているのでないが、まあどうでもいい。アレはあくまで魔法師とし

てふるまうためのカモフラージュ。チート染みた力の方が何倍も出力が大きい。

下りる途中で折った木の枝二本を手に、その場所——実験棟の方へと駆ける。
一言——文句を言うために！

*

「ミア……どうしたんですか？」

一方で、実験棟へ新型機材を運び入れるためのトレーラー前。魔法工学産業のトップメーカーであるマクシミリアンのその業務用トレーラーの前には、二人の存在がいた。交換留学生アンジェリーナと、マクシミリアンの従業員ミカエラ・ホンゴウだ。

この二人は知り合い——正確に言えば“同業者”、もしくは“協力者”であり、歳も近いということもあつてか、仲が良い。と、リーナは思っていた。

「いえ……なんでもありません」

ミア（ミカエラの愛称）と、彼女の名を呼ぶリーナの声には疑問があつた。ミカエラが、鬱陶しそうに何も無い空間を手で払っていたからだ。

それに対し、なんでもないと答えるミカエラ。その割には、手を止めない。

「You again! またお前か！」

そこに、物凄い速度で何者かが突っ込んできた。

まるで親の仇でも睨むかのように、積年の恨みでも果たすかのように——ミカエラを、睨みつける男。

「アオ!？」

追上青だ。

この時、リーナの中でいくつかの優先事項が浮上する。

一つ、先ほど観測された異常——吸血鬼の出現から、ミアを守る事。具体的には早く逃げて、と伝える事。

一つ、突如現れた追上青から、ミアを守る事。何故だかはわからないが、殺意さえ籠った瞳でミアを睨みつけているあの男。友人としてミアを守らなければならないと思っ

た。

一つ、追上青は、吸血鬼であると、昨夜判明した事。

これら三つが同時に浮上した——その結果。

リーナの中で、先ほど異常観測された霊子と追上青が結び付き——追上青が吸血鬼としての正体を現し、友人を襲ってきたのだという結論に至った。

「させないわよ……! ツ、今度は何?! 囲まれた!? く、でも……今は目の前の敵!」

突然リーナとミア、トレーラー、そして青の周囲に領域魔法が展開する。

だが、そんなことよりも、と……リーナは制服の内ポケットから古い板状端末を取り

出した。それは前後に。パカッと割れ、中から汎用CADが出現する。

「……Why, Ann何故だ、アン」

「……アオ、貴方がワタシの何を知っているのかはわからないけど……ミアを狙うなら、ワタシの、」

意外にも冷静に止まったアオに、リーナは啖呵を切る。

啖呵を切ろうとした。

だが出来なかった。

領域魔法の外側から、神速の突きが侵入してきたからだ。

リーナは咄嗟にミカエラを突き飛ばし、自らも後ろへ転がる。

その突きの下手人——エリカと、同じくして入ってきた十文字克人の存在にギ、と歯を絞めた。少々——どころではなく、分が悪い。

「何故邪魔をする、同胞」

「You are not allowed……! お前たちには許可されていない……!」

今度はエリカだけでなく、克人とリーナもそれを聞いた。

否、少し離れて様子をうかがっていた達也と深雪も聞いただろう。

許可されていない——その意味するところは。

「追上、どういう意味だ……？」

追上青は、まっすぐに——ミカエラへと、警告を放つ。怒りを顔に出したままに。

それを受け、僅かにミカエラも、顔をしかめた。

「思い出してください。貴方はこちら側です」

「おおおああー！」

「ッ、させない！」

「アンタの相手は私よー！」

棒切れ二本で、しかし鬼気迫る表情でミカエラへと斬りかかる青。これを吹き飛ばす術式を使うとして、しかしエリカの斬撃により中断、回避に専念した。

一瞬ミカエラの方を見れば、素手で棒切れと蹴撃に応戦しているものの、防戦一方。それもそのはずだ、とリーナは思う。何故ならアオは、驚異的な身体能力を持つ吸血鬼なのだから、と。

だが、その考えも次の瞬間に覆された。

それは、通信。シルヴィアからのもの。

『リーナ、聞こえますか!?!』

「シルヴィイ!?!」

『よかった、ようやく通じた！ 例の白覆面ですが、正体がわかりました!』

青の投げつけた棒切れが、ミカエラの素手に弾かれる。

直後、跳ね返った棒切れがあり得ない軌道を以てミカエラの後頭部へ突き刺さりんと加速するが、ミカエラはそれを防壁の魔法をまとった掌で受け止めた。

それは、例の白覆面の魔法師が使っていたものに他ならない。

「貴方とは戦う理由がありません。投降してください」

『ミアだったんです！ 白覆面の正体は、ミカエラ・ホンゴウです！』

「煩い煩いと……参ったな、まるで子供だ」

青の右足から繰り出された素早い蹴りを、ミカエラが受け止めた。

体格、体重差から見て、有り得ない程の怪力。一切の反動無く止まるなど、人間の域ではない。

だが、彼女と対峙する青もまた——事、足技の格闘戦に関する経験値は人間を外れているとっていいだろう。呂剛虎との死闘は、彼の蹴りとチート染みた力の親和性を格段に上げた。

軸足をひねり、僅かな軌道を生み出す青。

それだけでミカエラの身体がグイ、と引つ張られ、思いきり蹴り飛ばされ、トレーラーへと激突した。

そして、その胸の中心に向かって。

「何故やつらの味方をするのだ、同胞」

「Loud! しつこいんだよ!」

残っていたほうの棒切れを、射出した。

人間の腕から投げられたとは思えない程まっすぐな軌道を以て、それはミカエラの胸の中心へと吸い込まれ——ザク、と。

突き、刺さった。

「なんてことを!?!」

リーナが叫ぶ。

だが、青は油断しなかった。先ほどミカエラの後頭部へ向かわせた棒切れを右手に吸い付かせるように戻し、腰を落として構える。

彼の目には、化成品が未だ動いている事がはつきりと見えていたからだ。

そしてそれは、ここにいる全員にも伝わる事となる。

ミカエラが、自ら。

胸に刺さった棒切れを抜き——瞬く間に、その傷を塞いでしまったから。

「治癒、魔法? こんな速度で……!」

「まさしく化け物、つてところね」

「これだから上位存在は……面倒な」

「だったら、これはどう?」

直後。

トレーラーごと——降り注いだ恐ろしい程の凍気により、ミカエラは凍り付くこととなる。

「仕方がないですね」

終わった——そう思えなかったのは、凍り付いた女性を青が睨み続けているからだ。

氷の魔法を放った深雪と様子をうかがっていた達也もまた、それに気づいて緩めかけた氣勢を再度締める。

そしてその時は来た。

「危ない!」

一番遠くにいた幹比古による警告。

あまりにも緊急すぎて何が危ないのかを伝える余裕がなかったようだが、警告の役割は果たしていた。

放出される雷。人間の身体など一瞬で焼き去ってしまうだろう出力のソレは、しかし彼らに辿り着くことなく——天空へと消えていく。

「これ……前にも……」

その軌道は、明らかに曲げられていた。

雷は性質上軌跡が見えやすい。故に、どこで曲げられているのかがわかりやすい。

それら雷は、彼らに辿り着く前——追上青の真横で、全て曲げられていた。

エリカが思い出すのは、横浜事変の最後。

ゲリラが打ち出した弾丸が、有り得ない軌道を以て曲がったあの時の事。

「追上。お前がやっているのか」

「……ああ」

「そうか。パラサイトがどこにいるか、わかるか」

達也ではなく、克人が青に尋ねる。

それは単に、近くにいたから、という理由。

青が何も無い中空を指さした。

克人の目には何も見えない。そこから雷が放たれているわけでもないし、空間のゆが

みがあるわけでもない。

だが、他の——“視える者”達には違ったようで。

達也は驚いた顔をし——幹比古の隣にいた美月が、叫んだ。

「青さんの指さす方向、指先から約一メートルの位置に、います！」

その声に動いた人間は三人。

一人は吉田幹比古——対妖魔術式・迦楼羅炎。現実世界には燃焼と言う結果を起こさ

ずに、情報の上でだけ「焼けた」という事実を記録するS B魔法。

すでにその実力は二科生のものではないだろう、という思いを皆々が抱くのも無理はない速度とコントロールで、中空に浮いたパラサイトが燃えていく。

一人は司波達也。

その現象を、正体を見極めんと自らの“視力”で最大限にソレを追い——考察の果て、パラサイトを“観測”してしまった美月が危ないと考えた。

だが、もう一人、見えていたはずの青は襲われていない。やはり、という思いが、一瞬の隙を生む。

達也の意を突き、パラサイトから糸のようなものが美月へと射出されたのだ。無論達也も幹比古もそれを視認する事は叶わないが、何か危ないものが向かった、というのはわかった。霊子とはそも、第六感で察するものであるからに。

だが、それ以上どうしようもない。

やむを得ないと、達也はC A Dを構える。

最後の一人は追上青だ。

克人にその場所を指示さしめした後、彼はソイツの掌握に取り組んでいた。

相変わらず聞こえてくる声は煩わしく、意味不明で、イライラしていたこともあつてか——普通ならば捕獲なりなんなりを考える彼の頭も、回ることなく。

「In the way!どこかへ行け！」

達也が吹き飛ばすまでもなく——青が、その化成体の軌道をめちやくちやに捻じ曲げた。

化成体の軌道。

惑星が自転し、公転する際に生まれる軌道。

物凄い速度であるはずのそれは、しかし何の因果か、惑星外に吹き飛ばされる事無く

——すぐそばの、第一高校の倉庫へと着弾する。

だが、それを彼らが知ることはなく——此度。

パラサイトとの交戦は、撃退に終わる事となった。

*

あいあんいううおあ えいいうんあうあう

*

それは弱っていた。

それはもともとこの世界に属するものではなく、また、望んでこの世界にやってきたわけでもなかった。

それは壁をすり抜けやすい性質を持っていた。揺らいでいようが、いなかろうが、器を捨ててしまうと薄壁一枚を超えてしまう、そんな性質を持っていた。

あるときそれは、一つの器を捨てた。傷だらけの器。活動をやめてしまった器。それを捨てた時、ふと、近くにそれと同じものがあることに気づいた。

それは独りぼつちで、孤独な存在だと思っていたから、すぐにそれと同じものを追いかけた。

だけどそれは既にそこにいなかった。だから仕方なく、また壁を一枚超えて、新しい器へと宿った。

確かに声が聞こえたはずなのに。

それはいつだって、仲間を探していたのかもしれない。

それはほかのそれらと違って、高度な思考力を有していたがために。

それはほかのそれらと違って、ずっと記憶を保っていられたがために。

それは心の底から、自分の居場所がここではないことを知っていたのだと思う。

*

「宿主を全て消してください」

静かな声だった。

感情的でも、冷淡でも、努めて普通に行っているわけでもない。

単純に、プロジェクトの締めとして報告書を出してください、とでもいうかのような、当たり前の「けじめ」を、電話の向こうの女性は言う。

「捕縛、ではありませんので？」

電話の向こうの女性へ問うのは、男性。

「ええ、抹殺です」

「しかし現在の宿主が死ぬと、パラサイトはほかの宿主を求めて飛び去ってしまうようですが。新たな宿主を突き止めるにはいささか時間が……」

話している内容は物騒も物騒。

だというのに、二人の間に流れる空気は——日常的、と言えるものだった。

「構いません。死亡した宿主からパラサイトがどのように抜け出すのか。情報体の状態でどの程度の距離を移動できるのか。新たな宿主と一体化するのにどれほどの時間が必要で、活動再開は如何程の時間が経過した後なのか」

ああ、そう。——そう、女性が続ける。

「宿主に宿り続けられる時間はもうわかっています。ええ、十六年間も宿る事が可能なのであれば、長々と観察して待つ必要はありません」

「……例の、“大物”ですか」

「はい。ああ、“大物”には手を出さないように。彼に貴方の毒蜂は通じませんし——
なにより、アレに手を出すとあの子たちが、ね？」

「……ああ」

「それでは、宿主の抹殺。任せました。消去が終わつたらまた報告してください」
「明後日までお時間を頂戴いたしたく」

「それで結構です。くれぐれも、“大物”には悟られないように。アレは星をも操る怪物ですから」

電話が切れた。

*

夜。深夜というには深すぎず、しかし夕方というには帳の落ち切った、そんな時間。

僕は一人、非行……というにはヤンキースタイルをやめてしまったが、まあ、夜の街をシャーッとアイオンで駆けていた。

一応有無を言わせない迫力があつたとはいえ、達也くんの「お前は一人で追えるな？」という問いかけに頷いてしまったのだ。発言責任は果たさなければならぬ。

一人で追える、という部分はまあ、間違っていない。

というか、もうほぼ全てのUSNA軍を発見している。あとは追い詰めるだけ。

だが、少々奇妙な事になっているのだ。

先ほどから——USNA軍だろう化成品の軌道が、突然パタと消える。

達也君の軌道そのものを粉々にしてしまうアレや、深雪ちゃんを凍り付かせるアレが見えていない辺り、彼らではないと思うのだが、だとしたら誰か。

エリカちゃんや幹比古君は、申し訳ないがUSNA軍を相手にしてこれほど上手く立ち回れるとは思えない。仮にも軍人だからね。

考えられるとしたら、生徒会の人たち。あとは日本軍の人たちか……。

「あつ」

まただ。

また、すぐ近くの化成体の軌道が消えた。

この距離ならすぐにでも行ける……かな？

「A^エi^アr^ア」

路地に入つて、ジャンプして、壁を蹴つて……まあ、三角跳びの要領。

そして向かった先に。

そいつはいた。

地に倒れ伏す男の隣で、何やら端末を見ている、その男が。

そしてその周囲に幾人かの人間を従えて。

「……What^{ワウウーイ} are you doing^{ンク}何をしてんだ」

「……〃大物〃——？」

「あん？」

中心の男は何か驚いた表情で——有り得ないものを見たという声で、僕を〃大物〃と

言った。

大物。レアリティ？ ふむ。

「……お前たちは先に行け。宿主から抜け出した精神体の追跡を怠るな。最終的に見失

うのは仕方がないが、可能な限り追い続ける」

男が周囲の人間に指示をだす。

それを聞き、周囲の人間はまるでNINJAのように散開した。あ、この間シノビにあつたし、本当にNINJAだったかもしれない。

「ボス、しかし」大物との接触は……」

「いい。大丈夫だ。だから行け」

「……ハッ」

いやボスで。

NINJAの親分がボスって……そこは！　そこは！

「おうおうあお……頭領だろ……」

「……！」

男はなにか、また。

驚いた顔をした。

「……君との接触は禁じられている」

「あ？」

「君が彼らを」仲間」だというのなら……いや」

男はそれだけ言って。

何をしてくるわけでもなく——闇へと姿を消した。

いや、軌道は追えているのだが、まあ追わなくてもいいか。

普通なら殺人犯だ、と騒ぐところだが……倒れているのがさつきまで化成体の入っていた人間だし。

やっぱりアレは世を忍ぶNINJA……？

気のせいでなければ武器も針のようなモノだったっぽいし。

「足りない……足りない……」

「ああ？」

「感情が足りない……早く、次の、次の」

まただ。

また、うるさくなつた。

幻聴……ちよつとイライラするなあ。ホント。

「同胞……助けを乞う……」

「あついいえ！あつち行け！」

「ああ……ありがとう……」

目の前で死体から抜け出そうとしていた化成体をチート染みた力でぶつ飛ばす。
ん。

聞こえなくなつた。

ミッシヨンコンプリート！

*

「また独りになるのかAlso alone……」

ポツ、と少年が呟いた言葉。

それは心から惜しむような言葉だつた。

少年——ご当主様の言う“大物”。

この世界に来たばかりの十二の分裂した“デーモン”とはまた違う……十六年もの間この世界に潜んでいた、紛れもない本物。

霊子を奪う必要がない代わりに、無辜の少年の魂を食いつぶし、我が物顔で少年の家族と生活を送る邪悪デーモなる悪魔。人間社会に紛れ込み、それを周囲に悟られなかつた事はなんと恐ろしい。

この世界に来たデーモンが分裂出来る事は先の件でわかっている。
ならば。

ならばこれほどの知能を持つデーモンが、その身を分けたら。

我々人間はそれに、抗うことが出来るのか。身近な隣人が、ある日突然悪魔によりつてなり変わらされているかもしれないというのに。

「……しかし」

また独りになるのか、という言葉が耳朶を打つ。

そこまで知能の発達した「異生物」を、果たして、病の類のような扱いをすることが正しいのかどうか。

甘い考えだった。それは、紛れもなく。

だがそういう面も持ち合わせているのが男——黒羽貢だと、そうも言えるのだろうか。そして、それでも。

黒羽の目の前で、死んだ宿主から抜け出る化成体の逃亡の手助けをしたのは、やはりアレなる存在の位置付けを再認識できる行為だったといえるだろう。

物凄い勢いで飛んで行く化成体。あれでは追う事もままならないだろう。

「……」

そして少年は、暗闇且つ超遠方にいる貢を一瞥し、その場を去っていく。

星をも操る化物——自らの主の言葉が脳裏をかすめた。

*

二月十四日の朝。

もう、早朝も早朝。

僕の家に来た達也君から一言、「来い……いや、来てくれ」という珍しいにも程がある殊勝な態度を受けて、僕は寒い中もそもそと彼の後を追った。

着いた場所は寺。

八雲寺。八雲さんの寺なんだということはわかった。だが何故忍びが寺を？

そんな説明は一切されないまま。

ちなみに茜ちゃんはまだ起きていなかった。と、いう事にしておく。

何故って、チョコレートを湯煎していたようだったからね。そういうのは気付かないが華でしよ。

「やあ、よく来たね。追上青くん。君に少し手伝ってもらいたいんだけど、いいかな」

「えー……あ、うい」

そりやあもうにつこにこと。

ニツコニツコニーと顔を綻ばせて近づかれては、流石の僕も一瞬断ろうかと思つてしまつたのだが、そこはなんとか踏みとどまつて、了承。

僕の了承を得るなり、いきなり八雲さんはその手の上に揺らめく炎みたいなもの

う六角錐を出現させた。

「うお!」

「あ、大丈夫大丈夫。これは君を傷つけるものではないからね。

……しかしやはり、君には普通にこれが見えるんだね?」

「あん? おう」

普通に、つて、どういうこと?

他の人には見えないの、これ。

「……師匠、いちいちこつちをチラチラ見なくていいですから、続けてください」

「あつはは、ごめんごめん。」

それじゃあ青クン。この水晶をちよつと操つてみてくれないか。こう、中空でぐるぐる回す感じで」

「うん」

ほい、と放り投げられたその軌道をクイクイと変えて空に持ち上げる。

そのままくるくるくるくと回転させる。

この程度ならお茶の子さいさい。大道芸人にはなれるかもしれない。演目は言えないが。

「さて、じゃあここからだ。」

達也君。追上君の浮かべているアレを落としてみようか。追上君は達也君にそれを壊されないようにしてほしい」

「はい。わかりました」

「ういー」

あー、なんだろ。

達也君の修行、みたいな感じなのかな？ 的当てゲームみたいな。

そのために僕を呼んだから、だからあんなに殊勝だったと。

ほう。

なら、こつちも全力で応えてあげたほうが良いよね……！

*

師匠の手から離れた孤立情報体が、弧を描いて落ちる——寸前に何か^に絡めとられたようにして、その軌道を変えた。

そのまま宙へと浮き上がり、境内の上空4 mほどの所で旋回を始める孤立情報体。

「……くぐぐぐ」

「おう」

追上是薄く笑う。

押し固めたサイオンの砲弾を形成。

それを1/32sの速度で少しずつ座標をズラして配置していく事で、疑似的な砲弾として扱い、追上が旋回させている情報体にぶつける。

いや、ぶつけようとした。

——それは、急激に加速した情報体に避けられてしまったが。

追上は薄く笑っている。

いや、笑みを少しだけ深めた。

師匠が何かを言う気配はない。もともと、勝負らしさを出させるような言葉を吐いていた辺り、こうなることは想定済みだったのだろう。

望むところではあった。

何せ敵であるパラサイトはその場を一切動かない、なんてことはないし、なんであれば意思を持つが故にこちらの砲弾を避ける可能性だって十二分にあるのだ。

今この場で、そのシミュレーションが出来るなら、それに越したことはない。

サイオンの砲弾を再度形成。

今度は偏差的にそれをズラす。

今度は急激に遅くなった情報体に避けられた。

次のサイオンを形成。

その時点で既に、旋回していた情報体は不規則な軌道を描き始めている。遊んでいる事は完全にそうだろうが、追上也またこちらの考えを読もうとしているようでもあった。

「……」

「Wars……戦争だ……」

形成するサイオンの弾にも変化をつける。

面を重視するもの。小さく、細長くしてズラす位置を変えるもの。

動きにもバリエーションをつけ、さらにその先、その先へ。

消耗が激しいのは事実だが、おそらく八雲とだけでは辿り着かなかった——試行錯誤の先にまで手が伸びている事実は、ありがたいものだったといえるだろう。

そしてその全てを避け切った追上に、仄かに。

対抗心のようなものが浮かぶ。

「おいおい……」

こんなものか、とでも言いたげに肩をすくめる追上。

そういつた挑発に乗るようには心の仕組みが出来ていない達也だったが、形だけでも乗る事を選択する。

その光景は、果たして。

*

「いやあ、青春だねえ」

「……お兄様がひどく消耗しています。先生、そろそろ……」

「いやいや深雪くん。これは達也くんと青クンの戦いだからね。水を差すような真似は、いやいやいやいや」

明らかに楽しんで——微笑ましそうに彼らを見ている忍びにはもう、青春の一コマにしか見えなかったとか。

*

あいあんいううおうあ おいええあいあああいあいう。
う。

*

達也君との熾烈なバトル……という名の光球遊びは、そこまで時間をかけずに終了した。結果から言えば、圧勝。何故って僕は達也君の放つ想子弾の軌道も見えているわけだから、ソレを避けるなんて容易い容易い。

ただまあ恐ろしい成長速度というか、軌道が見えても弾速までを完璧に理解できるわけじゃない僕に対し、加速度的に想子弾の速度を上げてくるのはどうかとも思った。所々危なかったし。

最終的には達也君がへばって、僕の勝ち。またやろうか、と言おうとも思った。でも、まあ。

次があるとは、思っていないし。

翌日になって、いつも通りに登校。相変わらずノイズのように聞こえる幻聴に顔を顰めながらも眠ったふりをしてしていると、達也君たちが入ってきた。まあ朝の時間なのだか

らない人間が登校してくるのは当然至極、至極当然。なのだが。
……見える。

いや軌道が、とかじゃなくて……いやなんだろうね。

僕もね。男だから。いやね。

なんだろうねあの桃色空間。

発しているのはほのかちゃんだ。

ほけーっとして。ほへーっとして。髪につけた髪飾りを触ったり離したり触ったり離したり笑みを浮かべたり触ったり顔に手を当てたり触ったり離したりしている。

浮かれている、という言葉をジェスチャーで表しなさい、というお題が出たら、真っ先にアレになるだろう、ってくらい。

反対に達也君は……なんだろう、少し疲れている。

昨日の修業が無理を祟ったのかな、とは多少気になった。でもアレは頼まれたことだしなあ、と言いつつ。

その肩を叩きに行くのはレオ君で、流石輝くイケメン、達也君の表情の陰を忽ち取り除いてしまう。イケメンすぎやしませんか。

なんだなんだ、と思っていると。

「あ、これ……青さん」

「え？」

肩をぼんぼん、と叩かれて。

コト、と。小包が僕の机の上に置かれた。

ん。え。あ？ お？

母音ーツン語で話す必要のない心中で母音ーツン語のみになってしまいうくらいの動揺。

何これ。プレゼント？ 僕美月ちゃんに何かしたつけ？

「……？」

「バレンタインです」

……ああ！

ああ！ そういう……そういうことね！ ほのかちゃんと達也君のアレはそういう

ことね！

完全に忘れていた。だって縁のないイベントだから。

いや………つていうか、ええ、僕が貰っていいの？

確かにレオ君も幹比古君も達也君ももらっているようだから友チョコなんだろうけ

ど、いや、うん、まあ。

「ああ……えー」

「大丈夫です。気持ちには伝わっていますから」

さすがに公衆の面前。ありがとう、と言えない口を恨む。

それをわかつているのだろう、美月ちゃんはそう言ってくれた。

天使かよ。

「うい」

今一度頭を下げると、美月ちゃんは自分の席へ戻っていく。

……うわ、嬉しい。茜ちゃんも毎年くれるし、上尾さんもなんだかよくわからない形のチョコをくれるけれど……うわ、嬉しい。

うわあ。

……でも。もう。

*

放課後になると、もう完全にお祭りムードだった。

別世界でも何十年経つても日本人はバレンタインを勘違いしたままなのか、という呆れも多少含むため息を吐いて、この学校の片隅にあるガレージの方を見る。

好きです

「えんおうあえおおいおいあつあ……幻聴まで桃色になった……」
好きです

中高生かな？　　と、思つて、そういえばココ高校だったな、と思ひ直す。

達也君とか幹比古君とか十文字会頭なんかが例外で、一応、みんな高校生だったんだ。そりや浮かれもするか、というもの。

なんというか、いつにもまして視線の飛び交う日だ。温度こそわからないが、所謂おアツイ視線。

中には僕へ向かうものもあることにはな……り驚いた。桃の木レベル。でも美月ちゃんのように僕のことを理解してくれているわけではない女の子たちだ。たちつていうか一人しかいないのだが。

なので、非常に心苦しいが、視線を外させてもらつた。非常に心苦しい。人の想いを無碍にするのは本当に。

というか青君、真面目な恰好すればモテるんだなあ、とも思つた。

それにしても、だ。

上を見上げる。

視線——というか、画角というか。

そこにある。あるのがわかる。かなり遠い——恐らくは宇宙空間。だから多分、衛星。

その衛星……カメラでもついているのだろう監視衛星が、先程からこの第一高校に向けて視線を送っているのだ。当然僕の周囲は逸らすとして、他……例えば達也君や深雪ちゃん、はいいとしてもどうせ気付いているだろうから他の学生のプライバシーはどうなるのだろうか、と考える。

だつて高校生の青春だよ？

誰が誰を好きで、誰が誰にチョコをあげて、誰が誰に断られて……そんな青春のページを、衛星を使ってまでデバガメしようっていう輩がいる。

……うん、許せないね。

というわけで、大規模な軌道逸らしを行っている。多分ほのかちゃん辺りは気付いてしまうだろう。でも君を、君たちの恋路を守るためだ、許してほしい。

もしカメラの画角、あるいは視線を視認できる人間がいたら、驚いてしまうかもしれない。

第一高校の上空に出来た円形の空白——僕の軌道操作範囲の7分の1くらいの規模の操作は、情報体で象られたUFOのようなものに酷似していたから。

UFOなんて見た事はないのだが。

*

「どうした？」

部下の身体に走った緊張をバランス大佐は見逃さなかった。

モニターから目を離してこちらへと振り向いたオペレーターは、言葉が出ない様子でモニターを指さしている。

仕方ないので自らモニター前にまでバランス大佐が赴くと——そこには、一目見てわかる異常が広がっていた。

「……なんだこれは」

筋金入りのリアリストであるバランスを以てしても、それをしっかり受け止めることが出来ない。

モニターに映る、真黒の円形。

円の縁にある景色は潰されたように歪み、その空間が捻じれていることは明白だった。

「Unidentified flying object……いや、この規模は地上が騒ぎになっていないはずがない」

「現在、そのような情報は確認されていません」

「幻影の類の可能性もある。第一高校に仕掛けた盗聴器が何か拾っていないか」

バランスの問いに、ようやく再起動をしたらしいオペレーターが音声関係のツマミを回す。

一瞬、ノイズ。そして。

『And world wide, all wants our…….そして世界中、あらゆるものが私達を望んでいる』

聞こえた。若い男の声。

直後、グシャ、と。盗聴器が壊されたらしき音。その後、通信が断絶する。

「……」

「……」

両者沈黙。

通信の断絶と同時に、モニターに映っていた黒円も姿を消した。

それが誰の——何からのメッセージだったかなど、考えるまでもない。

「……シリウス少佐の元へ向かう。引き続き第一高校の監視を。何か異常があれば、すぐに知らせろ」

「はこ」

ならば一層、しなければならぬことがある。

灼熱のハロウイン。それを引き起こした術者、あるいは術式の確保。

目先の敵対宣言に囚われて、最優先事項を逃すわけにはいかない。ただ同時に、最大限の警戒を割く。

それがバランス大佐の選択だった。

*

翌日。

なんだか騒がしい校舎に興味もなく、いつも通りぐーすかぴーすか眠っていた時のことだ。

「貴方のものになりたい」

ガツン、と。

頭を殴られたかのような——感情の奔流。それは決して僕に向けられたものではないにもかかわらず、僕の感情にまで影響するほどの「祈り」。

複製されたそれがそこまでの純粹さを持つなど、考えられないほどに——ん？

なんだ、複製された、つて。

「う……」

ぐ。

ぐ、う、う、う。

顔を響めざるを得ないレベルの頭痛。違う。痛いのではない。

何か。何かを思い出そうとしている。

「貴方に従属したい」

まただ。感情の嵐。純粹すぎて鋭利。

それが、幻聴として聞こえてくる。響いてくる。

思い出せない。

違う。知っている。憶えている。

だから、忘れていない。

「青……青……あぁッ！」

ただ——意識していなかっただけ。

僕は覚えている。二度転生したことも、前に兵士だったことも、その前に高校生だったことも。

たことも。

だから、こつちへ来るときに何をしたのか、何があったのか、すべて、全て。

僕は許容量が大きいから、覚えている！

「……ああ」

ふらり、と。

席を立った。

達也君たちのいない教室では、誰も僕に興味を示さない。

そのままの足で保健室へ向かい、安宿先生に体調不良を訴える。甘楽先生と同じくある程度は母音ーツン語を理解してくれる彼女は僕の体調不良に頷き、早退届を書いてくれた。まあ僕の訴えがなくとも、明らかに顔面蒼白だったようではあるのだが。

アイオーンを返却してもらい、しかし履かずに歩いて帰る。

足取りは重く、遅い。

ふらふらと高熱に浮かされたように、帰路を歩き、ようやく家について、すぐに部屋のベッドへと倒れ込んだ。

「……いうおあん、おいあいあええ、えーうおえあいミクロちゃん、オイシヤサマへ、メールお願い」

ミクロちゃんを起動して、内容を言う。

そんなに長くはない。

ただ。

ありがとうございます、と。その旨を。

「……あお、えっえーいおあと、メッセージも」
 家族と——もうすぐ来るだろう、あの子への。

*

追上が学校を休んでいる、という事実は多少気になる事ではあったが、それよりも知への欲求が勝る。

達也は第一高校の実験棟で、先日パラサイトが宿ったヒューマノイド……呼称ピクシーに訊問を行っていた。パラサイトの生体、実態、原理などを。

その過程で、驚くべき……あるいは、すでに分かっていた事実を聞くことになる。

「仲間はこの国に何体いる?」

『このボディに宿る直前の時点で八体。自分を含めて九体でした』

「パラサイト同士で交信は可能か?」

『Yes』

「交信が可能な範囲は?」

『国境の内側であれば可能です』

「他のパラサイトの居場所は?」

『このボディに宿ってから、仲間との接続が切れています。現在位置不明……一体を除いては』

「一体はわかっているのか。それはどこだ？」

ピクシーは、顔を動かす。ある方向。

それはかつてブランシユの屯していた廃工場があった方向——並びに、彼の家がある方向だ。

『返信はありませんが、こちらからの交信は可能です』

「その必要はない。奴は……パラサイトなんだな」

それは疑問ではなく、確認。

『正確には、上位存在です。サイキックも思考能力も、我々では及びません』

だから、達也がいつしか行つた推察はあつていたのだ。

ソーサリーブースターのような化成品を持つ、というのは。その時は別方面からのアプローチではあつたが、結果は同じ。

「お前たちと奴の目的は同一か？」

『判別は難しいですが、同一ではないと思われます。上位個体と同調した形跡がないため彼の個体と意識の共有はされていませんが、幾度か上位個体は我々、あるいは彼らの前に立ちふさがっています』

「……なるほど」

そうだ。

吸血鬼を相手にした時も、目の前にいるピクシーの中の魔物を相手にした時も、決して同調する素振りは見せず、むしろ敵対していた。

一体化しすぎて宿主の意思に完全に同化している、ということだろうか。あるいは、全く別の目的があるのかもしれない。

少なくとも対パラサイトにおいては味方とみていいのだろう。

そう達也は思案を完結させ、次の質問へと移る。

静かに、すべてが動き始めていた。

*

一つになれ、と。

戻ってこい、と幻聴が言う。

そのすべてを振り払って、歩き出す。

大きく伸びを一つ。

向かう先は——青山霊園。

514 あいあんいうおうあ おいええあいああいあいう。

*

あいあんいううあああ　　おあえあえあ

誰もいない青山霊園を歩く。

達也君たちがここへ向かおうとしていた事は知っている。アイオーンで青山の高架の側面を駆け抜けている時、彼らの姿を確認したから。とはいえあの時はあらゆる視線を曲げていたから、姿は視認されていないはずだ。あのよくわからない視線もなかったし、誰にも見られていない。

誰にも見られずにここにきて、今。

誰もいない——誰一人いないはずの霊園で、三人と対峙している。

「よく来たな、追上青」

「……おついあおんあんあおうあそつちが呼んだんだろうが」

「そう警戒するな。我らは同胞、悠遠の旅の果てにこうして再会できたことを喜ばしく思う」

「あいあい？　あいいいっえんお再会？　何言ってるの？」

片足を上げて、ファイティングポーズを取る。

どよめく三人。

見えているよ。見えている。

君達の頭に憑いた、僕と同じ化成品が。

そこに宿主の意思などなく、ただの乗り物として操っている君自身が。

僕の目には、ちゃんと映っている。

「おうあいいあいおおいいいあんあ僕は君達を殺しに来たんだ」

「……何故だ。この世において、数少ない同胞よ。我々よりも遙か過去にこちらへ縛りつけられ、この世の生物としての在り方を余儀なくされた同胞よ」

「あんおういあああ満足したからだ」

十分だった。

ともすれば、君達はまだ日が浅い。転生てんしょうからまだ日が経っていないから、この世界について知らない部分も多いんだらう。

でも、むやみやたらにヒトを殺すのはダメだ。

憑依したのなら、宿主に敬意を。

僕は感謝している。青君に、そして茜ちゃんに、ううん、関わってきた人すべてに。

僕を見捨てないでくれてありがとう。

もう、十分だ。

もう十分だから。誠に勝手ながら。

「おうおうえいおあうあえい、あいあういいいあいおおう後顧の憂いを断つために、害ある君達を殺す」

言葉にも、思いにも込める。

わかつている。ずっと聞こえていた幻聴は、こいつらの声だ。昨日聞こえたのはちよつと違つたが、悪夢を見るようになったころから聞こえる幻聴はこいつらで間違いない。だつて声同じだし。

そして、彼の僕を見る目が同じ転生者に対する歓迎であることも、心の底から僕を仲間だと思つてくれているのも理解している。

理解している上での選択だ。

僕を含め。

転生者は——この世界にとつて、害あるものだと、僕は判断した。

ゆえに勝手ながら、相手の気持ちなんか一切考えることなく、僕は。

「いいあいおいうえいあええおあう君達を道連れにさせてもらう」

「……」

ほぼ水平方向のエア。僕の体を射出するだけのこの魔法は、実際それなりの速度を叩き出す。まさか馬鹿正直に突つ込んでくるとは欠片も思つて無かつたんだろう、三人は動揺を見せる——も、流星というべきか、すぐに雷撃で対応せんとしてくる。

それも全部、逸らして。

三人の胴体を抱いて、森の奥にまで突っ切った。

……いやまあね、霊園で戦うのはホラ、悪いし。あんなトコに霊がないとはわかってるんだが。

*

「遅かったか……」

「お兄様、これは」

「……足跡？ それに……」

青山霊園に辿り着いた達也達は、霊園に入って少しした所にある小さなクレーターを調べていた。

複数人の足跡。組み合った痕跡というよりは、誰か一人が強く走り、なんらかの加速系魔法を使った痕跡だ。

そしてその破壊痕は、霊園の奥、森の中へと繋がっている。

『マスター。この先で、上位個体と我々の仲間が戦闘行動を行っているようです』

「ああ、把握している。ピクシー、お前の仲間は何体いる？ 大体で良い」

『確認できるものは三分分のオーラですが、複数体の場合観測数にバラつきが出ます』
「三体……加え、もう三体くらいはいる、と見て良いということか」

達也は考える。

パラサイト三体。それだけなら達也一人でもなんとかなる可能性があるが、深雪とほのかを守りながら、奇襲に警戒しながら、となると難しいものがある。だが同時に、ピクシーらパラサイト、その上位個体とされた追上青の安否も気になるところだ。

心配である、というよりは——その肉体が壊れた場合の話。

他のパラサイトと同じく新たな宿主を探すのだとしたら。

……あれ程強力な存在が不可視なまま襲ってくる、というのは考えたくないな。

「お兄様。……私達は、退くべきでしょうか」

その発言が深雪から出たこと自体、達也にとっては驚きの強いものだった。

自立している事はわかっていても、だからこそ彼女は己が意思で如何なる時も達也のそばにいた。それを自ら、ということとは。

「恐らくこの先の戦いで、私やほのかは足手まといになってしまいます。お兄様が十全にお力を発揮するためには、私達はいない方がいいのではないかと思いました」

「……そんな」とは

「あります、よね。深雪はともかく、私は絶対足手纏いです。この先で戦闘が起きている

というのなら……私は」

今度こそ、そんなことはない、とは言えなかった。

少し耳をすませば、遠くで聞こえる激しい戦闘音。魔法師同士の撃ち合いではない、格闘戦や物理攻撃の類が行われている音がする。たまに混じる銃声を考慮しても、ほのかを近づけるべきではないことはわかる。

危険であることは承知で連れてきたつもりだったが、ここまでのものだとは思っていなかった、が正しいだろうか。そしてそれは恐らくほのかも同じ。

なんせ、こうも。

向けられた対象でもないにもかかわらず——心の臓を掴まれるような、凄まじい殺気が飛び交う場所だなどと、欠片も予想していなかっただろうから。これは、激しい激しい殺気だ。どれだけ戦闘になれている魔法師といえど、殺気を直接向けられたことなど数える程も無いだろう。

旧日本軍の兵士。

成程、本物だ、と。達也でさえ、殺気立ってしまいそうになるものが、森の奥にはあった。

『マスター、緊急事態です』

「どうした」

『現在多方向からパラサイトのオーラが接近中。恐らく前方で襲われている個体への救援かと』

それは確かに緊急事態だった。

追上青のピンチであると同時に、達也達にとつてもあまり大人数を相手にするのは得策ではない。

「そんじゃ、アタシらの出番ってことでいい？」

声は突然だった。

否、気配には気付いていたし、それが誰なのかもわかっていたけれど、わざわざ姿を現すとは思っていなかったのだ。ストーリーキングし、森の中で彼らがピンチになった瞬間に現れるものだ。そういうのを好む少女であると知っているから。

「エリカ！」

「僕も……」

「オレもいるぜ！」

「その……邪魔かとは思いましたが、私も……」

勢揃いだ。

今更何故、と問う事でもないが、達也は一応問うことにした。

「なんでエリカたちがここに居るのか、聞いておこうか」

「どっかのバカが遺言なんてものを残してつたからよ。開封日時は指定されていたんだけど、嫌な予感がしたって事で無視して開けた妹ちゃんに感謝ねー。中のメッセー
ジは、その子が目元赤くして泣き腫らす程酷いものだったみたいよ」

全く予想外の答えが返ってきて目を白黒させる達也。

今更何故、と聞いておいて正解だったな、と独り言ちる。

「遺言……ですか？」

「そ。美月、あんたは聞いたのよね。どんなのだったか言つてやつてよ」

「はい……思わず手が出るかと思いました」

「ハハッ、こんなに怒つてる美月は見たこと無いぜ」

「うん……柴田さんに内容を聞いたけれど、僕も少し思う所はあったかな」

「当然オレもだ。一回ぶん殴つて目え覚まさせてやらねえと気が済まねえぜ」

結局遺言の内容は一切伝わってこなかったが、彼ら彼女らをここまで怒らせるなど大したものだと心内で称賛する達也。彼も時折空気を讀まずに（あるいは意図的に）周囲を怒らせてしまう事があるが、恐らく此度の追上のそれは天然だろう。

得体の知れない二重スパイ、パラサイトの上位個体、己に並ぶ干渉力の持ち主、などの仰々しい肩書きの隣に「人心掌握には欠ける」という情報が追加される。

多分それをここで口に出せば総ツツコミを食らうのだろうことくらいは達也にもわ

かる。これこそが空気を読む技術だ。

「で、この先にアイツがいるんでしょ？」

「ああ。だが気を付けろ、エリカ。恐らく今までの奴とは別人レベルだ。戦っている敵も、奴自身も。生半可な覚悟で挑めば、一瞬だぞ」

「……」

「どうした？」

いつものエリカなら「上等じゃない！」みたいな言葉が返ってくるのを、けれどエリカはしゅんとした表情で。

「……なんでもないわ。行きましよ、達也君。それと、美月、ほのか、ミキはバックアツプで。ミキ、二人を守れる？」

「勿論だよ」

この手際の良さは、どこかの誰かからテコ入れがあつたな、と。

達也は腹の底の見えない老人の姿を思い浮かべる。実際にテコ入れたのは実は藤林だということを知らない。完全な冤罪であると同時に、少しばかり失礼な勘違いだと。

「ピクシー、テレパシーを繋げるのは俺と深雪、ほのか、エリカだ。できるな？」

『可能です、マスター』

では。

少々予定を早めての——決戦、である。

*

「アイアン」
「Iron！」

「くっ……このオ!!」

アイオーンで戦場を駆け巡りながら、サバイバルナイフと学校の備品である木刀で敵に攻撃を与え続ける。どっちも盗品だ。前者は先日の横浜から、後者は勿論学校から。

左手のナイフを主武器に、木刀は防御に。流石に本来のバトルスタイルとは行かなかったけれど、かなり戦いやすい。加えてアイオーンでの魔法行使も忘れない。主に使うのはアイアンとヤーン。

そして。

「いえうあ!逃げるな！」

「ガッ……ぐ、引き摺られ……!?!」

「決して背を向けるな! 動きに集中しろ、でないと——」

でないと、なんだよ。

僕のチート染みた力が、その程度で防げるって？

馬鹿言うなよ。

「う——目を、向けただけで……がはっ!!」

マルテ、と名乗った男性を木にぶつける。

なるほど、僕対策がよくわかっているというべきか、こいつらはできるだけ動かないようにしているのがわかる。リユーカーンフーと同じだ。無理矢理制動することで、軌道を生まれなくする。軌道操作までを理解しているかはわからないが、少なくとも何かを操っていることまでは見抜いている。

少しだけ舐めていたかもしれない。彼らの観察眼があれば、その内全貌をも見抜かれかねない。

その前に片を付ける。

「おい来い」

「ヒッ——」

先ほど逃げようとしていた奴の軌道をぐりんとまげて、僕の方へ来るようにする。

涙をポロポロと流し——ながら、その手に魔法らしきものを湛えているのも見えている。あー、BS魔法かな？ わかんないや。

でもこれが演技で、宿主の事なんか欠片も考えてないのはわかっている。

横浜事変の前までの僕も他人の事とやかく言えないが。

「隙あー」

「あういおいまず一人」

コン、と。

頭部を小突く。それだけで、ソレ……彼の頭についていた化成体は出てきた。軌道しか見えなくても、震えているのか、小刻みな軌道で輪郭が見える。

——僕に、化成体を殺す方法、なんてものはわからない。僕の魔法はどこまで行っても何かを移動させる、その軌道を変える技術でしかないのだから。

ただまあ、唯一できることがあるとしたら。

「ま——待て、何をする気だー」

「いついあーういあうっえー……ピッチャー振りかぶってー」

引き寄せて、それが動いている間に——軌道を上へ向ける。

上。

上だ。

都会だというのに森の中だからか、満天の星空が見える夜空に。

「おんえいえい！ ういううおあああい！！飛んでいけ！ 宇宙の彼方に！！」

軌道は操作した。

直線だ。まっすぐだ。

重力によって引つ張られない、どの天体にも影響されない完全な直線を与えた。ならば、あれが戻ってくる事は有り得ない。この世界の宇宙が端と端が繋がってる、ループしてるタイプの宇宙でなければ、だが。

「なんとこのことを……!」

「何故……何故だ! お前はわかっているはずだ! 何十年と独りで過ごしたんだろう、この世界で! 我々にとって同胞を失うことは、身を切られる思いに等しい! それ知って、何故!」

そうかもしれない。

でも多分僕、君達とは別の世界から転生してるし。仲間意識とかないよ、あんまり。サンズ・リバーの向こうから知り合いが来てたらちよつとは考えたかもね。

あるいは、本当にそう、なのかもしれない。でも。でもね。

「おえあ、あうおああこれが、覚悟だから」

「——もういい、やれ!!」

見えている。

彼らを助けるためだろう、各地から集結していた化成体の軌道。僕に向けられた魔法、僕に向けられた銃火器の軌道。

僕の後方に来ている、複数人の少年少女の軌道。

全部見えている。

「おう、あおいああいもう、迷いはない」

いいさ。達也君に何を見られようと、もう関係ない。深雪ちゃんに疑われても、レオ君たちの信頼を裏切っても。

必要なのは遺言メッセージに書いたしね。茜ちゃんなら、開封したあとみんなに伝えるくらいはやってくれるだろう。その点ちよつと苦労かけちゃうのがごめん。

だから、解放する。

今まで派手で目立つからやってこなかった使い方を。思い付きこそすれど、実行に移すことのなかった大技を。

僕だって最初の生は健全な男子だったんだ。それが、こんな魔法のある世界に生まれて。

ほとんどの魔法は使えないと知って絶望したとしても——やっぱり、考えることは考える。

必殺技の一つくらい、欲しいじゃん？

「You are all falling beyond. 君達は彼方に落ちていく」

さっきのでテストは終わった。

だから、これが必殺技だ。文字通りの。

アイオンを地面に叩きつける。

それにより、地が、大きく揺れる——！

*

誰もが光を見た。

可視化されていないはずの靈子^{フシオン}。それが、十二の光条となって空へ上がっていく。さ

ながら花開く前の花火のように、あるいは逆さの流星のように。

臨戦態勢になりながらも一向に会敵しない事に違和を覚えていた達也達にもそれは
みえた。

見えて。

見えたから。

誰よりも先に反応したのは——美月。

彼女は通信機越しに叫ぶ。

『誰か、止めてください!! あの実験中の強い光——青さんです!!』

先日の実験により、この世界に引きずり込まれたパラサイトは総勢十二体。

内の一体がピクシーの中にあるのだから、十二条の光の内一つは。

「お兄様！」

「いや、ダメだ。追上の精神は脆すぎる」

系統外・精神干渉系魔法『コキュートス』。

深雪のその魔法ならば、そして達也の知覚があれば、追上を捉え、凍らせる事まではできただろう。

だけどそれをすれば、本当に凍り付く。

そして砕け散ってしまう。それがわかったのは、追上が達也からの視線を受け入れたから。

達也は彼を見て、そして理解した。

こんなに弱い生物は他にいない。ともすればパラサイト達よりも脆い。

この表現が合っているかはわからないが——「老衰している」と、達也はそういう印象を受けた。

他に比べて、老いさらばえている。しなびている。もう、生命力が足りていない。

「クソツ、エリカ！ オレをぶっ飛ばしてくれ！」

「ぶっ飛ばしてどうすんのよ！ 相手は霊子の塊なのよ？ 物理攻撃は通じないってば

！」

「じゃあ黙って見てるだけかよ!!」

空が上がっていく光は、そろそろ視認不可な距離へと差し掛かる頃合いだった。

あんな遺言を聞かされて。

止めると意気込んで。

最期が、ただ見ているだけ、など。

「くっつ! ああもう、見てるだけのつもりだったのに——タツヤ、レオ、エリカ! ワ

タシを飛ばせる!? 天高くまで! あの光よりも早く、上空まで!」

その声は突然だった。突然現れた、暗闇より出でた鶴の一声だった。

深紅の髪、仮面——ではなく、金髪の美少女。

着ているものこそ正体を隠す気のないものだが、その表情はしっかりと焦っていた。

いいや、何かに吹っ切れたように、何かを思い出したかのように。

「仮装行列か!」

「タツヤ、余計な事言わないで欲しいんだけど。それより時間が無いわ。できるなら—

—」

「私が。——飛行魔法はCADにインストールしてあります。私がリーナを抱えて飛べ

ば、リーナは魔法に集中できる……:そうでしょう?」

「え——ええ。お願いできる?」

仮装行列。原型を纏衣の逃げ水という古式魔法とし、この世ならざるモノの目を誤魔化す為の術への対抗魔法であるがために——幾らかの精神干渉系魔法を含む魔法。

それならばアレを捉えられると、達也とリーナは踏んだのだ。

得心の行つた顔の兄を見て、深雪にも迷いはない。

「お兄様」

「ああ。——行つておいて、深雪」

「……はい！」

過保護な兄が彼女を止める事は無かつた。

達也としては、そんな顔を向けられたら止められるはずがない、という心境でもあつたが。

ただし、本来として飛行魔法はまだ何かを持ち運んでの運用を想定していない。軍用に調整したものならいざ知らず、深雪のCADに入っているものは普通の飛行魔法だ。ゆえに想定外のアクシデントもあり得る。

「リーナ、飛ぶわよ。——恐らくチャンスは一度きり。逃せば、彼は宇宙の彼方に飛んでいつてしまう」

「ミュキ、もしかしてワタシが失敗すると思つてる?」

「……いいえ。そんなはずなかつたわ。——行つてきます、お兄様！」

深雪とリーナの身体が浮かび上がる。

すぐに声の聞こえなくなるくらいの高さにまで上昇した深雪を見送りつつ、残ったエリカとレオに目配せをする達也。

「わかつてる。もしなんかあつたら、受け止める、だろ？」

「リーナは私達が。シスコンお兄ちゃんも深雪を受け止めたいでしょ？」

「いや、別に近い方でいいが……」

「またまたあ。どうせ深雪をレオがキャッチしたら静かに怒るクセに♪」
少しだけ想像をする達也。

空より落ちる妹を、齒をキラリと光らせたレオが掻き抱き、姫抱きで――。

「安全なら、それでいいさ」

「……今、一瞬殺気みてーなのが飛んできたんだが……気のせいだよな？」

「気のせいだ」

願わくは、妹たちが無事であるように。

そして――こんな事態を引き起こした追上青に、長らくのツケを。

この日、誰もが夜空を見守ったのだった。

あいあんいううあいあ　おい、おいうおい

拝啓。

茜ちゃんへ。

初めに謝っておきます。実は僕、本物の追上青くんじゃありません。君が生まれるその前から、僕は君のお兄さんに憑りついた幽霊でした。

難しい言葉を使うと化成品。それが僕の正体。青くんの脳に十六年間も憑りつき続けて、君のお兄さんのふりをしていた誰かです。本当にごめんなさい。

でもね、茜ちゃん。サプライズになるのかな。ある協力者のおかげで、僕はついにこの身体を君のお兄さんに返すことができるみたいなんだ。そのお兄さんは「あー」とか「うー」とかしか喋れない偽物じゃなくて、君の本当のお兄さん。

だから、多分僕とは全くの別人だと思う。優しく迎え入れてあげてください。

翻訳ノート、頑張つて作ってくれてありがとう。でも、これからは普通に喋れるようになるから。

僕に優しくしてくれてありがとう。でも、これからはお兄さん優しくしてあげて、そして優しくしてもらってください。

僕はお迎えが来たみたいだから。

せめて——みんなに迷惑をかけてしまっている彼らを連れて、どつかへ消えます。天国なんて上等なところへはいけなと思う。でも、宙の彼方へ一直線！　なんてね。

ありがとう、茜ちゃん。

本当にいままでありがとう。お父さんとお母さんにもありがとうって伝えておいて。勿論二人への手紙もメールするよ。でも茜ちゃんが一番僕をわかってくれていると思うから。あとレオ、美月ちゃんやミキヒコくん、司波兄妹にもよろしくね。

オイシヤサマとか宛は個別にメールするから気にしなくてよし！

それじゃ。

愛しているよ。知らない誰かより。敬具

*

「捉えた！　ミュキ、速度、もう少し上げられる!？」

「これ以上は……酸素が」

「一瞬だけだから！」

「……わかったわ」

飛行魔法に想定していない変数が加えられる。すぐに達也の書いた安全装置セイフテイが働くけれど、この時ばかりは深雪もそれを無視する。膨大な想子の力でねじ伏せる。

して、発動するはリーナの仮装行列パレード。

精神干涉系魔法の端くれに位置するこの魔法ならば、あの化成品を捉えることなど——容易ではないにせよ、可能だった。

手を伸ばす。手を伸ばす。魔法を発動して尚手を伸ばす。

リーナは。

シリウスは。

「戻ってきなさい！ アオ！」

その、夜空に輝く星に、手を伸ばし——見事掴んで見せたのだった。

深雪とリーナが戻って来た。落下することもなく、安全に。

そして……その光の球体を、気を失っている青の身体に押し込む。

「——つぶはあ!?!」

「青！」

「青さん！」

まるで長らく呼吸していなかったかのような反応で飛び起きる青。

右と、左と。周囲をキョロキョロ見渡して、今度は自らの手を見つめて。

「どうした、追上」

「……いねえ」

「何がだ」

「いねえ。いねえ……アイツがいねえ！」

それは流暢な日本語だった。日本語が得意ではないと言っていた彼の言動を覆す、あるいはありきたりな、どこにでもいるような普通の少年の言葉。

その焦りは伝播する。

「どうしたのよ、青」

「アオ？」

「青さん……？」

遅れて駆け寄って来た美月たちにもそれは伝わったらしい。

いいや、伝わり過ぎたらしい。

美月は。そして幹比古は、言う。

「……あなたが、追上青さん、なんですなね」

「君は……青なのかい？」

両者の言葉で事情を察せられない達也ではなかった。

膝から崩れ落ちる美月とは裏腹に、未だ宙へと昇っていく十二条の光を見つめる。

そんな彼を目にして、青がハッと気づいたように彼へと駆け寄った。継りつくように、だ。

「アンタ！ 達也だよな！ 司波達也！」

「……ああ、そうだが」

「頼む！ 後生だ、俺の半身を、俺の恩人を救い出してくれ！ このままだとアイツ、本当にどっかにいつちまう！」

「何故俺に頼む」

「アンタしかもう届く奴がいねえんだよ！ 俺のヘンな力も、魔法も、全部が全部アイツのモンなんだ！ 俺は魔法師ですらないんだよ！ 頼むよ！」

達也の中で、合点と情報の統合が高速でなされて行く。

別人だ。完全に。化成品。パラサイト。そして彼らの向かう先。

「……奴は、お前にとって害のあるものではないのか？」

「違う！ 生まれてすぐに死んじまいそうになつてた俺を繋ぎ止めてくれたのがアイツなんだ！ アイツがいなければ俺はもうこの世にいなえ！」

「た……達也さん、私からもお願いします。もし何かできるのなら、どうか、青さんを

……」

宿主を食い潰し、そのものと成り代わる寄生生物。

九重八雲はパラサイトをそう表現していた。ただし追上青の場合は事情が特殊である、とも。

そして、気付く。

全員の視線が達也へ集まっていることに。

正直な話、達也としてはもう追上青に興味はない。フランスの間者として使われていた化形体は空の彼方へ消え去り、今ここに戻って来たのが一般人の追上青なのであれば、関りはもう要らない。

長らくのツケを払ってもらいたい、という少々の不満も、彼自身がなんでもなくなるのならどうでもいい話だ。妹の無事こそが彼にとっての至上なのだから。

だから。

「……深雪」

「はい、お兄様」

「お前にとつて……追上を損なうのは、損失か？」

「お兄様。……私は、お兄様がいればそれで、それだけでいいです。ですが」

手を取る。

手を取り合う。

「今、この学校生活を楽しく思っている自分がいるのもまた事実。差し出がましい質問になりますが、お兄様もそうなのではないですか？」

問いに。

「……ああ」

達也は、本当に薄く、薄い笑みを浮かべる。

そして。

「幹比古！ お前の精霊は、まだアイツを追えるか!？」

「もうやってる！ でも、そろそろ成層圏だ！ 流石に宇宙まで、となると厳しいよ！」

「美月、追上がいている方角はわかるか？ 一番光の強い所だ」

「……はい。見えています。ずっと」

ならば、いけると踏んだ。

あとは――。

「深雪」

「はい、お兄様」

「コキュートスの手加減は、可能か？」

「……」ここでできません、などと言える程、私はお兄様にとって誇れない妹であるつもり

はありません」

「ああ、お前はいつも俺の誇りだよ」

達也が深雪の両肩に手を置く。

そして、美月の方角指定と幹比古の精霊を頼りに精霊の目を発動させて——齒噛みする。

足りない。

高度が足りない。

飛行魔法は無理だ。セーフティを超える速度を出したために、安全モードにシフトしてしまっているのが窺えた。

なら。

「足場、作ればいいんだな？」

「だったらアタシがレオをぶっ飛ばすわ。そこからレオ、アンタが二人をぶっ飛ばしなさい」

「些か乱暴な手段だが、方法はそれしかない。ぶっつけ本番だが、やれるか、二人とも」

「勿論！」

「黙って見てるなんかできるかよ！」

善は急げ。刻限は刻一刻と迫っている。

レオが取り出すは、いつしかの硬化魔法ガジェット。その剣先に深雪を抱えた達也が乗り——レオが、駆け出す。

目指すはエリカの構えるヤマタノオロチ、その剣の腹。

「おおおおお!!」

「いつ——つくわ、よ——お!」

三人分の重さをものもしない、なんてことは不可能だ。

それでもエリカは、確実にレオたちをぶつ飛ばした。一世紀前ならプロソフトボール選手を目指せるだろう特大フルスイング。

「邪魔な星を、一時的に見えなくします!」

ほのかの魔法が夜空の星の光を遮る。一気に暗夜となつた空に輝く、十二条の光。

「レオ! 僕の精霊のいる場所にフルスイングしてくれ! 角度的にそれが一番だ!」

「おうよ! いくぜ、達也!」

「ああ、やってくれ」

それはまた、特大も特大なフルスイングだった。座標固定の硬化魔法は、レオの凄まじいまでの膂力を一身に受け止め、それをそのまま達也の推進力に変換する。

緑色の式紙が誘導灯となり、彼が飛んでいくべき道を指し示す。

そして、捉える。

達也の精霊の眼が、イデアを通じて大気圏外へと突入している彼らを。その情報は、そのまま深雪へと預けられ。

「……」

「大丈夫だ。お前ならできるとよ」

「……はい！　行きます！」

系統外・精神干涉系魔法『コキュートス』。

本来の威力であれば、あの老衰した化成体など凍らせた瞬間に砕け散らせることも可能だろう。

だが、手加減だ。

殺してしまつては意味がない。深雪の我儘に付き合つてくれた兄のためにも、深雪はこれを絶対に成功させなければならぬ。

今地上で祈りを捧げているだろう全員のためにも。

なにより――。

「お兄様に背を押された私に、できないことなどありません！」

冷気。

否、常人では冷たいとさえ感じることでできない、意識を凍り付かせる魔法が発動する。彼女本来の射程を遥かに超えて、宇宙と呼ばれる場所にまで達したその照準。

今まさに十一條の光を牽引し、彼方へと飛び去ろうとしていた一條を捉える。

捉える！

「掴みました……ですが」

「安心しろ、深雪。砕け散らないだけで十分だ。凍らせたのなら、奴は自ら宙へ行くことができなくなる。そうすれば——ほら」

落ちてくる。

十一條の光がそのまま宙へと向かうのに反し、真ん中の巨光だけが落ちてくる。

落ちてきて。

落ちてきて。

それは。

*

教室にて、その一幕は発生した。

「自主退学ウ？　なーに言ってるんだよ青。魔法、全く使えないってわけでもねーんだろ

？」

「そりゃまあ、ゼロじゃない。けど、やっぱりアイツ程のを期待されるのは……困る」

「青だつて別に成績良くなかつたわよ？ 戦闘はできたけど、実技もテストもからつきし。だから二科生だつたんだし」

「そりや、アイツがハンデ背負つてたからで」

「ハンデという面で言うのなら、お前は十六年もの間自主的な勉強ができずにいた身だ。それでいて、ただの観察だけで俺達に付いてこられている時点で十分凄いなと思うが」

「いやまあ、褒められて悪い気はしねえけどよ……。でも、やつぱダメだと思うんだよ。なんつーかさ、俺とお前たちの関係性だつて、もとはと言えばアイツが築いたもので……」

「あん？ じゃあなんだ、お前、オレ達と友達じゃないつて言うつもりか？」

「……いや、だつてそうだろ？ 俺とアイツは、別人で……。そりや俺としては嬉しいよ。こんなぼつと出の野郎にまで優しくしてくれてさ。茜も親父もお袋も、ちゃんと……。迎え入れてくれたし」

追上が自主退学をする、と言い出したから、この騒ぎ。

パラサイトの事件が終わつてすぐのことだ。

「じゃあいいじゃねえか。つーか、今辞めたら魔法大学行けなくなつぞ？」

「だから、行ける成績じゃねえんだつて」

「でも解凍したいんだろ？ んでもつて、素体も作りてえんだつて息巻いてたじゃねえ

か」

「……そう、なんだけど、やっぱりこう……色々とあるだろ！」

歩き方や重心の置き方、性格や嗜好。

その全てに至るまで別人であると、達也だけでなく藤林ら軍人も太鼓判を押した。

今の追上青に後ろ暗いところなど一つもない。どうやら九島烈も早々に手を引いた

らしく、今の追上にそのことを訪ねても「一度も接触してきてねえよ」とのことだった。

それならばもういい、というのが達也の見解だ。

一応、深雪の心のケアとして早く戻ってこい、という気持ちはある。最大限の手加減は、しかし彼を殺さないまでも凍り付かせてしまった。それは今でも解けておらず、追上家に安置されている。

仮にアレが融けたとして、素体がなければこの世に留まり続けるのは難しいのだから、十二分以上の成果だと達也は思うのだが——深雪にとってはそうではないらしい。

そしてもう一人、心のケアが必要なのは。

「美月」

「え……あ、はい」

「大丈夫か」

「大丈夫です……。はい。大丈夫です」

存外気にしていたらしい美月だ。

いつかのクルージング旅行の時に、美月にだけは明かされていたらしい追上青の秘密。成程確かに夏休み以降二人の距離は近かった……ように思えたから、思いつめるのも理解できる。

だとして、達也に解決手段はないのだが。

1915年。旧日本軍において行われた神風特攻隊。

追上青に憑いていたいた化成本の正体は、その参加者の一人だったという。通りで過ぎる戦い方だ。そして、あの九島烈がああも執着するわけだと独り言ちる達也。

若くして国のために死した軍人が、今の追上の話によれば、生まれる前に散りそうになっていた彼の魂を一度情報体の中へ押しやって休眠及び回復状態にし、それが回復しきるまでその身体を使っていたのだと。

果たしてそこに真実がどれほど含まれているかは達也の与り知らぬところではあるが、警戒は無駄だったな、という妙な疲れがあるのは事実。敵ではなかった。ただそれだけだ。

追上青ではないダレカが起きない以上リーナとの関係も不明のまま。フランスとの関係もまた不明のまま。

だが、同じく妹を持つ身である達也から言わせてもらうのならば。

「あまり妹を泣かせすぎるとなよ、追上」

「わ、わーつてるよー！」

……お前に言ったわけではないのだが。

とかく。

パラサイト事件は収束を迎えた。彼の周囲を彩る日常に少しばかりの変化はあれど、

欠けてはいない。

妹が望んだ毎日がここにある。

それで満足だと、彼はまた独り言ちるのであった。

*

「ぼか」

彼女、追上茜はボソツと呟く。

目の前のポッド。魚などを鑑賞する用途としては少しばかり大きいそれに入った、凍り付いた光の玉。本来人が目にするのできるものではないそれは、けれど周囲の氷があるからこそ可視できるじょうたいにある。

これが、彼女の兄。

「ばか……」

手紙を読んだ。遺言だった。

何がサプライズだ。何がごめんなさいだ。

勿論帰つて来た兄……彼女を「茜」と呼ぶ彼のことだつて兄だと思つている。そう思えるくらいには、彼女は賢い。

でも、けれど、だつて、それでも。

その知らない誰かだつて、彼女の兄だ。彼女に甘々で、ノリがよくて、明るくて、どこか大人っぽくて。

「ばーかー」

だから、罵倒する。

喋ることのない球体に向かって何度も何度も罵倒を入れる。

その内、「いおいああひどいなあ」とか言つて返事をしてくれるんじゃないかと期待して。

でも、沈黙。

死んではないないと魔法師たちは言っていた。だから、解凍し、彼の肉体となり得るものさえ用意できれば、彼は帰つてくると。

似た事例として、ミクロちゃんのようなものでも肉体となれるらしい。ただし彼は容量が大きすぎるとかで、もっと大容量のものを用意する必要があるようだが。

解凍は責任を持って私がやります、と魔法師のお姉さんは言っていた。司波深雪。兄の同級生。

「ばーか!!」

ならば——残された茜にできることは、ただ一つだ。

そしてそれは、彼も同じらしい。

「ただいまー」

「あ、お帰り、お兄ちゃん」

青兄は、あっちの人だから。

そういう区別をつける。それで目の前の彼が救われていることも知っている。

「茜」

「なに？」

「……お前さ、工学の知識とかって、ある？」

「ないよ。けど、勉強するつもり」

「だよな。……俺、一応魔法師では在り続けられるみたいなんだ。だからさ」

「任せて。私は魔法以外、ゼーんぶ頑張るから！」

「……おう。んで俺は、魔法のトコはぜーんぶやってやる！」
だから。

「馬鹿野郎め。三途の川の向こうに行くとか、俺達が許さねえからな！」

「え、青兄そんなこと言つてたの？　ほんつとに妹心のわかつてない……絶対許さないから！」

突き付けられる二本の人差し指。

「お前は俺にとつても兄ちゃんだ。絶対生き返らせてやる。覚悟しとけよ！」

「青兄、帰つてきたら、たとえ機械の身体でもぶん殴るから！　美月さんの分まで！」

その時、気のせいではなければ、二人の幻聴でなければ。

おえあ、あえうおえんいおいああ……それは、帰るの遠慮したいかなあ……とか
なんとか、弱音オブ弱音が聞こえた気がした。

「茜。俺、決めたよ。体も鍛える」

「じゃあお兄ちゃんは蹴りね。私は殴る」

「美月さんも流石に殴りたいですつて言つてたからな。茜と美月さんと、両方からグー
な」

「おつけー！　じゃあ——お兄ちゃん！」

「おう！」

「はいこれテキスト！　まずは十六年間取り逃した分の勉強、全部終わらせないと、話にならないからね！」

「——お、おう」

果たして。

この兄妹の努力が結ばれたかどうかは——未来の話。

未だ確定しない、未来の、未来の、そのまた未来のお話である。